

城間東空寿古墓群

ぐすく ま あがり くう じゅ こ ぼ ぐん
城 間 東 空 寿 古 墓 群

— 県道浦添西原線（港川～城間）道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2017（平成 29）年 2 月
沖縄県 浦添市教育委員会

ぐすく ま あがり くう じゅ こ ぼ ぐん
城 間 東 空 寿 古 墓 群

— 県道浦添西原線（港川～城間）道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2017（平成 29）年 2 月
沖縄県 浦添市教育委員会



巻頭 1
第 1 調査区（南から）



巻頭 2 第 1 調査区（上空から※写真上が東）左から 008 号墓～ 022 号墓



巻頭3 004号墓完掘状況（東から）



巻頭4 004号墓遺物出土状況



卷頭 5 004 号墓出土藏骨器



巻頭6 016号墓完掘状況（西から）



巻頭7 039号墓完掘状況（西から）

序

本報告書は県道浦添西原線（港川～城間）道路改築事業に伴い、平成 24 年度と平成 26 年度に沖縄県中部土木事務所から委託を受けて行った城間東空寿古墓群の緊急発掘調査の成果をまとめたものです。

城間東空寿古墓群の所在する丘陵一帯は城間集落の墓域として知られ、現在でも亀甲墓を主とする約 100 基の古墓が存在します。丘陵斜面に亀甲墓群が整然と並ぶ様子は、基地建設によって消滅したかつての城間の風景の一端をしのばせます。

今回の調査を行った古墓からは墓の構造や形態等についての貴重なデータを得ることができました。また、出土した陶製や石製の蔵骨器、瓶や小杯などの陶磁器、銭貨、金属製品の遺物からは、被葬者や当時の墓制を知るうえで貴重な情報を得ることができました。

今後、この調査成果が地域の歴史・文化の学習ならびに学術研究の一助として多方面に活用いただければ幸いです。

末尾になりましたが、今発掘調査を実施するにあたり、ご協力をいただきました沖縄県中部土木事務所ならびに地域の皆さま、また、発掘調査の際にご指導・ご助言をいただきました先生方に深く感謝申し上げます。

平成 29 年 2 月

浦添市教育委員会
教育長 池原寛安

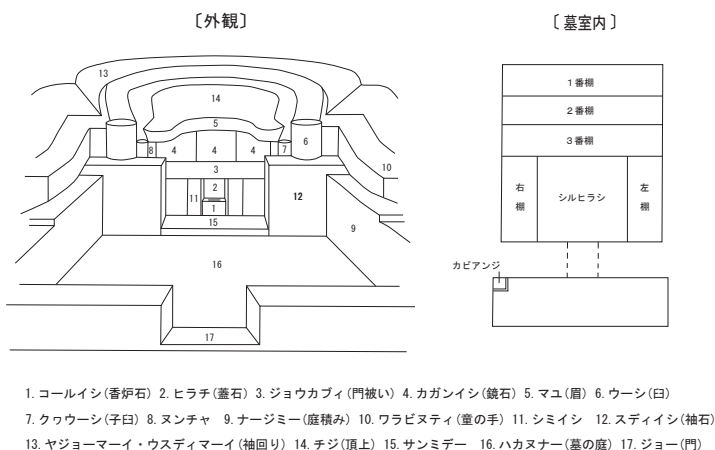
例 言

1. 本報告書は、県道浦添西原線（港川～城間）道路改築事業に伴い、沖縄県浦添市城間に所在する埋蔵文化財「城間東空寿古墓群」の発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査は、県道浦添西原線道路改築事業に伴うものであり、沖縄県土木建築部 中部土木事務所道路整備班の委託を受けて、浦添市教育委員会文化課が実施した。
3. 資料の整理にあたり、下記の方々の指導・助言をいただいた。記して感謝申し上げます。
陶磁器 倉成多郎氏（那覇市立壺屋焼物博物館）、吉田健太氏（那覇市市民文化部文化財課）
4. 発掘調査に係る現場作業は、平成24年度および平成26年度にかけて実施した。調査期間は、平成24(2012)年9月20日～平成25(2013)年3月19日、平成26(2014)年10月6日～平成27(2015)年3月13日である。調査の実施にあたっては、平成24年度を株式会社アーキジオパシフィック支店、平成26年度を株式会社イーエーシーの支援を受けた。
5. 報告書作成は、平成24年度から平成28年度の5ヶ年にわたって実施し、浦添市教育委員会文化課職員及び嘱託職員がこれにあたった。
6. 蔵骨器の実測および写真撮影等については、株式会社島田組沖縄支店及び株式会社シン技術コンサル沖縄営業所に委託した。
7. 掲載遺物は、遺物に一連番号を付し、遺物番号とした。従って遺物番号と図版・実測番号・観察表の遺物番号は一致する。
8. 色調表現は『標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。
9. 第1図は沖縄県土木建築部 中部土木事務所道路整備班から提供いただいた図に加筆して掲載した。
10. 報告書には、鈴木 悠（那覇市歴史博物館）から玉稿を賜った。記して感謝致します。
11. 本書の執筆を以下のように分担した。なお、副葬品の分類を又吉幸嗣、図版作成を勝野久美子の協力を得て、編集は仲宗根久里子が行った。
仲宗根久里子 第1章、第2章第2節・第3節、第3章、第4章、第8章
仁王浩司 第2章第1節
鈴木 悠 第5章
菅原広史 第6章、第7章
12. 本文中で使用した引用・参考文献は、各章末に記した。
13. 城間東空寿古墓群及び城間集落に関する聞き取り調査では多くの方々のご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。（敬称略）
[話者] 内間千代、内間政子、古波蔵トヨ、與座シゲ、又吉久子、西原芳子、西原良昭、城 良伸
[協力] 稲江哲哉（浦添市城間自治会長）、銘苅全郎（浦添市港川自治会長）、比嘉正仁、赤嶺有紀
14. 調査に関わる実測図や写真等の記録は、浦添市教育委員会文化課において保存している。

凡 例

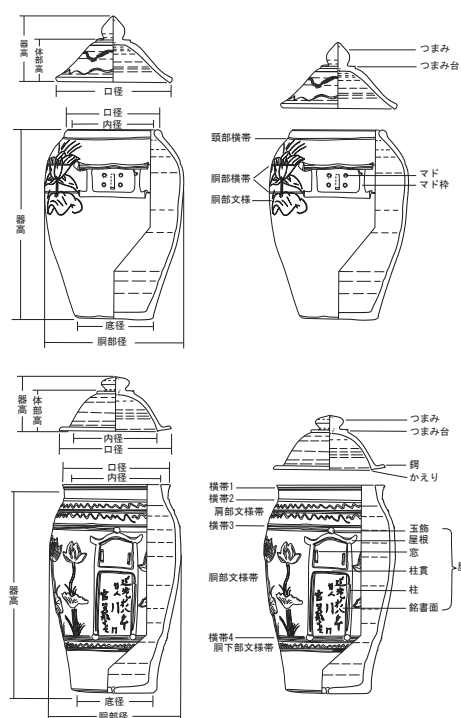
1. 本書に表示した基準高はすべて海拔高を用い、メートル単位で表した。
2. 地形測量図に示した座標は、世界測地系を用いた。
3. 平面図に記した方位は、基本的には座標北を示す。
4. 遺構断面図を作成した位置は、遺構平面図に横断ラインを示し、方向は英字で表した。
5. 地形測量図については 1/200 を基本として作成し、1/1000 の縮尺で掲載した。
6. 遺構図については、1/20 を基本として作成し、1/80 の縮尺で掲載した。
7. 埋納獣骨の出土状況図については、1/2 を基本として作成し、1/8 の縮尺で掲載した。
8. 埋納蔵骨器の出土状況図については、1/2 を基本として作成し、1/20 の縮尺で掲載した。
9. 遺物の実測図は、出土品のうち蔵骨器は 1/6、それ以外は 1/2 や 1/1 で掲載した。それらについては、掲載頁に明示した。
10. 本書で用いた墓の各部名称については以下のとおりである。
11. 蔵骨器の各部名称と計測位置などは、浦添市教育委員会刊行の浦添市文化財調査研究報告書第 25 集『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者』（1997 年）および浦添市文化財調査研究報告書『比嘉門中墓の家族史一家族の数だけ歴史があるー比嘉門中墓の調査概要』（2006 年）を参考にした。詳細は下記のとおりである。

墓の各部名称



蔵骨器の各部名称と計測位置

(上段：ボージャー形、下段：マンガン釉甕形)

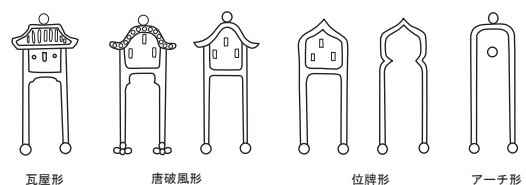


マド枠・屋門の部位名称と計測位置

マド枠の分類（ボージャー）



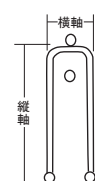
屋門の分類（マンガン軸廻形）



マド枠計測部位



屋門計測部位



目 次

巻頭図版

序文・例言・凡例・目次

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	3
第3節 調査の経過	4

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 浦添市の地理的環境	5
第2節 遺跡の地理的環境	5
第3節 遺跡周辺の歴史的環境	7

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺構	8
第2節 遺物	8

第4章 調査の成果

第1節 003号墓	18	第11節 026号墓	111
第2節 004号墓	28	第12節 033号墓	115
第3節 009号墓	65	第13節 034号墓	118
第4節 012号墓	70	第14節 039号墓	121
第5節 016号墓	78	第15節 041号墓	130
第6節 018号墓	83	第16節 042号墓・043号墓	134
第7節 019号墓	89	第17節 044号墓	136
第8節 021号墓	92	第18節 046号墓	139
第9節 022号墓	100	第19節 050号墓・051号墓	144
第10節 025号墓	105		

第5章 銘書の分析

第1節 資料の概要	148
第2節 銘書からわかる各墓の様相	148

第6章 獣骨の分析

第1節 資料について	156
第2節 分析の概要	156

第7章 人骨の分析

第1節 資料について	157
第2節 分析の方法	157
第3節 分析結果の概要	
(1) 003号墓	158
(2) 004号墓	158
第4節 小考	158

第8章 総括	158
--------------	-----

写真図版

報告書抄録

挿図目次

表 紙

第1図 城間東空寿古墓と 工事計画路線の位置関係図	2	第21図 004号墓出土遺物8	47
第2図 遺跡の位置と市内の主な基群の位置図	6	第22図 004号墓出土遺物9	48
第3図 調査地地形と各墓の位置図	9	第23図 004号墓出土遺物10	49
第4図 003号墓平面図	19	第24図 004号墓出土遺物11	50
第5図 003号縦断見通し図、トレンチ断面図、 正面図、墓室横断面図	20	第25図 004号墓出土遺物12	51
第6図 003号墓墓室内埋納獣骨 平面図、 断面図	21	第26図 004号墓出土遺物13	52
第7図 蔵骨器配置の模式図	22	第27図 004号墓出土遺物14	53
第8図 003号墓出土遺物1	24	第28図 004号墓出土遺物15	54
第9図 003号墓出土遺物2	25	第29図 古銭出土状況平面図	60
第10図 003号墓出土遺物3	26	第30図 004号墓出土遺物16	61
第11図 004号墓平面図	29	第31図 004号墓出土遺物17	63
第12図 004号縦断見通し図、正面図、墓室平面図 墓室横断面図	30	第32図 009号墓平面図	66
第13図 蔵骨器配置の模式図	31	第33図 009号墓縦断見通し図、トレンチ断面図、 正面図、墓室横断面図	67
第14図 004号墓出土遺物1	40	第34図 009号墓出土遺物	69
第15図 004号墓出土遺物2	41	第35図 獣骨埋納平面図	70
第16図 004号墓出土遺物3	42	第36図 012号墓平面図	71
第17図 004号墓出土遺物4	43	第37図 012号縦断見通し図、トレンチ断面図、 正面図、墓室横断面図	72
第18図 004号墓出土遺物5	44	第38図 蔵骨器配置の模式図	73
第19図 004号墓出土遺物6	45	第39図 012号墓出土遺物1	75
第20図 004号墓出土遺物7	46	第40図 012号墓出土遺物2	76
		第41図 016号墓平面図	79
		第42図 016号縦断見通し図、トレンチ断面図、 正面図、墓室横断面図	80
		第43図 016号墓出土遺物	82
		第44図 018号墓平面図	84

第45図	018号縦断見通し図、トレンチ断面図、 正面図、墓室横断面図	85
第46図	018号墓出土遺物 1	87
第47図	018号墓出土遺物 2	88
第48図	019号墓出土遺物	89
第49図	019号墓平面図	90
第50図	019号墓縦断見通し図、トレンチ断面図、 正面図、墓室横断面図、袖墓断面図	91
第51図	獣骨埋納平面図	92
第52図	021号墓平面図	93
第53図	021号墓縦断見通し図、トレンチ断面図、 墓室平面図、正面図、墓室横断面図	94
第54図	021号墓出土遺物 1	97
第55図	021号墓出土遺物 2	98
第56図	022号墓平面図	101
第57図	022号墓縦断見通し図、トレンチ断面図、 正面図、墓室横断面図	102
第58図	蔵骨器配置の模式図	103
第59図	022号墓出土遺物	104
第60図	025号墓平面図	106
第61図	025号縦断見通し図、正面図、 墓室横断面図	107
第62図	025号墓出土遺物 1	108
第63図	025号墓出土遺物 2	110
第64図	026号墓平面図	112
第65図	026号墓縦断見通し図、トレンチ断面図、 正面図、墓室横断面図	113
第66図	026号墓出土遺物	114
第67図	033号墓出土遺物	115
第68図	033号墓平面図	116
第69図	033号墓縦断見通し図、トレンチ断面図、 正面図、墓室横断面図	117
第70図	034号墓平面図	119
第71図	034号墓縦断見通し図、トレンチ断面図、 正面図、墓室横断面図	120
第72図	墓庭埋納蔵骨器 出土平面図	121
第73図		122
第74図	039号墓縦断見通し図、トレンチ断面図、 正面図、墓室横断面図 039号墓平面図	123

第75図	039号墓出土遺物 1	125
第76図	039号墓出土遺物 2	126
第77図	039号墓出土遺物 3	127
第78図	041号墓 遺構図	131
第79図	041号墓出土遺物	132
第80図	042号墓出土遺物	134
第81図	043号墓出土遺物	134
第82図	042号墓・043号墓 遺構図	135
第83図	044号墓出土遺物	136
第84図	044号墓平面図	137
第85図	044号墓縦断見通し図、トレンチ断面図、 正面図、墓室横断面図	138
第86図	046号墓平面図	140
第87図	046号墓縦断見通し図、トレンチ断面図、 正面図、墓室横断面図	141
第88図	046号墓出土遺物	142
第89図	050号墓・051号墓蔵骨器配置の模式図	144
第90図	050号墓・051号墓 遺構図	145
第91図	050号墓出土遺物	146
第92図	051号墓出土遺物	146

表目次

第 1 表	墓室平面形の類型	11
第 2 表	遺構観察表(1)～(2)	12~13
第 3 表	出土遺物一覧表(1)～(4)	14~17
第 4 表	003号墓 錢貨観察表	23
第 5 表	003号墓 蔵骨器(蓋)観察表	27
第 6 表	003号墓 蔵骨器(身)観察表	27
第 7 表	003号墓 陶磁器他観察表	27
第 8 表	004号墓 出土蔵骨器内訳表	32
第 9 表	004号墓 蔵骨器(蓋)観察表(1)	55
第10表	004号墓 蔵骨器(蓋)観察表(2)	56
第11表	004号墓 蔵骨器(身)観察表(1)	57
第12表	004号墓 蔵骨器(身)観察表(2)	58
第13表	004号墓 陶磁器他観察表	62
第14表	004号墓 錢貨観察表	64
第15表	009号墓 蔵骨器(蓋)観察表	68
第16表	009号墓 蔵骨器(身)観察表	68

第17表	009号墓	陶磁器他観察表	68
第18表	012号墓	蔵骨器(蓋)観察表	77
第19表	012号墓	蔵骨器(身)観察表	77
第20表	012号墓	陶磁器他観察表	77
第21表	016号墓	蔵骨器(蓋)観察表	81
第22表	016号墓	蔵骨器(身)観察表	81
第23表	018号墓	蔵骨器(蓋)観察表	86
第24表	018号墓	蔵骨器(身)観察表	86
第25表	018号墓	陶磁器他観察表	86
第26表	021号墓	蔵骨器(蓋)観察表	99
第27表	021号墓	蔵骨器(身)観察表	99
第28表	021号墓	陶磁器他観察表	99
第29表	022号墓	蔵骨器(蓋)観察表	103
第30表	022号墓	蔵骨器(身)観察表	103
第31表	025号墓	蔵骨器(蓋)観察表	109
第32表	025号墓	蔵骨器(身)観察表	109
第33表	025号墓	陶磁器他観察表	110
第34表	025号墓	銭貨観察表	110
第35表	026号墓	蔵骨器(蓋)観察表	114
第36表	026号墓	陶磁器他観察表	114
第37表	039号墓	陶磁器観察表	128
第38表	039号墓	蔵骨器(蓋)観察表	129
第39表	039号墓	蔵骨器(身)観察表	129
第40表	041号墓	蔵骨器(蓋)観察表	133
第41表	041号墓	蔵骨器(身)観察表	133
第42表	041号墓	陶磁器観察表	133
第43表	046号墓	蔵骨器(蓋)観察表	143
第44表	046号墓	蔵骨器(身)観察表	143
第45表	046号墓	陶磁器観察表	143
第46表	050号墓・051号墓	蔵骨器(蓋)観察表	147
第47表	050号墓・051号墓	蔵骨器(身)観察表	147
第48表	050号墓	青銅製品観察表	147
第49表	銘書観察表(1)		151
第50表	銘書観察表(2)		152
第51表	銘書観察表(3)		153
第52表	銘書観察表(4)		154
第53表	銘書観察表(5)		155

第54表	動物埋設遺構出土の動物骨観察	156
第55表	最少個体数集計表	158
第56表	出土人骨一覧表	159～160
第57表	墓別墓室類型表	161
第58表	遺構別墓室類型表	163
第59表	各墓の所有者(「土地所有権証明書 交付簿(1952年)より作成」)	164

写真図版

巻頭 1	第 1 調査区(南から)	
巻頭 2	第 1 調査区(上空から※写真上が東) 左から008号墓～022号墓	
巻頭 3	004号墓完掘状況(東から)	
巻頭 4	004号墓遺物出土状況	
巻頭 5	004号墓出土蔵骨器	
巻頭 6	016号墓完掘状況(西から)	
巻頭 7	039号墓完掘状況(西から)	
図版 1	調査区遠景(北から)着手前状況	167
図版 2	第 1 調査区(南から)(上空から)	168
図版 3	第 2 調査区(南から)(上空から)	169
図版 4	001号墓・002号墓・005号墓	170
図版 5	003号墓(1)	171
図版 6	003号墓(2)	172
図版 7	003号墓(3)	173
図版 8	003号墓(4)	174
図版 9	004号墓(1)	175
図版10	004号墓(2)	176
図版11	004号墓(3)	177
図版12	004号墓(4)	178
図版13	004号墓(5)	179
図版14	006号墓・007号墓・008号墓	180
図版15	009号墓	181
図版16	010号墓・011号墓・013号墓	182
図版17	012号墓	183
図版18	014号墓・015号墓・017号墓	184
図版19	016号墓	185
図版20	018号墓	186

图版21	019号墓	187	图版59	016号墓出土遺物	225
图版22	020号墓·023号墓·024号墓	188	图版60	018号墓出土遺物(1)·(2)、 019号墓出土遺物	226
图版23	021号墓	189	图版61	021号墓出土遺物(1)	227
图版24	022号墓	190	图版62	021号墓出土遺物(2)	228
图版25	025号墓	191	图版63	022号墓出土遺物	229
图版26	026号墓	192	图版64	025号墓出土遺物(1)	230
图版27	027号墓·029号墓· 030号墓·031号墓	193	图版65	025号墓出土遺物(2)、026号墓出土遺物、 033号墓出土遺物	231
图版28	032号墓·035号墓·036号墓	194	图版66	039号墓出土遺物(1)	232
图版29	033号墓	195	图版67	039号墓出土遺物(2)	233
图版30	034号墓	196	图版68	039号墓出土遺物(3)	234
图版31	037号墓·038号墓·040号墓	197	图版69	041号墓出土遺物	235
图版32	039号墓	198	图版70	046号墓出土遺物	236
图版33	041号墓·042号墓·043号墓	199	图版71	042号墓·043号墓·044号墓·050号墓 051号墓出土遺物	237
图版34	044号墓	200			
图版35	045号墓·047号墓	201			
图版36	046号墓	202			
图版37	048号墓·049号墓	203			
图版38	050号墓·051号墓·052号墓	204			
图版39	003号墓出土遺物(1)	205			
图版40	003号墓出土遺物(2)	206			
图版41	003号墓出土遺物(3)	207			
图版42	004号墓出土遺物(1)·(2)	208			
图版43	004号墓出土遺物(3)	209			
图版44	004号墓出土遺物(4)	210			
图版45	004号墓出土遺物(5)·(6)	211			
图版46	004号墓出土遺物(7)	212			
图版47	004号墓出土遺物(8)	213			
图版48	004号墓出土遺物(9)	214			
图版49	004号墓出土遺物(10)	215			
图版50	004号墓出土遺物(11)	216			
图版51	004号墓出土遺物(12)	217			
图版52	004号墓出土遺物(13)·(14)	218			
图版53	004号墓出土遺物(14)·(15)	219			
图版54	004号墓出土遺物(16)	220			
图版55	004号墓出土遺物(17)	221			
图版56	009号墓出土遺物	222			
图版57	012号墓出土遺物(1)	223			
图版58	012号墓出土遺物(2)	224			

第 1 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

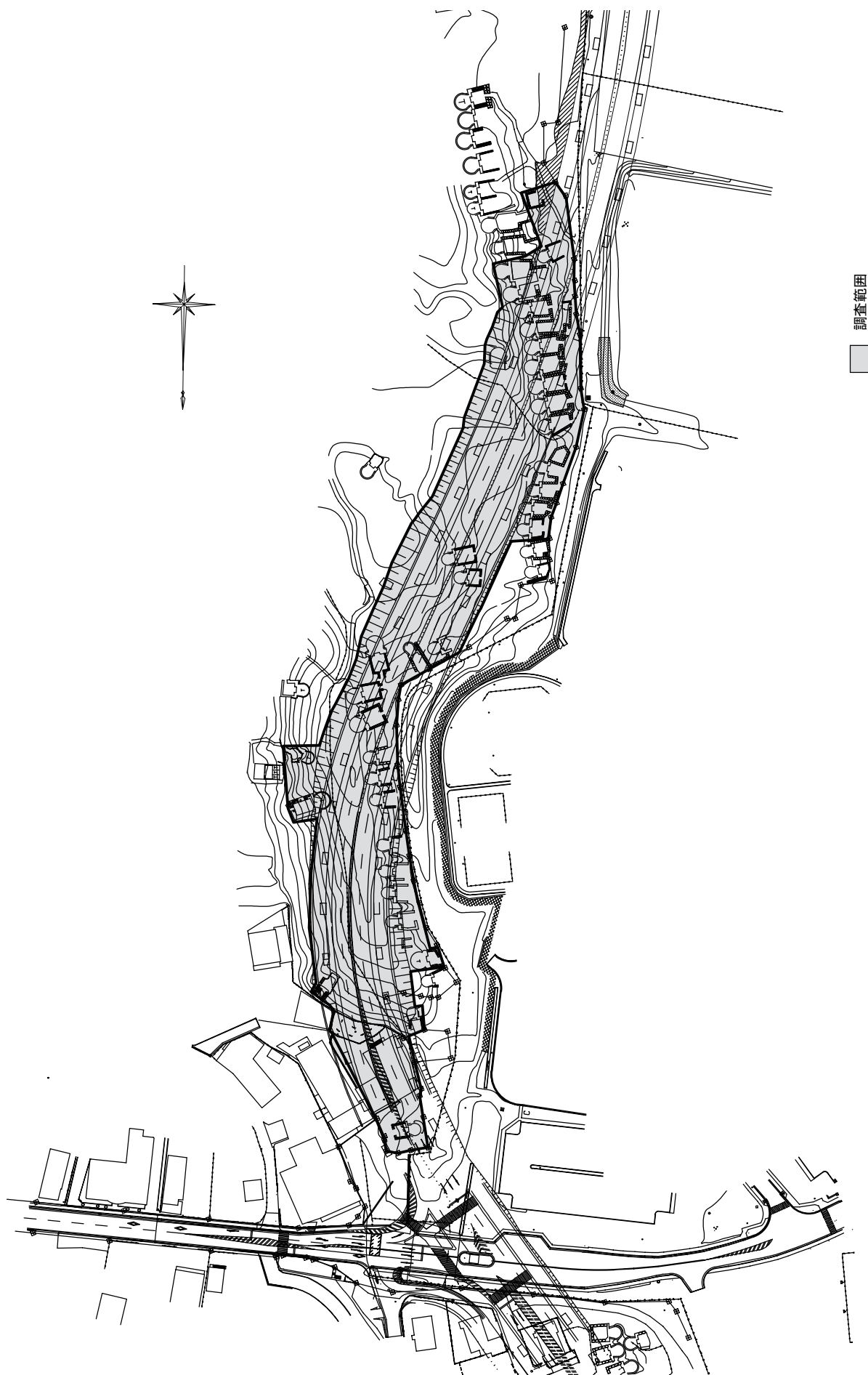
平成17年3月31日付け中土第5849号により、沖縄県土木建築部中部土木事務所(以下、沖縄県中部土木事務所)から「主要地方道浦添西原線(港川道路)の計画に伴う文化財等について(照会)」があった。これを受けて浦添市教育委員会は平成17年4月5日付け浦教文第2号により、道路計画地内に崎原古墓群、東空寿古墓群、城間村跡が存在すると回答した。同時に、周知の遺跡については範囲確認調査、未調査地域においては試掘調査の必要がある旨を回答した。

その後、浦添市教育委員会では沖縄県中部土木事務所の工事計画区分の3工区(崎原工区、東空寿工区、城間工区)のうち、本報告書で報告を行う東空寿古墓群が存在する東空寿工区について、過去に本格的な調査が行われておらず、遺跡の概要や墓の基数などが明らかではなかったため、浦添市教育委員会では、開発事業者との事前調整に向けた基礎資料を得る目的で、古墓の分布状況、残存状況などを確認するための範囲確認調査を平成23年2月16日～3月29日にかけて実施した。まず本遺跡が存在する丘陵は全体的に草木が覆い茂っていたため、古墓の観察が出来る程度の伐採作業を行い、順次に任意番号を付して、古墓の個別観察を行った。調査にあたっては沖縄県中部土木事務所作成の地籍・計画路線合成図を使用して、位置情報の記録を行い、遺構観察カードに遺構観察の記述を行った。その調査の結果、石積墓1基、洞穴墓1基、岩陰墓10基、平葺墓8基、亀甲墓59基、堀込墓14基、脇墓4基、形式不明のもの1基、計98基の古墓と壕と思われる遺構1基などを確認した。

上記の調査結果を踏まえ、平成23年9月16日付け浦教文第219号にて、東空寿工区計画地内にかかる古墓は亀甲墓35基を含む49基の墓が確認されたことを沖縄県中部土木事務所へ報告し、同年10月3日、同事務所と浦添市教育委員会で、道路計画路線上にかかる埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。その結果、当該文化財の現状保存や路線変更は不可能であることから、当該文化財について記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。また、本発掘調査は浦添市教育委員会が実施することや、調査に係る費用は浦添市教育委員会が積算し、事業者が負担すること、今回の協議を踏まえ協定を結ぶことなどについても合わせて協議を行った。その後、発掘調査の時期、期間について調整した結果、平成24年度に現地調査を実施し、平成25年度に出土品の整理、平成26年度に発掘調査報告書を刊行することとし、年度毎にそれぞれ契約を交わすことで合意した。こうした埋蔵文化財の取り扱いに関する協議や調整に基づき、平成24年3月1日付け沖縄県中部土木事務所長と浦添市教育委員会教育長との間で、埋蔵文化財の取り扱いの措置及び発掘調査の実施方法等について定めた「県道浦添西原線(港川～城間)道路改築事業(東空寿工区)に係る埋蔵文化財に関する協定書」(以下、「協定書」)を締結した。同時に、発掘調査事業の実施体制や現地調査から資料整理、報告書作成までの3年度にわたる発掘調査全体スケジュールを示した「発掘調査全体実施計画書」を提出した。

平成24年5月31日、上記の協議、協定を踏まえ沖縄県中部土木事務所長と浦添市長との間で、平成24年度分の発掘調査委託業務契約を締結した。同年6月1日付けで、契約書に基づく「平成24年度発掘調査実施計画書」を提出した。

平成24年度に現地調査を実施したが、地権者から発掘の承諾を得られていない古墓があったため、未調査となった古墓が数基あった。平成26年度にそれら古墓の承諾が得られたことから、現地調査を同年度に実施した。これらのことにより、平成27年度に出土品の整理、平成28年度に発掘調査報告書を刊行することとする「県道浦添西原線(港川～城間)道路改築事業(東空寿工区)に係る埋蔵文化財に関する協定



書の一部変更(第1回)」「以下、「協定書の一部変更(第1回)」を平成27年3月16日付けで締結した。

以降、平成24年3月1日付け締結の「協定書」および平成27年3月16日付け締結の「協定書の一部変更(第1回)」並びに各年度に締結した「発掘調査業務委託契約書」、「発掘調査実施計画書」等に基づき、平成24年度から平成28年度の5ヶ年事業として県道浦添西原線(港川～城間)道路改築事業に伴う城間東空寿古墓群の記録保存のための本発掘調査を実施した。

第2節 調査体制

調査体制は以下のとおりである。

調査主体	浦添市教育委員会			
事業責任	浦添市教育委員会	教育長	津波 清(平成23年度～平成24年度)	池原 寛安(平成25年度～平成28年度)
事業所管	浦添市教育委員会	文化部 部長	下地 安広(平成19年度～平成28年度)	
事業統括	同	文化課 課長	當間 眞榮(平成23年度～平成24年度)	
		同	松川 章(平成25年度～平成28年度)	
事業調整	同	文化財係長	宮里 信勇(平成23年度)	
		同	松川 章(平成24年度)	
		同	渡久地 政嗣(平成25年度～平成28年度)	
事業事務	同	文化財係主任	仲宗根 久里子(平成23年度～平成28年度)	
		同 主任	渡久地 政嗣(平成24年度)	
		同 主事	菅原 広史(平成24年度)	
	同	文化振興係主事	松田 奈津子(平成25年度～平成28年度)	
		臨時職員	名渡山 俊幸(平成24年度)	
		同	宮里 磨(平成25年度)	
		同	上原 仁美(平成26年度)	
調査員	同	文化財係主任	仲宗根久里子	
	同	嘱託職員	玉栄 飛道(平成24年度)	
	同	同	玉那覇 有登(平成24年度・平成26年度)	

資料整理嘱託職員

平成25年度	(嘱託職員)	比嘉 美智子、浦崎 祐子
平成26年度	(嘱託職員)	玉那覇 有登
平成27年度	(嘱託職員)	勝野 久美子、石嶺 敏子
平成28年度	(嘱託職員)	勝野 久美子

委託業務

平成24年度	発掘支援業務委託 株式会社アーキジオ沖縄
	細川 俊之(所長)、西井 敏夫(所長9月～)、天久 朝海(現場代理人・主任調査員)、宮城 勉(調査員)、細川 俊之(管理技術者)
平成25年度	遺物実測等業務委託 株式会社 島田組沖縄支店
	角上 寿行(支店長)、高橋 徹(主任技術者)

平成26年度 発掘支援業務委託 株式会社イーエーシー

大石 哲也(代表取締役)、菊池 恒三(調査員)、島尻 弘光(管理技術者)

平成27年度 遺物実測等業務委託 株式会社 シン技術コンサル沖縄営業所

平井 貢(所長)、菊池 康一郎(主任技術者)

第3節 調査の経過

現場での発掘作業については、平成24年度は古墓40基、平成26年度は古墓11基の調査を実施した。
第1次調査は調査範囲を2つに分け、第1調査区と第2調査区として調査を実施した。

○平成24年9月20日～平成25年3月19日

現場事務所や発掘調査機材の搬入など準備作業が整った後、現地の境界測量、防蛇網に伴う伐採作業および設置作業、各古墓の着手前状況の撮影を行った。その後、地形測量図の作成、着手前の全景撮影のための空中写真撮影を行った。空中写真撮影の後は重機による伐木作業を順次行った。平成24年11月16日より、第1調査区(001号墓～029号墓)の伐採作業および検出作業に順次着手した。並行して伐採樹木の運搬処理作業及び磁気探査を実施した。人力掘削により各古墓の表土除去作業が進行するにしたがって、各遺構の様相が確認可能となってきた。検出作業が終了後、順次、各古墓の外観や墓室の検出状況の撮影を行った。遺構掘削作業が終了すると、随時、完掘状況の撮影および遺構実測を行った。平成25年1月5日より、第1調査区の作業と並行して第2調査区(030号墓～049号墓)の伐採作業を始めた。第2調査区も上記の作業内容と同様に順次、伐木運搬、磁気探査、人力掘削を行い、掘削が終了した遺構について写真撮影、図面作成を行った。2月7日は第1調査区、3月12日は第2調査区の完掘全景撮影のための空中写真撮影を行った。作業と並行して出土遺物の洗浄および台帳作成を行った。各古墓の作業が終了したことを確認後、種子吹き付けを行い、本調査は終了した。

○平成25年4月～平成26年3月

平成25年度は前年度に出土した遺物の注記・接合作業を実施し、蔵骨器の実測および写真撮影を株式会社 島田組沖縄支店に委託を行った。また、蔵骨器の集計作業、蔵骨器の遺物カードの作成、副葬品の集計作業、副葬品の実測作業を行った。

○平成26年10月6日～平成27年3月13日

現地において調査対象墓の踏査を行い、着手前状況の撮影を行った。その後、防蛇網設置作業を行った。11月1日より重機を搬入し、伐木作業を行う。伐採後は順次、磁気探査を行った。11月19日より025号墓の人力掘削作業を開始した。その後、023号墓と丘陵西斜面に位置する古墓から順次作業に着手し、東斜面の古墓は1月6日から検出作業に着手した。遺構掘削作業が終了次第、写真撮影、図面作成を行った。作業と並行して出土遺物の洗浄及び台帳作成を行った。

○平成27年4月～平成28年3月

平成27年度は前年度に出土した遺物の注記・接合作業を実施し、蔵骨器の実測および写真撮影を株式会社 シン技術コンサル沖縄営業所に委託を行った。また、蔵骨器の遺物カードの作成、副葬品の集計作業、副葬品の実測作業を行った。

○平成28年4月～平成29年2月

平成28年度は副葬品のトレース作業、写真撮影を行った。それらと並行して原稿執筆および版組作業を行い、平成29年2月にそれらの成果を取りまとめた報告書を刊行した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 浦添市の地理的環境

浦添市は沖縄本島南部に位置する人口約11万4千人(県内4位)の都市で、西に東シナ海を臨み、北は宜野湾市、東は西原町、南は那覇市と接する。市域は要を北にした扇状を成し、東西8.4km、南北4.6kmで、面積は19.48km²を測る。琉球国時代には浦添間切と呼ばれ、1671年の宜野湾間切新設までは現在の宜野湾市をも含めた広大な地域であった。現在、市の西部には国道58号線、市中央部には国道330号線、東部には沖縄自動車道がそれぞれ南北に走り、本島の南北を結ぶ主要交通路に位置する。海浜部は、南北約3km、東西約1km、面積約273ヘクタールの地域を米軍牧港補給地区施設が占めている。

現在の市域は北を牧港川及び比屋良川、東を丘陵地、西を東シナ海の海岸、南を安謝川によって画されており、大局的な地形は丘陵地から西の東シナ海に向けて傾斜している。東の丘陵地を源として4つの河川(北より牧港川、シリン川、小湾川、安謝川)が西に流れ、市内を横断して東シナ海へと注ぐ。いずれも全長約3～5km、幅約50～90mの小規模な河川で、平均水位と平均流量は共に少ない。

市域の北側には南東から北西方向に延びる比高差20～30mの断層があり、浦添断層崖と呼ばれている。断層崖の南東に位置する浦添グスクは標高の高い地域であり、市内の最高地点は浦添グスクの南東端に屹立する岩「ワカリジー」頂上で148.2mを測る。

浦添市の地質は古いものから順に島尻層群、琉球層群、海浜堆積物および沖積層に分けることができる。これら地層の中でも基盤となるのは風化・浸食に弱い島尻層群であり、市の中央部～南東部に広く露出している。島尻層群は豊見城層、与那原層、新里層に細分されるが本市に分布するのは前二者であり、豊見城層は砂岩と泥岩、与那原層は泥岩を主体とする。沖縄の方言で豊見城層の砂岩は「ニービ」、与那原層の泥岩は「クチャ」と呼ばれる。市の西部や北部では島尻層の上位層である琉球層群が広く分布する。琉球層群を構成するのは石灰岩で、那覇石灰岩、読谷石灰岩、牧港石灰岩に細分されるが、市内では那覇石灰岩と牧港石灰岩の2種が分布している。那覇石灰岩は琉球層群の中で最も古い時代に形成された緻密な石灰岩で、市内の広い地域に分布する。石灰岩自体はその風化土である赤褐色の粘土で覆われている場合が多く、これを方言で「マージ」と呼ぶ。牧港石灰岩は市域でも空寿崎一帯の限られた地域にのみ分布する砂質の石灰岩である。海浜堆積物および沖積層は河川の河口付近や海岸沿いに分布するが、範囲は狭い。暗灰色粘土を主体とするが固結は弱く、軟弱地盤である。

第2節 遺跡の地理的環境

本遺跡は浦添市字城間東空寿に所在する。城間は屋富祖の北に位置し、東は伊祖、北は牧港、西は海岸に面している。国道58号の西側には米軍牧港補給地区施設が建設される。市内では面積の一番大きい字で23カ所の小字から成り、面積は1.95平方キロメートルである。城間の地形をみると字域の北(字牧港境)から西(字屋富祖境)に至る海岸に沿って海岸低地を形成し、内陸は下位段丘Ⅰ面で構成される。その段丘や丘陵をシリン川が北流して侵食する形で河川段丘崖が見られる。石灰岩丘陵を構成する地質は主に牧港石灰岩であり、この牧港石灰岩は砂質で、その砂粒のほとんどが大型有孔虫で構成される。有孔虫が粒状をしているため、その形状がアワオコシに似ていることから一般に「アワ石(粟石)」と称され、戦前までは家屋の壁や屋敷囲い、墓石などの用材として盛んに切り出された。この牧港石灰岩は、堆積した時の様子を示す層理や葉理、堆積時の流水の方向を示す斜交層理など典型的な堆積構造が発達する。



– 6 –

小字東空寿は西側に小字中空寿と接し、東側はシリン川域の低地に接する。同小字中央部の大部分は石灰岩質の丘陵であり、墓地と原野で占めている。昭和10年代の土地利用では西側に畑地が広がり、東空寿、中空寿、西空寿の三空寿をあわせて畑作が盛んな地域であった。畑地は腐葉物と湿潤に恵まれた上畑で、県下にその名を知られた「空寿藷」の産地であり、他にサトウキビや西瓜の生産も盛んであった。

本遺跡は城間の旧集落の北方に位置する小字東空寿の中央部の石灰岩丘陵に位置し、調査地内の地層は牧港石灰岩を基盤とする。墓群は石灰岩の岩盤を掘り込んで構築され、本遺跡の標高は9m～23mである。

第3節 遺跡周辺の歴史的環境

城間の地名について、1621(元和7)年のもので尚恭浦添王子朝良宛『琉球国知行目録』に「城間村」とある。また1649(順治3)年の『絵図郷村帳』に「城間村」、1635(寛永12)年の『琉球国高究帳』に「城間村」、1713(康熙52)年の『琉球国由来記』に「城間村」と表記が見られ、約400年前から現在に至って当地名は「城間」である。『琉球国由来記』によるとコバ森・アマカケノ嶽・古重嶽・波平森・屋富祖カマノ嶽の5御嶽と内原之殿の1殿がある。城間ノロの祭祀域は当村のみで、1731(雍正9)年の『琉球国旧記』でも城間ノロは城間だけの祭祀を担当していた。当村は琉球国時代、中国の封冊使一行の来流時に、薩摩役人が那覇の在番奉行所から移動し、城間村に滞在していた歴史的にも特筆される地である。沖縄三大ウェーキ(富農)の一つに数えられる「城間ナーカ」や「一番仮屋」の屋敷はその薩摩役人の避難場所として使われたといわれる。また、尚瀨王(在位1804～34)が病氣療養のため別荘を構えたのが城間村であり、城間御殿と称された。集落の主要道路沿いに敷地面積150坪余りの村屋があり、石高においても浦添間切で上位を占めていた。太平洋戦争時の1943(昭和18)年に日本軍によって海岸側の土地を没収され、住民を総動員して南飛行場が建設された。沖縄戦の際には本古墓群のある丘陵やその周辺でも激しい戦闘が行われている。戦後はそのまま米軍牧港補給地区として強制的に接収され、字域の51%が軍用地となっている。戦後は基地建設に仕事を求める労働者、関連業者の流入により市街地が形成されるようになった。人口の急激な流入により、農地から市街地へ、農村から都市化への移行が急速になる。

本古墓群の周辺の文化財として、約7,000年前の土器である爪形文土器が出土した城間古墓群(A地区9号墓)や貝塚時代前期、後期の集落跡である嘉門貝塚、近代の生産遺跡である牧港石灰岩を切り出した西海岸の石切場跡、近世から近代の墓群である港川崎原古墓群などが見られる。

<引用・参考文献>

- | | |
|---|------------------------------------|
| ・浦添市の人口(114,314人「広報うらそえ」2017.1.1) | ・浦添市史編集委員会1987『浦添市史 第六巻 資料編5』浦添市 |
| ・浦添市教育委員会1990『浦添市文化財悉皆調査報告書』 | ・角川書店1986『角川日本地名大辞典47沖縄』 |
| ・浦添市史編集委員会1989『浦添市史 第一巻 通史編』浦添市 | ・浦添市教育委員会1988『浦添の地名』 |
| ・城間字誌編集委員会『城間字誌 第一巻「城間の風景」』
浦添市城間自治会 | ・金城善2013「三つの「琉球国知行目録」」『首里城研究No.15』 |
| ・外間守善・波照間永吉編1997『定本 琉球国由来記』角川書店 | ・浦添市史編集委員会1987『浦添市史 第七巻 資料編6』浦添市 |
| ・平凡社2002「沖縄県の地名」『日本歴史地名大系』第四八巻 | ・沖縄県教育委員会1993『琉球国絵図史料集 第二集』 |

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺構

本遺跡は城間集落の墓域として周知されており、昭和27年作成の「土地所有権証明書交付簿」によると城間東空寿の古墓基数は61基とある。平成22年度に実施した本古墓群の範囲確認調査では約100基の古墓が確認されており、このうち49基の古墓が道路工事影響範囲に含まれることから、今回の調査実施対象墓となった。当初49基の古墓を確認していたが、調査中に埋没墓を3基検出したため、調査の対象となった古墓は亀甲墓が34基、平葺墓4基、堀込墓11基、破風墓1基、岩陰墓1基の合計51基である。(第3図)

調査時に閉塞されている状況で確認した古墓は004号墓・005号墓・027号墓の3基のみで、023号墓及び050～052号墓は埋没した状況で検出された。他の古墓は墓口が空いており、墓室内では蔵骨器が割れた状態で検出されたほか、墓庭へ廃棄されたものも多く見られた。

本遺跡の古墓は、一帯に分布する牧港石灰岩を利用して造墓することが窺え、墓室や墓庭を掘り込んで構築する。亀甲墓が主体を占めるが、墓室の棚形状は2類b型や3類a型及びb型、5類a型及びb型、6類a型等が確認でき、各古墓でバリエーションが見られた。

以下、これらの古墓に任意の番号を丘陵西斜面に造営されている墓から北側より001号墓から005号墓と付していき、ついで東斜面に造営されている墓を北側より006号墓から052号墓と付した。028号墓については測量により工事影響範囲外であることが判明したため調査は行っていない。なお、平成24年度に『市内遺跡発掘調査報告書(3)―平成18～23年度調査報告―』で本古墓群を報告しているが、本調査では新たに番号を付して発掘調査を実施した。

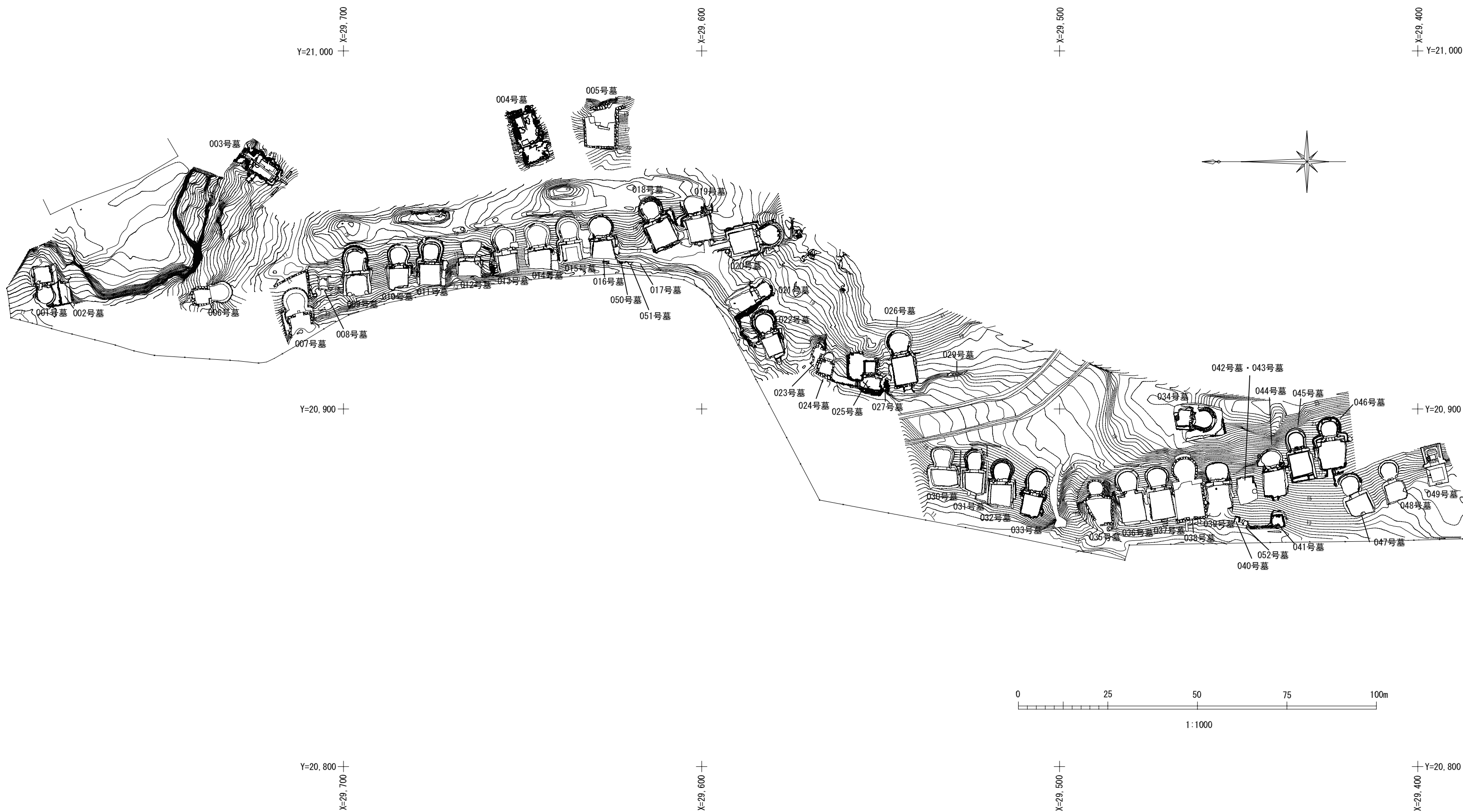
第2節 遺物

遺物は総計で4,382点が出土した。出土遺物の数量と内訳を第3表(1)～(4)にまとめた。主な出土遺物は、陶製及び石製の蔵骨器、副葬品と思われる陶磁器類、煙管や簪、銭貨などの金属製品、一次葬時の木製の棺箱のものとと思われる鉄釘等が出土している。遺物については基本的に墓ごとに取り上げた。

最も多く出土した遺物は蔵骨器で総数2,753点である。そのうち、接合・復元できた資料は蓋と身をあわせて433点である。蔵骨器の種類は家形、甕形、転用品に分けられ、その中で最も多い出土は甕形蔵骨器のマンガン釉甕形であった。復元できた資料は蓋102点、身85点を数え、復元資料の43%を占める。次はボージャー形で、復元できた資料は蓋76点、身は64点を数え、32.3%を占める。次いで、家形蔵骨器の上焼ツノ形、マンガン釉御殿形、赤焼御殿形が続く。調査を実施した古墓はそのほとんどが空墓で破片資料または墓庭への廃棄資料が多い中、004号墓は墓室より多くの完形資料を得ることが出来た。蓋と身のセット関係で得られた資料も多く、37点のセット関係を把握できたことは特筆される。

蔵骨器以外の遺物として、副葬品と思われる陶磁器類の出土がみられた。数量は第3表(3)～(4)をご参照いただきたい。そのほとんどは沖縄産で碗、小杯、瓶が多くを占める。金属製品は銅製の煙管、指輪、簪、鉞、毛抜き、銭貨、釘、小刀が出土した。第55図193の雁首や194の延べ煙管では灰を落とすときの叩き痕である使用痕が見られた。銭貨は61枚出土しており、そのほとんどは004号墓出土の蔵骨器の内より検出されている。古墓によって戦争遺物の出土も見られたが、今回は報告を見送ったものが多い。

以上、遺構及び遺物について概述した。各遺構、各遺物の詳細については次章より報告する。



第3図 調査地地形と各墓の位置図

第1表 墓室平面形の類型（浦添市教育委員会2007『市内遺跡発掘調査報告書（1）』を一部改変、加筆修正）

類型		墓室平面形と柵の形状		墓室及び柵の特徴や構築方法
1類	a	柵無し		楕円またはいびつな形状。
	b			直線的な規格性をもって造る。
	c			蔵骨器が数点置けるくらいの広さで、墓口から奥壁まで直線的に造る。平面形は縦長の方形となる。1人（一次葬人骨）を安置する墓として造られる。棺箱は遺構形状と同様に縦置きとなる。 ※ 奥壁の片側または両側を拡張して蔵骨器を安置する場合もある。
	d			蔵骨器が数点置ける広さで平面形は楕円に近い。1c同様一次葬人骨を安置する墓として造られる。1cでは棺箱を縦置きするが、1dは横置きになる。
2類	a	出窓状		正面の奥壁を凸状（＝出窓状）に成形。柵幅がシルヒラシ幅より短くなる。
	b			正面奥壁と左右側壁を凸状に成形。
	c			正面奥壁と、左右側壁のいずれか片側を凸状に成形。
3類	a	「コ」字状		平面形が「コ」字を90度左に回転した形状。柵は平坦になる。 ※ 左右柵の片側いづれかと正面柵の接地部に段差ができることもある。 ※ 柵の高さで分類できる可能性あり。
	b			平面形は3類aと同じだが、正面柵と左右柵の接地部に段差ができる。正面に比べて左右の柵が低くなる。
	c	「L」字状		奥壁（正面）と側壁のいずれか片側のみ柵を造る。 平面形は「L」字を90度または180度、右に回転した形状。
4類	a	段状（階段状）		墓室内が楕円またはいびつな形状で、ほぼ平行するように正面1段の柵を造る。
	b			墓室内が直線的な規格で造られ、正面に1段の柵を造る。 ※ 柵の高さで細分類できる可能性あり。
	c			墓室内が直線的な規格で造られ、正面に2段の柵を造る。
5類	a	「コ」字状＋階段状		3類a＋4類c
	b			3類b＋4類c
	c	「L」字状＋階段状		3類c＋4類c
6類	a	「コ」字状＋段状		3類a＋4類b
	b			3類b＋4類b
	c	「L」字状＋段状		3類c＋4類b

第2表 遺構観察一覧表(1)

墓番号	外観形式	墓室類型	墓口方位	平面面積 (㎡)	ヤジョーマーイの有無	墓底法量 (m)			墓口法量 (m)			墓室法量 (m)			棚 (段数)			棚高さ (m)			備考
						幅	奥行	高さ	高さ	幅	羨道	高さ	幅	奥行	奥	右	左	奥 (シルヒラシ棚)	右	左	
001	亀甲墓	5b	N97° E 東南東	64.8	消失?	4.78	4.53	0.98	0.91	0.64	0.93	1.67	2.77	3.55	3	1	1	(未計測)			空墓。臼、子臼、ヌンチャ有り。室の手不明瞭。羨道とシルヒラシ間に1.3×0.7の空間が見られる。045号墓類似。
002	堀込墓?	3a	N85° E 東北東	22.9	-	2.2~ 2.9	2.5	-	1.06	0.66	0.44	1.25	2.55	1.75	1	1	1	(未計測)			空墓。墓口周辺を切石による布積みで構築し、漆喰塗布仕上げ。墓室天井および壁面の成形成が不十分。
003	平葺墓	3a	N49° E 東北東	74.5	無	4.8	8.3	3.7	1.6~ 1.1	1.2~ 0.7	0.7	1.6~ 1.7	4.20	3.2	1	1	1	0.65	0.6	0.6	空墓。正面相方積み。墓口は布積み。袖石無し。棚岩盤削り出し。墓室東隅で骸骨の埋納有。
004	平葺墓	2b	N62° E 東北東	115.9	無	4.4	8.2	2.6	1.1	0.7	1.02	1.8	4.8	3.1	1	1	1	0.79	0.73	0.72	庭積みは岩盤削り出しと石積みの併用。袖石無し。墓口は岩盤削り出し。片方の隅石使用。墓室より42基の蔵骨器(身)が出土。
005	亀甲墓	5b	N115° E 北北東	42	無	6.16	5.06	2.18	1.08	0.65	0.9	1.98	2.46	2.93	3	1	1	(未計測)			チジュ及びヤジョーマーイ無し。厩石のみ。向かって左の子臼?のみで、その他の臼なし。ヌンチャ不明瞭。袖石岩盤削り出し。安置された蔵骨器は上焼ツノ形とマンガン粒安里V期。
006	亀甲墓	6a	N10° W 北北西	39.9	有	3.76	5.1	1.23	0.91	0.62	0.91	1.40	2.36	2.77	2	1	1	(未計測)			厩石、臼、子臼、ヌンチャ有り。室の手不明瞭。正面全面漆喰塗布。袖石は岩盤と切石の併用。庭積み岩盤削り出し。墓室岩盤掘込。棚岩盤削り出し、縁のみ一部切石。
007	亀甲墓	5c変形	N104° W 西西南	75.1	有	5.75	(3.75)	1.55	1.06	0.64	0.79	1.46	2.58	2.69	3	1	1	(未計測)			臼、子臼、ヌンチャ、室の手有り。供物台2段。右袖石布積み。左袖石は岩盤削り出し。奥棚3番棚及び左棚は段差の無い同一の高さのL字状だが、右棚には段差が設けられる。
008	堀込墓	1b	N98° W 西西南	10.2	無	2.9~ 3.0	3.7	1.2~ 2.5	0.83	0.6	0.8	0.87	1.92	1.08	-	-	-	(未計測)			空墓。墓底を掘り下げて構築し、岩盤に横穴を掘り込んで墓室を構築する。袖石は見られない。
009	亀甲墓	5b	N95° W 西西南	101.6	有	6.0	6.0	1.5	1.0	0.65	0.8	1.7	2.6	2.6	3	1	1	0.33	0.23	0.21	空墓。正面岩盤削り出し。墓口にジョウカパイと隅石あり。臼、子臼、ヌンチャ、室の手有り。袖石および庭積み岩盤削り出し。
010	亀甲墓	5a	N85° W 西北西	87.0	有	5.48	5.03	1.2	0.99	0.66	1.05	1.72	2.4	2.7	3	1	1	(未計測)			空墓。正面は漆喰塗布仕上げ。袖石は相方積み。庭積みは岩盤削り出し。シルヒラシに枝サンゴ有り。棚は岩盤削り出しで縁石に板状切石。
011	亀甲墓	6c変形	N88° W 西北西	96.1	有	0.95	0.65	0.97	0.95	0.65	0.97	2.0	3.33	2.98	3	2	1	(未計測)			空墓。鏡石は岩盤削り出し。臼、子臼、ヌンチャ不明瞭。子臼無か?奥棚1番棚は岩盤削り出し。2番棚および3番棚は縁石に切石を使用。2番棚はL字状。3番棚がコの字状。
012	亀甲墓	3b	N90° W 西	98.3	無	6.3	4.3	1.7	1.2	0.6 ~ 0.7	1.0	1.5	3.1	2.6	1	1	1	0.88	0.8	0.77	空墓。正面、袖石、庭積み岩盤削り出し。厩石のカーブ線やか。臼、子臼、ヌンチャ、ヤジョーマーイ無し。墓室岩盤掘込。棚出窓状。
013	亀甲墓		N92° W 西西南	73.7	有	5.07	5.5	1.43	0.98	0.64	0.95	-	-	-				(未計測)			空墓。正面岩盤掘削し。墓室内落壁により未調査。正面岩盤を成形後布積みによる仕上げ。袖石岩盤削り出し。袖石に漆喰塗布の跡。
014	亀甲墓	3b	N100° W 西西南	88.4	有	6.37	6.05	1.54	1.0	0.64	0.94	2.0	3.95	2.65	1	1	1	(未計測)			空墓。ヤジョーマーイ及び厩石周縁の石列岩盤削り出し。左袖石は相方積み。右袖石は切石と岩盤削り出しの併用。室の手不明瞭。棚岩盤削り出し。
015	亀甲墓	6b	N80° W 西北西	80.8	有	5.12	4.85	1.38	1.0	0.66	0.94	1.9	2.77	2.73	2	1	1	(未計測)			空墓。墓口は切石積み。ヤジョーマーイは岩盤の成形と切石積みを使用。厩石は石2つ。臼、子臼、ヌンチャ有り。室の手不明瞭。奥棚1番棚岩盤削り出し。2番棚及び左右棚は縁に切石を使用。
016	亀甲墓	2b	N82° W 西北西	89.1	有	6.5	5.6	1.5	0.97	0.63	0.9	1.8	4.2	2.3	1	1	1	0.74	0.51	0.5	空墓。ヤジョーマーイ無し。臼、子臼、ヌンチャ有り。室の手不明瞭。棚は出窓状。
017	堀込墓	1a	N126° W 西西南	5.1	無	1.8	1.3	-	0.57	1.3	-	1.08	1.6	1.43	-	-	-	-	-	-	空墓。正面の大部分が消失。墓室が墓底より下がる。棚無。正面上部に野面積みが見られる。
018	亀甲墓	6a	N110° W 西西南	121.9	有	6.6	6.8	1.1	1.0	0.65	1.0	1.8	2.7	2.7	2	1	1	0.34	0.24	0.31	空墓。正面、袖石、庭積み岩盤削り出し。臼、子臼、ヌンチャ有り。棚岩盤削り出しと切石の併用。棚は縁に切石を使用。墓門有り。
019	亀甲墓	5b	N100° W 西西南	100	有	6	6.2	1.3	0.95	0.6	1.2	2.0	3.0	2.4	3	1	1	0.34	0.28	0.31	空墓。正面、袖石、庭積み岩盤削り出し。臼、子臼、ヌンチャ、室の手有り。棚は縁に切石を使用。墓門有り。
020	亀甲墓	5b	N7° W 北北西	133.5	有	5.83	6.83	1.42	1.01	0.64	0.98	1.93	2.43	2.76	3	1	1	(未計測)			空墓。臼、子臼、ヌンチャ、室の手有。シルヒラシ棚に枝サンゴを敷き詰める。奥棚は岩盤削り出し。左右棚は縁石に切石を使用。
021	亀甲墓	2b-6a	N27° W 北北西	81.0	無	4.2	6.1	2.0	1.0	0.63	0.83	1.6	3.3	2.8	2	1	1	0.68→ 0.30	0.31	0.32	空墓。左庭積みが隣墓の石積みにより消失。正面、袖石、庭積み岩盤削り出し。ジョウカパイ及びシミシ有り。棚は出窓状からコの字状へと進み替えた形跡有り。墓底北側隅で骸骨出土。
022	亀甲墓	5a	N105° W 西西南	102.4	有	4.5	5.1	1.3	1.4	0.64	0.82	1.60	2.5	3.0	3	1	1	0.43	0.43	0.55	空墓。鏡石の切石1枚。袖石布積み。庭積みは岩盤削り出し。臼、子臼、ヌンチャ有り。墓室岩盤掘込。棚岩盤削り出し。奥棚1段目の縁で切石使用。
023	堀込墓	1a	N89° W 西北西	1.8	無	2.0	2.85	0.52	-	0.57	0.5	0.73	1.72	1.28	-	-	-	-	-	-	埋没。正面およびジョウカパイ崩落。墓室狭小。墓門から墓底へ至る墓道?が比較的長い。
024	亀甲墓	類型不明	N70° W 西北西	62.8	無	3.18	3.68	0.94	0.68	0.52	0.58	0.98	2.02	1.38	-	1	1	-	0.12	0.12	空墓。規模の小さい亀甲墓。臼、子臼有り。ヌンチャ不明瞭。厩石崩落。袖石、左右庭積み岩盤削り出し。奥棚が無く、左右の1段幅のみ。シルヒラシの中央奥に枕港石灰岩の礎を4つ配置する。
025	平葺墓	3a	N80° W 西北西	104	無	5.3	3.1	0.9	1.0	0.6	0.76	1.2	2.7	1.8	1	1	1	0.22	0.15	0.19	空墓。墓の入口が024号墓側に設けられる。横長の墓底。棚は岩盤削り出し。袖石の高さが左右で異なる。棚の高さが低いコの字状。

第2表 遺構観察一覧表(2)

墓番号	外観形式	墓室類型	墓口方位	平面面積(m ²)	ヤジョー マリー の有無	墓庭法量 (m)			墓口法量 (m)			墓室法量 (m)			棚 (段数)			棚高さ (m)			備考
						幅	奥行	高さ	高さ	幅	羨道	高さ	幅	奥行	奥	右	左	奥 (シルヒ ラシ側)	右	左	
026	亀甲墓	3b	N95° W 西南西	133.8	無	6.0	7.5	1.0	1.05	0.63	1.2	1.7	3.8	2.6	1	1	1	0.5	0.34	0.34	空墓。臼、子臼、ヌンチャ有り。重の手不明瞭。正面岩積み。両袖石、両底積み相方積み。墓室岩壁堀込。棚の縁に切石を使用。
027	堀込墓	1a	N88° W 西北西	2.1	無	2.82	2.2	-	0.93	0.64	-	0.9	0.9	0.7	-	-	-	-	-	-	野面積みによる閉塞性。墓室狭小。マンガン輪装安里IV期2基検出。シルヒラシ無。
029	岩陰墓	1a	N80° W 西北西	-	-	-	-	-	1.06	0.88	-	1.05	0.8	0.6	-	-	-	-	-	-	空墓。岩陰を利用。墓室床面を段状に成形。墓室幅は90cm未満と狭小型。027号墓と墓室法量近似のため、029号墓も蔵骨器安置数は2基程度か。
030	亀甲墓	5b	N80° E 西北西	87.0	有	7.02	4.52	1.45	1.05	0.62	0.73	1.51	2.41	2.68	3	1	1	(未計測)			空墓。墓正面岩積み。臼、子臼、ヌンチャ。重の手有り。墓室及び棚は岩壁削り出し。羨道よりシルヒラシが下がる。天井の成形丁寧。
031	亀甲墓	6a	N80° W 西北西	79.8	有	4.8	5.62	1.21	1.05	0.67	0.89	1.65	3.97	2.82	2	1	1	(未計測)			空墓。墓正面は切石積み。両袖石は岩壁削り出し。左底積みは岩壁削り出し。右底積みは相方積み。羨道よりシルヒラシが低い位置にある。墓室平面形は室。シルヒラシは矩形。棚は岩壁削り出し。
032	亀甲墓	5a 変形	N95° W 西南西	94.7	有	5.71	5.79	1.32	1.06	0.65	0.95	1.75	2.27	2.56	3	1	1	(未計測)			空墓。墓正面切石積み。両袖石は岩壁削り出し。右底積みは隣墓031号墓の左底積みの上部に構築される。羨道よりシルヒラシが低い位置にある。棚は岩壁削り出し。
033	亀甲墓	5a	N77° W 西北西	88.8	有	5	5.5	2.4	1.0	0.66	0.87	2.2	2.5	2.7	3	1	1	0.28	0.28	0.25	空墓。臼、子臼、ヌンチャ有り。両袖石及び両底積みは切石積み。墓正面岩積み。墓室両端及び天井が石組のアーチ状となるマチ(巻)墓。棚は縁に切石を使用。
034	亀甲墓	不明	N10° W 北北西	121	有	4.3	3	1.56	-	0.78	0.8	(1.4)	3.4	2.4	1	1	1	-	-	0.18	空墓。臼は岩壁を半円形状に成形。子臼有。ヌンチャ。重の手不明瞭。底積みは岩壁削り出しと石積みの併用。墓室へ昇降の階段あり。墓室内壁に土室を築いた見られ、シルヒラシから地下への段状の堀込有。
035	亀甲墓	5b	N90° W 西	91.6	有	6.98	9.11	1.68	-	-	-	2.06	3.96	3.16	3	1	1	0.3	0.3	0.3	空墓。屋根周縁の石列のみ残存。正面の層石や墓口の構成石材など他の部位は崩落または消失。正面岩壁を墓口よりも大きく構内形に掘り込む構築法が観察できる。棚の縁は切石を使用。
036	亀甲墓		N91° W 西南西	112.8	有	6.55	7.27	1.4	(1.46)	(1.35)	-	1.82	4.05	3.45				(未計測)			空墓。墓正面崩落著しい。墓室内崩落のため未調査。正面岩壁を墓口よりも大きく矩形に掘り込む構築法が観察できる。
037	亀甲墓	5b	N102° W 西南西	102.9	有	6.24	7.97	1.06	1.06	0.67	1.17	1.72	2.44	2.8	3	1	1	(未計測)			空墓。臼・子臼・ヌンチャ・重の手有り。墓室左右壁が布積み仕上げ。シルヒラシ・棚に枝サンゴを敷き詰める。羨道に厚みのある切石が使用され、シルヒラシと高低差が生じている。
038	亀甲墓	6a	N71° W 西北西	114.6	有	6.21	8.79	1.81	1.39	1.51	0.52	1.6	1.96	2.82	2	1	1	0.3	0.3	0.3	空墓。左臼、子臼、屋根周縁の石列、ヤジョーマリー。重の手の一部が残存。正面の層石や墓口の構成石材等他の部位は崩落又は消失。墓室堀込。棚は岩壁削り出し。
039	亀甲墓	3a	N67° W 西北西	107.6	無	6.1	6.8	1.75	1.0	0.62	1.06	1.8	4.0	2.7	1	1	1	0.52	0.51	0.52	空墓。臼、ヌンチャ有り。子臼、重の手無し。墓正面切石組。袖石、底積み岩壁削り出し。墓室岩壁堀込。棚は岩壁削り出し。一部切石使用。奥壁の一部相方積み。墓室で埋納蔵骨器検出。
040	堀込墓	1b	N80° W 西北西	-	-	1.1	1.3	-	0.6	0.63	-	0.85	1.05	0.74	-	-	-	-	-	-	空墓。岩壁を掘込み、墓口上部と正面左右に相い相方積みにより構築。墓室狭小。マンガン輪装安里IV～V期および荒焼御殿形が室内に出土。
041	平葺墓	3a	N85° W 西北西	19.2	有	3	2.2~ 3.1	2.1	0.8	0.63	0.8	1.3	2.3	1.9	1	1	1	0.17	0.16	0.22	空墓。屋根らしき成形がcaううて見られる。袖石無し。墓底を掘り下げて構築。底積みの一部に石積みあり。棚は岩壁削り出しと縁に切石利用を併用。
042/ 043	堀込墓	1b	N106° W 西南西	44.2	無	5.5	6.8	1.07	-	-	-	0.8	3.2	0.63	-	-	-	-	-	-	空墓。墓口の石組が崩落または消失。墓口と見られる開口部が2箇所並ぶが墓室内は区切り無し。墓室幅と比較すると奥行き0.7m未満は短い方。
044	亀甲墓	3b	N99° W 西南西	94.2	有	6.0	7.0	2.2	1.0	0.65	1.0	1.8	3.4	3.1	1	1	1	0.63	0.43	0.43	空墓。臼、子臼、ヌンチャ有り。重の手無し。袖石岩壁削り出しと布積みの併用。左右底積み岩壁削り出し。墓室堀込。棚は岩壁削り出しと縁に切石利用の併用。
045	亀甲墓	5a	N94° W 西南西	96.2	有	5.74	6.31	1.51	0.99	0.61	1.4	2.11	3.12	3.09	3	1	1	(未計測)			空墓。001号墓で見られた羨道と墓室の間に空間がある。墓室堀込。墓室平面縦正方形。天井が平たく成形される。
046	亀甲墓	5b	N95° W 西南西	130	有	7.3	7.5	1.5	1.0	0.62	0.91	1.6	2.5	2.6	3	1	1	0.37	0.23	0.21	空墓。臼、子臼、ヌンチャ。重の手有り。袖石岩壁削り出しの2段。底積み岩壁削り出しと切石積みの併用。墓室堀込。棚は岩壁削り出し。
047	亀甲墓	5b	N108° W 西南西	80	有	6.28	5.98	1	0.94	0.63	0.92	1.7	2.43	2.77	3	1	1	(未計測)			空墓。層石や臼など崩落。墓室は岩壁を掘り込み構築。棚は縁に切石を使用。
048	亀甲墓	5b	N100° W 西南西	87.9	有	5.45	5.2	(0.5)	0.9	0.63	0.81	1.71	2.35	2.63	3	1	1	(未計測)			空墓。底のほとんが埋没。層石の一部、臼、袖石、底積み崩落。正面鏡石切石3枚。墓室棚は縁に切石を使用。
049	破風墓	5b	N100° W 西南西	63.1	有	5.43	5.4	0.45~ 1	-	-	-	-	2.61	2.94	3	1	1	(未計測)			屋根および正面の石組崩落。ヤジョーマリーはコ字状(屋根の形状に合わせる)。底積み岩壁削り出し。正面及び屋根に見られる被覆はコンクリートか。
050	堀込墓	1a	西南西	-	無	-	-	-				0.5	1.1	0.53	-	-	-				埋没墓。マンガン輪装形1基検出。墓室を墓底より下位に構築。墓室狭小。
051	堀込墓	1b	西南西	-	無	-	-	-				0.6	0.94	0.65	-	-	-				埋没墓。ボージャー形2基検出。050号墓より上位位置に所在する。
052	堀込墓	1b	西北西	-	無	1	1.4	-	0.6	1.08	-	0.77	1.7	0.84	-	-	-				埋没空墓。040号墓の南側に位置する。造りが類似。ただし、040号墓より横長の墓室で、より多くの蔵骨器を安置されていた可能性がある。

第3表 出土遺物一覧表(1)

種類			蓋		0 0 1 号	0 0 2 号	0 0 3 号	0 0 4 号	0 0 5 号	0 0 6 号	0 0 7 号	0 0 8 号	0 0 9 号	0 1 0 号	0 1 1 号	0 1 2 号	0 1 3 号	0 1 4 号	0 1 5 号	0 1 6 号	0 1 7 号	0 1 8 号	0 1 9 号	0 2 0 号	0 2 1 号	0 2 2 号	0 2 3 号	0 2 4 号	0 2 5 号	小計 1	
蔵骨器	家形 (石製)	蓋	完形			2	3																							5	
		身	完形			2	3																							5	
	ボージャー 形	蓋	完形			6	26								12		1		1						2				1	49	
		破片				1								4		1														6	
		身	完形			4	28							8											3				1	44	
		破片	1									5	4		13		24	13	15					9						84	
	無軸甕形	身	完形											1																1	
	マンガン釉 甕形	蓋	完形				8	1			3	3			4	1	3		7	1	3			4	3			3	7	51	
		破片	5							1	2	2	3			7	1	18	1	2			2			1	3	4	52		
		身	完形				7	3	1		3	3	1		2	1			6	1	4			4	3			1	5	45	
		破片	7	2		1	1	3	10	4	10	15	32	58		132	3	218	21	78			4			5	4	6	614		
	マンガン釉 底付甕形	蓋	完形														1													1	2
		身	完形												1		1		1											3	
		破片																												0	
	赤焼御殿形	蓋	完形				2								2																4
		破片																	3		1									4	
		身	完形				2																							2	
		破片			1								1		2				3	11										18	
	マンガン釉 御殿形	蓋	完形									2			1								2								5
		破片																												0	
		身	完形									1			1							1								3	
		破片											1	3		1					17									22	
	上焼本御殿 形	蓋	完形																1		1										2
		破片																				5								5	
		身	完形																		2									2	
		破片																	4											4	
	上焼ツノ形	蓋	完形					3					1										1	1		1			1	8	
		破片										7							34											41	
		身	完形					3				2													1	1			1	8	
		破片																	126											126	
	上焼コバル ト釉御殿形	蓋	完形																											0	
		身	破片																											0	
	御殿形 (施釉)	蓋	破片	1										4				4												9	
		身	破片	1								2					4													7	
	転用蔵骨器 (沖縄産無 釉陶器)	蓋	完形				1													1										2	
		破片	1																											1	
		身	完形				2		1																			1	1	5	
		破片			20																							19	70	109	
	転用蔵骨器 (中国産釉 種陶器)	身	破片			1																								1	
	現代蔵骨器	蓋	完形					2																							2
		身	完形					2																							2
	合計				16	2	36	84	15	5	10	11	36	25	40	112	2	175	24	446	24	116	0	1	30	8	6	31	98	1353	

※「完形」の個数には、接合により1基（個体）として集計可能なものを含む。

第3表 出土遺物一覧表(2)

種類				蓋		0 2 6 号	0 2 7 号	0 2 9 号	0 3 0 号	0 3 1 号	0 3 2 号	0 3 3 号	0 3 4 号	0 3 5 号	0 3 6 号	0 3 7 号	0 3 8 号	0 3 9 号	0 4 0 号	0 4 1 号	0 4 2 号	0 4 3 号	0 4 4 号	0 4 5 号	0 4 6 号	0 4 7 号	0 4 8 号	0 4 9 号	0 5 0 号	0 5 1 号	0 5 2 号	小計 2	合計 (小計1+ 小計2)		
蔵骨器	家形 (石製)	蓋	完形															1														1	6		
		身	完形															4														4	9		
	ボージャー 形	蓋	完形														1		17	1	2		4								2	27	76		
		破片															1		19	1	2			5			2		5			35	41		
		蓋	完形																15		1			2							2	20	64		
		身	破片	2					1								3	1	169	6	8			13			4	10	23		2	242	326		
	無軸甕形	身	完形																													0	1		
		マンガン軸 甕形	蓋	完形	2	1					1						1		16	9	1	6	1		2		7	4						51	102
	破片		3	1				1		7						4		1	10		3				1		8		1	1			41	93	
	身		完形	2	1					1		2			10	7	1	7					1	1	5	1							40	85	
	破片		6	2				1		168					1	3	4	162	56	14	1			2	7	27	51	4	20	1		2	532	1,146	
	マンガン軸 底付甕形	蓋	完形	1															1	1													3	5	
		身	完形																														0	3	
		破片	1																														1	1	
	赤焼御殿形	蓋	完形																5															5	9
		破片																1	23														24	28	
		身	完形																5															5	7
		破片																	68														68	86	
	マンガン軸 御殿形	蓋	完形	1												1			2	1														5	10
		破片																1	19	1							2						23	23	
		身	完形													1			5														6	9	
		破片																									5						5	27	
	上焼本御殿 形	蓋	完形																							1								1	3
		破片																																0	5
		身	完形																							1								1	3
		破片																																0	4
	上焼ツノ形	蓋	完形												1			2	1															4	12
		破片													1					41	1			2			28						73	114	
		身	完形																5															5	13
		破片																	9					1			40						50	176	
	上焼コバル ト軸御殿形	蓋	完形													1																		1	1
		身	破片													7																	7	7	
	御殿形 (施軸)	蓋	破片							2							1			2									8					13	22
		身	破片							3				1	4					2								5			1		16	23	
	転用蔵骨器 (沖縄産無 軸陶器)	蓋	完形																		1													1	3
		破片																1	1															2	3
		身	完形	1														1				1											3	8	
		破片	1	3										8		8	65																85	194	
	転用蔵骨器 (中国産褐釉陶 器)	身	破片																														0	1	
	現代蔵骨器	蓋	完形																															0	2
		身	完形																															0	2
	合計				20	8	0	0	3	7	175	0	14	24	15	102	597	74	45	2	4	28	9	41	145	14	62	2	4	5	1400	2,753			

※「完形」の個数には、接合により1基（個体）として集計可能なものを含む。

第3表 出土遺物一覧表(3)

種類			0 0 1 号	0 0 2 号	0 0 3 号	0 0 4 号	0 0 5 号	0 0 6 号	0 0 7 号	0 0 8 号	0 0 9 号	0 1 0 号	0 1 1 号	0 1 2 号	0 1 3 号	0 1 4 号	0 1 5 号	0 1 6 号	0 1 7 号	0 1 8 号	0 1 9 号	0 2 0 号	0 2 1 号	0 2 2 号	0 2 3 号	0 2 4 号	0 2 5 号	0 2 6 号	小計 1	
本土産磁器	湯のみ	完形				3																							3	
		破片				1			1																				2	
	皿	完形						1				1	1													1			4	
		破片	1														2										1		4	
	碗	完形																											0	
		破片									1				3		8	6	2										20	
	小碗	完形							3		2	2			2	2	1					1								13
		破片						1	1		2				2	1		6						1		1	2			17
	瓶	破片														2					1					1	2			2
	小杯	完形	1						1			4					1				1		1		3					12
破片					1													1			2					1			6	
器種不明	破片				1					2									1	2					1	1			8	
輸入	皿	破片																									2		2	
	小杯	破片																											0	
	小碗	破片																											0	
	器種不明	破片																								1	1		2	
沖縄産陶器	瓶（施軸）	完形	1		1	2						1	1	3						2				2				1	14	
		破片	1			2			1			3	1	4	1		1	1	3	2	4		1	2	1	1	1	5	2	37
	小碗	完形														1													1	
		破片	1																										1	
	碗	完形																				1							1	
		破片									2			5	1	1								1		3	2	3	18	
	小杯	完形				5					3												4			2	1	1	16	
		破片																										2	2	
	火取？	破片																											0	
	皿	破片				4																							4	
	酒注	破片																											0	
	アンビン	破片																											0	
	鉢	破片							1		1									1										3
	アングーガーミ	完形											1	1																2
		破片							1				1		1														3	
	香炉	完形																												0
		破片																									1			1
	急須	完形																												0
		破片																									1			1
	火入れ	完形				1																								1
		破片										2																		2
	播鉢	破片								1															1					2
水注	破片					1																							1	
器種不明	破片	2				7				2		4	21	27	4		3		4				2	1		1	6	13		97
陶質土器		鉢	破片																							3	3	1		7
		鉢	破片									1																		1
		火炉	破片	1								1															1	1		3
		蓋	破片																								2			2
		器種不明	破片				5									3											1	10	3	22
瓦		破片	3						1				14	7	4	1	3	300								2	1			336
円盤状製品		完形													1													2	3	
		破片							1																		1			2
煙管	金属製	瓶首	完形				1				1													1		1				4
			破片																											0
		刀豆型																1												1
			延べ煙管																						1					1
	陶製	瓶首	完形																					1						1
			破片				2						1																	3
	吸い口				1															1									2	
金属製品	簪	完形				2															1							1	5	
		完形				6						3					3		9										21	
	指輪	破片									7																			31
		鉄	完形				1																							1
	毛掻き	完形				1																							1	
		鉄釘	完形				1	3								10		44				5								63
	小刀		破片				1					24				28		41			1	2								97
		不明	完形				1																							1
	不明	破片	1			6			1	1	96		5			20	2				1				2	1				137
銭貨	銭貨	寛永通宝				3	36			1																		4		44
		紹聖元寶						1																						1
		無文銭				3	2																							5
		一銭																									1			1
		破片				1	2																							3
ガラス製品	薬瓶	完形																		2						1			3	
		完形										5				2	1		1		2				3				14	
	ビーズ	破片														4	6								1				11	
		完形																											0	
		破片																												0
プラスチック製品	ボタン	完形							3																	1			4	
		破片																		2									2	
	櫛	完形				1																							1	
		破片															1				1								2	
	ハブラシ																												0	
海産貝																														

第3表 出土遺物一覽表(4)

[illegible]

※「完形」の個数には、接合により1基（個体）として集計可能なものを含む。

第4章 調査の成果

調査では51基の墓を実施した。これらの遺構の概要については第2表に示したとおりである。本章ではこれらの墓の中から遺構と遺物の残存状況が良好な資料を図示し報告する。また詳細な報告を行う以外の墓については、巻末に掲載した写真図版をもって報告する。

第1節 003号墓

(1) 遺構(第4図～第5図、図版5～図版8)

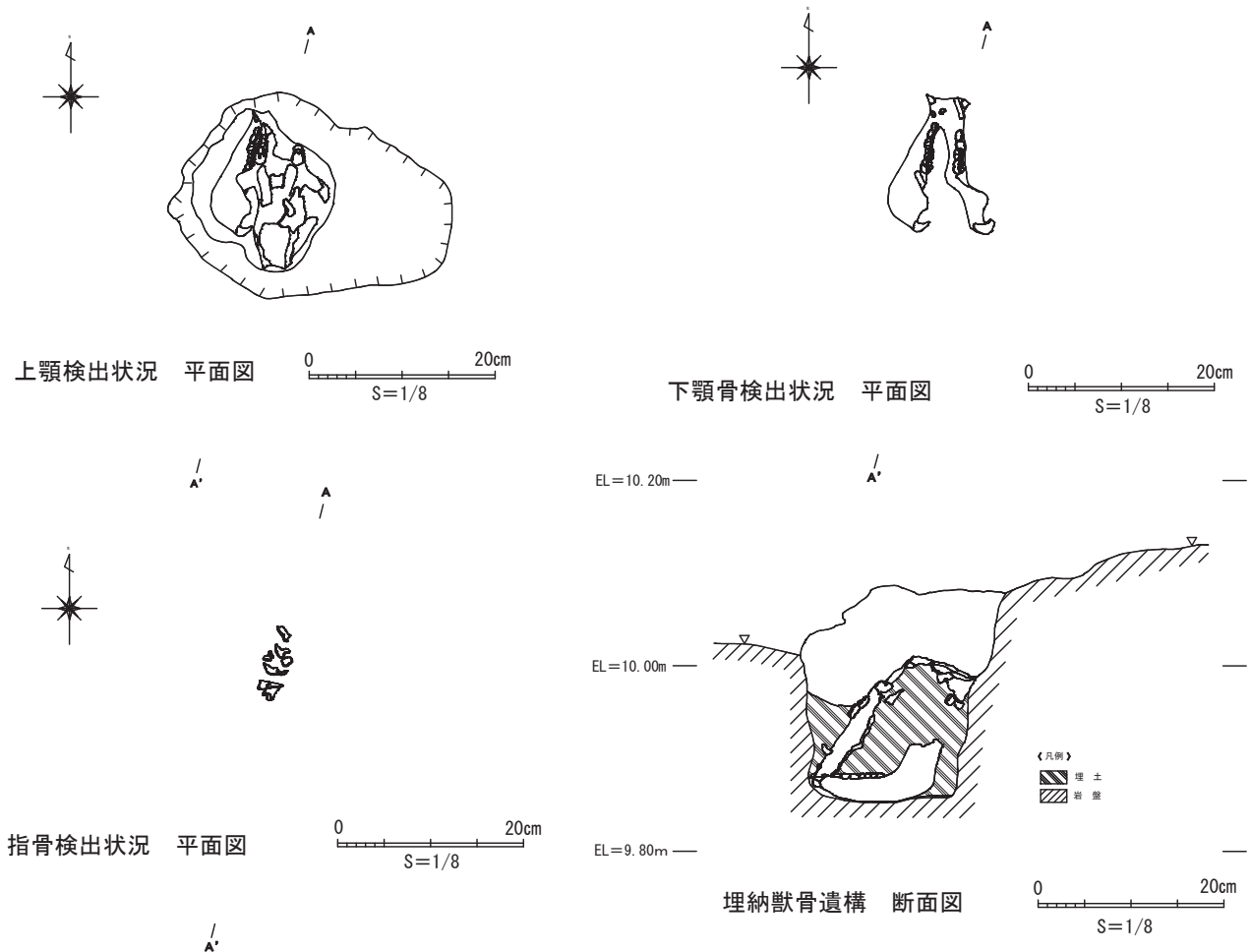
003号墓は調査区丘陵の東側斜面に立地し、当斜面に立地する墓の中では最も北側に位置している。墓は横位に見られる岩盤の窪みを利用しながら、基盤である牧港石灰岩に横穴を掘削し墓室を造る。墓庭は斜面をL字状に掘り下げ、正面岩盤はほぼ垂直である。屋根は丘陵斜面を利用した平葺墓で、正面屋根側の縁は岩盤の削り出しのままの仕上げである。墓正面には高さ約1.5mの位置に連続して横位に走る岩盤の亀裂があり、その上部は岩盤削り出しによる自然面が顕著にみられるが、下部を墓室開口部とし墓室奥壁まで横穴が掘り込まれ、石組および石積みにて墓口や墓室壁面の一部を仕上げている。天井は亀裂の自然面を利用したとみられ、向かって右側の天井が高く左側が低い。正面の入口は布積み、その周囲を相方積みで埋め、入口は庭よりも1段高くなる。墓口は入口で幅約1.2m、高さ約1.6m、内部で幅約0.7m、高さ約1.1m。羨道の幅は約0.7mを測る。調査前、墓口はすでに開口しており、閉塞石が墓口の高さの半分ほど残存していた。墓口前には閉塞石の一部が散乱しており、その石を除去すると寛永通宝(新)1点(第10図20)が出土した。閉塞石で使用されていた石は大小様々な大きさで面を持たないものが多く、庭積みで使用されていた礫と酷似する。墓室の蔵骨器は横転したものや、奥棚の石厨子が2基とも蓋は外された状況であったことから、後世に墓口を開口後、閉塞石の一部は庭積みの礫を二次利用したことが考えられた。

墓室の平面形はやや横長の方形である。向かって右壁面は相方積みが見られ、奥壁および左壁面は岩盤に一部切石がはめ込まれる。墓室の奥行き約3.2m、幅約4.2mを測り、棚を含めた面積は約13.5㎡である。墓室の高さは入口側で約1.6m、奥側で約1.7m。墓口から奥壁への天井高はほぼ同じだが、向かって右側は約2m、左側で1.5mと違いが見られる。棚は奥側および左右に1段ずつ造られる。基本的に岩盤を削り出して造られるが、縁の足りない部分には切石がはめ込まれる。平面観コの字状で、段差はなくフラットとなっている。奥棚は奥行き0.9mを測り、シルヒラシ基底面からの高さは0.65mである。左右の棚の奥行はともに0.9mで、高さはどちらも0.6mである。棚面は岩盤起因による凹凸も見られるが、牧港石灰岩の石粉を敷き詰めて平坦とする。墓室の棚から蔵骨器が5基、シルヒラシから横倒しの状況で1基の出土状況があった(第7図蔵骨器配置の模式図)。また、シルヒラシから陶磁器などが検出された。

シルヒラシの墓口側向かって左隅部分にピットがあり、獣(偶蹄目イノシシ科)の頭骨と指骨が出土した。ピットを約10cm掘り下げると上顎骨の犬歯および歯が天井を向いた状態で露出し始めた。いわゆる上下が逆になった状態で検出された(第6図上顎検出状況)。上顎骨を取り上げると、その下から下顎骨の歯等が見え始めた。下顎骨は正位置の状態で、顎先は真北方向を向くよう埋納されていた(第6図下顎骨検出状況)。下顎骨を取り上げた後、更にピットの底には指骨が南北軸で横並びに埋納されていた(第6図指骨検出状況)。指骨は北から5本分の指骨が並べられ、さらにその下層には2本分の指骨が検出された。よって指骨は計7本分の検出となる。指骨の方向はそれぞれ異なっており、北から1本目及び2本目及び3本目



は北西を向く。4本目は東を向いていた。5本目は北東を向く。そしてその下層から検出された6本目は北を向き、7本目は北東を向く。4本目が逆の向きに置かれていたことから方向に共通性は見いだせないが、概ね北を意識していたことが窺える。ピットは約20cm掘り込まれ、獣骨を埋納後3～4cm大の混礫土で上面を仕上げている。覆土は10YR7/6明横褐色で弱粘性の混土砂。石灰質の砂粒が多く見られた。検出された埋納骨の詳細については、第6章を参照いただきたい。



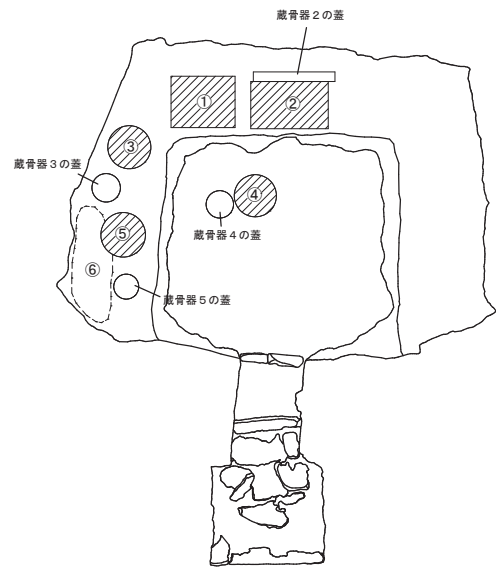
第6図 003号墓墓室内埋納獣骨 平面図、断面図

墓庭は墓門から墓正面まで奥行き約8.3m、幅約4.8m、面積約39.8㎡である。斜面をL字状に掘削して構築され、左庭囲いでは正面と同様に横位の岩盤の亀裂が確認できる。左庭囲いは墓庭基底部より最長部で高さ約3.7m立ち上がる。墓門は通路側に大きめの切石を使用し、全体的に相方積みで仕上げる。庭基底部では岩盤が削られフラットになる箇所もあり、使用時は岩盤面と造成土面の併用が考えられる。墓庭から蔵骨器の蓋の破片や金属製品が検出されている。

墓室には奥柵から2点、右柵から3点、シルヒラシから1点の合計6点の蔵骨器が確認され、そのほとんどで蓋が外された状態で出土した。奥柵には2基の石厨子が安置されていた。蔵骨器1のみ身の上に蓋を確認できたが、蓋と身の間に礫が挟まれていた。蔵骨器2は蓋が外され、身の後方に立てかけられていた。右柵では3点のボージャー形が確認できた。その内の1つ、蔵骨器6は天井または壁からの崩落石により

破損した状態で出土した。蔵骨器3および5はともに蓋は外され、身の左側に置かれていた。奥棚の石製家形蔵骨器2点および右棚のボージャー形2点(蔵骨器3・5)のマドはシルヒラシの方向を向けて安置されていた。蔵骨器4はシルヒラシの中央やや奥側で横倒しになって検出され、マドは天井を向く。

本墓の造営年代は不明で、銘書でも年代が確認できる資料は見られなかった。墓の使用期間について蔵骨器の製作年代からみると、出土した蔵骨器の石厨子が大堀分類の2H類(17世紀後葉～18世紀)、ボージャー形で最も古いのが蔵骨器6で蓋が安里編年のⅡa式(1680～1750)、身がⅡc式(1680～1740)で両者を絞り込むと1680～1740年となる。新しいものは蔵骨器3で蓋が安里編年Vb式(1740～1770)、身がⅣ式(1720～1820)となり絞り込むと1740～1770年となる。これらの資料から、本墓の使用期間は17世紀後半～18世紀半ば頃と想定できる。



第7図 蔵骨器配置の模式図(数字は蔵骨器No.)

(2) 遺物(第8図～第10図、図版39～図版41)

003号墓からは蔵骨器、沖縄産陶器、金属製品、古銭が出土している。本墓に伴う遺物の種類と数量の内訳は第3表のとおりである。蔵骨器は墓室から焼物厨子であるボージャー形やサンゴ石製家形蔵骨器が検出されており、同じく墓室シルヒラシから沖縄産陶器の瓶と火入れ、無文銭が検出された。また、蔵骨器3の内より鉄や毛抜き、鉄製の釘などの金属製品が出土している。

蔵骨器は蓋が外された状態や壁際の天井の崩落等で破損した状態のものもあったが、第7図のように概ねその位置は原位置を保っていると考えられる。

奥棚はサンゴ石製家形蔵骨器が2点みられ、蔵骨器1の蓋(第8図1)は入母屋形で正面および両側面の軒に垂木を表現する。背面には垂木の意匠は無い。外面は丁寧に研磨が施され、内面も縁やかかりは丁寧に成形されるが、その他の部分は削り跡が明瞭である。身(第8図2)は正面の上部に方形の窓が2箇所掘り込まれている。正面および両側面に線彫りの枠がみられた。サンゴ石の凹凸を漆喰で充填して表面を平にする。背面は無文。銘書が正面右端に見られたが残存状態が悪い。器形から大堀分類の2H類(17世紀後葉～18世紀)の資料と考えられる。蔵骨器2の蓋(第8図3)も入母屋形を呈する。正面および両側面に垂木が表現される。背面は無文。蔵骨器1と同様に外面は丁寧な研磨が施されるが、内面は削り跡が明瞭に残る。身(第8図4)は正面の上部に方形の窓が3箇所掘り込まれる。正面の左右に線彫りの枠が施されている。銘書は見られない。器形から蔵骨器1と同様に大堀分類の2H類の資料である。

右棚ではボージャー形が3点みられた。蔵骨器6は天井や壁からの崩落礫により破損していたが、接合により完形となった資料である。ボージャー形はシルヒラシからも出土し、計4点出土しているが、どれも蓋が外され、身の横に置かれている状況であった。蔵骨器6の蓋(第9図5)は体部に櫛描きの波状文が描かれ、つまみは宝珠形。器形から安里分類のⅡa式(1680～1750年)の資料と考えられる。身(第9図6)の

窓は唐破風形で、左右に沈線による蓮華文が施されている。口縁部は玉縁状で内傾する。頸部沈線が2本で、安里分類のⅡc式(1680～1740年)の資料である。蔵骨器3の蓋(第9図7)はつまみが宝珠形で無孔。体部は無文で、器形から安里分類のVb式(1740～1770)の資料である。身(第9図8)のマドは平葺形で、胴部は無文。マド枠上方に窯印が見られる。頸部沈線が3本で、安里分類のⅣ式(1720～1820)の資料である。蔵骨器5の蓋(第9図9)はつまみが宝珠形で有孔。体部は無文であることから、安里分類のⅢb式(1710～1740)の資料である。身(第9図10)はマドが平葺形で頸部沈線が3本を数え、胴部は無文である。マド枠上方に窯印が見られる。器形から安里分類のV式に相当し、1720～1780年の資料である。蔵骨器4の蓋(第9図11)はつまみが饅頭形の有孔で、体部に沈線による波状文が見られる。器形から安里分類のⅡb式(1680～1750)の資料である。蓋内面に銘書きが見られ、「先真ノ子女なへ」と「子ども」、「母親」の3人が葬られたことが分かる。身(第9図12)はマドが平葺形で胴部は無文。頸部沈線は3本を数え、安里分類のⅣ式(1720～1820)に相当する。

副葬品ではシルヒラシからの沖縄産陶器(第10図13・14)や無文銭(第10図22・23)、蔵骨器3内から鉄(第10図15)、鉄釘(同図16)、毛抜き(同図17)が出土した。墓庭から青銅製の簪のほか、寛永通宝が出土した。

第10図13は沖縄産施釉陶器の瓶で内面頸部途中から外面高台まで黒釉が施されている。畳付と外底面は露胎である。口縁部は欠損する。第10図14は沖縄産無釉陶器の火入れである。口縁部と胴部に1条の沈線が見られ、素地に黒色粒や白色粒が含まれる。瓶、火入れともに湧田焼または初期壺屋と見られる資料である。

第10図15は蔵骨器3内より出土した鉄である。両側の持ち手の先端や刃部の片側が欠損するもののほぼ完形の資料である。全体に錆が付着する。墓室より鉄が出土した事例として、市内の勢理客城門原古墓群1号墓右棚より出土したものがある。

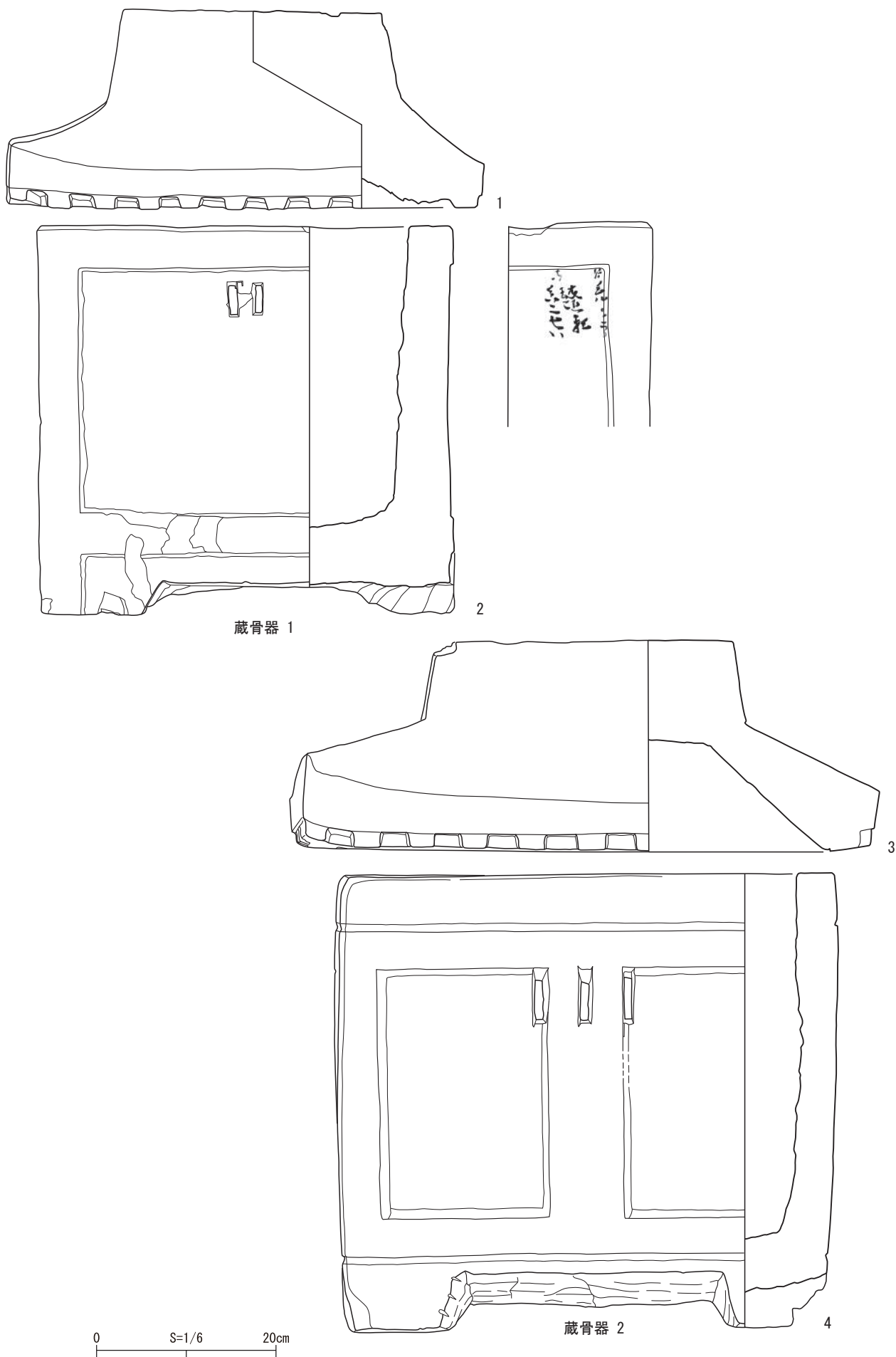
第10図16、17も蔵骨器3内より出土した。16は鉄釘。17は青銅製の毛抜きである。毛抜きは長さ6.5cm、幅0.6cm、厚み0.1cmを測る。表面に緑青が見られるが、残存状況は良好である。

第10図18は青銅製の簪(押差)である。長さ11.7cmを測る。耳かき状で、断面首部は丸形、竿部は六角形を呈する。墓庭より出土した。

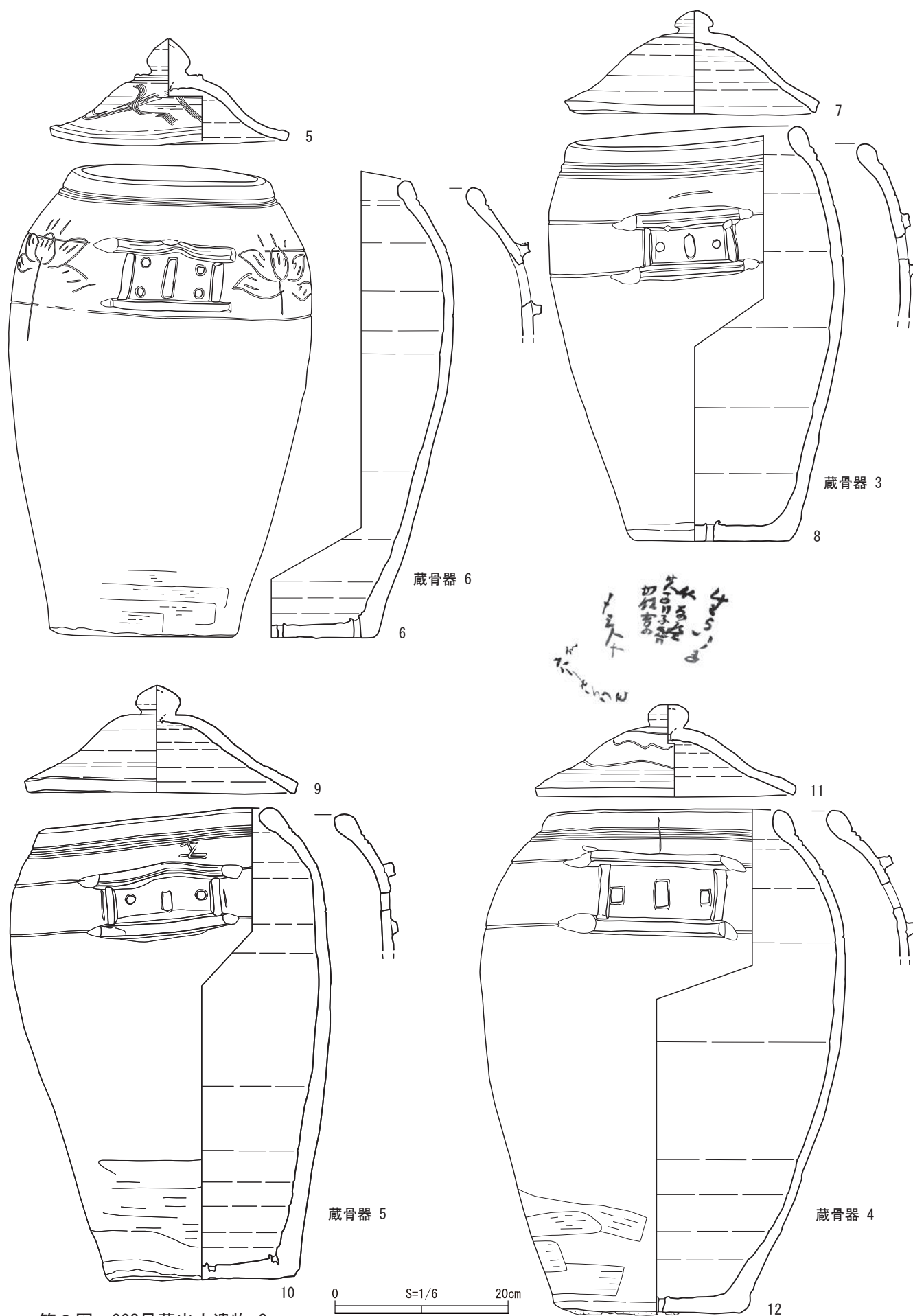
第10図19～21は古銭で、19は墓正面向かって右側の墓口の近くから出土した寛永通宝である。輪外径2.48cm、輪内径1.97～2.0cm、輪厚0.1cmを測る。20は閉塞石を除去した際に出土した。輪外径2.34～2.35cm、輪内径1.85～1.92cm。輪厚0.12cmを測る。両者ともに新寛永である。同図21は墓庭から出土した古寛永である。墓室内シルヒラシからは同図22・23の無文銭が出土した。

第4表 003号墓 銭貨観察表

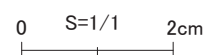
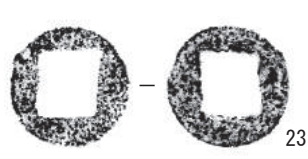
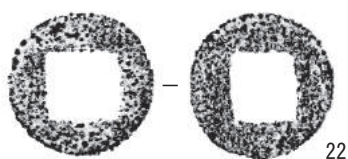
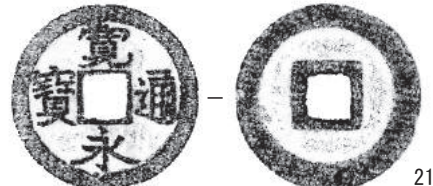
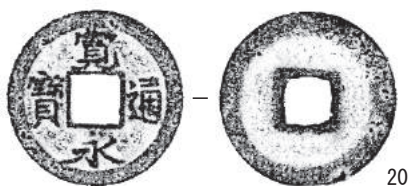
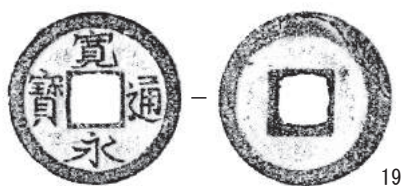
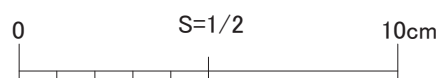
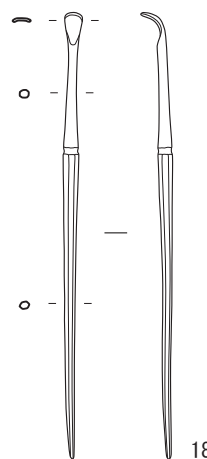
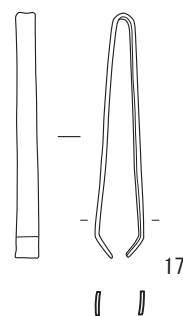
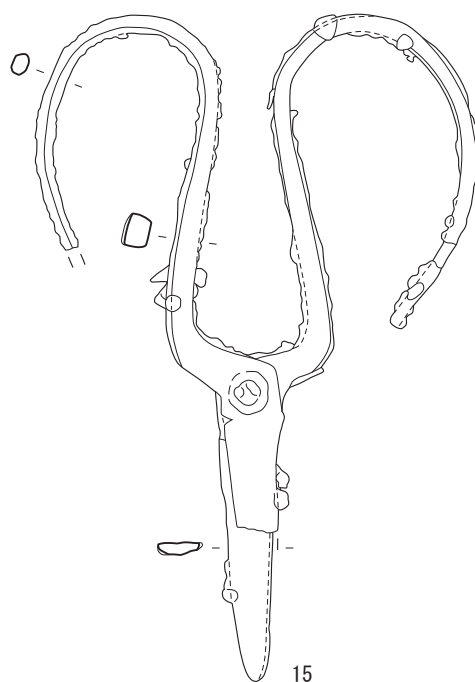
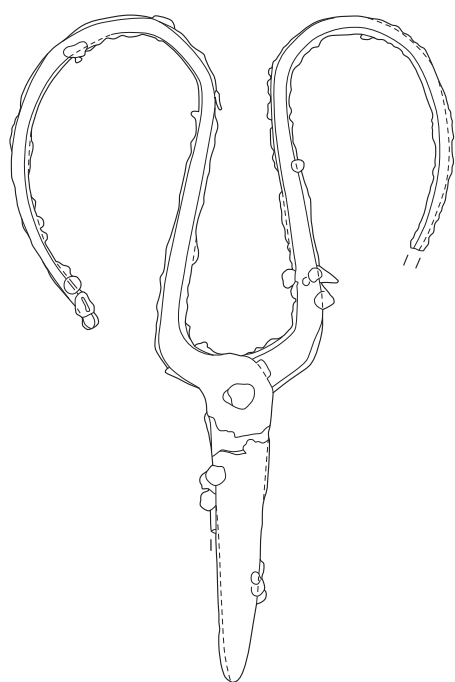
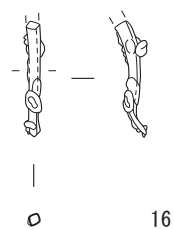
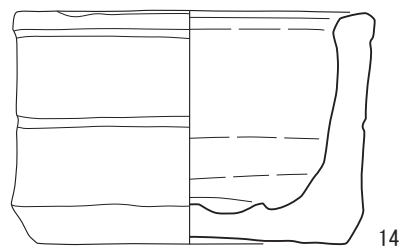
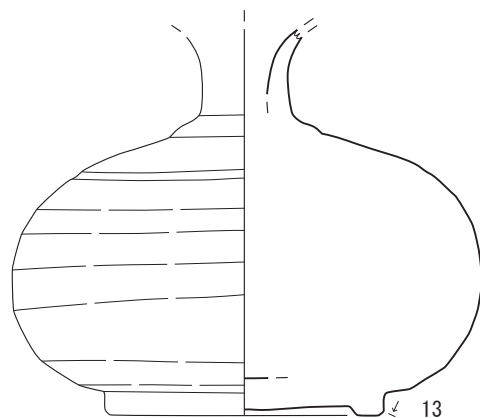
No.	挿図番号 図版番号	出土地	銭貨名	初鑄年	区分	法量 (cm・g)						材質	備考
						輪外径	輪内径	郭外幅	郭内幅	輪厚	重量		
1	第10図 19 図版41-19	墓口横	寛永通寶 (新寛永)	1636年	I 期	2.48	1.97-2.0	0.74-0.75	0.58-0.6	0.1	2.95	銅	
2	第10図 20 図版41-20	墓口 (羨道)	寛永通寶 (新寛永)	1697年	Ⅲ期	2.34-2.35	1.85-1.92	0.77-0.78	0.63-0.64	0.12	3.20	銅	
3	第10図 21 図版41-21	墓庭	寛永通寶 (古寛永)	1697年	Ⅲ期	2.32-2.33	1.88	0.80	0.65	0.1	2.35	銅	
4	第10図 22 図版41-22	墓室 (シルヒラシ)	無文銭	—	—	1.93		0.85-0.91		0.08	1.00	銅	
5	第10図 23 図版41-23	墓室 (シルヒラシ)	無文銭	—	—	1.60		0.75-0.85		0.07	0.55	銅	



第 8 図 003号墓出土遺物 1



第9図 003号墓出土遺物 2



第10図 003号墓出土遺物 3

第5表 003号基蔵骨器(蓋)観察表

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	つまみ/屋根形状 接合部孔 つまみ台・圏線 鐫かえり	つまみ台径 口径/棟長 内径/桁行長 器高/渠行長 体部高/器高	文様	調整痕	釉薬	銘書	死去年	洗骨年	備考
1	1	第8図 1 図版39-1	墓室・ 奥棚	家形 (石製)	入母屋形	— 28.8 52.8 40.7 21.7	屋根は入母屋。正面および左右の軒に垂木の表現。背面軒には見られない。	外面は研磨が施される。内面は縁やかかりは丁寧に削られているが、その他の部分では削り跡が明瞭に残る。	なし	なし	—	—	
2	2	第8図 3 図版39-3	墓室・ 奥棚	家形 (石製)	入母屋形	— 32.6 63.8 44.5 23.5	屋根は入母屋。正面および左右の軒に垂木の表現。背面軒には見られない。	外面は研磨が施される。内面は縁やかかりは丁寧に削られているが、その他の部分では削り跡が明瞭に残る。	なし	なし	—	—	
3	6	第9図 5 図版40-5	墓室・ 右棚	ボージャー形	宝珠形 有孔 1段・1条 なし なし	7.6 27.5 27.0 12.3 8.1	櫛書き波状文	つまみは宝珠形。つまみ台は回転へう削り。端部は平坦。ロクロ成形後、回転へう削り。内面に回転痕が残る。	なし	なし	—	—	
4	3	第9図 7 図版40-7	墓室・ 右棚	ボージャー形	宝珠形 無孔 なし・なし — —	— 29.3 28.2 12.0 —	無し	体部上部に2条の凹線。端部は鐫端部の中央が浅く窪む。ロクロ成形後、外面回転へう削り。内面に回転痕が残る。	なし	なし	—	—	
5	5	第9図 9 図版40-9	墓室・ 右棚	ボージャー形	宝珠形 無孔 なし・なし — —	— 31.5 30.7 12.4 —	無し	つまみ台なし。端部は平坦。ロクロ成形後、外面回転へう削り。内面に回転痕残る。	なし	なし	—	—	
6	4	第9図 11 図版40-11	墓室・ シルヒラン	ボージャー形	饅頭形 有孔 なし・1条 — —	— 29.9 29.4 10.8 —	櫛書き波状文	体部上部に1条の凹線。端部は平坦。ロクロ成形後、外面回転へう削り。内面に回転痕残る。	なし	あり	—	—	

第6表 003号基蔵骨器(身)観察表

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	大きさ (cm) ※	窓枠/屋 門	窓数/形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯印	銘書	死去年	洗骨年	備考
1	1	第8図 2 図版39-2	墓室・ 奥棚	石製 (家形)	46.3×35.1 46.0×35.1 43.3	—	2個方形	—	正面、身上部に方形の窓が2箇所掘り込まれる。正面、両側面に線彫りによる枠が施される。背面に枠はない。脚部は方形。	内面は研磨が施されるが、内面は削り出しのままである。調整がされおらず、ノミの削り痕が明瞭に残る。	—	なし	なし	あり	—	—	素材:サンゴ石
2	2	第8図 4 図版39-4	墓室・ 奥棚	石製 (家形)	54.0×36.7 52.0×39.2 50.7	—	3個方形	—	正面、身上部に方形の窓が3箇所掘り込まれる。左側、右側の窓を軸にして線彫りの枠が左右施される。両側面にも同様に左右の枠が見られる。正面および両側面の口縁下方に一条の線彫りが施される。背面には文様なし。脚部は方形。	内面は研磨が施されるが、内面は削り出しのままである。調整がされおらず、ノミの削り痕が明瞭に残る。また、底面でもノミの削り痕が明瞭に残る。	—	なし	—	なし	—	—	素材:サンゴ石
3	6	第9図 6 図版40-6	墓室・ 右棚	ボージャー形	21.5 34.6 20.1 52.8	唐破風形	5個 1方4円	①凹2 ②凹1 ③凹1 ④—	窓左右に蓮華文	口縁部は小振りな玉縁状で口唇部はやや平坦。内傾する。回転成形後、ナデ調整と胴部から底部はへう削り。	4個/ 円形 (1個は未貫通)	なし	なし	なし	—	—	
4	3	第9図 8 図版40-8	墓室・ 右棚	ボージャー形	25.5 33.9 17.8 47.8	平葺形	3個 1方2円	①凹3 ②凹1 ③凹1 ④—	無し	口縁部は玉縁状でやや直口。回転成形後、ナデ調整とへう削り。	4個/円形 (2個は未貫通)	なし	あり	なし	—	—	窓底上方に窯印あり。
5	5	第9図 10 図版40-10	墓室・ 右棚	ボージャー形	25.6 36.5 21.4 54.6	唐破風形	3個 1方2円	①凹3 ②凹1 ③凹1 ④—	無し	口縁部は玉縁状で内傾。回転成形後、ナデ調整とへう削り。	6個/円形 (3個は未貫通)	なし	あり	なし	—	—	窓底上方に窯印あり。
6	4	第9図 12 図版40-12	シルヒラン	ボージャー形	25.0 41.8 20.5 58.8	平葺形	3個 1方2方	①凹3 ②凹1 ③凹1 ④—	無し	口縁部は玉縁状で内傾。回転成形後、ナデ調整とへう削り。	6個/円形 (3個は未貫通)	なし	なし	なし	—	—	

※大きさ(cm)は、ボージャー形・甕形は上から口径/胴径/底径/器高。家形・御殿形は上部(長軸×短軸)/底部(長軸×短軸)/器高。

第7表 003号墓 陶磁器他観察表

※法量の()内は残存値

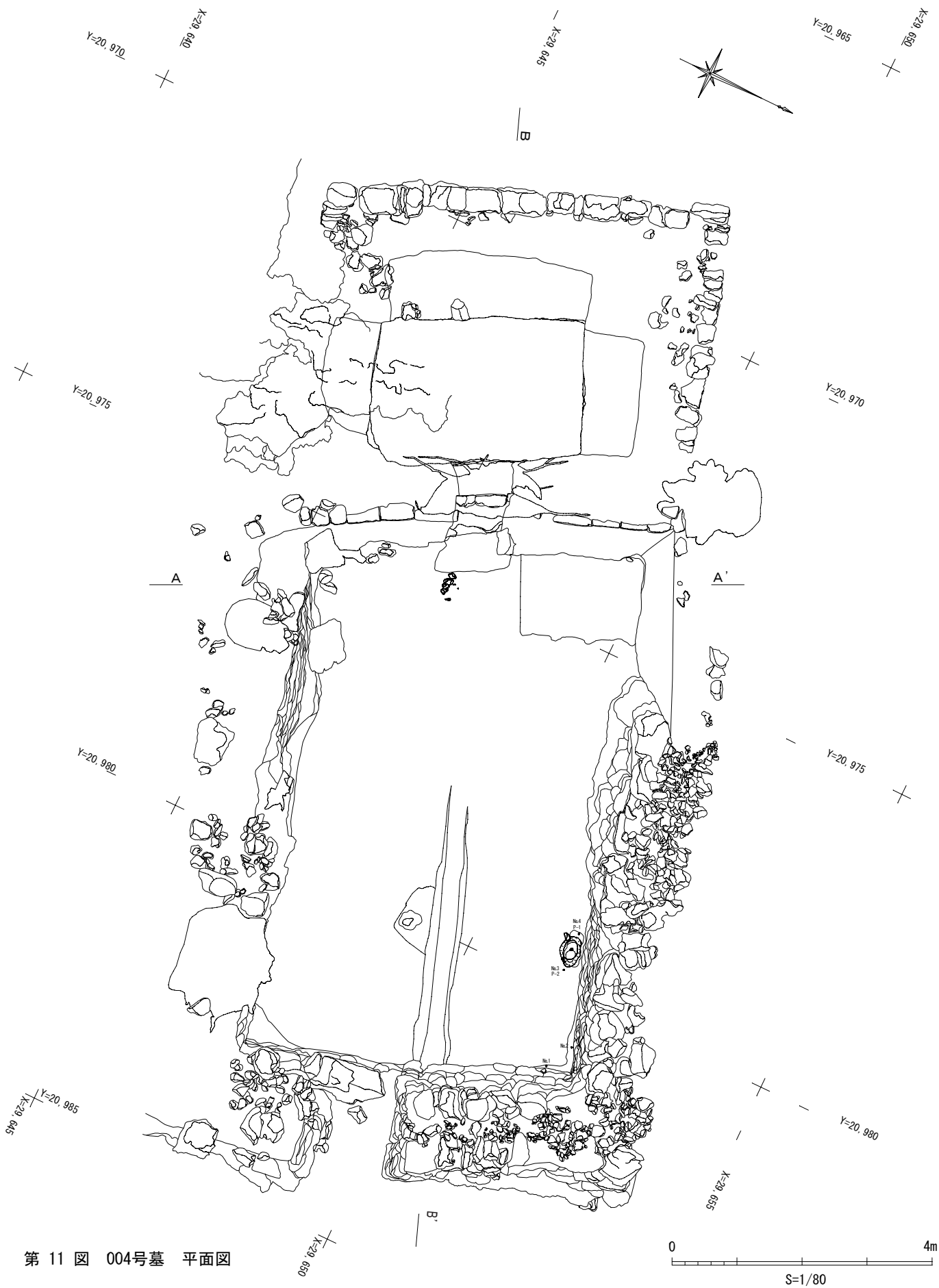
No.	挿図番号 図版番号	出土地	器種	分類	法量(cm)	特徴	備考
1	第10図 13 図版41-13	墓室 シルヒラン	瓶	沖縄産施釉陶器	口径:— 器高:(10.2) 底径:7.3	内面頸部途中から外面高台まで黒釉を施釉。壺付と外底面は露胎。素地はにふい赤褐色。	
2	第10図 14 図版41-14	墓室 シルヒラン	火入れ	沖縄産無釉陶器	口径:9.3 器高:6.2 底径:8.2	口縁部と胴部に1条の沈線を巡らす。素地に黒色粒や石灰岩粒が含まれる。素地は橙褐色。	
3	第10図 15 図版41-15	蔵骨器No.3	はさみ	金属製品(鉄)	長さ:17.6	重量70g。全体が錆などの付着物に覆われる。全体が残存するが、いくつかひび割れが見られる。	
4	第10図 16 図版41-16	蔵骨器No.3	釘	金属製品(鉄)	長さ:3.0 厚さ:0.25	重量0.9g。小型の角釘。やや変形する。	
5	第10図 17 図版41-17	蔵骨器No.3	毛抜き	金属製品(青銅)	長さ:6.5 幅:0.6 厚み:0.1	完形品。重量4.9g。表面に錆などの付着物が所々見られる。	
6	第10図 18 図版41-18	墓庭	簪 (押差)	金属製品(青銅)	長さ:11.7 厚さ:0.2	重量4.5g。耳かき状。断面は首部が丸形、竿部が六角形。	

第2節 004号墓

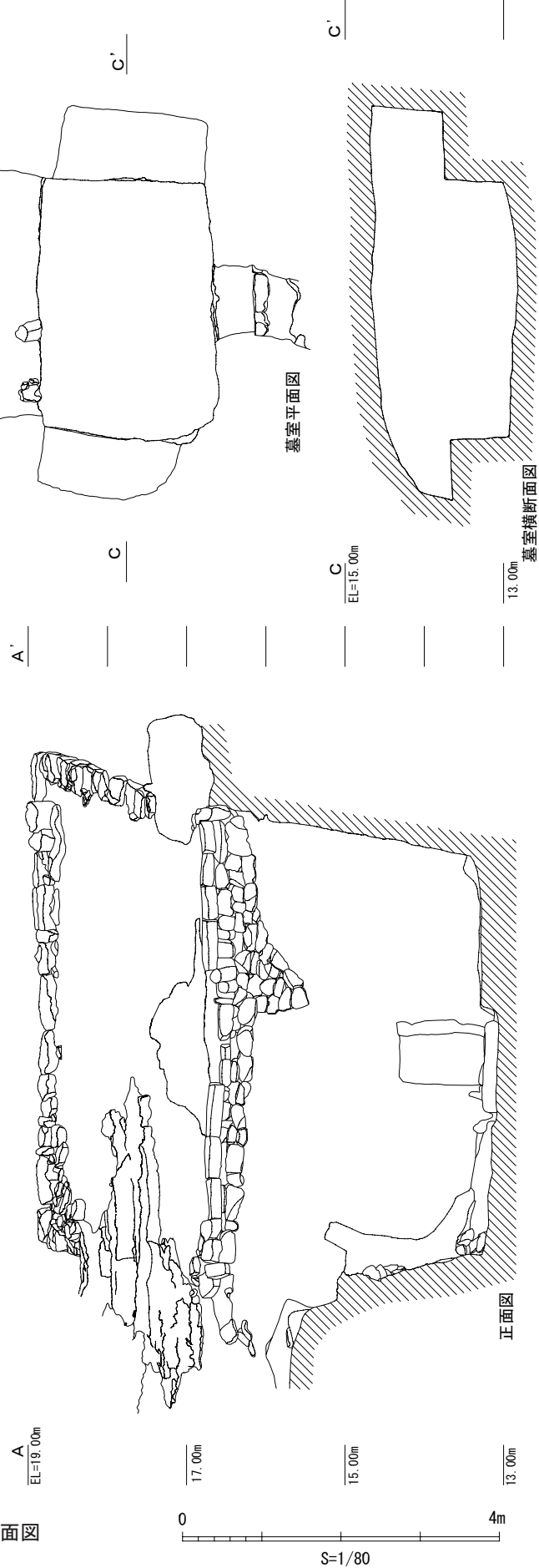
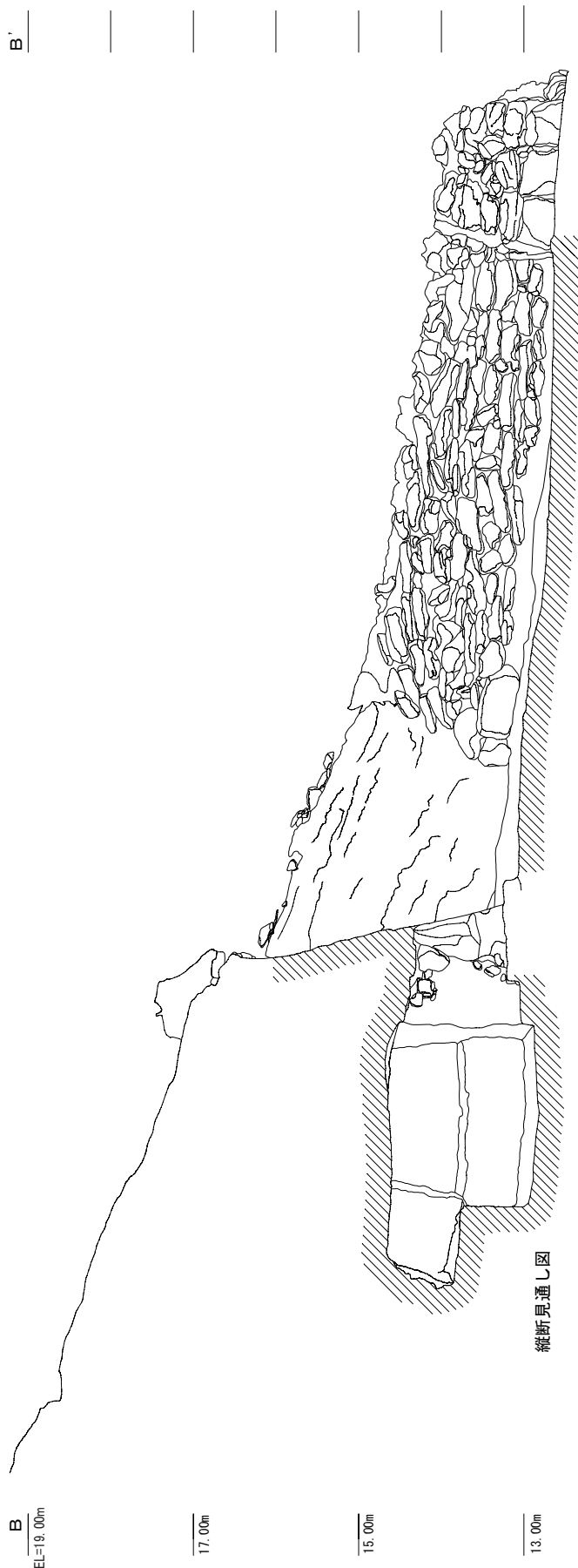
(1) 遺構(第11図～第12図、図版9～図版13)

004号墓は調査区丘陵の東側斜面に立地し、003号墓から南側75mの箇所に位置する。牧港石灰岩を基盤とする丘陵斜面に横穴を掘削して墓室を構築した平葺墓である。墓庭は斜面をL字状に掘り下げ、正面は屋根側に向かって少し開く傾斜となる。屋根の平面形状は約50cm大の切石を一行並べて方形とする。切石の上面は比較的丁寧な面を持つが側面の加工は粗い。石列内の中央は一部岩盤が露出するものの黄白褐色混礫土により充鎮されていたことが窺えた。石敷き等は見られず、表面は造成土による仕上げが施されたことが考えられる。正面屋根側の縁は横長の長方形の切石を横一行に並べ、両端は縦長の切石を配置する。亀甲墓という眉石にあたる横長の切石は屋根中央付近にある樹木の根で一部崩落しているが、10個の切石で構成されていたことが窺える。墓正面は岩盤削り出しによる自然面が顕著に見られるが、正面向かって右側の屋根側切石下部は岩盤の窪みがあったと思われる、そこには丁寧な相方積みによる面仕上げが施されている。使用される切石は丘陵と同質の牧港石灰岩であるが、一部サンゴ石灰岩の切石も確認された。眉石直下の切石の列は大きさが異なる切石で布積みのような積み方がなされており相方積み部分とは少々様相が異なる。墓口は幅約0.9mで岩盤を掘り込む。向かって右側に幅約0.2m、高さ約1.1m、奥行き0.28mの切石が一つ嵌め込まれており、墓口の現状の寸法では幅約0.7m、高さ約1.1m、奥行き(羨道)は約1mを測る。調査前墓口は閉塞されていたが、閉塞石で使用されていた石は大小様々な大きさで面を持たないものが多く、積み方も雑であった。墓口手前には板状の切石が設置され、表土を掘り下げると墓口前方に面を持たない一行の切石の列が検出された。向かって左側から楕円状に列が緩く曲がり、墓口前方で石列は折れ曲がるため墓口との間が広がる。そして向かって右側に列が伸びていくが、途中で途切れている。また、墓口前方には幅0.7m、奥行き0.4mの切石が見られ、石列はサンミデーとして、切石は香炉の役割のものだと考えられた。これらの閉塞石と一行の石列および板状の香炉石は後世に構築されたものと見られた。雑な閉塞石を除去すると、羨道の墓室側まで面を持つ切石が3列2段で積まれていた。これらの切石が本墓を閉じた当時の閉塞石と考えられ、本来は墓口上部まで積まれていたと推測した。しかし、何らかの理由により墓口が開いた時期があると考えられた。墓室に残る蔵骨器は残存状況がよく、原位置の復元も可能な資料が多数見られたが、サンミデーで重なるように置かれた蔵骨器や横倒しの蔵骨器が確認されたことから、戦時中の避難等で開口したことが推測された。その後閉塞され、調査開始時に目にした閉塞石は戦後のものだと考えられる。当時の閉塞石を除去すると、墓口手前に幅約1.1m、奥行き約0.6mの切石が露出し、造墓当時のサンミデーもしくは香炉のような線香等を置くための切石だと考えられた。

閉塞石がかかる位置には石列が見られるが、基本的に岩盤を掘り込んで構築されており、墓室は羨道から0.13m下がった位置に構築する。墓室の平面形は奥壁と左右側壁を凸状に成形する出窓状で、天井および床面や壁面は岩盤掘り込みにより構築される。墓室の奥行き約3.1m、幅約4.8mを測り、棚を含めた面積は約12.7㎡である。墓室の高さは約1.8mで天井は丁寧に造られる。奥棚は奥行き約3.1mを測り、シルヒラシ基底面からの高さ約0.79mである。右棚の奥行きは約0.75mで、高さは約0.73m。左棚の奥行きは約0.83m、高さ約0.72mである。奥棚の縁側で岩盤の窪み部分に切石を嵌めて面を整えた箇所が一部あるが、基本的には掘り込みにより構築し、棚面の岩盤起因による凹凸を牧港石灰岩の石粉を敷き詰めて平坦とする。シルヒラシの平面形は幅約3.2m、奥行き約2.1mの横長の長方形をなしており、床面は岩盤起因による凹凸を棚と同じように石粉を充鎮して仕上げる。墓室の棚から21点、シルヒラシから24点の計45点(蓋と



第 11 图 004号墓 平面图



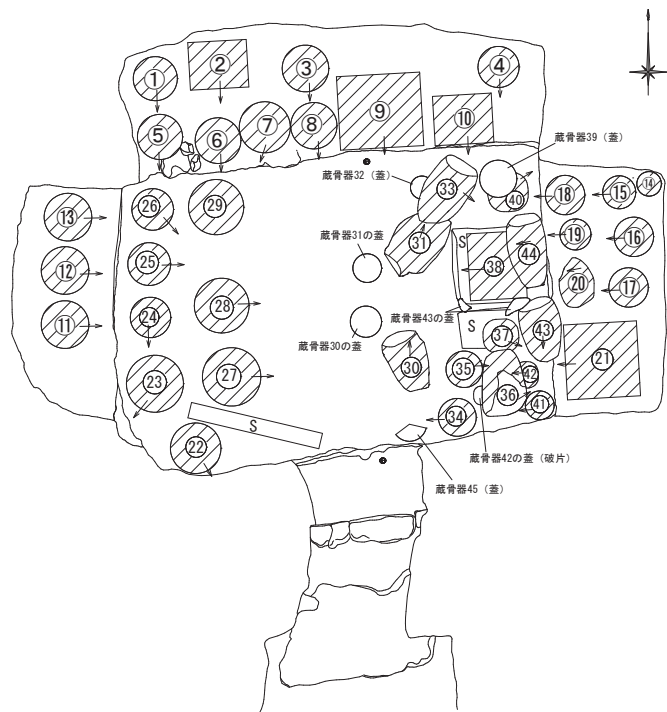
第 12 図 004号墓 縦断見通し図、正面図、墓室平面図、墓室横断面図

身がセットのものは1点として数えた数値。また身のみ、蓋のみも含む。第8表参照)の蔵骨器が検出された。3つの棚に安置されていた蔵骨器は原位置を保っていることが窺えるが、シルヒラシに安置されていた一部の蔵骨器は横倒しのものや蔵骨器の上部に重なって検出されたものも見られた。

墓庭は牧港石灰岩の丘陵を削って平場を構築する。墓門付近の庭は岩盤の窪みが見られ、そのような窪みには屋根の造成と同様に黄白褐色混礫土を充鎮して平場を構築している状況が窺えた。墓庭の寸法は墓門から墓正面まで奥行き約8.2m、幅約4.4m、面積39.5㎡である。左庭囲いは正面との角の部分で墓庭基底部より約2.6m立ち上がる。上端はなだらかに東に向かって傾斜し、コーナーから1.8mの部分まで岩盤の削り出しによる自然面が顕著に見られるが、そこから墓門まで粗い相方積みで構築される。墓門は幅約1.1m、奥行き約1.75mで重厚な造りとなり、比較的大ぶりの切石による相方積みで仕上げる。墓門は墓口の正面には無く、墓口中央から南側1.2mの位置に門の中心がくるよう構築される。

墓室には前述したように多くの蔵骨器が安置されていた。奥棚および右棚は原位置を保っていると見られ、どの蔵骨器も正面がシルヒラシを向いていた。左棚も一部蔵骨器が傾いたもの(蔵骨器20)があるものの、他は正面が全てシルヒラシの方を向いていたため原位置を保っていると考えられる。シルヒラシでは向かって左側(右棚の前方)は蔵骨器22、23、24が壁側を向いているものの25～28の蔵骨器はシルヒラシを向く。29は転用蔵骨器のため、正面の位置は不明。向かって右側(左棚の前方)は蔵骨器34、38、41、42のマドがシルヒラシを向く状況から原位置だと見られるが、蔵骨器43、44はシルヒラシに安置された蔵骨器(37、38)の屋根と左棚の前列の蔵骨器との間に横倒しで置かれていた。他にも横倒しで検出された蔵骨器(30、31、33、36)やマドが壁の方向を向く蔵骨器(37、40)があり、これらは原位置を保っているとは言い難い。

本墓の明確な造墓年代は明らかではないが、奥棚中央に安置されている蔵骨器8に年代が分かる銘書は見られないもののその器形から安里分類のⅠ式に相当する1660～1690年と見られる資料が出土したこと、本墓内で最も古い銘書が左棚検出の蔵骨器15で康熙56(1717)年が見られたことなどから、使用時期の始まりが17世紀半ば頃から18世紀初め頃とみられ、その後は、検出されたマンガン釉甕形が安里編年のⅡ期(1770～1800年代)やⅢ期(1810～1850年代)で、それ以降の形式が確認されなかったことから、1850年代までが最も機能していたと見られる。一番新しい銘書は光緒2年(1876)のものだが、ボージャー形蓋(安里分類Ⅶ式1750年～1820年)の外面に墨書された銘書を確認した。形式と銘書の時代に最低でも約60年の差があるが、光緒2年以降に再び墓が開けられたことが窺える。



第13図 蔵骨器配置の模式図(数字は蔵骨器No.)

第 8 表 004号墓出土蔵骨器内訳表

(2) 遺物(第14図～第28図、図版42～図版56)

004号墓からは蔵骨器、沖縄産陶器、金属製品、古銭、現代の本土産磁器が出土している。特に蔵骨器は完形資料が多く検出されたことは特筆される。種類ではボージャー形をはじめ、石製家形や赤焼御殿形、マンガン釉甕形、沖縄産無釉陶器の転用品が見られた。内訳ではボージャー形は28点、石製家形は3点、赤焼御殿形は2点、マンガン釉甕形は7点、転用蔵骨器が2点の計42点である(身のための内訳)。

奥棚からは10点の蔵骨器が安置されていた。内訳はボージャー形が7点、石製家形が2点、赤焼御殿型が1点である。蔵骨器は2列で安置されており(第13図)、前列中央の蔵骨器8(第15図30、31)が本墓で最も古いボージャー形である。蓋はつまみが宝珠形で蓋裏の中心部は有孔である。径7.4cmのつまみ台が見られ、体部には沈線で牡丹唐草文が施される。安里分類のⅠ式(1660～1690)の資料である。身はマドが瓦葺を表現した寄棟形が貼り付けられており、その両脇には沈線で蓮華文が描かれている。安里分類のⅠ式(1660～1690)の資料である。銘書(身)には「栗國掟…／たら■／子／四月八日」とある。銘書から栗國家の蔵骨器であることが分かる。

前列の蔵骨器6(第14図26、27)もボージャー形で、蓋はつま

蔵骨器 No.	種類	出土地点	形式	年代幅の絞り込み	銘書/備考
1	ボージャー形(蓋・身)	奥棚	蓋:Ⅱa(1680～1750) 身:Ⅱc(1680～1740)	1680～1740	
2	石製家形(蓋・身)	奥棚	大堀編年2H類(17C後葉～18C)	17C後葉～18C	サンゴ石灰岩
3	ボージャー形(蓋・身)	奥棚	蓋:Ⅲb(1710～1740) 身:Ⅴ(1720～1780)	1720～1740	
4	ボージャー形(蓋・身)	奥棚	蓋:Ⅴb(1740～1770) 身:Ⅳ(1720～1820)	1740～1770	
5	ボージャー形(蓋・身)	奥棚	蓋:Ⅴb(1740～1770) 身:Ⅳ(1720～1820)	1740～1770	
6	ボージャー形(蓋・身)	奥棚	蓋:Ⅱa(1680～1750) 身:Ⅴ(1720～1780)	1720～1750	
7	ボージャー形(蓋・身)	奥棚	蓋:Ⅴb(1740～1770) 身:Ⅳ(1720～1820)	1740～1770	
8	ボージャー形(蓋・身)	奥棚	蓋:Ⅰ(1660～1690) 身:Ⅰ(1660～1690)	1660～1690	
9	石製家形(蓋・身)	奥棚	大堀編年2H類(17C後葉～18C)	17C後葉～18C	
10	赤焼御殿形(蓋・身)	奥棚	上江洲編年1690～1780年	1690～1780年代	
11	ボージャー形(蓋・身)	右棚	蓋:Ⅲa(1710～1740) 身:Ⅱc(1680～1740)または Ⅲc(1700～1800)	1710～1740	
12	ボージャー形(蓋・身)	右棚	蓋:Ⅲb(1710～1740) 身:Ⅲa(1700～1800)	1710～1740	雍正13(1735)
13	ボージャー形(蓋・身)	右棚	蓋:Ⅵ(1760～1790) 身:Ⅳ(1720～1820)	1760～1790	
14	転用蔵骨器(身)	左棚	—	—	
15	ボージャー形(蓋・身)	左棚	蓋:Ⅲa(1710～1740) 身:Ⅱa(1680～1740)	1710～1740	康熙56(1717)
16	ボージャー形(蓋・身)	左棚	蓋:Ⅲa(1710～1740) 身:Ⅲa(1700～1800)	1710～1740	雍正7(1729)
17	ボージャー形(蓋・身)	左棚	蓋:Ⅱa(1680～1750) 身:Ⅲa(1700～1800)	1700～1750	康熙60(1721)
18	ボージャー形(蓋・身)	左棚	蓋:Ⅴb(1740～1770) 身:Ⅴ(1720～1780)	1740～1770	
19	ボージャー形(蓋・身)	左棚	蓋:Ⅴb(1740～1770) 身:Ⅲa(1700～1800)	1740～1770	
20	ボージャー形(蓋・身)	左棚	蓋:Ⅶ(1750～1820) 身:Ⅳ(1720～1820)	1750～1820	
21	石製家形(蓋・身)	左棚	大堀編年2H類(17C後葉～18C)	17C後葉～18C	サンゴ石灰岩 康熙60(1721)
22	ボージャー形(蓋・身)	シルヒラシ	蓋:Ⅴb(1740～1770) 身:Ⅲa(1700～1800)	1740～1770	
23	マンガン釉甕形(蓋・身)	シルヒラシ	身:Ⅱ～Ⅲ(1770～1850年代)	1770～1850年代	
24	ボージャー形(蓋・身)	シルヒラシ	蓋:Ⅲb(1710～1740) 身:Ⅱc(1680～1740)	1710～1740	
25	ボージャー形(蓋・身)	シルヒラシ	蓋:Ⅶ(1750～1820) 身:Ⅳ(1720～1820)	1750～1820	
26	ボージャー形(蓋・身)	シルヒラシ	蓋:Ⅴb(1740～1770) 身:Ⅲa(1700～1800)	1740～1770	
27	マンガン釉甕形(蓋・身)	シルヒラシ	身:Ⅱ(1770～1800年代)	1770～1800年代	
28	ボージャー形(身)	シルヒラシ	身:Ⅲa(1700～1800)	1700～1800	
29	転用蔵骨器(蓋・身)	シルヒラシ	蓋:Ⅶ(1750～1820)	1750～1820	蓋はボージャー形
30	ボージャー形(蓋・身)	シルヒラシ	蓋:Ⅶ(1750～1820) 身:Ⅳ(1720～1820)	1750～1820	
31	マンガン釉甕形(蓋・身)	シルヒラシ	身:Ⅱ～Ⅲ(1770～1850年代)	1770～1850年代	
32	マンガン釉甕形(蓋)	シルヒラシ	—	—	
33	マンガン釉甕形(身)	シルヒラシ	身:Ⅲ(1810～1850年代)	1810～1850年代	
34	マンガン釉甕形(蓋・身)	シルヒラシ	身:Ⅱ(1770～1800年代)	1770～1800年代	嘉慶3(1798)洗骨
35	マンガン釉甕形(蓋・身)	シルヒラシ	身:Ⅱ(1770～1800年代)	1770～1800年代	
36	ボージャー形(身)	シルヒラシ	身:Ⅳ(1720～1820)	1770?～1820	マンガン釉を一部施釉
37	マンガン釉甕形(蓋・身)	シルヒラシ	身:Ⅱ(1770～1800年代)	1770～1800年代	乾隆60(1795)
38	赤焼御殿形(蓋・身)	シルヒラシ	上江洲編年1690～1780年	1690～1780年	
39	マンガン釉甕形(蓋)	シルヒラシ	—	—	
40	ボージャー形(蓋・身)	シルヒラシ	蓋:Ⅴa(1740～1770) 身:Ⅲa(1700～1800)	1740～1770	
41	ボージャー形(蓋・身)	シルヒラシ	蓋:Ⅶ(1750～1820) 身:Ⅵa(1770～1810)	1770～1810	乾隆48(1783)
42	ボージャー形(蓋・身)	シルヒラシ	蓋:Ⅴb(1740～1770) 身:Ⅲc(1700～1800)	1740～1770	
43	ボージャー形(蓋・身)	シルヒラシ	蓋:Ⅴb(1740～1770) 身:Ⅳ(1720～1820)	1740～1770	
44	ボージャー形(身)	シルヒラシ	身:Ⅲc(1700～1800)	1700～1800	
45	ボージャー形(蓋)	シルヒラシ	蓋:Ⅶ(1750～1820)	1750～1820	光緒2(1876)

みが饅頭形で蓋裏の中心部は有孔である。径8.6cmのつまみ台が見られ、体部に櫛描き波状文が施される。安里分類のⅡa式(1680～1750)の資料である。身は頸部沈線が2本、胴部は無文である。マドは平葎形が貼り付けられており、安里分類のV式(1720～1780)の資料となる。両者の絞り込みから1720～1750年の資料と考えられる。銘書は蓋と身と両方で確認された。蓋には外面及び内面に墨書されていた。外面は残存状態が悪く「午十一月十八日／…／栗國■…／女房…／…」と判読不能な文字が多いが、内面は「午十一月十八日死去／■栗國む戸西原／女房真こせい」とあり、■栗國む戸西原の「女房真こせい」が被葬者であることが分かる。マド枠下方で見られた銘書は「栗國之む戸西原／女房真こせい」とある。蓋で書かれていた死去月日が身では書かれていない。銘書の内容より栗國に關係する西原姓が確認できる。

前列の蔵骨器9(第17図38、39)はサンゴ石製家形蔵骨器で、同墓で最も大きな石製家形である。屋根は入母屋形で軒に垂木の意匠が正面及び両側面に施されているが、背面には垂木の表現は見られない。四面とも桁の両端の幅は厚い。身は正面中央に方形のマドが3箇所見られ、正面および両側面には左右に線彫りによる枠が施される。屋根及び身の器形から大堀分類の2H類(入母屋造千鳥破風6式)と見られ、17世紀後葉から18世紀が主体となる資料である。身正面には判読不能な文字が多いが「栗■掟親雲上／女房／■■■之■■■／■■■…■■■女子／まか戸／…■■■七日」と書かれており、被葬者は「栗國掟親雲上女房」とその女子の「まか戸」ということが分かる。

前列右端の蔵骨器10(第18図42、第19図43)は赤焼御殿形である。上江洲編年の1690～1780年の資料で、蓋は寄棟形である。大棟に一对の鯨が乗り、正面及び背面の鯨の下方には獅子頭を2体ずつ貼り付けている。四面ともに朱、青、黒で彩色され、正面は蓮華文、両側面および背面は雲文が描かれている。身はマドが唐破風形の貼り付けで1方2方の3箇所の掘り込みがある。マドの両脇には貼り付けの法師像がみられ、両側面にも蓮華に乗った法師像が1体ずつ貼り付けられる。正面のマドの下方に蓮華文を彩色で描き、左右および下方を鋸歯状の文様で連続して縁取られている。背面には大きな蓮華文および草文を彩色で描いている。全体的に白化粧を施してから蓮華文等の彩色がなされていた。丁寧なナデ調整を行って成形されている。内面裏側に銘書が確認できた。「山戸比嘉／同人／女房／■■■ノ／■真戸／仁牛比嘉／未六月初三日入／メ四人申候」と比嘉姓が見られ、被葬者は「山戸比嘉」とその「女房」、「■真戸」、「仁牛比嘉」の四人だということ分かる。

後列左端の蔵骨器1(第16図32、33)はボージャー形で、蓋はつまみが饅頭形で蓋裏の中心部は有孔となる。径7.9cmのつまみ台が見られ、体部に櫛描波状文が描かれることから、安里分類のⅡa式(1680～1750)となる。身はマドの右側に蓮華文を沈線で描かれており、安里分類のⅡc式(1680～1740)の資料となる。両者の絞り込みから1680～1740年の製作年代が考えられる。蓋の外面に銘書が墨書で「亥ノ年正月十／栗國西原築登之／母親」とある。栗國と西原の關係性がこの銘書からも確認できる。

後列右端の蔵骨器4(第17図40、41)はボージャー形で、蓋はつまみが扁平形で蓋裏の中心部は無孔である。つまみ台も見られないことから安里分類のVb式(1740～1770)に相当する。身は胴部が無文で頸部沈線が3本、マドは平葎形が貼り付けられIV式(1720～1820)の資料とみられる。両者を絞り込むと1740～1770年とみられるものである。銘書(蓋)に「山戸外間／亥八月式日新くつ仕／同人女房／但兩人入／壬亥八月八日」とあり、身の胴部には「申／八月十一日／■ら外間／山戸外間／兩人入／同人／女房」と墨書される。蓋と身の銘書の内容が若干異なっている。身の銘書の「■ら外間」の筆跡と「山戸外間」「同人女房」の筆跡が異なる様相から、後者の二人の被葬者は後の追記と考えられる。また、同蔵骨器は内より多くの副葬品が検出されたことは特筆される。第30図104青銅製の簪(ジーファー)、第30図107青銅製の指輪、第30図

111鉄製の小刀と様々な金属製品が検出された。指輪は図化した以外にも3点検出されており、計4点の指輪が出土した。それら以外には特に古銭が注目され、23枚の寛永通宝と1枚の紹聖元寶の合計24枚の古銭が検出された。寛永通宝は古寛永や新寛永と2種類のもが見られた。

これらのことから、奥棚の使用時期は安置される蔵骨器の形式より17世紀終わり頃から使われ始め、18世紀終わり頃まで使用されていたことが窺える。また、後列に前列のものより新しい形式の蔵骨器が安置されていたことから、並び替えの可能性が考えられる。

右棚は3点の蔵骨器が安置されていた。内訳はボージャー形の3点である。左端の蔵骨器11(第20図44、45)の蓋はつまみが宝珠形で蓋裏の中心部は有孔である。径7.8cmのつまみ台が見られ、体部は無文であることから、安里分類のⅢa式(1710～1740)の資料である。身は頸部沈線が2本、平葎形のマドが貼り付けられ、マドの下方には草文のような沈線が見られるが一部分のみであることから胴部全体に文様があったかは判然としない。そのため安里分類のⅡc式(1680～1740)またはⅢc式(1700～1800)と見られ、両者の形式から1710～1740年の資料と想定したい。蓋内面に銘書が「山戸西原にや／子年正月十六日母親様／…戸」と見られ、西原姓が確認できる。マド枠上方に「十三」のカマ印が見られる。

中央に安置される蔵骨器12(第20図48、49)は、蓋はつまみが宝珠形で蓋裏の中心部は有孔となる。つまみ台が見られず体部無文であることから、安里分類のⅢb式(1710～1740)の資料となる。身は頸部沈線が2本、胴部無文で、平葎形のマドが貼り付けられる。安里分類のⅢa式(1700～1800)の資料となる。両者の絞り込みから1710～1740年の資料と考えられる。同蔵骨器は銘書が蓋と身の両方に墨書された資料としても好資料である。銘書(蓋)は内面に「乙卯七月六日洗骨／仕候／比嘉掟親雲上」と書かれ、身では「雍正拾壹年／比嘉掟親雲上／乙卯七月六日洗骨仕候」とある。雍正11年(1733)は癸丑で、乙卯は雍正13年(1735)である。年号または干支を書き違えたと思われるが、干支は蓋身とも乙卯であることから、雍正13年の可能性が高いと考えられる。銘書から比嘉姓が確認できる。

右端の蔵骨器13(第20図46、47)の蓋は径6.7cmのつまみ台のみでつまみは見られないことから、安里分類のⅥ式(1760～1790)の資料である。身は頸部沈線3本で、胴部は無文、平葎形のマドが貼り付けられる。安里分類のⅣ式(1720～1820)の資料となり、両者の絞り込みは1760～1790年となる。銘書は見られなかった。

これらの安置された3点の蔵骨器から、右棚の使用時期は18世紀初め頃から18世紀終わり頃と見られ、西原姓と比嘉姓の関係が示唆される。

左棚は8点の蔵骨器が安置されており、内訳ではボージャー形が6点、サンゴ石製家形厨子が1点、沖縄産無釉陶器の転用蔵骨器が1点である。奥棚と同様に2列で安置される。

後列左端の蔵骨器15(第22図56、57)はボージャー形で、蓋はつまみが宝珠形で蓋裏の中心部は有孔となる。径7.8cmのつまみ台が見られ、体部が無文であることから、安里分類のⅢa式(1710～1740)の資料である。身は口縁部が内傾し、頸部沈線が3本見られる。マド左側の胴部に浅い線彫りで草文のような文様を描く。平葎形のマドが貼り付けられ、安里分類のⅡa式(1680～1740年)の資料である。両者の絞り込みから1710～1740年と想定される。同蔵骨器は本墓で最も古い年号の銘書が確認された。蓋の外表面および内面に墨書されており、外面の銘書は大部分が薄れているが「…康熙五■…」の文字が読み、内面には「あくに之／三らにし原男子／山戸西原／康熙五十／六年丙酉／六月初八日」とあり、康熙56年(1717)の年号が確認できた。身はマド下方に「西六月八日／あくに三ら西原／男子山戸」とある。銘書の内容から被葬者はあくに之三ら西原の男子で「山戸西原」であることが分かる。

後列中央の蔵骨器16(第22図59、60)もボージャー形で蓋はつまみが饅頭形で蓋裏の中心は有孔である。径7.0cmのつまみ台が見られ体部が無文であることから、安里分類のⅢa式(1710～1740)の資料である。身は頸部沈線が2本、胴部は無文で平葎形のマドが貼り付けられる。安里分類のⅢa式(1700～1800)の資料である。両者の絞り込みから1710～1740年と想定される。蓋内面と身のマド下方に銘書が確認できた。蓋は「雍正七年己酉／十一月三十日死去／三ら西原」とあり、身にも同様の銘書が墨書される。銘書の内容から被葬者は「三ら西原」で雍正7年(1729)に死去したことが分かった。

後列の蔵骨器17(第23図61、62)もボージャー形で蓋はつまみが宝珠形で蓋裏の中心は有孔である。径7.2cmのつまみ台下方に雑な波状沈線文が施される。安里分類のⅡa式(1680～1750)と考えられる資料である。身は頸部沈線が2本、胴部は無文で、平葎形のマドが貼り付けられている。マド上方に「二」とカマ印が見られた。安里分類のⅢa式(1700～1800)の資料である。両者の形式から1700～1750年と想定される。銘書が蓋の内外面および身の胴部で確認できた。蓋の外面には「亥十二月一日／粟國■親雲上／男子三ら／西原」「丑七月七日／うし比嘉」「丑八月十八日／三ら西原／女子かま戸」が読め、内面には「亥十二月一日／粟國掟親雲上／男子三らにし原」が確認できた。また、身のマド下方には「■熙六十年■丑七月七日／…■／うし比嘉／■子かま戸」と被葬者が3名並列される。蓋内面の銘書から、同蔵骨器には先に粟國掟親雲上の男子で「三ら西原」が納められ、次に「うし比嘉」が納められている。その時に身の胴部にも銘書が書かれたと考えられる。その後、三ら西原の女子でかま戸が亡くなったため、同蔵骨器に納められ、銘書の追記があったと見られる。康熙60年(1721)はうし比嘉の死去年または洗骨年と想定され、粟國掟親雲上男子三ら西原はそれ以前の死去と考えられる。本蔵骨器から西原姓と比嘉姓が確認できた。奥棚前列の蔵骨器9の被葬者の「粟國掟親雲上」との関係性が考えられる。

後列右端の蔵骨器21(第図63、64)はサンゴ石製家形蔵骨器で屋根は入母屋形である。正面及び両側面の軒に垂木が表現されるが、背面には見られない。身は正面中央に方形のマドが2箇所見られ、正面及び両側面には左右に線彫りの杵が施される。脚部は方形となる。屋根および身の器形から大堀分類の2H類(入母屋造千鳥破風6式)と見られ、17世紀後葉から18世紀が主体となる資料である。身の正面には銘書が「正月一日にし■■／■■…■■[女カ]子／康熙六十年辛丑七月七日／大しゆ／巳十月■九日にし原■■子／宮里にや」と判読できる。康熙六十年辛丑七月七日は蔵骨器17と同年の年号である。

前列左端の蔵骨器18(第21図50、51)はボージャー形で、蓋はつまみが扁平形で蓋裏の中心部は無孔である。つまみ台は見られず体部は無文であることから、安里分類のVb式(1740～1770)の資料と見られる。身は頸部沈線が2本、胴部は無文で、平葎形のマドが貼り付けられる。マド杵の上方には「三」のカマ印が見られる。安里分類のV式(1720～1780)の資料である。両者の形式から1740～1770年と想定できる。銘書が蓋の内面および身の胴部で確認できた。蓋に「戌八月朔日去／三ら西原男子／うし西原」、身に「戌八月朔日去／三ら西原男子／■■うし西原／未ノ七月七日」と確認でき、三ら西原の男子の「うし西原」が、戌八月一日に死去したことが分かる。

前列中央の蔵骨器19(第21図54、55)はボージャー形で蓋はつまみ台が見られず、つまみは饅頭形で蓋裏の中心部は無孔である。つまみ台は見られないが、体部上面を平坦に仕上げている。文様は見られず、安里分類のVb式(1740～1770)の資料と見られる。身は口縁が内傾し、頸部沈線が2本数える。胴部は無文で平葎形のマドが貼り付けられる。その上方に「四」のカマ印が見られた。安里分類のⅢa式(1700～1800)の資料である。両者の形式から1740～1770年と考えられる。銘書が蓋の外表面と身の胴部で確認できた。蓋に「前仲間掟／未年九月廿／五日」とあり、身に「あくに西原仁屋男子／前仲間掟／未年九月廿五日」とある。

あくに西原仁屋の男子で仲間掟の役職についていた人物がいたことがわかる。

前列中央の蔵骨器20(第21図52、53)はボージャー形で、蓋はつまみやつまみ台が見られない笠形である。安里分類のⅦ式(1750～1820)の資料となる。身は口縁部が直口し、頸部沈線が3本を数える。胴部は無文で平葎形のマドが貼り付けられる。マド枠の右側にカマ印が見られる。安里分類のⅣ式(1720～1820)の資料で、両者の絞り込みから1750～1820年と考えられる。本蔵骨器の銘書は蓋の内面で確認できた。「外間筑登之／妻／西六月七日」とある。外間姓が確認でき、外間姓は奥棚後列の蔵骨器4でも確認されている。

後列左端の蔵骨器15と壁との間に蔵骨器14(第22図58)が安置されていた。沖縄産無釉陶器を転用した蔵骨器で蓋は確認されていない。口縁部から頸部にかけて打割され、現存の器高29.3cm、胴径21.4cmを計る。そのサイズから成人用ではなく、幼児等が考えられる。蔵骨器15の被葬者「あくに之三ら西原の男子山戸西原」との関係が示唆される。

左棚に安置される蔵骨器は転用蔵骨器を除いて全ての厨子に銘書が確認できたことが特徴としてあげられる。本墓において最も古い年号である康熙56年(1717)が蔵骨器15で確認できた。また蔵骨器17および21では康熙60年(1721)、蔵骨器16では雍正7年(1729)が確認できたことから、後列は18世紀初め頃に使用されたことが窺える。前列は蔵骨器の器形から18世紀半ばからの使用が考えられる。

シルヒラシではボージャー形の蓋と身のセットが9点、マンガン釉甕形のセットが6点、赤焼御殿形のセットが1点、転用蔵骨器のセットが1点の蓋と身のセット関係が分かるものの他に、ボージャー形の蓋が1点、ボージャー形の身が3点、マンガン釉甕形の蓋が2点、マンガン釉甕形の身が1点の単体で検出された蔵骨器に分かれる。身のみを数えると21点の検出があった。検出された蔵骨器は、右棚の前方では2列で配置されていた状況が窺えるが、左棚の前方は横倒しになった蔵骨器31の上に蔵骨器33が置かれていたこと、蔵骨器43や44のように他の蔵骨器の上に横倒しで置かれていた状況など上下で重なっていたものが多く見られたことから、ある時期に墓室内で原位置から移動せざるを得ない事由が発生したと推測する。床を精査すると缶や小さな鉄片が出土したことから、戦時中に墓が開けられ、空間確保を目的に一部の蔵骨器の移動が行われたと考えられた。

右棚壁側の蔵骨器23(第24図65、66)はマンガン釉甕形で屋門は壁を向いた状態で検出された。蓋のつまみは宝珠形で鐙の縁が上方に反り、端部はやや平坦に仕上げる。かえりは丁寧に作られる。身は瓦屋形の屋門が貼り付けられ、柱は横帯4まで伸びて玉飾りが付く。胴部は蓮華文の貼り付けが施されるが茎の部分は線彫りで表現される。横帯3および4は突帯で、胴下部文様帯に波状沈線文が1条見られる。安里編年のⅡ～Ⅲ式(1770～1850年代)の資料に相当する。銘書は見られない。

右棚側前列の蔵骨器27(第24図67、68)もマンガン釉甕形で屋門はシルヒラシを向いて検出された。蓋はつまみが宝珠形で鐙の縁が上方に反り、端部は平坦に仕上げる。身は瓦屋形の屋門が貼り付けられ、柱は横帯4まで伸びる。玉飾りは見られない。肩部文様帯は無文で、胴部文様帯に貼り付けの蓮華文が施される。茎部分は線彫りで表現し、その根元部分に貼り付けの蓮華が見られる。横帯3および横帯4は突帯で、胴下部文様帯は無文。安里編年のⅡ式(1770～1800年代)の資料と考えられる。銘書は蓋および身とも見られない。

同じく右棚側前列の蔵骨器28(第25図71)はボージャー形で身のみを検出で、マド枠はシルヒラシを向いて検出された。口縁部は玉縁状で内傾し、頸部沈線は2本を数える。胴部は無文で平葎形のマド枠が貼り付けられる。マド枠の右上にカマ印が見られた。器形から安里分類のⅢa式(1700～1800)の資料である。

銘書は見られない。

右棚側後列中央の蔵骨器24(第24図69、70)はボージャー形で、マド枠が墓口のある壁を向いており、シルヒラシ中央へ向いていない状況で検出された。蓋は饅頭形で蓋裏の中心部は有孔である。つまみ台は見られず、体部は無文。安里分類のⅢb式(1710～1740)の資料である。身は玉縁状の口縁部は内傾し、頸部沈線は2本を数える。唐破風形のマドが貼り付けられる。胴部にはマド枠下方に大きく蓮華文を沈線で描き、マド枠の左右にも沈線で蓮華文を描く。マド枠の下には「春」という文字が確認できる。また、マド枠右上にカマ印が見られる。安里分類のⅡc式(1680～1740)の資料である。両者の絞り込みから1710～1740年の資料と見られる。銘書が蓋の内外面で見られた。蓋の外面には「未ノ五月廿三日／かま戸比嘉男子／歳拾四かな」「未ノ五月廿八日／西原■男子／歳■かま戸」。内面には「未ノ五月廿三日／かま戸比嘉男子／歳拾四／かな」「未ノ五月廿八日／西原筑登之男子／歳七かま戸」と判読できた。両者とも同文が墨書されている。被葬者はかま戸比嘉の男子「かな」と西原筑登之の男子「かま戸」の二人である。記載された干支・月日が五日違いで、相次いで死亡した子どもを同じ蔵骨器に納骨したことが分かる。左棚の蔵骨器17と同じく、比嘉姓と西原姓の二つの姓が確認できる。

奥棚側の壁際でみられた蔵骨器29(第25図74、75)は沖縄産無釉陶器を使用した転用蔵骨器である。蓋はボージャー形でつまみやつまみ台が見られない笠形で安里分類のⅦ式(1750～1820)の資料。身は沖縄産無釉陶器の水甕で、肩部に粘土紐の貼り付けによる縄目が1条巡る。口径32.0cm、胴径42.3cm、底径23.6cm、器高63.5cmを測る。粘土紐の上部にカマ印が見られた。蓋と身のどちらにも銘書は見られなかった。

蔵骨器31(第25図72、73)は左棚前方の奥壁側で横たわって検出されたマンガン釉甕形である。蓋はその前方の床上で検出されたものをその状況からセットだと判断した。蓋のつまみは宝珠形で鏝はやや歪むが端部とかえり端部は平坦に仕上げている。全体的に丁寧な造りである。銘書は見られない。身は屋門が貼り付けの瓦屋形で柱貫が付く。玉飾は見られない。肩部文様帯に沈線で波状文が描かれる。胴部文様帯は蓮華文を貼り付けるが茎の部分は沈線で表現され、柱が横帯4まで伸びる。胴下部文様帯に沈線で波状文が1条描かれる。安里編年のⅡ～Ⅲ期(1770～1850年代)の資料と考えられる。身にも銘書は見られなかった。

蔵骨器40(第25図76、77)は奥壁側左隅で検出されたボージャー形である。蓋の上にはマンガン釉甕形の蓋が重ねられており、マドは壁側を向いていた。蓋はつまみが扁平形で蓋裏の中心部は無孔である。径10.6cmのつまみ台が見られ、体部は無文である。安里分類のⅤa式(1740～1770)の資料である。銘書は見られない。身は口縁部が内傾し、頸部沈線は2本数える。胴部は無文で平葎形のマド枠が貼り付けられる。その左上に「し」を反転させたようなカマ印が見られる。銘書は見られない。両者の形式から1740～1770年の資料と考えられる。

左棚前方で検出された蔵骨器38(第26図78、79)は赤焼御殿形で、石灰岩の切石の上に安置され、マド枠はシルヒラシを向いていた。上江洲編年の1690～1780年の資料で、蓋は寄棟形で屋根が上下二層となる。大棟に一对の鯰が乗り、正面および背面に獅子頭を2体ずつ貼り付けている。正面に大きな蓮華文を彩色で表現する。下段の屋根には黒色で瓦を描画する。正面軒にかろうじて垂木の表現が見える。身はマドが唐破風形の貼り付けで1方2方の3箇所掘り込みがある。窓の両脇には貼り付けの法師像が見られ、両側面にも同様に法師像が1体ずつ貼り付けられる。外面はナデ調整が見られるが全体的に粗い。白化粧が施される。蓋と身のどちらにも銘書は見られなかった。

蔵骨器37(第26図80、81)はマンガン釉甕形で蔵骨器38と同様の切石の上に安置されていたが、屋門は

壁を向いていた。蓋のつまみは宝珠形で鐙は平坦に仕上げ、端部はやや丸い。宝珠台は2段で構成される。全体的に丁寧な造りである。銘書が内面で見られ反時計回りに「乾隆六拾年己卯七月七日洗骨／栗國筑登之親雲上」とあり、被葬者は乾隆60年(1795)の七月七日に洗骨した「栗國筑登之親雲上」だと分かる。後述する蔵骨器41の被葬者と夫婦関係だと考えられる。身は口縁部が緩く外反し、口唇部は中央が浅く窪む。肩部文様帯は沈線で蓮葉文を施す。屋門は瓦屋形を貼り付けし、柱貫が付く。柱は胴部の中央辺りまでで、横帯4まで届かない。屋根に玉飾りは見られず、柱下に見られる。胴部文様帯は蓮華文を貼り付け、茎は沈線で表現する。胴下部文様帯は見られない。安里編年のⅡ式(1770～1800年代)の資料である。

蔵骨器34(第27図84、85)はマンガン釉甕形で墓室に入ってすぐ右手側に安置されていた蔵骨器である。屋門はシルヒラシを向く。蓋はつまみが宝珠形で鐙は平坦に仕上げ、端部やかえりの縁も平坦に仕上げる。全体的に丁寧な造りである。銘書が内面で見られ反時計回りで「馬氏板良敷親雲上室真靄嘉慶元年丙辰七月朔日死同三年戊午正月二十四日洗骨号慈心翁氏安谷屋親方盛孟女」とあり、板良敷親雲上の室「真靄」で嘉慶元年(1796)に死去し、嘉慶3年(1798)に洗骨されていることが分かる。真靄は組踊の創始者玉城親方朝薫の孫娘にあたる。その真靄がなぜ本墓に葬られたのか詳細は分かっていない。身は口縁部が直口し、口唇部は平坦に仕上げる。屋門は瓦屋形を貼り付けし、柱貫が付く。柱は横帯4まで伸び、玉飾りを3枚貼り付け花卉形となる。肩部文様帯は無文で、胴部文様帯は貼り付けの蓮華文し、茎部分は沈線で表現する。蓮華の下に沈線で波文を施す。胴下部文様帯は見られない。安里編年のⅡ式(1770～1800年代)の資料である。

蔵骨器36(第28図86)はボージャー形で蔵骨器35と蔵骨器41の上に乗せるように重なって検出された。身のみの検出で蓋は出土していない。口縁部は玉縁状で直口し、頸部沈線は3本を数える。胴部は無文で平葎形のマド枠が貼り付けられる。マド枠の右側にカマ印が見られた。マド枠の幅でマンガン釉が回転施釉される。器形から安里分類のⅣ式(1720～1820)の資料で、マンガン釉が施されていることから、マンガン釉甕形が定型化する1770年代以降が上限となる可能性が考えられる。

蔵骨器41(第28図87、88)はボージャー形でマドはシルヒラシを向いて安置されていた。蓋はつまみ台やつまみが見られない笠形で安里分類のⅦ式(1750～1820)の資料である。身は玉縁状の口縁部が内傾し、頸部沈線が4本見られる。胴部は無文で、平葎形のマド枠が貼り付けられる。安里分類のⅥa式(1770～1810)の資料である。両者の絞り込みから1770～1810年に相当すると考えられる。銘書が蓋及び身で見られ、蓋の内面に「乾隆四拾八年／癸卯四月初七日／栗國筑登之親雲上妻／洗骨仕候」とある。身のマド枠下方には「乾隆四拾八年癸卯／四月初■日栗國筑登之親雲上／妻洗骨仕候」とあり、蓋に墨書された銘書と同文が身でも確認できる。銘書より被葬者は「栗國筑登之親雲上妻」で、乾隆48年(1783)に洗骨されたことが分かる。また、被葬者は蔵骨器37の妻であることも判明した。

蔵骨器42(第28図89、90)はボージャー形で蔵骨器41と同様にマドはシルヒラシを向いて安置されていた。蓋は扁平形のつまみで蓋裏の中心部は無孔、つまみ台は見られない。体部は無文だが、「十」字のカマ印のような刻み目が1箇所見られた。安里分類のⅤb式(1740～1770)の資料である。身は玉縁状の口縁部がやや直口し、頸部沈線が2本見られる。胴部は無文で、唐破風形のマド枠が貼り付けられる。マド枠左上方に「三」のカマ印が見られる。安里分類のⅢc式(1700～1800)の資料となり、両者の絞り込みから1740～1770年の資料と考えられる。銘書が蓋及び身の胴部で見られた。蓋の外面に「かま戸栗國／亥年正月十／三日」とあり、身の胴部に「あくに西原仁屋男子／かま戸栗國／亥年正月十三日」と確認できる。身の銘書から被葬者はあくに西原仁屋の男子の「かま戸栗國」であることが分かる。蔵骨器19の銘書でもあくに西原

仁屋男子とあったことから、本蔵骨器の「かま戸栗國」と蔵骨器19の「前仲間掟」は兄弟関係であることが判明した。

シルヒラシは棚では見られなかったマンガン釉甕形が安置されていることが特徴としてあげられる。本墓から出土したマンガン釉甕形の7点は全てシルヒラシからの出土である。

シルヒラシで最も古い器形は右棚前方で安置されていた蔵骨器24のボージャー形で、1710～1740年の資料と想定される。被葬者は「かま戸比嘉男子かな」と「西原筑登之男子かま戸」の二人で、姓を異にして同じ蔵骨器に納められた状況から比嘉姓と西原姓の深い関係性が指摘される。右棚前方に安置されていた蔵骨器8点はこの蔵骨器24を除いて銘書は見られなかった。蔵骨器23および蔵骨器27はマンガン釉甕形で安里編年のⅡ期からⅢ期の資料(1770～1850年代)の資料である。

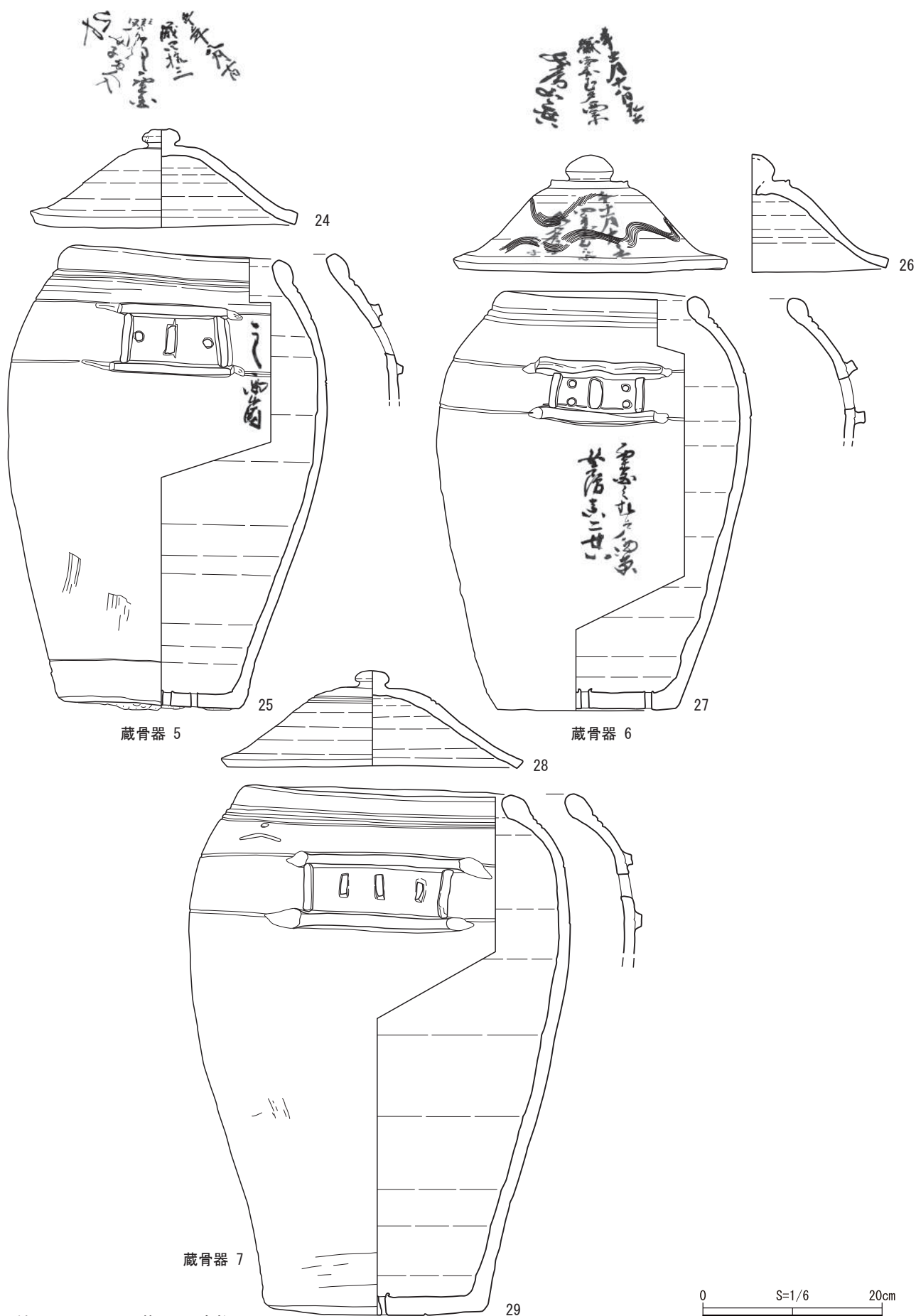
左棚前方で検出された最も古いのは蔵骨器42のボージャー形と蔵骨器43のボージャー形で1740～1770年の資料と見られる蔵骨器である。蔵骨器42の被葬者は左棚前列の蔵骨器19の被葬者と兄弟関係にあるとみられる。また蔵骨器43は左棚前列の蔵骨器20の被葬者の妻であることが分かる資料である。その他に蔵骨器37と蔵骨器41の被葬者は夫婦関係であるが、隣接しての安置ではなかった。蔵骨器34、37、41の資料はともに年号および洗骨の文字、被葬者名が墨書された資料で、乾隆48年(1783)から嘉慶3年(1798)の年号が確認出来る。蔵骨器33の資料は図化を見送ったが安里編年のⅢ期(1810～1850年代)に相当する資料で、本墓から出土した蔵骨器の中で最も新しい器形の蔵骨器である。また、蔵骨器45はボージャー形の蓋のみの検出で安里分類のⅦ式(1750～1820)に相当する資料であるが、蓋外面に「光緒二年丙■／…」とあり光緒2年(1876)の年号が記されていた。

シルヒラシの使用時期は上述したそれぞれをまとめると1710～1740年に右棚前から使用し始め、左右の別はそれぞれの左右棚に安置された者との関係性の深い者を配列し、全体的に1850年代まで使用していることが窺える。その後、1876年以降に再び墓を開けた時期があったことが分かる。

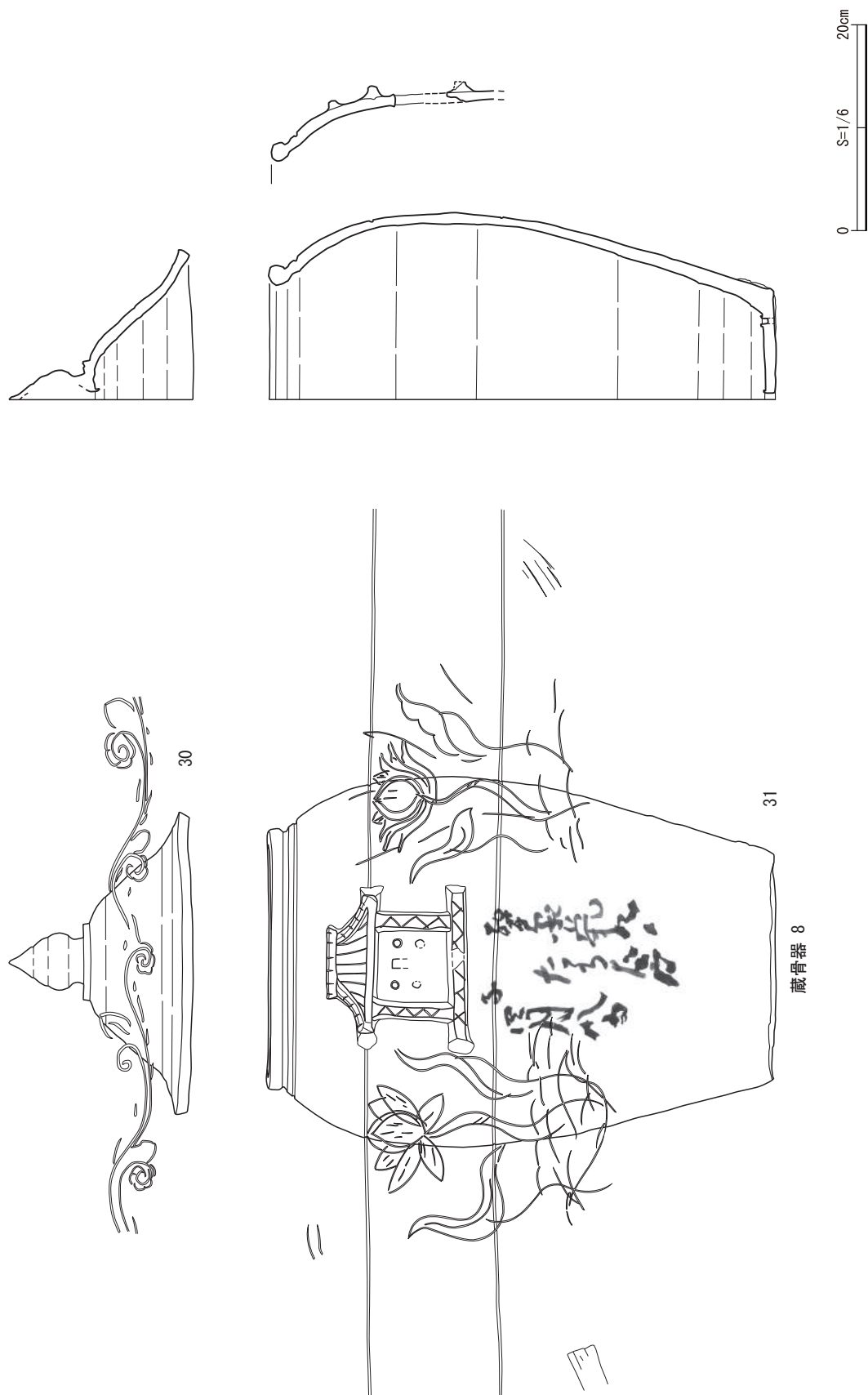
本墓は蔵骨器の配置状況から、栗國姓の蔵骨器8を中心に17世紀終わり頃から奥棚の使用が始まり、左右棚には18世紀初め頃からその分家筋とみられる西原姓、比嘉姓が安置される。外間姓も確認されているが、その関係性は不明である(第5章参照)。左棚では親子や兄弟の蔵骨器を近接して安置する状況も窺えた。シルヒラシは18世紀前半から使用が始まり、19世紀半ばまで継続して使用される。一端使用が途絶えるも19世紀後半に再び墓を使用するが、墓所有者からの聞き取りでは近代にハワイへ移民したとあり、20世紀以降の使用が途絶えたものと推測された。

004号墓からは蔵骨器以外にも副葬品と思われる沖縄産陶器の小杯や瓶、煙管の雁首や吸い口、青銅製品の簪や指輪、鉄製の小刀らの遺物のほかに木製品に付随すると見られる鉄製釘が出土した。また、紹聖元寶が1枚、寛永通宝が37枚、無文銭が7枚の計45枚の古銭が蔵骨器の内や墓庭から出土した。

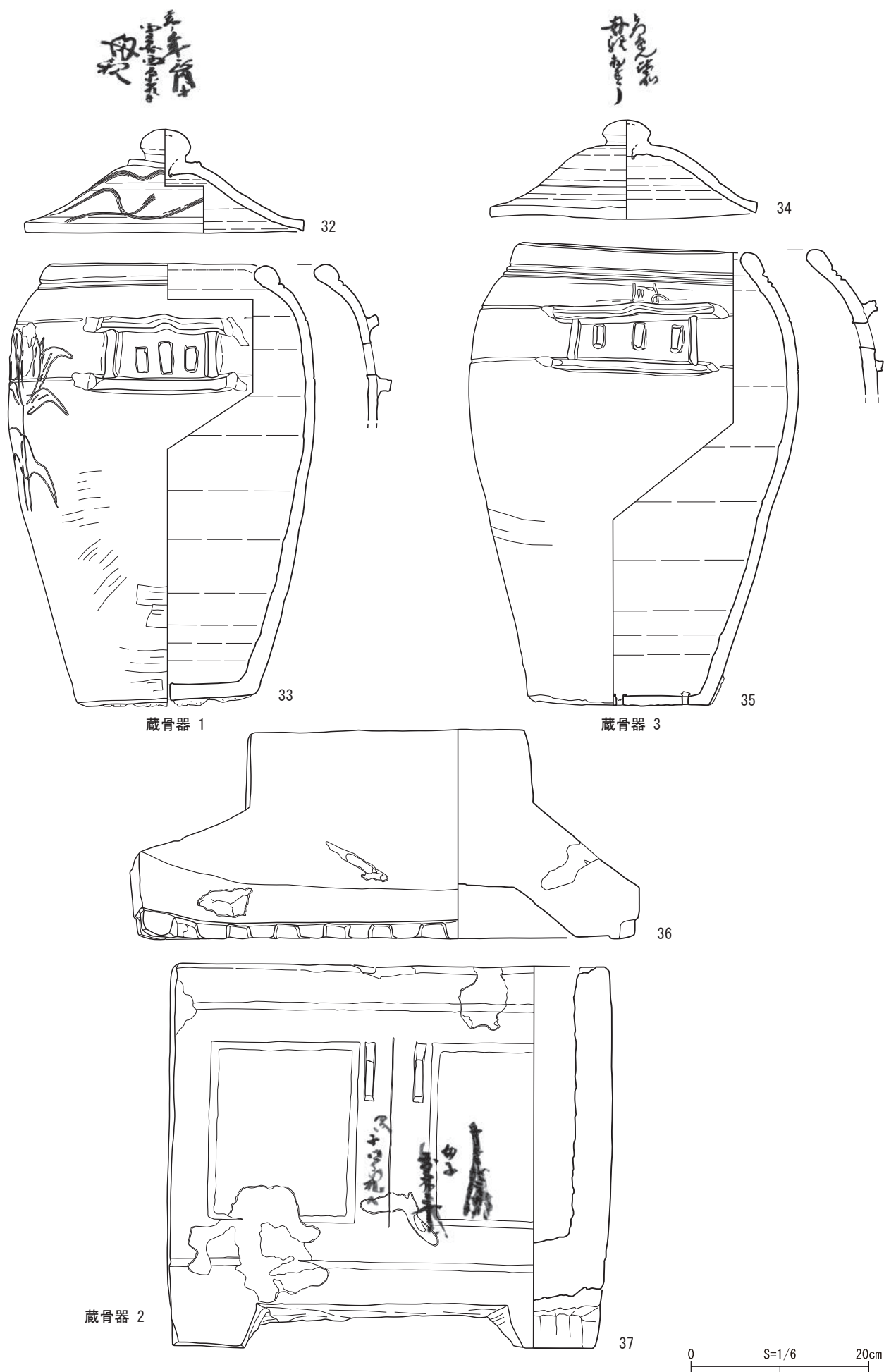
第30図91～95は沖縄産施釉陶器の小杯である。91～93は法量の口径が3.4cm～3.6cm、器高が1.9cm～2.0cm、底径が1.6cm～1.8cmに収まり、どれも透明釉が施され、素地の灰白色が見られる。91および92は貫入が多く入る。第30図94は法量が口径3.4cm、器高1.9cm、底径1.5cmを測り、内面から外面高台際まで透明釉で全面施釉される。高台から外底面は露胎で口唇部は釉剥ぎが見られる。外面は飴釉で水玉模様を施す。素地は灰白色。95は法量が口径4.8cm、器高2.6cm、底径2.2cmを測り、91～94の小杯よりやや大きい。口縁部が外反し、内面から外面高台際まで透明釉が施されている。素地は灰白色。93は墓庭Ⅰ層より出土。91および95は墓庭北東隅でⅠ層を掘り下げ後のⅡ層上面にて一括で出土。92および94は同じく墓庭北東隅でⅡ層(黄褐色混礫土)を掘削中に一括で出土した。



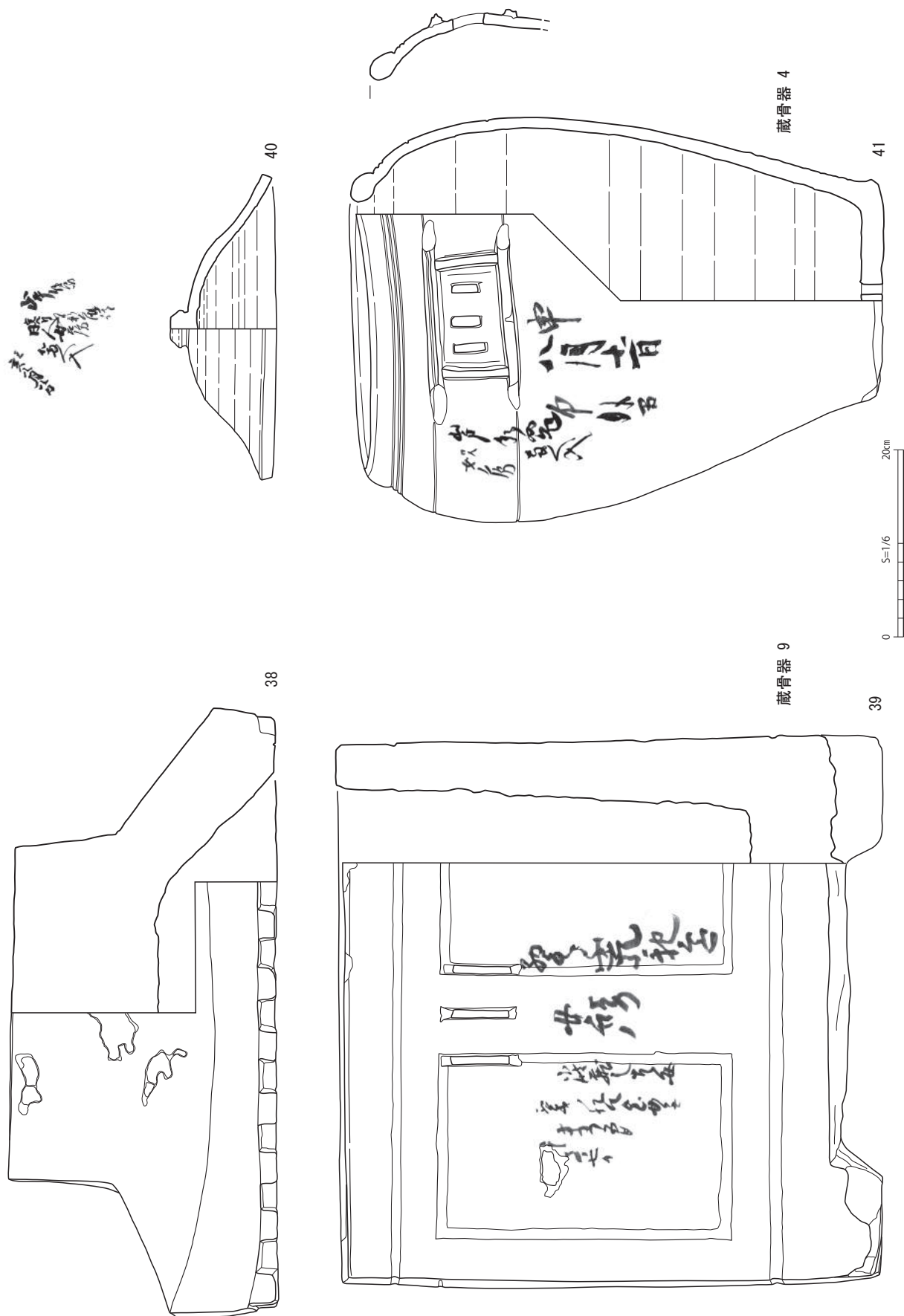
第14図 004号墓出土遺物 1



第15图 004号墓出土遺物 2

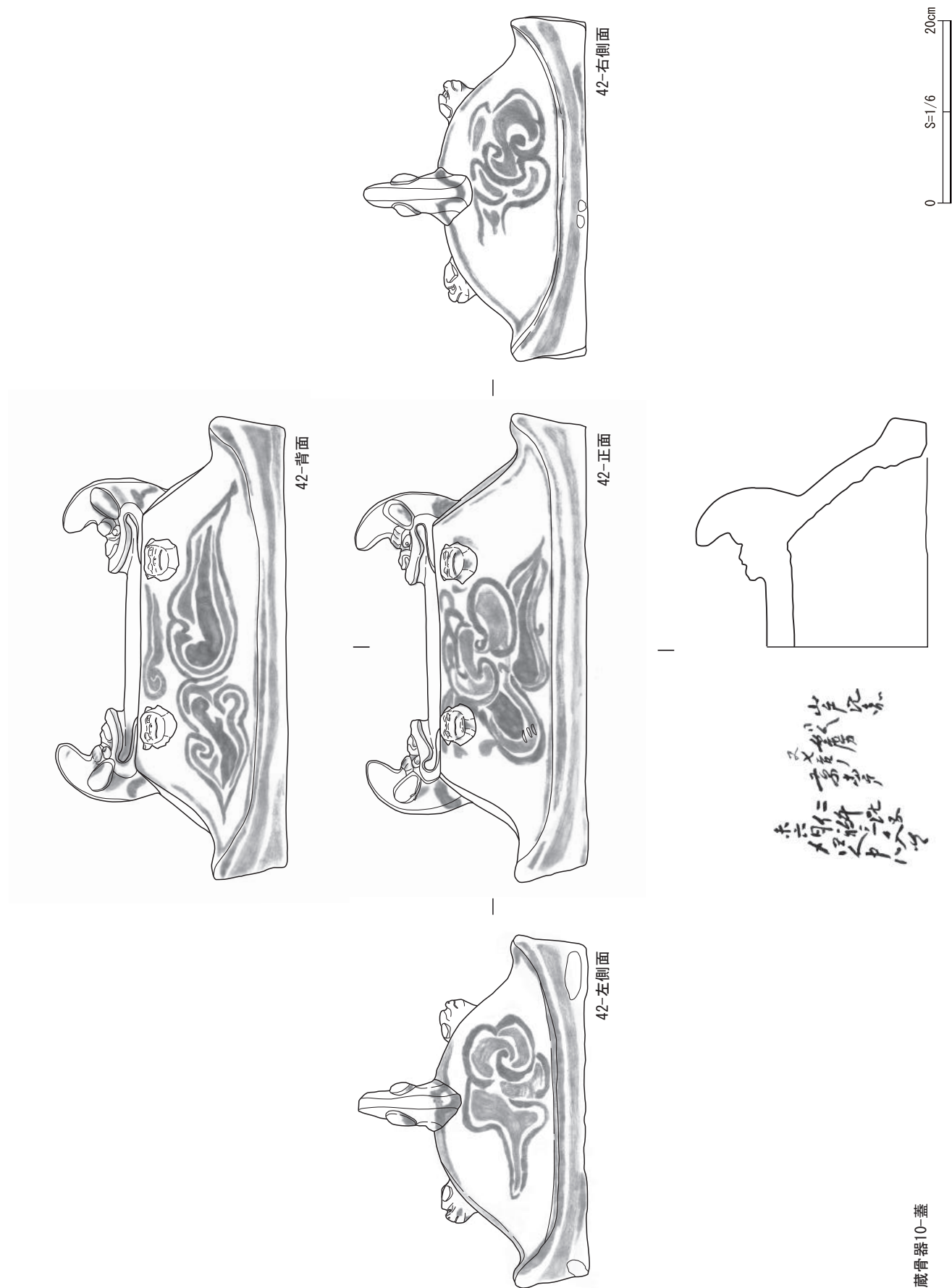


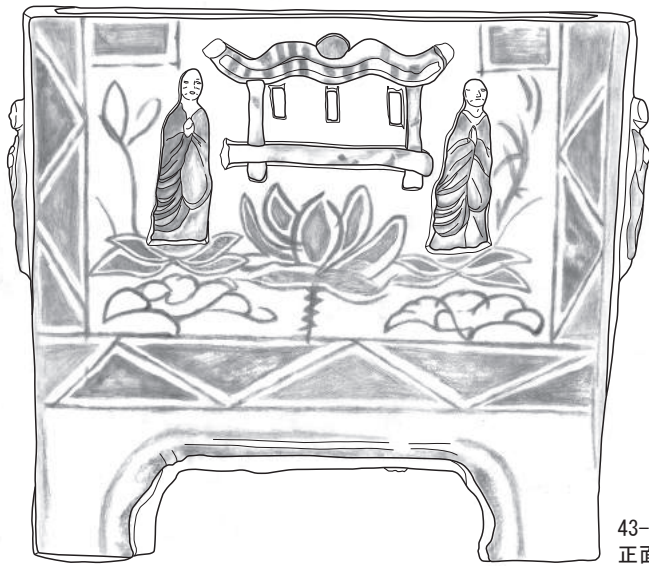
第16图 004号墓出土遺物 3



第17図 004号墓出土遺物 4

第18図 004号墓出土遺物 5





43-
正面



43-
右側面

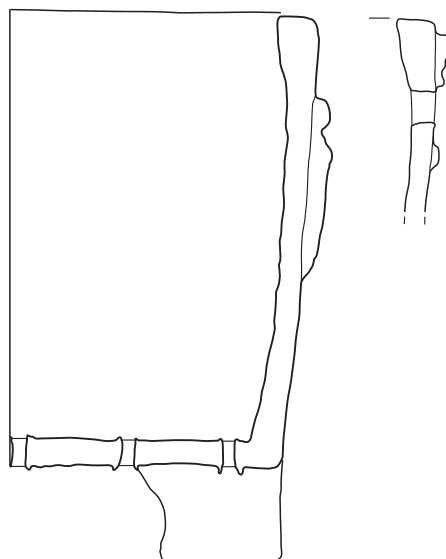


43-
背面



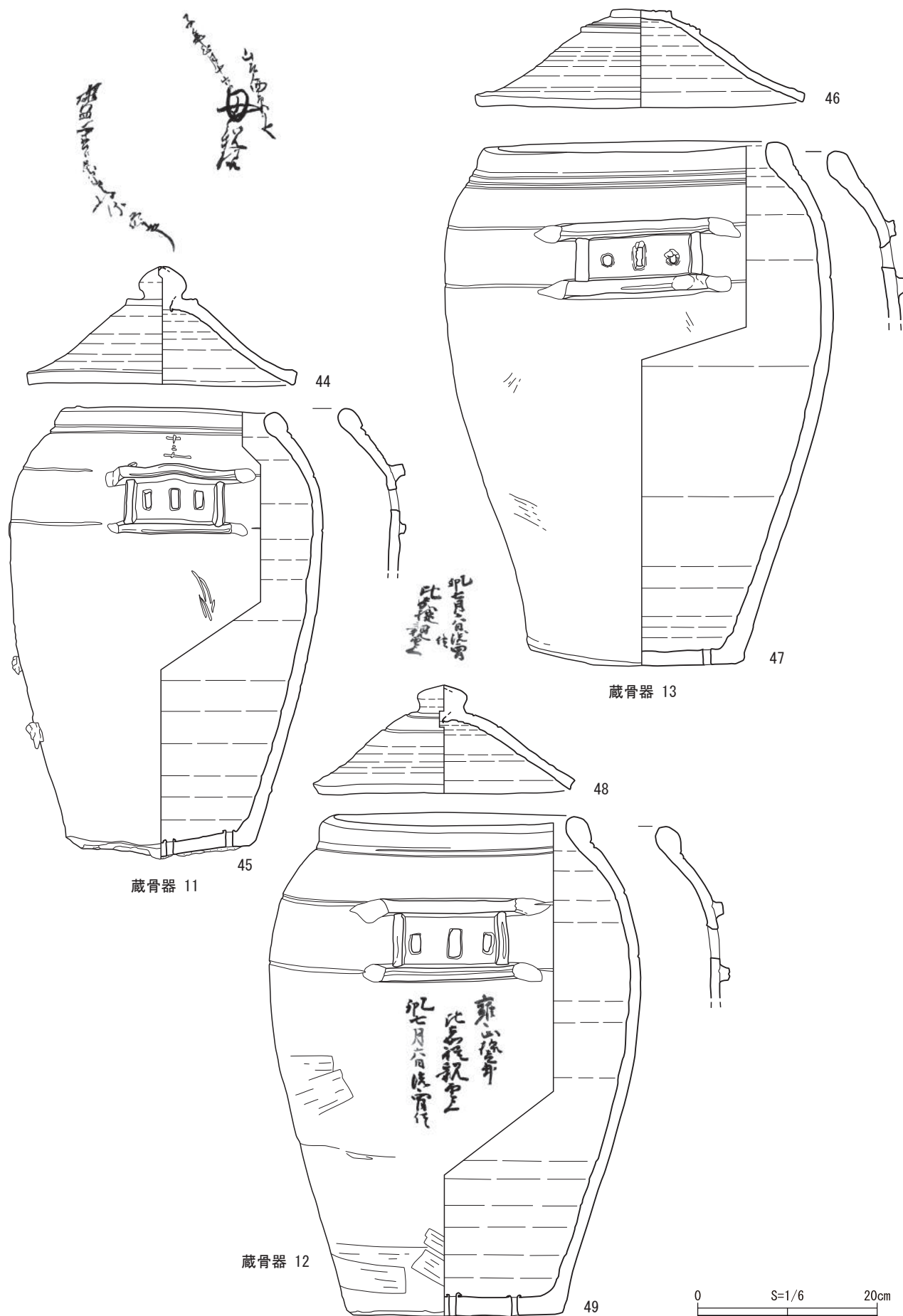
43-
左側面

藏骨器10-身

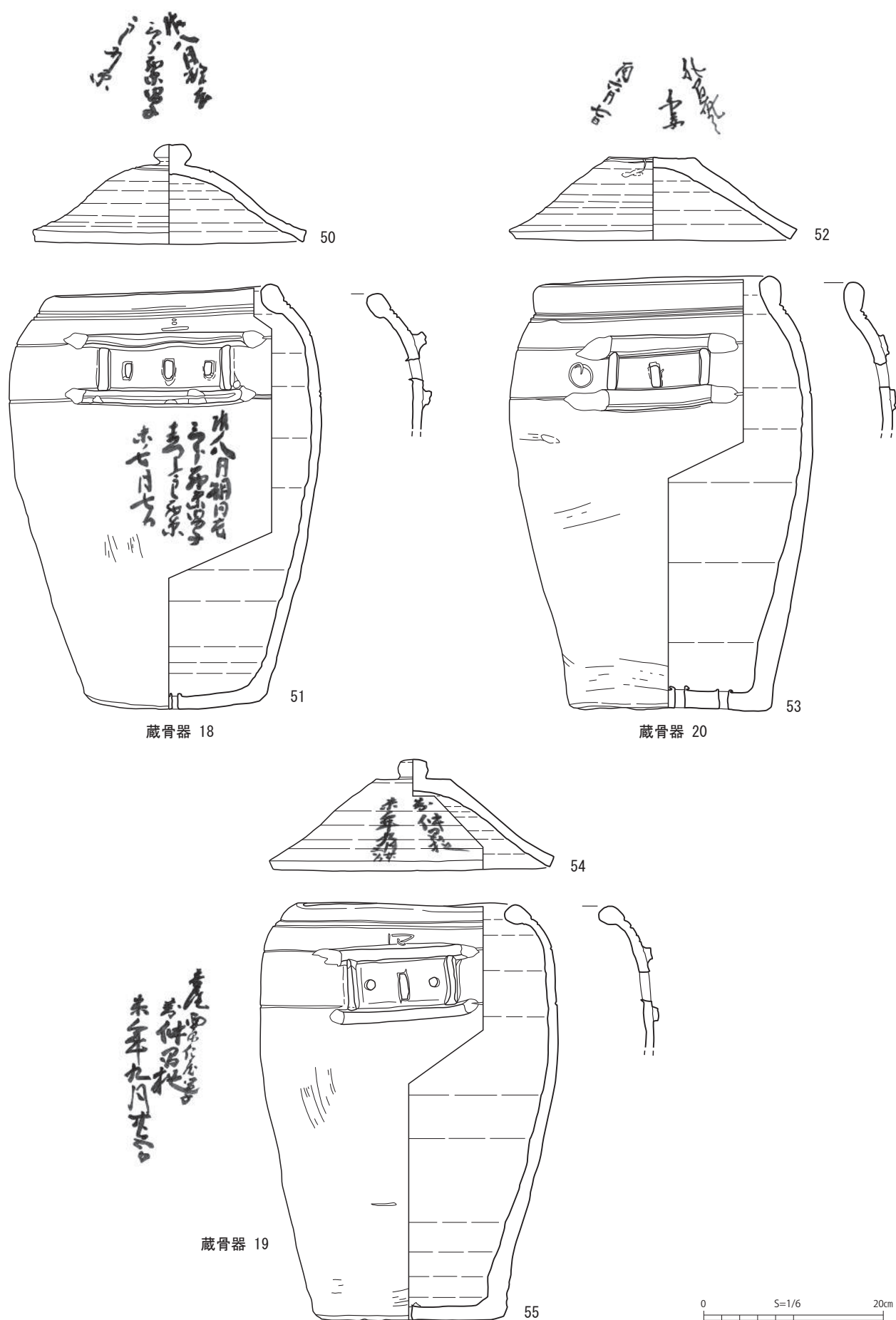


第19図 004号墓出土遺物 6

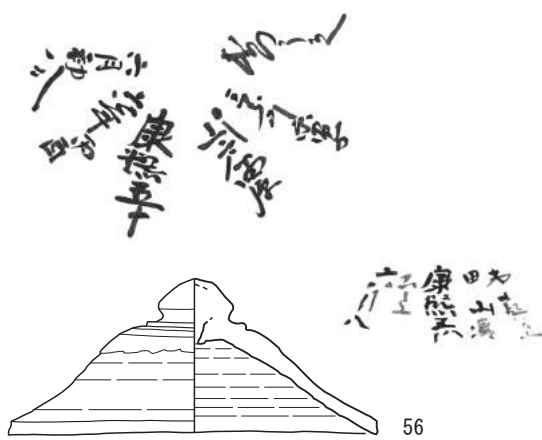
0 S=1/6 20cm



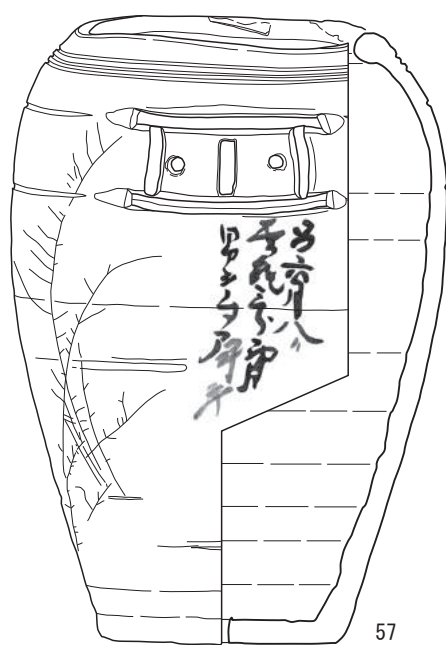
第20図 004号墓出土遺物 7



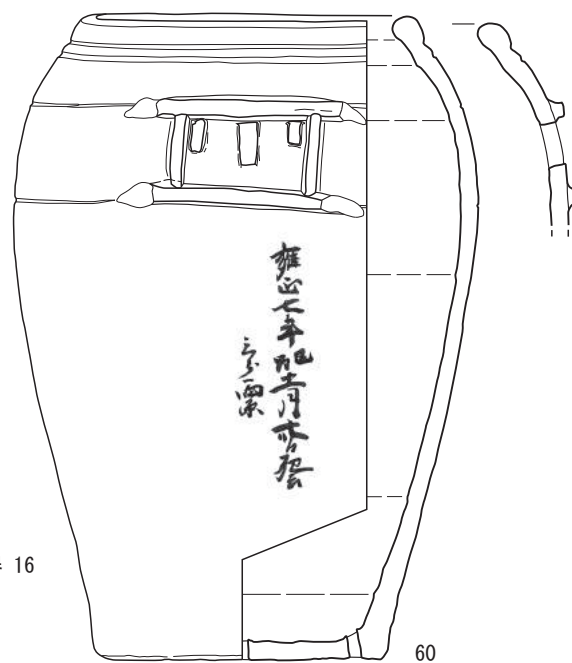
第21図 004号墓出土遺物 8



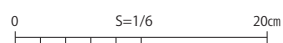
蔵骨器 14



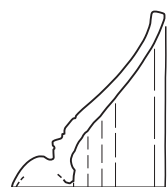
蔵骨器 15



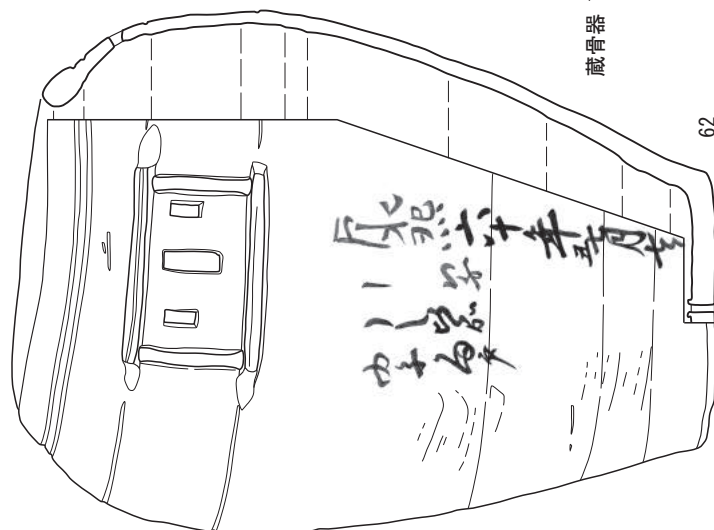
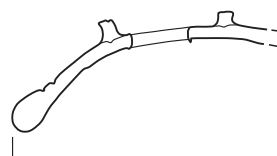
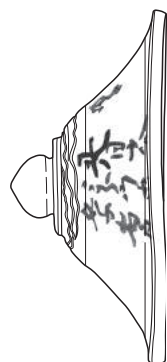
蔵骨器 16



永正十一年
 九月廿五日
 辰時
 故
 大工
 藤原
 氏
 墓
 所
 記

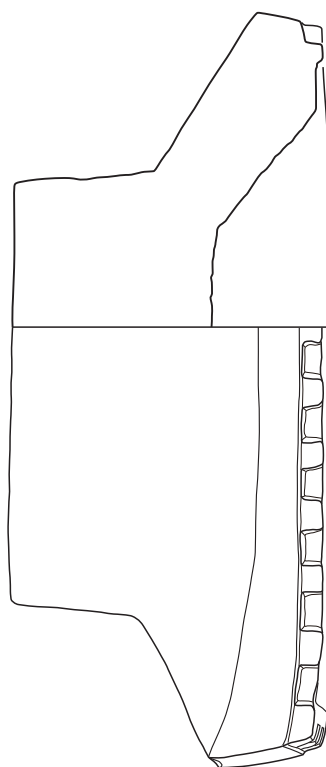


61

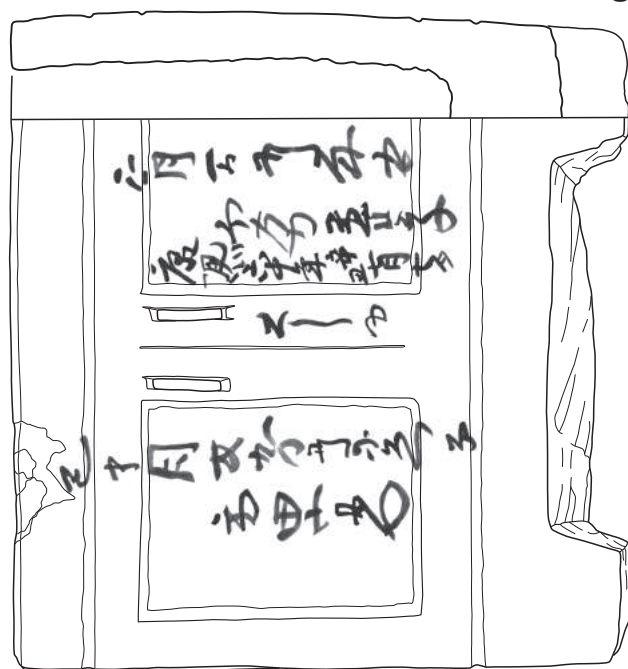


62

藏骨器 17

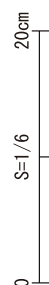


63

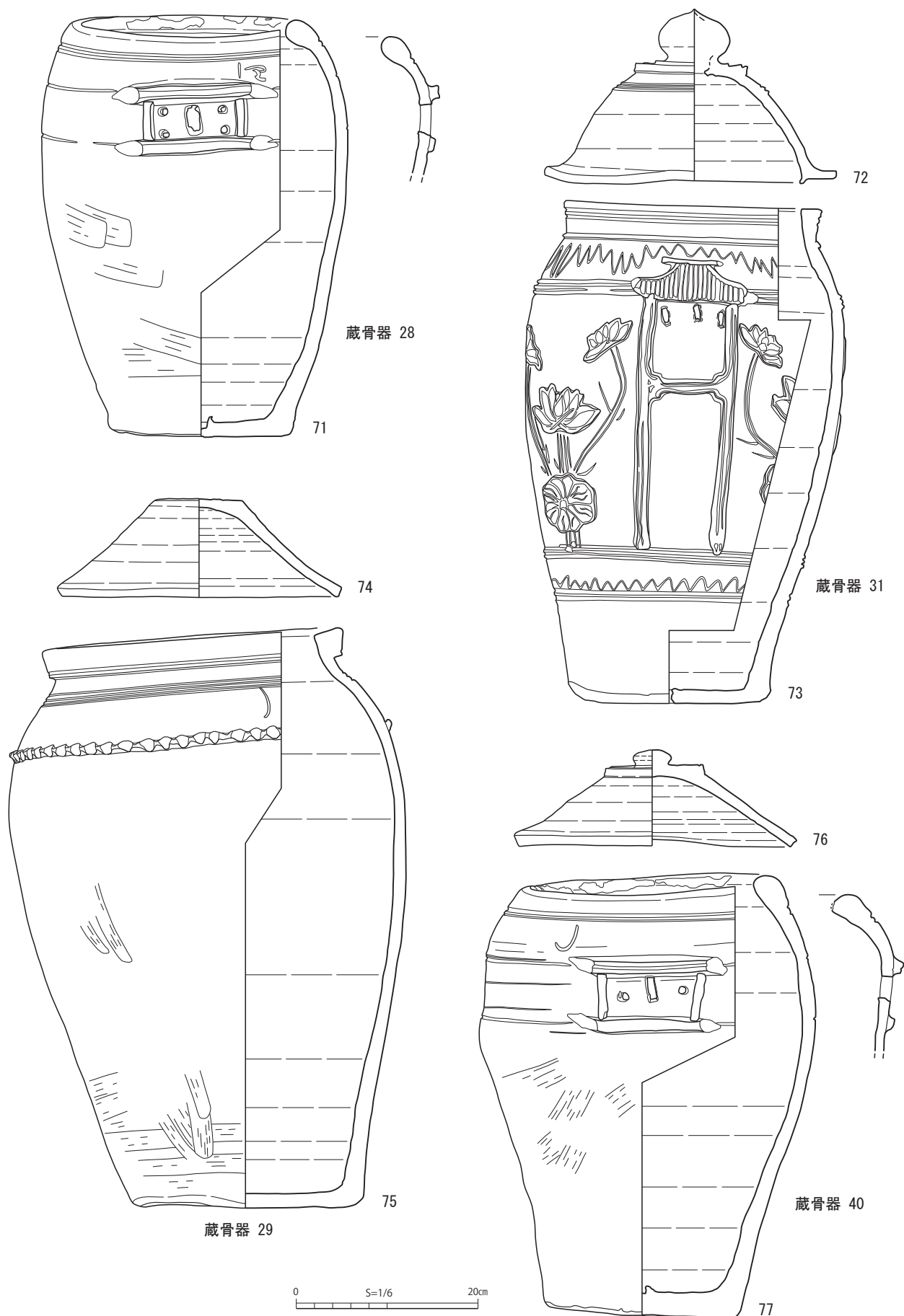


64

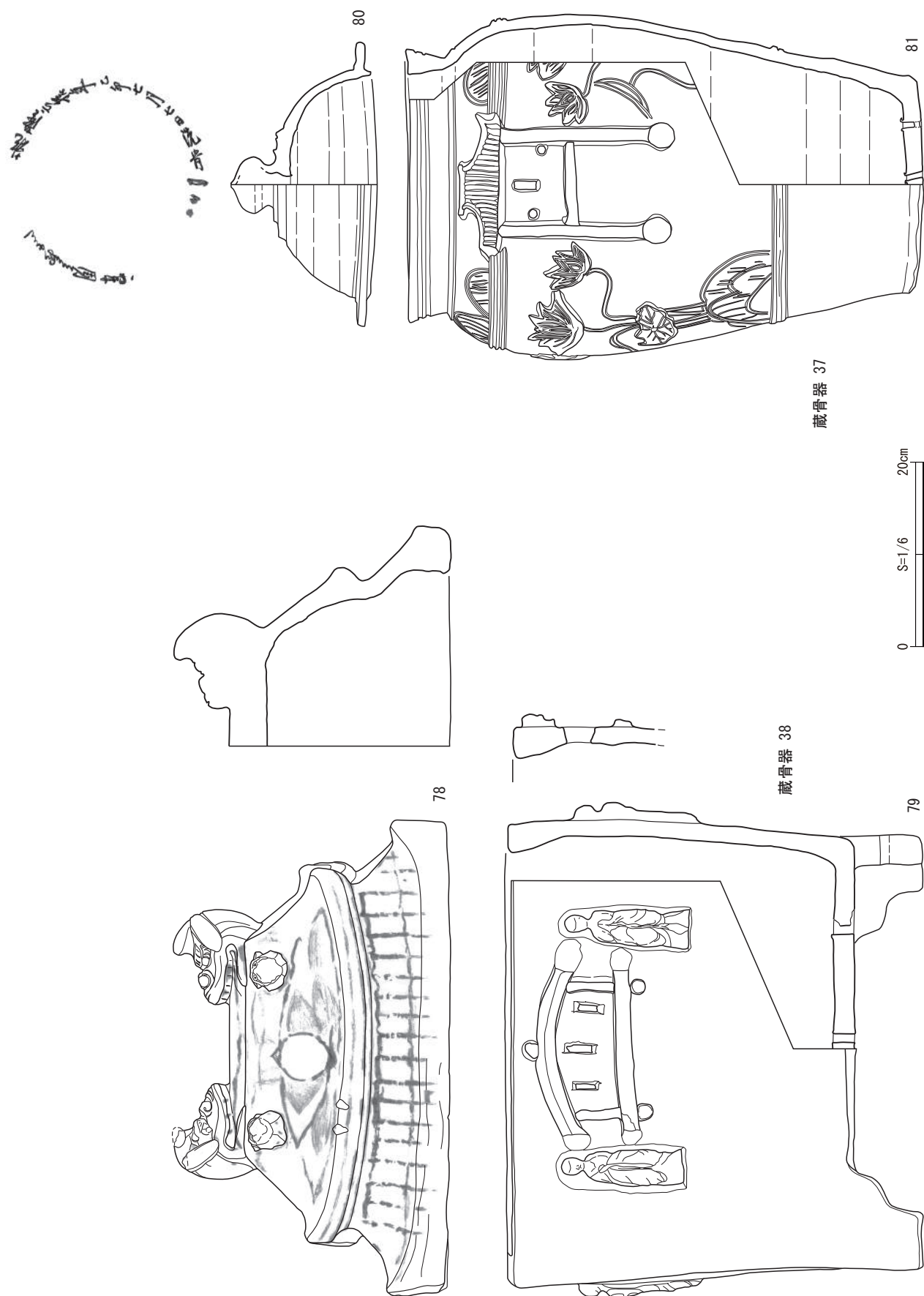
藏骨器 21

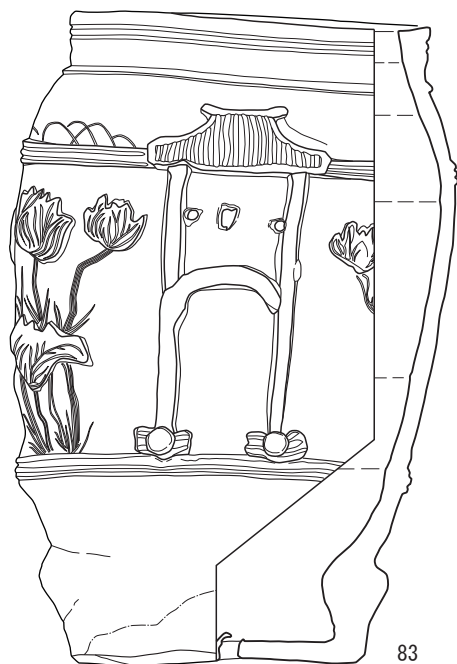
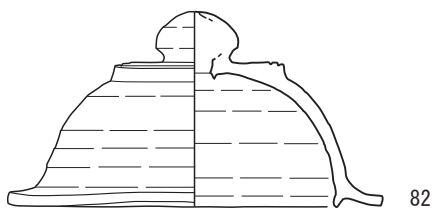


第23図 004号墓出土遺物 10

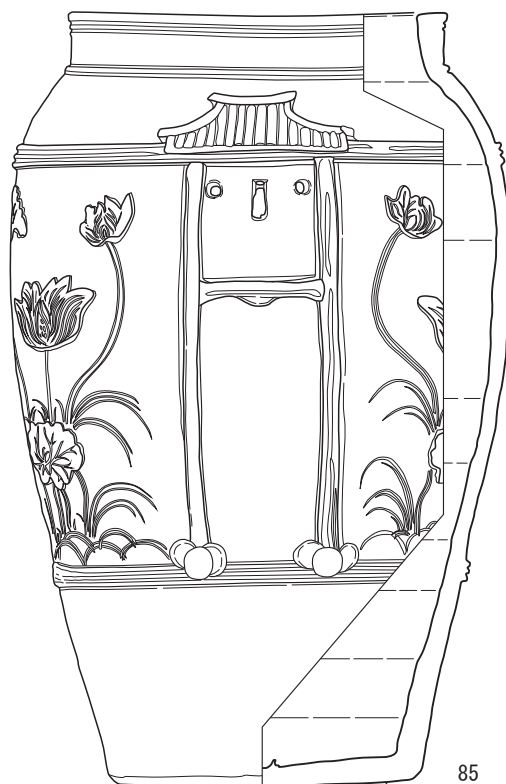
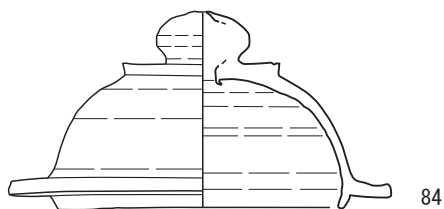


第26图 004号墓出土遗物 13

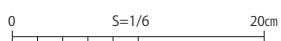


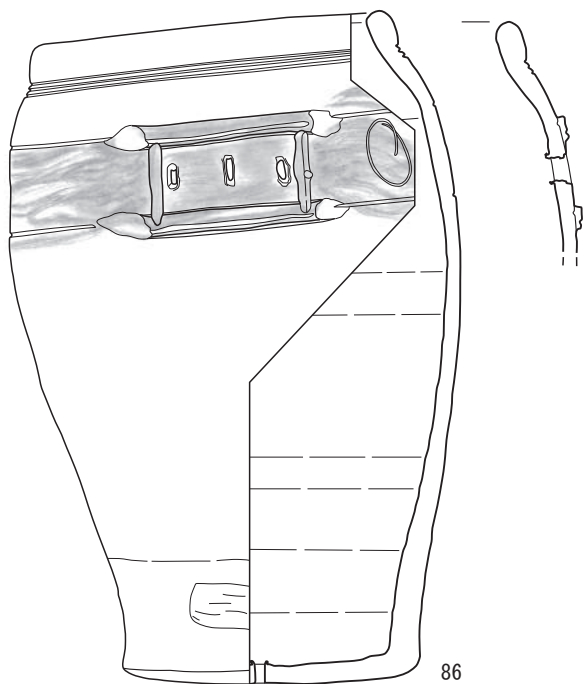


藏骨器 35

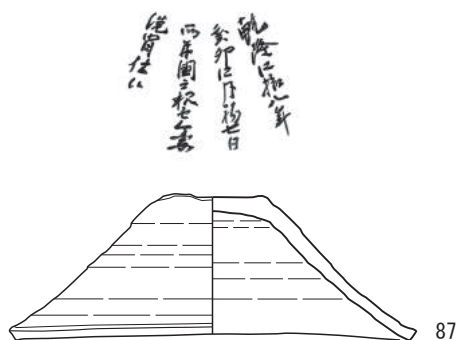


藏骨器 34





藏骨器 36

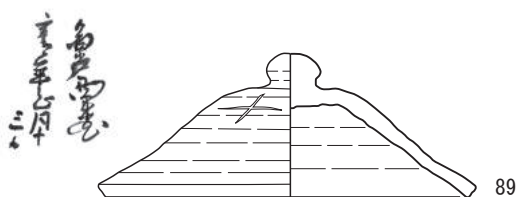


87

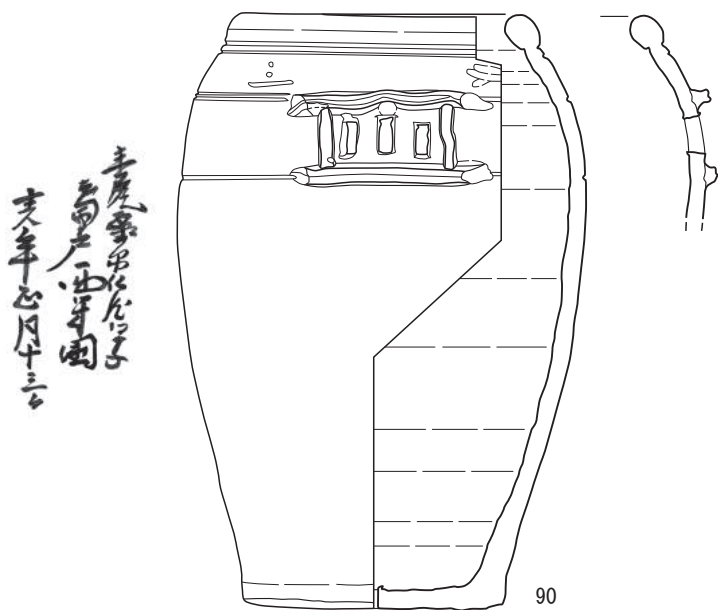


88

藏骨器 41



89



90

藏骨器 42

0 S=1/6 20cm

第9表 004号基蔵骨器(蓋)観察表(1)

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨 器番 号	図版番号	出土 地点	種類	つまみ/屋根形 状 接合部孔 つまみ台・圓線 鏝 かえり	つまみ台径 口径/棟長 内径/桁行長 器高/奥行長 体部高/器高	文様	調整痕	釉 薬	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
1	5	第14図24 図版42-24	墓室・ 奥棚	ボージャー形	扁平形 無孔 なし —	— 29.7 28.8 11.0 —	なし	つまみは扁平。端部は平坦。ロクロ成形後、外面上部は回転へう削り。内面は回転痕がやや明瞭に残る。	なし	あり	—	—	
2	6	第14図26 図版42-26	墓室・ 奥棚	ボージャー形	饅頭形 有孔 あり・1条 — —	8.6 30.5 29.5 13.1 10.2	体部全体にゆるやかな櫛描波状文	つまみ台は回転削り出し。端部は平坦。ロクロ成形後、外部は回転へう削り。内面は回転痕がやや明瞭に残る。	なし	あり	—	—	
3	7	第14図28 図版42-28	墓室・ 奥棚	ボージャー形	扁平形 無孔 なし・2条 — —	— 33.7 32.4 10.9 —	なし	体部上部に凹線が2条施される。ロクロ成形後、外部は回転へう削り。内面は回転痕がやや明瞭に残る。	なし	なし	—	—	
4	8	第15図30 図版42-30	墓室・ 奥棚	ボージャー形	宝珠形 有孔 あり・1条 — —	7.4 29.3 28.5 17.7 10.5	沈線による牡丹唐草を施文	つまみ台は回転削り出し。端部は平坦。ロクロ成形後、外面は丁寧なナデ調整。	なし	なし	—	—	
5	1	第16図32 図版43-32	墓室・ 奥棚	ボージャー形	饅頭形 有孔 あり・1条 — —	7.9 31.3 31.0 11.7 7.8	体部全体にゆるやかな櫛描波状文	つまみ台は回転削り出し。端部は平坦。ロクロ成形後、外部は回転へう削り。内面は回転痕がやや明瞭に残る。	なし	あり	—	—	
6	3	第16図34 図版43-34	墓室・ 奥棚	ボージャー形	饅頭形 有孔 なし・なし — —	— 30.1 29.8 11.2 —	なし	つまみ台なし。端部は平坦。ロクロ成形後、外面上部は回転へう削り。内面は回転痕がやや明瞭に残る。	なし	あり	—	—	
7	2	第16図36 図版43-36	墓室・ 奥棚	家形(石製)	入母屋形	30.8 56.5 42.0 23.5	正面および左右の軒に垂木 の表現。背面に軒はみられ ない。	外面は研磨が施される。内面は縁やかえりも丁寧に削られているが、その他の部分では削り跡が明瞭に残る。石材の窪みの部分を土または漆喰で埋める。	なし	なし	—	—	サンゴ石製
8	9	第17図38 図版44-38	墓室・ 奥棚	家形(石製)	入母屋形	— 35.5 64.5 52.5 28.2	正面および左右の軒に垂木 の表現。背面に軒はみられ ない。	内外面共に丁寧に研磨が施される。内面は縁やかえりも丁寧に削られている。石材の窪みの部分を土または漆喰で埋める。	なし	なし	—	—	サンゴ石製
9	4	第17図40 図版44-40	墓室・ 奥棚	ボージャー形	扁平形 無孔 なし・なし — —	— 32.5 31.7 11.4 —	なし	つまみ台なし。端部は平坦。ロクロ成形後、外面は回転へう削り。内面は回転痕がやや明瞭に残る。	なし	あり	—	—	
10	10	第18図42 図版45-42	墓室・ 奥棚	赤焼御殿形	寄棟形	— 35.2 51.3 37.5 25.2	大棟に1対の龕。正面及び背面の龕の下方に獅子頭を貼り付け。正面に大きく蓮華を描く。両側面および背面は雲文。軒を朱で彩色する。	型成形後、ナデによる調整が見られるが全体的に荒い。白化粧を施す。	なし	あり	—	—	
11	11	第20図44 図版46-44	墓室・ 右棚	ボージャー形	宝珠形 有孔 あり・1条 — —	7.8 30.0 29.5 13.2 9.5	なし	つまみは宝珠。端部は平坦。ロクロ成形後、外面上部は回転へう削り。内面は回転痕がやや明瞭に残る。	なし	あり	—	—	
12	13	第20図46 図版46-46	墓室・ 右棚	ボージャー形	なし 無孔 あり2段・4条 — —	6.7 36.7 36.2 10.9 —	なし	つまみ台は回転削り出し。端部は平坦。ロクロ成形後、外面上部に明瞭な回転へう削りの痕がみられる。	なし	なし	—	—	
13	12	第20図48 図版46-48	墓室・ 右棚	ボージャー形	宝珠形 有孔 なし・2条 — —	— 29.2 28.1 12.1 —	なし	つまみ台なし。つまみ直下と体部上部にそれぞれ沈線が1条施す。端部は平坦。ロクロ成形後、外面上部は回転へう削り。内面は回転痕が明瞭に残る。	なし	なし	—	—	
14	18	第21図50 図版47-50	墓室・ 左棚	ボージャー形	扁平形 無孔 なし・1条 — —	— 30.5 29.8 11.1 —	なし	つまみ台なし。体部上部に沈線を1条施す。端部は平坦。ロクロ成形後、外面上部は回転へう削り。内面は回転痕が明瞭に残る。	なし	あり	—	—	
15	20	第21図52 図版47-52	墓室・ 左棚	ボージャー形	なし 無孔 なし・なし — —	9.7 32.0 30.5 9.2 —	なし	つまみとつまみ台のない笠形。端部は平坦。ロクロ成形後、外面上部は回転へう削り。蓋上部の調整は粗い。内面は回転痕がやや残る。	なし	あり	—	—	
16	19	第21図54 図版47-54	墓室・ 左棚	ボージャー形	饅頭形 無孔 なし・なし — —	8.1 31.6 30.7 12.4 10.2	なし	つまみ台なし。端部は平坦。ロクロ成形後、外面は回転へう削り。内面は回転痕が明瞭に残る。	なし	あり	—	—	

第10表 004号墓蔵骨器(蓋)観察表(2)

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	つまみ/屋根形状 接合部孔 つまみ台・圍繞 鐔 かえり	つまみ台径 口径/棟長 内径/桁行長 器高/渠行長 体部高/器高	文様	調整痕	釉薬	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
17	15	第22図56 図版48-56	墓室・左棚	ボージャー形	宝珠形 有孔 あり・なし — —	7.8 28.9 29.0 12.4 9.9	なし	つまみ台なし。端部は平坦。ロクロ成形後、外面上部は回転ヘラ削り。内面は回転痕が明瞭に残る。	なし	あり	康熙56 (1717)		
18	16	第22図59 図版48-59	墓室・左棚	ボージャー形	饅頭形 有孔 あり・なし — —	7.0 28.8 28.1 11.7 9.3	なし	つまみ台は回転削り出し。端部は平坦。ロクロ成形後、外部は回転ヘラ削り。内面は回転痕がやや明瞭に残る。	なし	あり	雍正7 (1729)	—	
19	17	第23図61 図版49-61	墓室・左棚	ボージャー形	宝珠形 有孔 あり・1条 — —	7.2 27.7 27.5 12.1 8.7	体部上部に沈線で波状文を施す。	つまみ台は回転削り出し。端部は平坦。ロクロ成形後、外部は回転ヘラ削り。内面は回転痕がやや明瞭に残る。	なし	あり	—	—	
20	21	第23図63 図版49-63	墓室・左棚	冢形(石製)	入母屋形	33.2 59.0 41.5 24.8	正面および左右の軒に垂木の表現。背面に軒はみられない。	外面は研磨が施される。内面は縁やかえりも丁寧に削られているが、その他の部分では削り跡が明瞭に残る。石材の窪みの部分を土または漆喰で埋める。	なし	なし	—	—	
21	23	第24図65 図版50-65	墓室・シルヒラシ	マンガン軸甕形	扁平形 有孔 1段・2条 3.4 0.8	11.5 29.6 21.8 16.6 12.5	なし	つまみ台削り出し。鐔は上へ反り、鐔端部はやや平坦。かえりも丁寧に作られる。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	—	—	
22	27	第24図67 図版50-67	墓室・シルヒラシ	マンガン軸甕形	宝珠形 有孔 1段・1条 3.0 0.8	11.2 27.3 20.9 13.2 9.0	なし	つまみ台削り出し。鐔は上へ反り、鐔端部は平坦。かえりも丁寧に作られる。	マンガン釉を表面に薄く施釉する。口唇部はほぼ露胎する。	なし	—	—	
23	24	第24図69 図版50-69	墓室・シルヒラシ	ボージャー形	饅頭形 有孔 なし・1条 — —	— 29.7 29.1 13.5 —	なし	つまみ台なし。体部上部に沈線を1条施す。端部は平坦。ロクロ成形後、外面上部は回転ヘラ削り。内面は回転痕が明瞭に残る。	なし	あり	—	—	
24	31	第25図72 図版51-72	墓室・シルヒラシ	マンガン軸甕形	宝珠形 有孔 3段・3条 ? 0.5	12.3 31.9 24.2 19.1 12.7	なし	つまみ台は回転削り出し。鐔はやや歪むが端部とかえり端部は平坦。全体的に丁寧に作られる。	マンガン釉を表面全体に刷毛で施釉する。	なし	—	—	
25	29	第25図74 図版51-74	墓室・シルヒラシ	ボージャー形	なし 無孔 なし・なし — —	9.4 31.1 30.2 10.9 —	なし	つまみとつまみ台のない笠形。端部は平坦。ロクロ成形後、外面は回転ヘラ削り。内面は回転痕がやや明瞭に残る。	なし	なし	—	—	
26	40	第25図76 図版51-76	墓室・シルヒラシ	ボージャー形	扁平形 無孔 あり・1条 — —	10.6 30.9 29.8 10.7 8.9	なし	つまみ台は回転削り出し。鐔端部は中央が窪む。ロクロ成形後、外部は回転ヘラ削り。内面は回転痕が明瞭に残る。	なし	なし	—	—	
27	38	第26図78 図版52-78	墓室・シルヒラシ	赤焼御殿形	寄棟形 2層? — —	— 29.0 51.2 36.2 30.0	大棟に1対の龕。正面及び背面の龕の下に獅子頭を貼り付け。正面に大きく蓮華を描く。屋根を2層で表現しており、下段の屋根に黒線で瓦を描画。正面軒に黒線でかろうじて垂木の表現が見える。	型成形後、外面はナデ調整がみられるが全体的に粗い。白化粧を施す。	なし	なし	—	—	
28	37	第26図80 図版52-80	墓室・シルヒラシ	マンガン軸甕形	宝珠形 有孔 2段・1条 3.1 0.6	10.4 30.5 24.1 15.8 10.9	なし	つまみ台は回転削り出し。鐔はやや平坦で端部はやや丸い。かえりの端部は平坦。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	あり	—	乾隆60 (1795)	
29	35	第27図82 図版52-82	墓室・シルヒラシ	マンガン軸甕形	宝珠形 有孔 1段・2条 3.0 0.8	13.4 29.2 22.5 15.5 11.4	なし	つまみ台は回転削り出し。鐔はやや下がる。鐔端部およびかえりの端部は平坦。ロクロ成形後、外面の上部回転ヘラ削りで調整が荒い。内面は丁寧に調整される。	マンガン釉を表面全体に刷毛で施釉する。	なし	—	—	
30	34	第27図84 図版53-84	墓室・シルヒラシ	マンガン軸甕形	饅頭形 有孔 1段・1条 3.2 0.6	12.3 30.1 22.6 15.5 11.4	なし	つまみ台は回転削り出し。鐔は平坦で端部およびかえりの幹部も平坦。全体的に丁寧に作られる。	マンガン釉を表面全体に薄く刷毛で施釉する。	あり	嘉慶1 (1796)	嘉慶3 (1798)	
31	41	第28図87 図版53-87	墓室・シルヒラシ	ボージャー形	なし 無孔 なし・なし — —	— 7.9 32.3 31.4 11.0	なし	つまみとつまみ台のない笠形。端部は平坦。ロクロ成形後、外面は回転ヘラ削り。体部上部の調整は荒い。内面は回転痕がやや明瞭に残る。	なし	あり	—	乾隆48 (1783)	
32	42	第28図89 図版53-89	墓室・シルヒラシ	ボージャー形	扁平形 無孔 なし・なし — —	— 30.0 28.6 11.3 8.6	なし	つまみ台はない。鐔端部の中央が深く窪む。ロクロ成形後、外部は回転ヘラ削り。	なし	あり	—	—	窯印あり

第11表 004号墓蔵骨器(身)観察表(1)

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	大きさ(cm) ※	窓枠/屋門	窓数/形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯印	銘書	死去年	洗骨年	備考
1	5	第14図25 図版42-25	墓室・奥棚	ポージャー形	22.6 35.5 19.3 50.3	平葺形	3個 1方2円	①図2 ②図1 ③図1 ④-	なし	口縁部は玉縁状で内傾。回転成形後、ナデ調整とヘラ削り。底部から約4.5cm上に1条の沈線あり。焼成不良により器形にやや歪みがみられる。	5個/ 円形 (2個は未貴通)	なし	なし	あり	-	-	蓋(第14図24)に銘書あり
2	6	第14図27 図版42-27	墓室・奥棚	ポージャー形	21.0 34.7 19.7 46.1	唐破風形	5個 1方4円	①図3 ②図1 ③図1 ④-	なし	口縁部は玉縁状で内傾。回転成形後、ナデ調整とヘラ削り。焼成不良により口縁部にやや歪みが見られる。	8個/ 円形 (1個は未貴通)	なし	なし	あり	-	-	蓋(第14図24)に銘書あり
3	7	第14図29 図版42-29	墓室・奥棚	ポージャー形	30.0 42.4 23.4 57.8	平葺形	3個 1方2方	①図3 ②図1 ③図1 ④-	なし	口縁部は玉縁状で内傾。回転成形後、ナデ調整とヘラ削り。	9個/ 円形	なし	あり	あり	-	-	窓底の右上方に窯印あり。
4	8	第15図31 図版42-31	墓室・奥棚	ポージャー形	23.3 35.8 21.7 49.5	寄棟形	(5個) 1方4円	①図1 ②図1 ③図1 ④-	窓は寄棟形で大棟・降棟・屋根に細い沈線で瓦を表現。柱や下段の窓枠には鋸歯状の文様。窓枠の左右に沈線で蓮華文を施す。蓮葉下方に波文。	口縁部は小振りの玉縁状で直口。回転成形後、ナデ調整とヘラ削り。	7個/ 円形 (3個は未貴通)	なし	あり	あり	-	-	背面肩部に窯印あり。
5	1	第16図33 図版43-33	墓室・奥棚	ポージャー形	23.6 34.3 19.0 49.6	唐破風形	3個 1方2方	①図2 ②図1 ③図1 ④-	窓枠の左に沈線で蓮華文を施す。	口縁部は玉縁状で内傾。回転成形後、ナデ調整とヘラ削り。	5個/ 円形 (1個は未貴通)	なし	なし	なし	-	-	蓋(第16図32)に銘書あり
6	3	第16図35 図版43-35	墓室・奥棚	ポージャー形	24.5 37.0 19.8 50.8	唐破風形	3個 1方2方	①図3 ②図1 ③図1~2 ④-	なし	口縁部は玉縁状で内傾。回転成形後、ナデ調整とヘラ削り。	5個/ 円形 (1個は未貴通)	なし	あり	なし	-	-	蓋(第16図34)に銘書あり窓底上方に窯印あり。
7	2	第16図37 図版43-37	墓室・奥棚	家形(石製)	48.2×34.5 47.5×34.5 42.9	-	2個 2方	-	正面中央に方形の掘り込みが2箇所あり、その間を縦に一条の線彫り。正面左右に線彫りによる枠。左右枠の上下に凹状の横位の削りあり。	外面は研磨が施されるが内面は削り出しのまま。脚部内側に削り出しのあとが明瞭にみられる。石材の窪みの部分を土または漆喰で埋める。	-	なし	なし	あり	-	-	
8	9	第17図39 図版44-39	墓室・奥棚	家形(石製)	56.5×45.0 56.5×44.5 57.9	-	3個方形	-	正面中央に方形の掘り込みが3箇所ある。正面左右に線彫りによる枠があり、その上下に凹状の横位の削りあり。	外面は研磨が施されるが内面は削り出しのまま。脚部内側に削り出しのあとが明瞭にみられる。	-	なし	なし	あり	-	-	
9	4	第17図41 図版44-41	墓室・奥棚	ポージャー形	29.5 43.0 22.5 56.8	平葺形	3個 1方2方	①図3 ②図1 ③図1 ④-	なし	口縁部は玉縁状で内傾。回転成形後、ナデ調整とヘラ削り。	1個/ 円形	なし	なし	あり	-	-	蓋(第17図40)に銘書あり
10	10	第19図43 図版45-43	墓室・奥棚	赤焼御殿形	47.6×33.0 44.5×28.5 43.0	唐破風形	3個 1方2方	-	正面と側面は貼付の法師。正面、法師の足元および窓枠下方に蓮華文を彩色で描き、左右および下方を鋸歯状の文様を連続させて縁取る。背面、大きな蓮華文および草文を彩色で描く。側面、法師の左右および足元、その下方に蓮華文を描く。またスキの葉のような草文も見られる。	成形後、丁寧にナデ調整を行い、白化粧をする。蓋との接触面は露胎。全体的に丁寧につくられる。	13個/ 円形	外面白化粧をした後に、朱、黒、青を用いて施釉する。	なし	なし	-	-	蓋(第18図42)に銘書あり
11	11	第20図45 図版46-45	墓室・右棚	ポージャー形	22.5 34.6 18.7 49.8	唐破風形	3個 1方2方	①図2 ②図1 ③図1 ④-	窓枠下方に沈線による文様が見られるが、掘りは浅く、模様も一部分のみでどのような文様であったかが不明。	口縁部は玉縁状で内傾。回転成形後、ナデ調整とヘラ削り。胴部に火ぶくれや付着物が見られる。底面成形は粗く平坦ではない。	5個/ 円形	なし	あり	なし	-	-	蓋(第20図44)に銘書あり窓底の上方に窯印あり。
12	13	第20図47 図版46-47	墓室・右棚	ポージャー形	32.0 43.2 22.9 58.1	平葺形	3個 1方2円	①図3 ②図1 ③図1 ④-	なし	口縁部は玉縁状で内傾。回転成形後、ナデ調整とヘラ削り。	7個/ 円形	なし	なし	なし	-	-	
13	12	第20図49 図版46-49	墓室・右棚	ポージャー形	27.0 41.4 23.3 55.7	平葺形	3個 1方2方	①図2 ②図1~2 ③図1 ④-	なし	口縁部は玉縁状で直口。ロクロ成形後、ナデ調整とヘラ削り。内面は回転痕が残る。	5個/ 円形	なし	なし	あり	雍正13 (1735)		蓋(第20図48)に銘書あり
14	18	第21図51 図版47-51	墓室・左棚	ポージャー形	24.2 34.5 18.5 47.3	唐破風形	3個 1方2方	①図3 ②図1 ③図1~2 ④-	なし	口縁部は玉縁状で内傾。回転成形後、ナデ調整とヘラ削り。	5個/ 円形 (3個は未貴通)	なし	あり	あり	-	-	蓋(第21図50)に銘書あり窓底の上方に窯印あり。
15	20	第21図53 図版47-53	墓室・左棚	ポージャー形	25.4 33.6 21.5 48.4	平葺形	1個 (方形)	①図3 ②図1 ③図1 ④-	なし	口縁部は玉縁状で直口。ロクロ成形後、ナデ調整とヘラ削り。内面は回転痕が残る。	5個/ 半円形	なし	あり	なし	-	-	蓋(第21図52)に銘書あり窓底の上方に窯印あり。
16	19	第21図55 図版47-55	墓室・左棚	ポージャー形	24.1 32.9 20.1 46.0	平葺形	3個 1方2円	①図2 ②図1 ③図1 ④-	なし	口縁部は玉縁状で内傾。回転成形後、ナデ調整とヘラ削り。窓枠が第2・3横帯に対してやや傾く。	5個/ 円形	なし	あり	あり	-	-	蓋(第21図54)に銘書あり窓底の上方に窯印あり。
17	15	第22図57 図版47-57	墓室・左棚	ポージャー形	22.2 34.4 18.5 48.6	平葺形	3個 1方2円	①図3 ②図1 ③図1 ④-	胴部左側に草文?	口縁部は玉縁状で内傾。回転成形後、ナデ調整とヘラ削り。口唇部の剥離痕は形状から珊瑚枝の痕だと考えられる。全体的に丁寧に作り。	4個/ 円形 (1個は未貴通)	なし	なし	あり	-	-	蓋(第22図56)に銘書あり
18	14	第22図58 図版48-58	墓室・左棚	転用	- 21.4 13.4 (29.3)	-	-	-	なし	頸部直下に沈線で2条の圈線がある。回転成形後、ナデ調整とヘラ削り。胴部に付着物がつく。頸部より上方を打削。	-	なし	なし	なし	-	-	

※大きさ(cm)は、ポージャー形・甕形は、上から口径/胴径/底径・器高。家形・御殿形は、上部(長軸×短軸)/底部(長軸×短軸)/器高。

第12表 004号墓蔵骨器(身)観察表(2)

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	大きさ(cm) ※	窓枠/屋門	窓数/形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯印	銘書	死去年	洗骨年	備考
19	16	第22図60 図版48-60	墓室・左棚	ボージャー形	25.0 36.6 21.6 51.1	平葺形	3個 1方2方	①図2 ②図1 ③図1 ④-	なし	口縁部は玉縁状で内傾。回転成形後、ナデ調整とヘラ削り。	5個/ 円形	なし	なし	あり	雍正7 (1729)	-	蓋(第22図59)に銘書あり
20	17	第23図62 図版49-62	墓室・左棚	ボージャー形	25.0 41.3 20.8 53.3	平葺形	3個 1方2方	①図2 ②図1 ③図1 ④-	なし	口縁部は玉縁状で内傾。回転成形後、ナデ調整とヘラ削り。全体的に丁寧につくられる。	5個/ 円形 (3個は未貫通)	なし	あり	あり	康熙60 (1721)		蓋(第23図61)に銘書あり窓底の上方に窯印あり。
21	21	第23図64 図版49-64	墓室・左棚	家形(石製)	51.2×31.7 50.0×31.4 48.6	-	2個 2方	-	正面中央に方形の掘り込みが2箇所あり、その間を縦に一条の線彫り。正面左右に線彫りによる枠。左右枠の上下に凹状の横位の削りあり。	外面は研磨が施されるが内面は削り出しのまま。脚部内側に削り出しの跡が明瞭にみられる。石材の窪みの部分を土または漆喰で埋める。	-	なし	なし	あり	康熙60 (1721)		
22	23	第24図66 図版50-66	墓室・シルヒラシ	マンガン釉壺形	27.5 33.8 21.5 51.7	瓦屋形	3個 1方2方	①図2 ②図1 ③図2 ④△3	胴部に蓮華文の貼り付け。蓋部分は線彫り。胴下部に波状沈線文が1条みられる。	直口口縁で、口唇部は平坦。口口成形後、内外面共に丁寧な調整。	15個/ 5円・6半円・43 日月 (4個は未貫通)	マンガン釉を表面全体に刷毛で施釉する。	なし	なし	-	-	
23	27	第24図68 図版50-68	墓室・シルヒラシ	マンガン釉壺形	27.4 35.2 21.3 52.6	瓦屋形	3個 1方2円	①図3 ②図1 ③△3 ④△3	胴部に蓮華文の貼り付け。蓋部分は線彫り。屋門柱と横帯4が一体化する。	直口口縁で、口唇部は平坦。口口成形後、胴部から底部にかけてヘラ削り。ナデ調整。焼成不良により器形に歪みがみられる。	5個/ 円形	マンガン釉を表面全体に刷毛で施釉する。銘書部分は露胎。	なし	なし	-	-	
24	24	第24図70 図版50-70	墓室・シルヒラシ	ボージャー形	25.0 36.0 21.0 52.2	唐破風形	3個 1方2円	①図2 ②図1 ③図1 ④-	窓枠の両脇および下方に沈線で蓮華文。窓枠下に線彫りで「春」の文字。	口縁部は玉縁状で内傾。回転成形後、ナデ調整とヘラ削り。透かし窓を焼成後に作成したとみられ、3つとも方形を意識しているが、中央はいびつな方形で、左右の窓は円形となっている。	4個/ 円形	なし	あり	なし	-	-	蓋(第24図69)に銘書あり窓の底右側に窯印あり。
25	28	第25図71 図版51-71	墓室・シルヒラシ	ボージャー形	23.5 33.5 18.8 45.7	平葺形	5個 1方4円	①図2 ②図1 ③図1 ④-	なし	口縁部は玉縁状で内傾。回転成形後、ナデ調整とヘラ削り。口唇部の剥離痕は形状から珊瑚枝の痕だと考えられる。全体的に丁寧なつくり。	1個/ 円形 (未貫通)	なし	あり	なし	-	-	窓の底右側に窯印あり。
26	31	第25図73 図版51-73	墓室・シルヒラシ	マンガン釉壺形	27.7 34.7 19.0 54.2	瓦屋形	3個 3方	①図2 ②△1 ③△3 ④△3	肩部文様に波状沈線文。胴部に蓮華文貼り付け。蓋部分は沈線。胴下部文様帯に波状沈線文を1条。屋門に玉飾りはみられない。	直口口縁。口唇部は平坦。口口成形後、胴部から底部にかけてヘラ削り。ナデ調整。焼成不良により器形に歪みがみられる。	4個(三日月)	マンガン釉を表面全体に刷毛で施釉する。	なし	なし	-	-	
27	29	第25図75 図版51-75	墓室・シルヒラシ	転用	32.0 43.3 23.6 63.5	-	-	-	肩部に粘土紐の貼り付けによる縄目が1条。頸部に3条の沈線が通る。	口口成形後、外面ナデ調整および削り調整。底部付近に横位の削り調整。胴部および底部付近に縦位の削り調整がみられる。	-	なし	あり	なし	-	-	頸部沈線直下に窯印あり。
28	40	第25図77 図版51-77	墓室・シルヒラシ	ボージャー形	26.0 36.6 20.3 48.5	平葺形	3個 1方2円	①図2 ②図1 ③図1 ④-	なし	口縁部は玉縁状で内傾。回転成形後、ナデ調整と胴部ヘラ削り。口唇部の剥離痕は形状から珊瑚枝の痕だと考えられる。全体的に丁寧なつくり。	5個/ 円形 (すべて未貫通)	なし	あり	なし	-	-	窓の底左側に窯印あり。
29	38	第26図79 図版52-79	墓室・シルヒラシ	赤焼御殿形	50.0×35.7 46.7×29.2 45.2	平葺形	3個 3方	-	正面中央上部に平葺形の窓枠。屋根上と柱下にそれぞれ玉飾りを貼り付け。窓枠の両脇に貼り付けの法師。両側面にはそれぞれ中央に貼り付けの法師がみられる。背面に蓮華を描く。	型成形後、ナデ調整を施すが器面はやや粗い。全体的に白化粧を施したみられるが、正面・側面は剥離し、背面にその痕跡が残る。蓋との接合面は露胎する。	9個/ 円形	外面白化粧を施す。	なし	なし	-	-	
30	37	第26図81 図版52-81	墓室・シルヒラシ	マンガン釉壺形	29.0 36.7 22.1 56.2	瓦屋形	3個 1方2円	①図2 ②△1 ③△3 ④△2	肩部文様帯に沈線で蓮葉文。胴部に蓮華文の貼り付け。蓋部分は沈線。屋根上に玉飾りは見られないが、柱下に玉飾りあり。柱は横帯4に接触しない。	口縁部はゆるい外反。口唇部は中央が浅く窪む。口口成形後、ナデ調整およびヘラ削り。横帯4下方は露胎となる。	11個/円形 (6個は未貫通)	マンガン釉を表面全体に施釉するが、口唇部・胴下部・屋門内は露胎。	なし	なし	-	-	蓋(第26図80)に銘書あり
31	35	第27図83 図版52-83	墓室・シルヒラシ	マンガン釉壺形	28.2 34.5 21.8 50.5	瓦屋形	3個 1方2円	①図2 ②△1 ③△3 ④△3	肩部文様帯の一部に波状文。胴部に蓮華文の貼り付け。蓋部分は沈線。屋門柱下の玉飾りは花卉形。	直口口縁。口唇部は内側へやや傾く。口口成形後、胴部から底部にかけてヘラ削り。ナデ調整。焼成不良により底部が大きく歪み、火ぶくれた部分が多くみられる。	5個/ 半円形 (1個は未貫通)	マンガン釉を全体的に施釉。ただし、屋門内は露胎。	なし	なし	-	-	
32	34	第27図85 図版53-85	墓室・シルヒラシ	マンガン釉壺形	29.5 39.5 23.2 61.2	瓦屋形	3個 1方2円	①図2 ②△1 ③△3 ④△3	胴部に蓮華文の貼り付け。蓋部分は線彫り。蓮華下に沈線で波文。屋門柱下の玉飾りは花卉形。	直口口縁で、口唇部は平坦。口口成形後、内外面共に丁寧な調整。	5個/円形 (全て未貫通)	マンガン釉を表面全体に施釉するが、口唇部・胴下部・屋門内は露胎。	なし	あり	-	-	蓋(第27図84)に銘書あり
33	36	第28図86 図版53-86	墓室・シルヒラシ	ボージャー形	27.0 35.0 22.1 53.3	平葺形	3個 1方2方	①図3 ②図1 ③図1 ④-	なし。	口縁部は玉縁状で直口。回転成形後、ナデ調整と底部ヘラ削り。焼成不良により器形に歪みがみられる。	5個/ 円形	なし	あり	あり	-	-	窓枠の右側に窯印あり。
34	41	第28図88 図版53-88	墓室・シルヒラシ	ボージャー形	25.8 34.5 21.8 49.5	平葺形	3個 1方2円	①図4 ②図1 ③図1 ④-	なし	口縁部は玉縁状で内傾。回転成形後、ナデ調整と胴部ヘラ削り。全体的に丁寧なつくり。	5個/ 半円形 (1個は未貫通)	なし	なし	あり	-	乾隆48 (1783)	蓋(第28図87)に銘書あり。
35	42	第28図90 図版53-90	墓室・シルヒラシ	ボージャー形	21.5 32.4 20.5 47.1	唐破風形	3個 1方2方	①図2 ②図1~2 ③図1 ④-	なし	口縁部は玉縁状でやや直口。回転成形後、ナデ調整と胴部ヘラ削り。全体的に丁寧なつくり。	1個/ 円形	なし	あり	あり	-	-	蓋(第28図89)に銘書あり。窓の底左上方に窯印あり。

※大きさ(cm)は、ボージャー形・壺形は、上から口径/胴径/底径/器高。家形・御殿形は、上部(長軸×短軸)/底部(長軸×短軸)/器高。

第30図96は沖縄産施釉陶器の瓶で墓庭北東隅より出土した。口縁部がラッパ状に開き、頸部で細くなり、胴部が膨らむ。脚部はハの字状に広がる。内面頸部途中から外面底部、高台内に白化粧と透明釉が施されている。外面はコバルトと鉛釉で色付けを行い、外面に線刻で圏線、牡丹文、葉文を施す。法量が口径4.8cm、器高21.55cm、底径8.7cmを測る。97は沖縄産施釉陶器の瓶でいわゆる渡名喜瓶である。内面口縁から外面底部、高台内に白化粧と鉛釉を施すが発色は悪い。胴部二箇所に2条の圏線を巡らしている。素地は橙色。同じく墓庭北東隅より出土。法量が口径2.9cm、器高15.65cm、底径4.7cmを測る。91や95の小杯と一括で出土した。

第30図98～100は沖縄産施釉陶器の煙管で雁首と吸い口である。98は雁首で法量が長さ3.4cm、火皿径1.5cm、ラウ接続部の径が1.5cmを測る。火皿内面から外面ラウ接合部まで透明釉を施している。外面胴部四箇所に紡錘形の文様が見られる。素地は灰白色を呈する。99は同じく沖縄産施釉陶器の雁首で法量が長さ2.9cm、火皿径1.3cm、ラウ接続部の径が長径1.3cm、短径1.2cmを測る。内面は火皿から外面ラウ接合部まで瑠璃釉を施釉する。素地は白色を呈する。沖縄産施釉陶器瓶96と一括で出土した。100は沖縄産施釉陶器の吸い口で法量が長さ2.8cm、吸口の径が0.5cm、ラウ接合部の径は長径1.3cmを測る。外面吸口からラウ接合部まへ瑠璃釉を施釉する。素地は白色を呈する。98及び100の煙管は小杯92や94と一括で出土した。第30図101は青銅製の雁首で、長さは法量が残存部で4.5cm、ラウ接合部の径0.9cmを測る。火皿を欠損。側面上部につなぎ目が見られる。上層のサンミデーを掘削中に出土。

第30図102は無文銭で墓口手前で見られた切石前方の墓庭造成土より出土した。無文銭は墓口前より4枚、シルヒラシから3枚の計7枚出土したが、残存状況の良いものを1点図化した。法量が輪外径1.05cm、郭外幅0.65cmを測る。輪厚0.1cmと薄い。

第30図103は青銅製の髪差で墓庭より出土した。法量が残存部で長さ8.75cm、カブが欠損する。断面は首部が六角形、竿部は方形となり、ムディ部のひねり痕が明瞭に見られる。104は青銅製のジューファーで匙状を呈し、竿部からほぼ90度曲がる。カブの横断面は緩やかなカーブを描き、背面に陵は見られない。法量が長さ14.8cm、厚さ0.4cm、重量12.5g。奥棚後列の蔵骨器4内から出土した。

第30図105～110は青銅製の指輪である。105及び106はマンガン釉甕形の蔵骨器44内より出土した。105は厚み0.1cmの薄い板状の指輪で法量は直径2.1cm、幅0.5cmを測る。重量1.6g。全体的に緑青が付着する。106も厚さ0.12cmの薄い板状の指輪である。法量が直径2.2cm、幅0.5cmを測る。重量1.3g。装飾と思われる丸い突起が見られるが、全体的に緑青が付着するためどのような装飾か不明。107は奥棚後列の蔵骨器4内から出土した。同蔵骨器からは計4点の青銅製の指輪が検出されたが、その内残存状況の良い1点を図化した。厚さ0.1cmの薄い板状の指輪で法量が直径1.8cm、幅0.4cm、重量1.6gを測る。緑青は少なく、光沢が残る。外面上下に圏線を巡らし、その間に縦の沈線を密に施す。つなぎ目が明瞭に残る。108～110の3点はシルヒラシで見られたマンガン釉甕形の蔵骨器33内より出土した。108は厚み0.1cmの薄い板状の指輪で、法量が直径2.1cm、幅0.4cm、重量1.5gを測る。109もほぼ同様の法量で、両者とも緑青が全体的に付着する。110は厚さ0.1cm、幅0.1cmの細い形状をしており、重量も0.5gと軽い。直径2.1cmを測る。

第30図111は104のジューファーおよび107の指輪が出土した同じ蔵骨器4より出土した。鉄製の小刀と見られ、刃部の先が欠損する。全体的に錆び膨れが著しい。法量が長さ10.8cm、幅2.3cm、厚さ1.1cm、重量40gを測る。

第30図112～114は鉄製釘である。112はシルヒラシから出土した。法量が残存部の長さ3.4cm、厚さ0.4cm、重量1.9gを測る。頭部を一方に折り曲げる。上部に錆の付着が目立つ。113および114はどちらも頭部

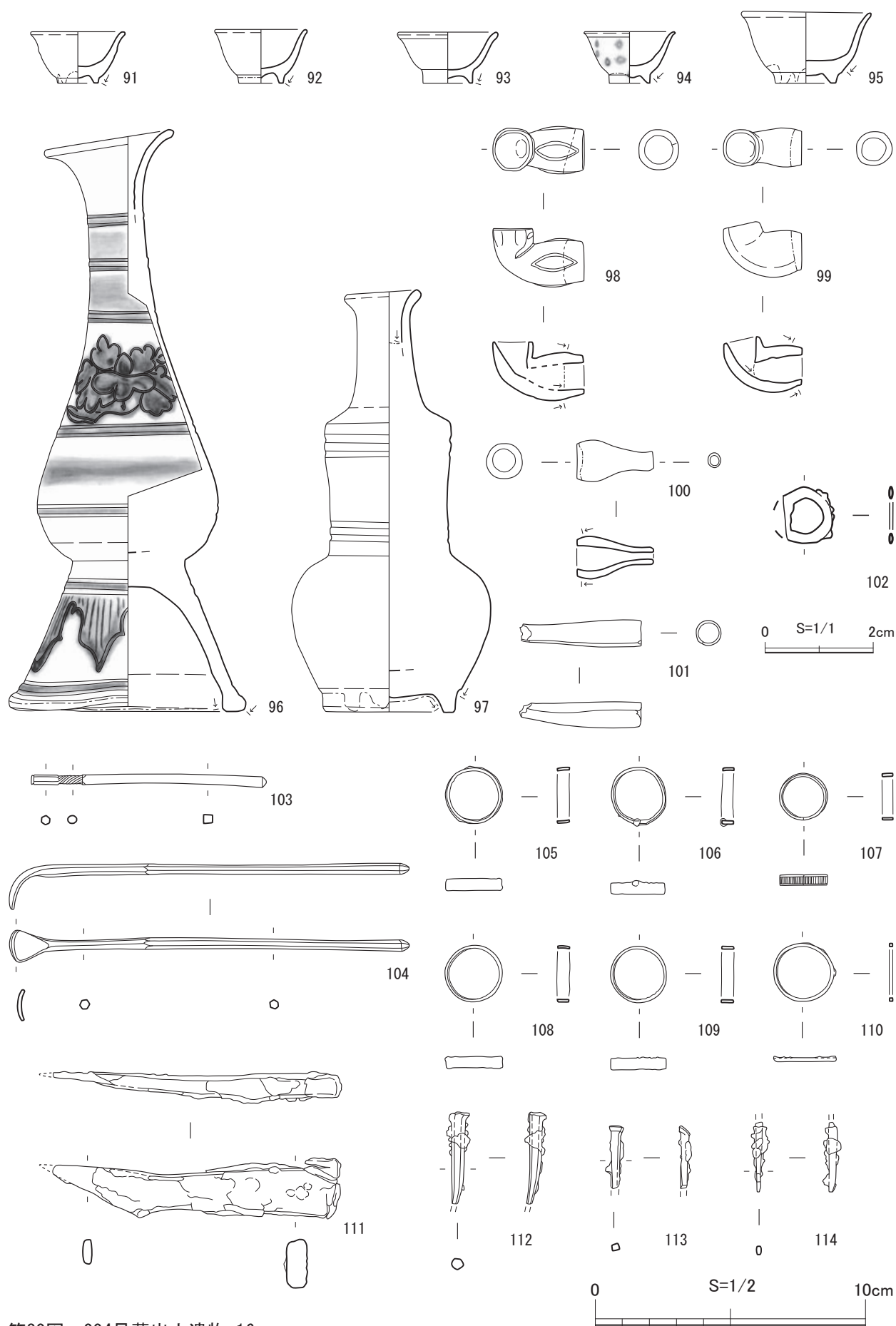
を一方に折り曲げる。113の法量は残存部の長さ2.3cm、厚さ0.25cm、重量0.7 gを測る。先端が欠損する。114は法量が残存部の長さ2.6cm、厚さ0.3cm、重量0.7 gを測る。先端部のみ残存する。墓庭北東隅でⅡ層(黄褐色混礫土)を掘削中に小杯92や94と一括で出土した。

第31図115～135は墓庭や蔵骨器内より出土した古銭である。115～118は右棚の右端に安置されていた蔵骨器13内より検出された。同蔵骨器から7枚の寛永通宝を検出し、その内の残存状況の良好な4点を図化した。116及び117は一部不明瞭だが、古寛永と思われる。118および119は新寛永と思われる。材質はどちらも銅製である。119は寛永通宝である。背文は見られない。古寛永と思われる。法量は、輪外径2.46cm、輪内径1.7～1.9cm、郭外幅0.7～0.9cm、郭内幅0.57～0.6cm、輪厚0.12cm、重量2.9 gである。銅製。奥棚後列の蔵骨器3内より検出された。

120～130は奥棚後列右端の蔵骨器4内より検出された。同蔵骨器内より24枚の古銭が検出され、その内の残存状況の良好な11点を図化した。

120は紹聖元寶である。北宋の渡来銭で初鑄年が1094年となる。篆書体。法量は、輪外径2.4cm、輪内径1.7～1.75cm、郭外幅0.8cm、郭内幅0.58～0.6cm、輪厚0.12～0.13cm、重量3.2 gである。銅製。121～122は古寛永と思われる。背面は見られない。両者とも銅製。123～130は新寛永と思われる。127は寛の字の末尾が虎の尾のように曲がりながら上に跳ねる「虎之尾寛」で平野新田銭と見られる資料である。128～129は背面上方に「元」の文字が確認できることから高津新銭と見られる。131は墓口前の石列前方のⅡ層から出土した寛永通宝である。銭文が不明瞭だが新寛永だと見られる。

132～135は墓庭北側のピットより出土した埋納された寛永通宝である。ピットは長軸47cm、短軸31cmを測る。4枚重なった状態で出土した。ピットの上部には幅30cm、奥行25cm、厚み14cmの切石が置かれていた。4枚とも新寛永だと見られる。

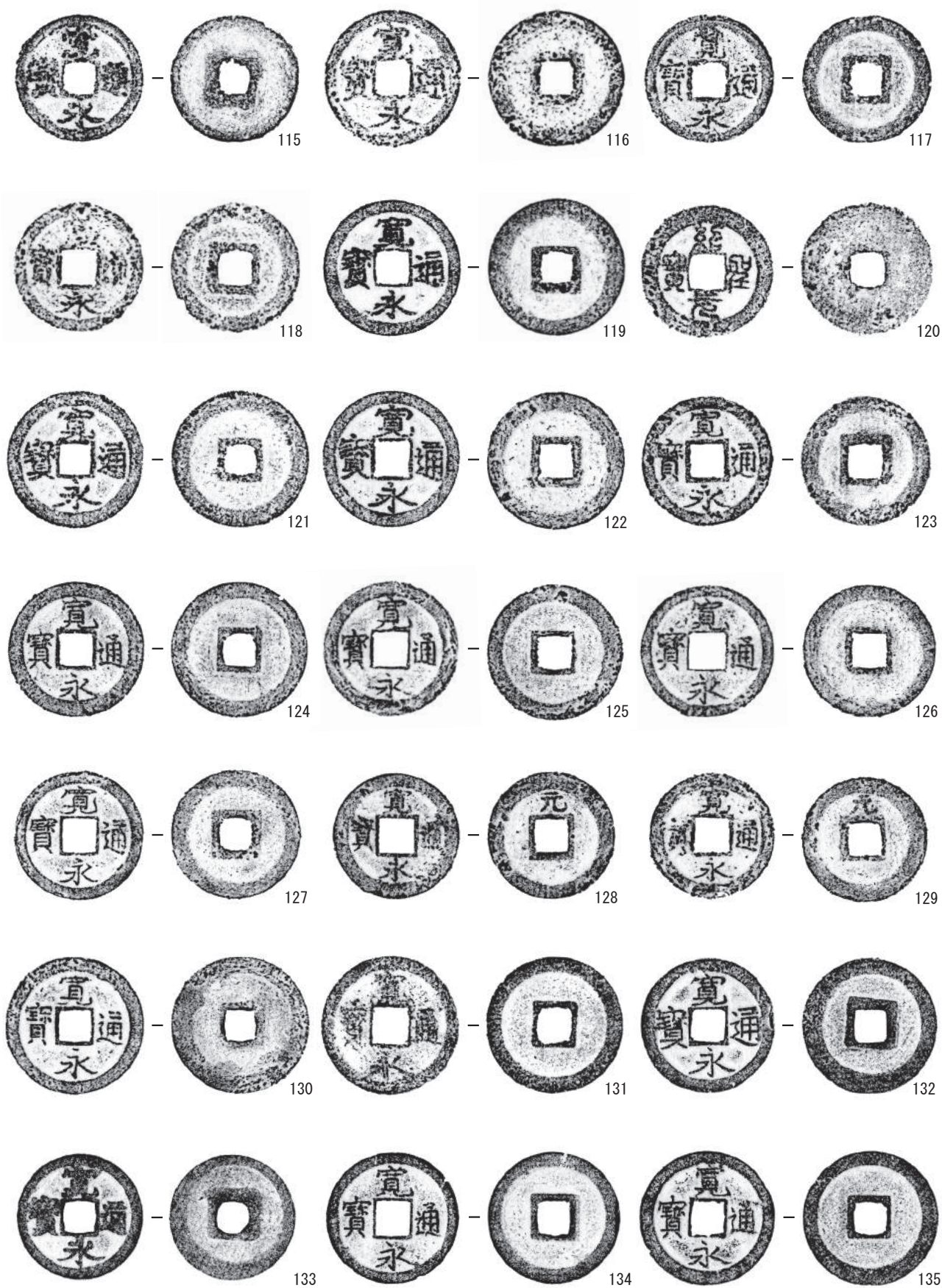


第30图 004号墓出土遺物 16

第13表 004号墓 陶磁器他観察表

※法量の()内は残存値

No.	挿図番号 図版番号	出土地	器種	分類	法量(cm)	観察事項	備考
1	第30図 91 図版54-91	墓庭	小杯	沖縄産施釉陶器	口径:3.5 器高:1.9 底径:1.6	外反口縁。内面から外面高台際まで透明釉を施釉。貫入が多く入る。素地は灰白色。	
2	第30図 92 図版54-92	墓庭	小杯	沖縄産施釉陶器	口径:3.4 器高:2.0 底径:1.7	外反口縁。内面から外面高台際まで透明釉を施釉。貫入が多く入る。素地は灰白色。	
3	第30図 93 図版54-93	墓庭	小杯	沖縄産施釉陶器	口径:3.6 器高:1.9 底径:1.8	外反口縁。内面から高台外面まで透明釉を施釉。畳付を平坦にしている。素地は灰白色。	
4	第30図 94 図版54-94	墓庭	小杯	沖縄産施釉陶器	口径:3.4 器高:1.9 底径:1.5	内面から外面高台際まで透明釉で全面施釉。高台から外底面は露胎。口唇部は釉剥ぎ。外面は鉛釉で水玉模様を施す。素地は灰白色。	
5	第30図 95 図版54-95	墓庭	小杯	沖縄産施釉陶器	口径:4.8 器高:2.6 底径:2.2	外反口縁。内面から外面高台際まで透明釉を施釉。素地は灰白色。	
6	第30図 96 図版54-96	墓庭	瓶	沖縄産施釉陶器	口径:4.8 器高:21.55 底径:8.7	内面頸部途中から外面底部、高台内に白化粧と透明釉を施釉。外面はコバルトと鉛釉で色付け。外面に線刻で圏線、牡丹文、葉文を施す。形状に歪みが見られる。素地は浅黄橙色。	
7	第30図 97 図版54-97	墓庭	瓶	沖縄産施釉陶器	口径:2.9 器高:15.65 底径:4.7	内面口縁から外面底部、外底面に鉛釉を施釉するが、発色は悪い。胴部二か所に2条の圏線を巡らす。素地は橙色。	
8	第30図 98 図版54-98	墓庭	煙管 (雁首)	沖縄産施釉陶器	長さ:3.4	火皿の径1.5cm。ラウ接合部の径1.5cm。重量8.7g。火皿内面から外面ラウ接合部まで透明釉を施釉。外面胴部四か所に紡錘形の文様を施す。素地は灰白色。	
9	第30図 99 図版54-99	墓庭	煙管 (雁首)	沖縄産施釉陶器	長さ:2.9	火皿の径1.3cm。ラウ接合部の径は縦1.2cm、横1.3cm。重量6.1g。内面は火皿から外面ラウ接合部まで瑠璃釉を施釉。素地は白色。	
10	第30図 100 図版54-100	墓庭	煙管 (吸口)	沖縄産施釉陶器	長さ:2.8	吸口の径0.5cm。ラウ接合部の径1.3cm。重量4.4g。外面吸口からラウ接合部まで瑠璃釉を施釉。素地は白色。	
11	第30図 101 図版54-101	サンミ デー 下部	煙管 (雁首)	金属製品(青銅)	長さ:(4.5)	ラウ接合部の径0.9cm。重量5.3g。火皿を損失。上面に孔が2つ。側面上部につなぎ目。	
12	第30図 103 図版54-103	墓庭	簪 (髪差)	金属製品(青銅)	長さ:8.75	重量7.7g。カブを損失。断面は首部は六角形、竿部は方形。ムディ部のひねり痕が明瞭。	
13	第30図 104 図版54-104	蔵骨器No. 4	簪 (ジーファー)	金属製品(青銅)	長さ:14.8 厚さ:0.4	重量12.5g。匙状。断面は首部、竿部ともに六角形。	
14	第30図 105 図版54-105	蔵骨器 No.44	指輪	金属製品(青銅)	直径:2.1 幅:0.5 厚さ:0.1	重量1.6g。全体的に錆が付着。	
15	第30図 106 図版54-106	蔵骨器 No.44	指輪	金属製品(青銅)	直径:2.2 幅:0.5 厚さ:0.12	重量1.3g。全体的に錆が付着。装飾と思われる丸い突起が見られる。	
16	第30図 107 図版54-107	蔵骨器No. 4	指輪	金属製品(青銅)	直径:1.8 幅:0.4 厚さ:0.1	重量1.6g。錆は少なく、光沢が残る。外面に2本の圏線を巡らし、その間に縦の沈線を施す。つなぎ目が明瞭。	
17	第30図 108 図版54-108	蔵骨器 No.33	指輪	金属製品(青銅)	直径:2.1 幅:0.4 厚さ:0.1	重量1.5g。全体的に錆が付着。	
18	第30図 109 図版54-109	蔵骨器 No.33	指輪	金属製品(青銅)	直径:2.1 幅:0.45 厚さ:0.1	重量1.6g。全体的に錆が付着。	
19	第30図 110 図版54-110	蔵骨器 No.33	指輪	金属製品(青銅)	直径:2.2 幅:0.1 厚さ:0.1	重量0.5g。全体的に錆が付着。	
20	第30図 111 図版54-111	蔵骨器No. 4	小刀	金属製品(鉄)	長さ:10.8 幅:2.3 厚さ:1.1	重量40g。錆などの付着物が多く見られる。	
21	第30図 112 図版54-112	シルヒラ シ	釘	金属製品(鉄)	長さ:(3.4) 厚さ:0.4	重量1.9g。頭部を一方に折り曲げる。小型の角釘。上部に錆の付着が目立つ。	
22	第30図 113 図版54-113	墓庭	釘	金属製品(鉄)	長さ:(2.3) 厚さ:0.25	重量0.7g。頭部を一方に折り曲げる。小型の角釘。先端が欠損している。	
23	第30図 114 図版54-114	墓庭	釘	金属製品(鉄)	長さ:(2.6) 厚さ:0.3	重量0.7g。先端部のみ残存。錆に覆われる。	



0 S=1/1 2cm

第31図 004号墓出土遺物 17

第14表 004号墓 銭貨観察表

No.	挿図番号 図版番号	出土地	銭貨名	初鑄年	区分	法量 (cm・g)						材質	備考
						輪外径	輪内径	郭外幅	郭内幅	輪厚	重量		
1	第31図 115 図版55-115	蔵骨器 No.13	寛永通寶 (古寛永)	1636年	I 期	2.30	1.75- 1.85	0.75- 0.95	0.55	0.13	3.05	銅	
2	第31図 116 図版55-116	蔵骨器 No.13	寛永通寶 (古寛永)	1636年	I 期	2.45	1.85- 1.95	0.7-0.9	0.60	0.13	2.75	銅	
3	第31図 117 図版55-117	蔵骨器 No.13	寛永通寶 (新寛永)	1697年	Ⅲ期	2.30	1.68- 1.85	0.78-0.9	0.6-0.69	0.14	3.35	銅	
4	第31図 118 図版55-118	蔵骨器 No.13	寛永通寶 (新寛永)	1697年	Ⅲ期	2.30	1.7-1.85	0.8-0.95	0.60	0.10	2.30	銅	
5	第31図 119 図版55-119	蔵骨器No.3	寛永通寶 (古寛永)	1636年	I 期	2.46	1.7-1.9	0.7-0.9	0.57-0.6	0.12	2.90	銅	
6	第31図 120 図版55-120	蔵骨器No.4	紹聖元寶	1094年	北宋	2.40	1.7-1.75	0.80	0.58-0.6	0.12- 0.13	3.20	銅	篆書体
7	第31図 121 図版55-121	蔵骨器No.4	寛永通寶 (古寛永)	1636年	I 期	2.45	1.7-1.95	0.7-0.85	0.55-0.6	0.12- 0.13	2.75	銅	
8	第31図 122 図版55-122	蔵骨器No.4	寛永通寶 (古寛永)	1636年	I 期	2.50	1.85- 1.95	0.7-0.9	0.60	0.13- 0.14	3.75	銅	
9	第31図 123 図版55-123	蔵骨器No.4	寛永通寶 (新寛永)	1697年	Ⅲ期	2.30	1.7-1.9	0.8-0.9	0.60	0.12	2.90	銅	
10	第31図 124 図版55-124	蔵骨器No.4	寛永通寶 (新寛永)	1697年	Ⅲ期	2.45	1.85-1.9	0.73-0.8	0.60	0.12	3.20	銅	
11	第31図 125 図版55-125	蔵骨器No.4	寛永通寶 (新寛永)	1697年	Ⅲ期	2.45	1.8-1.9	0.75-0.8	0.60	0.11	2.80	銅	
12	第31図 126 図版55-126	蔵骨器No.4	寛永通寶 (新寛永)	1697年	Ⅲ期	2.40	1.87- 1.95	0.7-0.85	0.65	0.13	3.10	銅	
13	第31図 127 図版55-127	蔵骨器No.4	寛永通寶 (新寛永)	1697年	Ⅲ期	2.30	1.76- 1.87	0.7-0.9	0.60	0.11	2.60	銅	
14	第31図 128 図版55-128	蔵骨器No.4	寛永通寶 (新寛永)	1697年	Ⅲ期	2.29	1.70	0.75-0.8	0.60	0.12	2.65	鉄	背上「元」 磁気反応あり
15	第31図 129 図版55-129	蔵骨器No.4	寛永通寶 (新寛永)	1697年	Ⅲ期	2.27	1.6-1.75	0.7-0.8	0.60	0.12	2.30	鉄	背上「元」 磁気反応あり
16	第31図 130 図版55-130	蔵骨器No.4	寛永通寶 (新寛永)	1697年	Ⅲ期	2.50	1.8-1.9	0.7-0.8	0.60	0.13	3.55	銅	
17	第31図 131 図版55-131	墓口前	寛永通寶 (新寛永)	1697年	Ⅲ期	2.48	1.8-2.0	0.75-0.8	0.60	0.12	2.80	銅	銭文が不明瞭 新寛永か
18	第31図 132 図版55-132	墓庭土坑	寛永通寶 (古寛永)	1636年	I 期	2.45	1.76-1.9	0.71-0.9	0.59	0.13	3.70	銅	
19	第31図 133 図版55-133	墓庭土坑	寛永通寶 (古寛永)	1636年	I 期	2.27	1.7-1.85	0.7-0.9	0.55	0.11	2.85	銅	
20	第31図 134 図版55-134	墓庭土坑	寛永通寶 (新寛永)	1697年	Ⅲ期	2.38	1.85-1.9	0.7-0.81	0.60	0.14	3.55	銅	
21	第31図 135 図版55-135	墓庭土坑	寛永通寶 (新寛永)	1697年	Ⅲ期	2.43	1.85-1.9	0.7-0.8	0.60	0.10	2.35	銅	

第3節 009号墓

(1) 遺構 (第32図～第33図、図版15)

009号墓は調査区丘陵の西斜面の北側に立地する。標高14.0m～18.2mの牧港石灰岩を基盤とする丘陵斜面に横穴を掘り込んで墓室を構築した亀甲墓である。当墓は本調査に以前に廃棄され、墓口が開いており、墓室からは甕形や御殿形などの蔵骨器が割れて散乱した状態で出土した。

チジ（屋根）は平面形が後方で緩やかに湾曲する馬蹄形を呈し、高さ約0.6mの石積みでヤジョーマーイが構築される。石積みは板状の切石が使用された粗い相方積みが見られる。ウーシ（臼）に繋がる屋根周縁の石列は岩盤を約0.3mの高さで削り出して構築されており、周縁部の一部には切石が数個残存する。チジ中央はほぼ平坦で盛り上がりは見られない。石敷きは見られなかったため、岩盤を緩やかな弧状に削り出し後は盛り土等で表面を仕上げたことが考えられる。眉石も岩盤削り出しで成形されており、眉頂部は平坦に仕上げ、眉端部に向かって下方に屈曲し、先端部付近で上方に反る。両端部は肥大しない。眉正面の底部には小さな段が施されている。スディイシ（袖石）の上にウーシ（臼）及びクウーシ（子臼）が配置される。墓正面も岩盤の削り出しだが、墓口に厚み約0.3m、幅約1mのジョウカブイ（門被い）と幅約0.15m、高さ約1mのシミイシ（隅石）が嵌め込まれている。墓口は高さ約1m、幅約0.65m、奥行き（羨道の長さ）約0.8mである。サンミデー（供物台）は一段で、大小5個の切石で墓庭との段差が設けられ、石敷きは見られない。向かって左隅にカビアンジ（紙銭焼き場）が造られる。スディイシ（袖石）は墓正面左右に岩盤削り出しの1段で構築されている。墓正面や袖石の表面、チジ周縁の石列に漆喰が一部残存していたことから、造墓当時は全面の漆喰塗布仕上げだったことが窺える。墓庭は岩盤を掘り込んで平坦化を行っている状況が窺えた。岩盤の窪みに褐色砂質土を敷き、その上層に石粉で仕上げている様子が見られた。ワラビヌティ（童の手）やナージミー（庭積み）も岩盤を削り出しで構築される。ワラビヌティはナージミーの中間ほどで先端部が窄まる。右側のナージミーの高さは約1.5mを測る。ジョー（門）が見られなかったが、現存の墓庭の法量は奥行き約6m、幅約6mを測る。

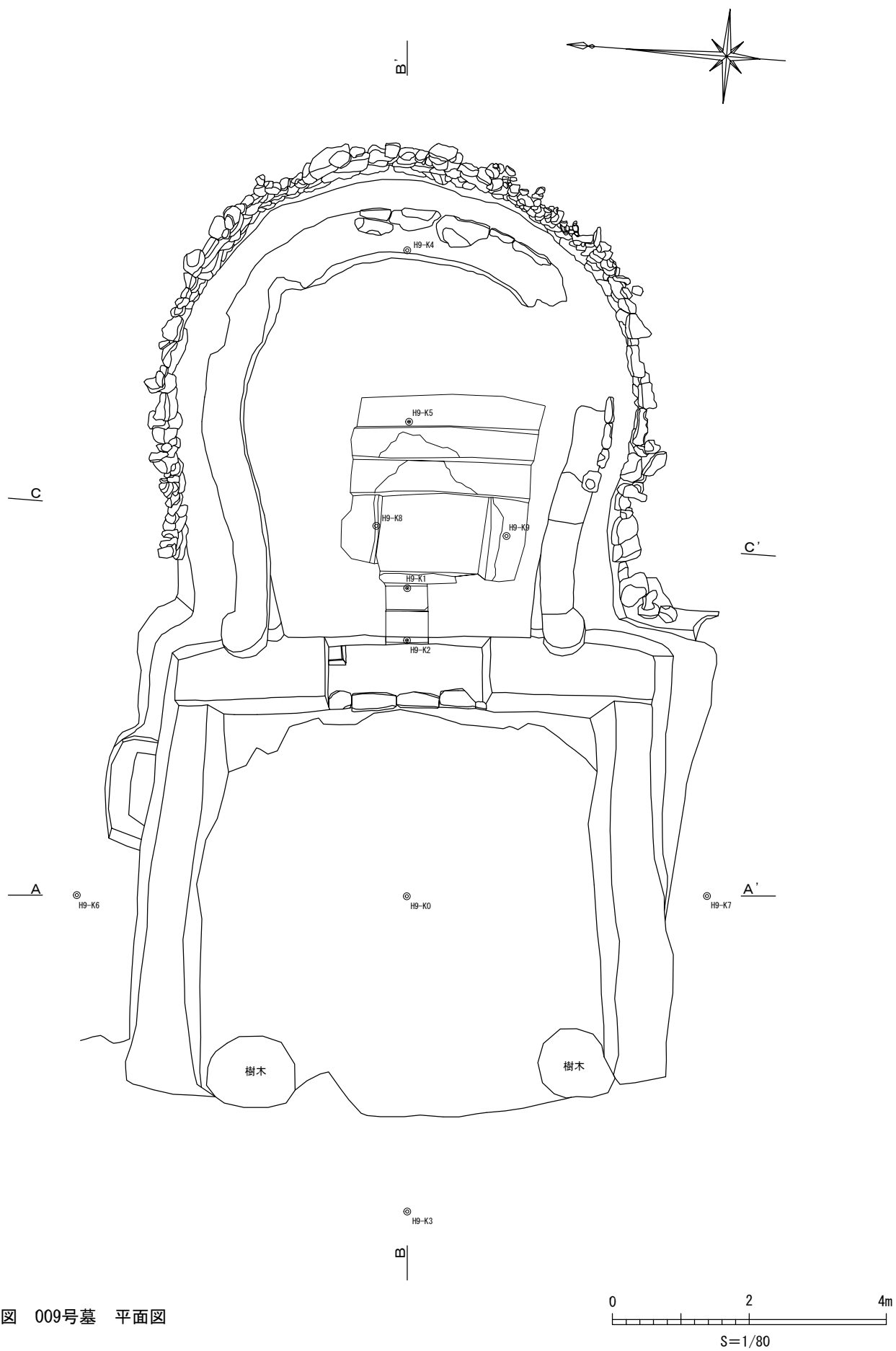
墓室は幅約2.6m、奥行き約2.6m、シルヒラシから天井までの高さ約1.7mを測る。牧港石灰岩の岩盤に横穴を掘り込んで構築された墓室の壁は斜交層理が明瞭に見られた。タナ（棚）は奥側に3段、左右に1段で奥棚と左右の棚に段差を設ける5類b型に相当する。棚は全て岩盤を削り出して造られている。シルヒラシは横約1.5m、奥行約1.2mを測り、1cm大の小礫が少量入った明黄褐色砂を敷き均らしている。

本墓の明瞭な造墓年代は明らかではないが、使用時期はマンガン釉甕形の安里編年Ⅳ期（1850～1890年代）ごろから始まり、図化を見送ったが上焼コバルト釉御殿形の身の銘書に「大正元年旧ノ六月七日／子人父西原太郎」と確認できたことから、20世紀の初頭まで使用された墓であると考えられる。

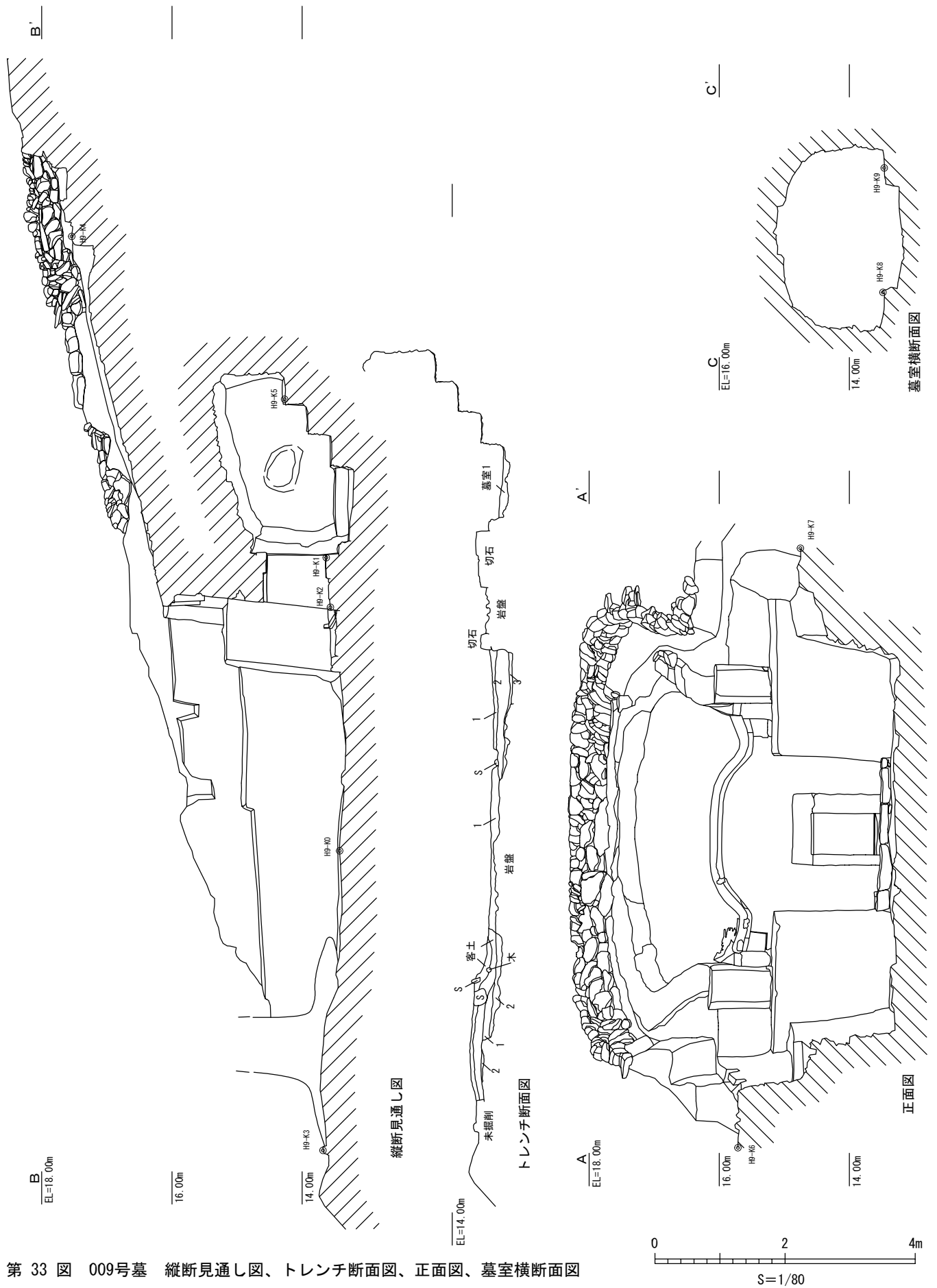
(2) 遺物 (第34図、図版56)

009号墓からは蔵骨器、沖縄産陶器、本土産磁器、煙管、金属製品、ガラス製品などが得られた。蔵骨器はボージャー形、甕形、御殿形が出土している。墓室からの出土であるが、散乱した出土状況で原位置を保っていない。身と蓋のセット関係は不明。銘書は西原姓のみが見られた。

第34図I36はマンガン釉甕形の身で、口縁部が外反し、屋門は貼り付けのアーチ形。肩部文様帯および胴部は蓮華文が沈線で描かれ、胴下部文様帯は櫛描波状文が2条見られる。器形から安里編年の第Ⅳ期（1850～1890年代）の資料である。第34図I36はマンガン釉甕形の身で、口縁部が外反し、口唇部



第 32 図 009号墓 平面图



の中央が浅く窪む。屋門は貼り付けのアーチ形で、柱の下に台座のような意匠の貼り付けがある。肩部文様帯に葉文を、胴部には蓮華文を沈線で描く。器形から安里編年Ⅳ期の資料と見られる。第34図138および139はマンガン釉甕形の蓋である。138はつまみ台が2段で、かえりが見られない。139はつまみ台が3段で、かえりは0.3cmと低い。銘書きで見られた「新屋」は屋号と考えられる。蔵骨器以外は墓庭から出土した。第17表、第34図140～148に示すとおりである。

第15表 009号墓蔵骨器(蓋)観察表

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	つまみ/屋根形状 接合部孔 つまみ台・圏線 鏝(cm) かえり(cm)	つまみ台径 口径/棟長 内径/桁行長 器高/梁行長 体部高/器高	文様	調整痕	釉薬	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
1		第34図138 図版56-138	墓室	マンガン釉甕形	宝珠形 有孔 2段・なし 2.5 なし	11.9 27.8 20.9 15.05 10.06	なし	つまみ台は回転削り出し。鏝は平坦だが端部はやや丸みをおびる。かえりなし。ロクロ成形後、ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	あり	—	—	
2		第34図139 図版56-139	墓室	マンガン釉甕形	宝珠形 有孔 3段・凹1 2.4 0.3	9.45 32.4 26.2 16.4 11.7	なし	つまみ台は回転削り出し。鏝は平坦だが端部でやや反る。端部の成形はやや丸い。かえりは0.3cmと小さい。ロクロ成形後、ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	あり	—	—	

第16表 009号墓蔵骨器(身)観察表

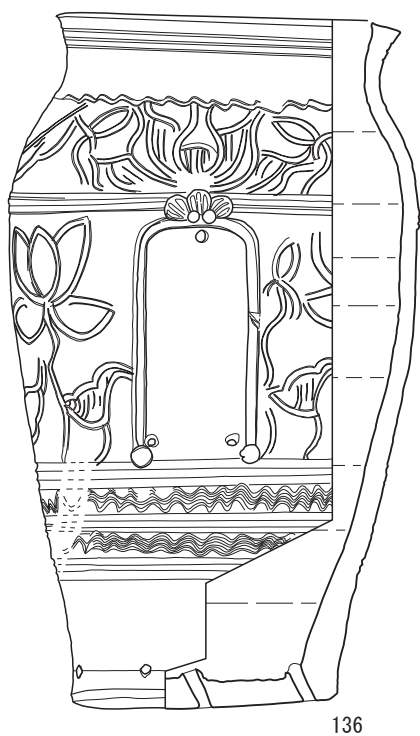
※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	大きさ (cm) ※	窓枠/屋門	窓数/形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯印	銘書	死去年	洗骨年	備考
1		第34図136 図版56-136	墓室	マンガン釉甕形	27.3 32.4 19.8 55.2	アーチ形	3個/3円	①凹3 ②波状沈線 ③凸3 ④凹3	肩部文様帯に沈線で蓮華文。胴部に沈線で蓮華文。胴下部文様帯は櫛描波状文を2条。	口縁部は外反。口唇部は外側へやや傾く。ロクロ成形後、口縁部から胴下部までナデ調整。胴最下部はヘラ削り。	11個/円形	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	なし	—	—	
2		第34図137 図版56-137	墓室	マンガン釉甕形	28.6 35.3 19.3 54.9	アーチ形	3個/3方	①凹2 ②凸1 ③凸1 ④凹3	肩部文様帯に沈線で葉文。胴部に沈線で蓮華文。胴下部文様帯は櫛描波状文を2条。屋門はアーチ形で柱の下に台座のような意匠の貼り付けがある。銘書面に法師像の貼り付け。	口縁部は外反。口唇部の中央が浅く窪む。ロクロ成形後、口縁部から胴下部までナデ調整。胴最下部はヘラ削り。	10個(未貫通)	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	なし	—	—	

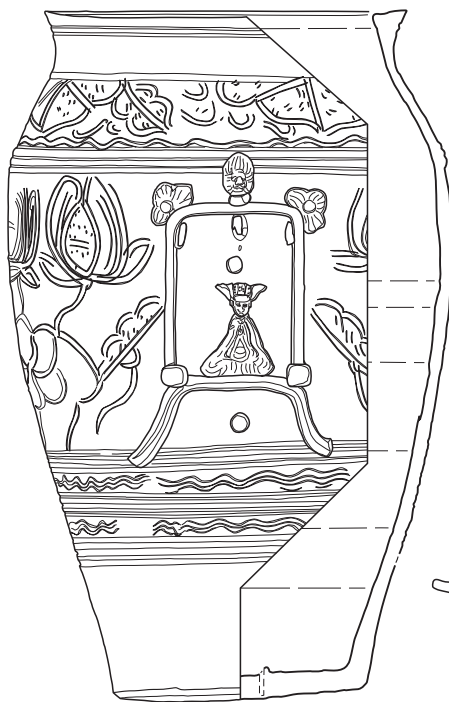
※大きさ(cm)は、ボージャー形・壺形は、上から口径/胴径/底径/器高。家形・御殿形は、上部(長軸×短軸)/底部(長軸×短軸)/器高。

第17表 009号墓 陶磁器他観察表

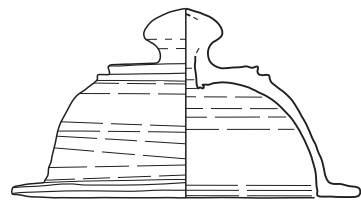
No.	挿図番号 図版番号	出土地	器種	分類	法量(cm)	観察事項	備考
1	第34図 140 図版56-140	墓庭	小杯	沖縄産施釉陶器	口径:2.8 器高:1.55 底径:1.6	精選された白土を用いる。外面にはコバルトで円形文が、高台脇から内底にかけて透明釉が施される。焼成時に隣の製品と溶着した痕跡あり。素地は灰白色。	
2	第34図 141 図版56-141	墓庭	小杯	沖縄産施釉陶器	口径:4.8 器高:2.75 底径:2.3	内面と外面下部まで透明釉を施す。貫入多い。素地は浅黄橙色。	
3	第34図 142 図版56-142	墓庭	小杯	本土産磁器	口径:6.4 器高:2.6 底径:2.7	畳付以外は全面に施釉される。釉の色調は内外面とも淡黄緑色だが、高台内から外底面までは白色。	
4	第34図 143 図版56-143	墓庭	小杯	本土産磁器	口径:6.0 器高:2.5 底径:2.3	白色の磁器で、畳付以外は全面に施釉される。内底面にコバルトによる菊花文が施される。	
5	第34図 144 図版56-144	墓庭	煙管 (雁首)	青銅製	長さ:4.2 幅:1.0	火皿の径0.9cm。首部の立ち上がり1.7cm。重量5g。継目は左か。ラウ接合部の径0.9cm。	
6	第34図 145 図版56-145	墓庭	指輪	銅製	直径:1.9 高さ:0.7 厚さ:0.1	重量1.8g。縦方向の沈線が一巡している。銅の板を輪状にして、つなぎ目を内側からろう付けする。	
7	第34図 146 図版56-146	墓庭	指輪	銅製	直径:2.1 高さ:0.25 厚さ:0.1	重量0.7g。縦方向の沈線と花の模様が一巡している。	
8	第34図 147 図版56-147	墓庭	指輪	銅製	直径:1.1 高さ:0.25 厚さ:0.1	重量0.8g。縦方向の沈線と花の模様が一巡している。	
9	第34図 148 図版56-148	墓庭	ガラス瓶 (薬品瓶)	ガラス	口径:2.3 器高:14.05 底径:短4.5/長6.2	透明の薬品瓶で横断面は楕円形。胴部には目盛がついている。ガラスには気泡が見られる。	



136

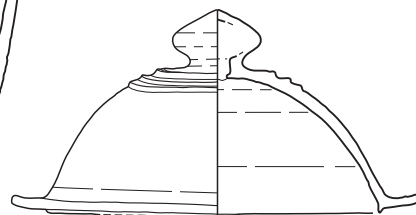


137



138

新
西原
西原
西原



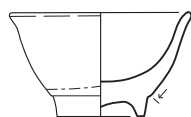
139

新
西原
西原
西原

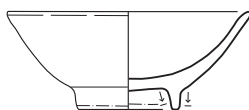
0 S=1/6 20cm



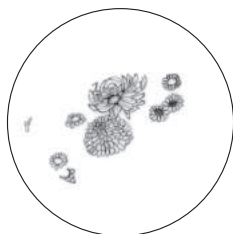
140



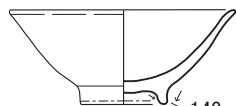
141



142



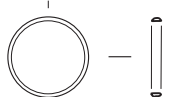
143



144



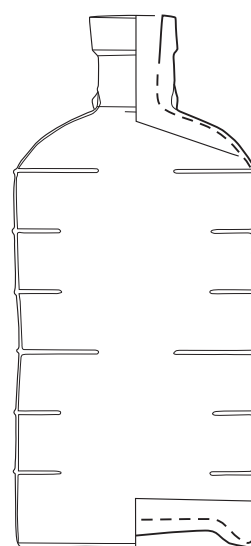
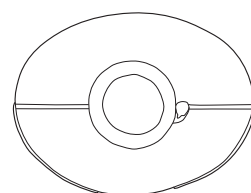
145



146



147



148

0 S=1/2 5cm

第34図 009号墓出土遺物

第4節 012号墓

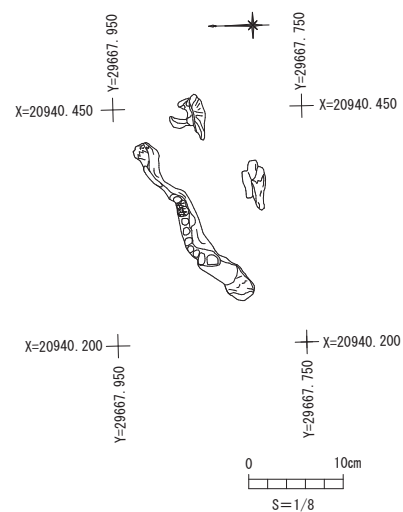
(1) 遺構(第36図～第37図、図版17)

012号墓は調査区丘陵の西斜面に位置し、牧港石灰岩の基盤とする丘陵斜面に横穴を掘り込んで墓室を構築した亀甲墓である。当墓は本調査以前に廃棄された墓で、調査前は墓口が見えないほど埋没していた。墓口は閉塞されておらず開口していたことから土砂が墓室に流れ込み、出土した蔵骨器のほとんどは割れた状態で散乱していた。しかし、数基ほどは完形を留め、原位置が分かるものもあった(第38図)。

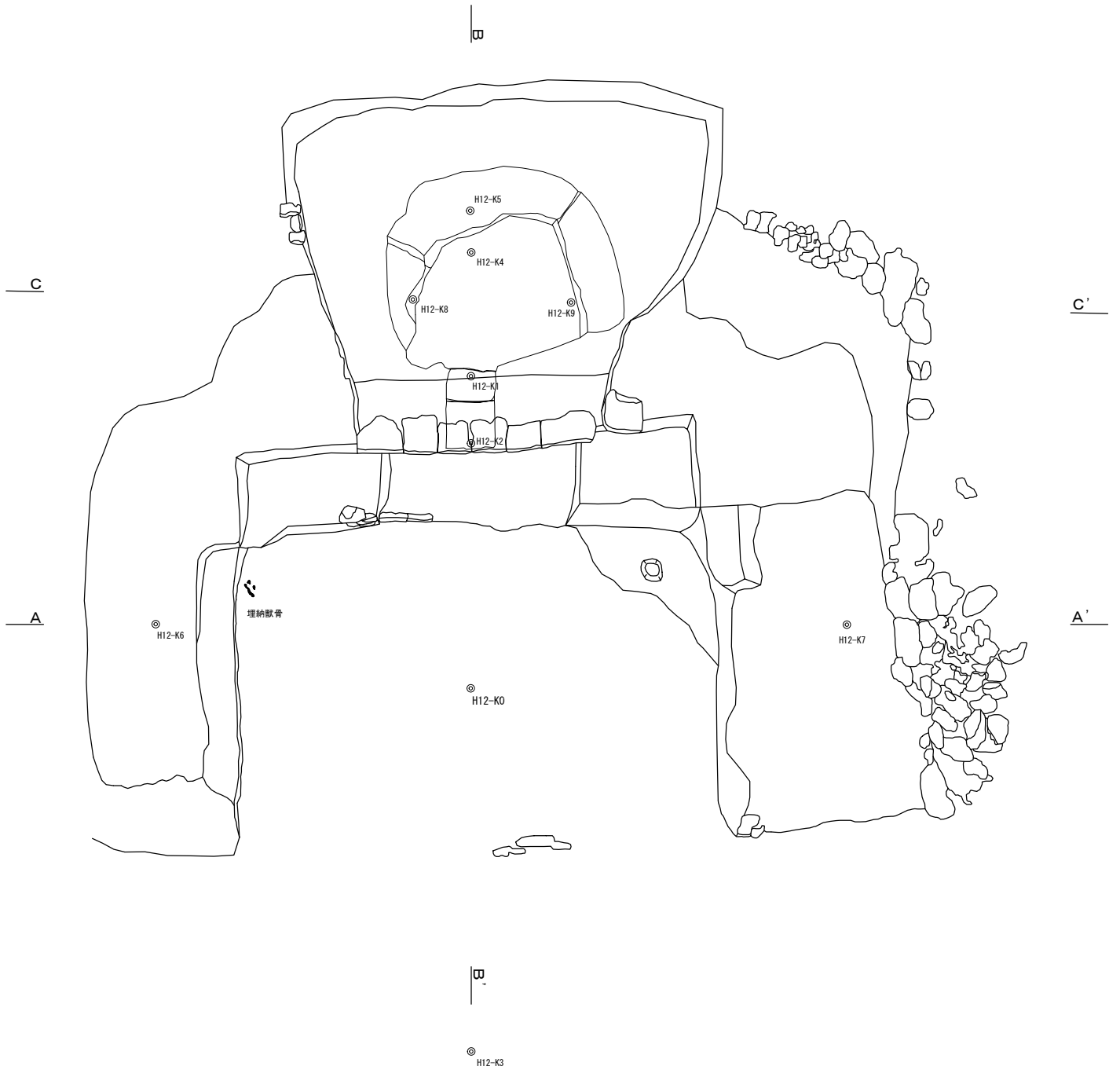
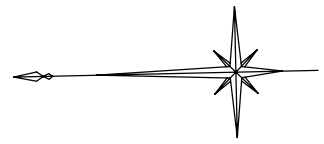
チジ(屋根)は亀甲墓で見られるような平面形が馬蹄形を呈しておらず、左右非対称の矩形である。墓庭から見ると奥の方へ広がる撥状となる。岩盤を約0.15m浅く掘り下げ、チジ中央は緩やかな弧状で成形される。向かって左側に切石が数個残存しており、本来は切石で屋根の周縁を巡らされていたと考えられる。ヤジョーマーイは見られず、眉両端は岩盤と接していることから、ミジハイ(水はけ口)も見られない。チジの表面に石敷きは見られなかったため、岩盤を削り出した後は盛り土等で表面を仕上げたと考えられる。マユ(眉)は正面観が緩やかな弧状を呈しており、6個の切石で構成されている。眉端部は微弱に上へ反るが、肥大しない。009号墓で見られた眉正面の底部の段差は本墓では見られない。ウーシ(臼)やクウーシ(子臼)も見られず、眉端部は岩盤に接する。墓正面も岩盤の削り出しで構築され、墓口のジョウカブイ(門被い)やジョウハシラ(門柱)は見られない。墓口は高さ約1.2m、幅は上部で約0.6m、下部で0.7m。奥行(羨道の長さ)約1mである。サンミデー(供物台)は幅約2.4m、奥行約0.95mで岩盤による削り出しで構築されるが、縁の部分に一部切石が使用されている。カピアンジは見られない。スディイシ(袖石)は墓正面左右に、岩盤削り出しの1段で構成される。向かって左側の袖石の角部分は切石を使用して面を揃えている。墓庭も岩盤の削り出しで構築され、岩盤の窪みに小礫が多く含まれる締まりの強い褐色砂質土(7.5YR4/4)が重鎮され、その上に暗褐色砂質土の旧表土が見られた。ナージミー(庭積み)も岩盤を削り出して成形している。左側のナージミーの高さは約1.7mを測る。明確なワラビヌティ(童の手)は見られなかったが、両ナージミーとも上部に段差がある。ジョー(門)は見られないため墓庭の法量は掴めないが、ナージミーで囲まれる範囲は奥行約4.3m、幅約6.3mを測る。墓庭北側で埋納獣骨が検出された。検出された埋納骨の詳細については、第6章を参照いただきたい。

墓室は幅約3.1m、奥行き約2.6m、シルヒラシから天井までの高さ約1.5mを測る。牧港石灰岩の岩盤に横穴を掘り込んで構築される。タナ(棚)は奥側に一段、左右に一段のコの字状で奥棚と左右棚に段差が見られることから3類b型に相当する。墓室の平面観は四隅の陵が緩い楕円状で、左右棚の位置は非対称である。棚は全て岩盤を削り出して造られている。壁面や天井は岩盤の細かな凹凸が見られ、全体的に雑な仕上げの印象である。シルヒラシは横約2.0m、奥行き約1.9mを測り、石灰岩を砕いた小礫と石粉が混じった明黄褐色砂を敷き均している。

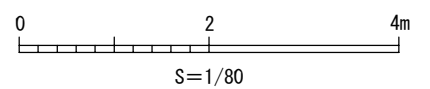
本墓の造営年代は不明だが、墓の使用時期は検出されたボージャー形で最も古いものは1740～1770年の資料であることを考慮すると、18世紀の中頃から始まり、マンガン釉甕形で安里編年Ⅲ～Ⅳ期(1810～1870年)の資料より19世紀終わり頃

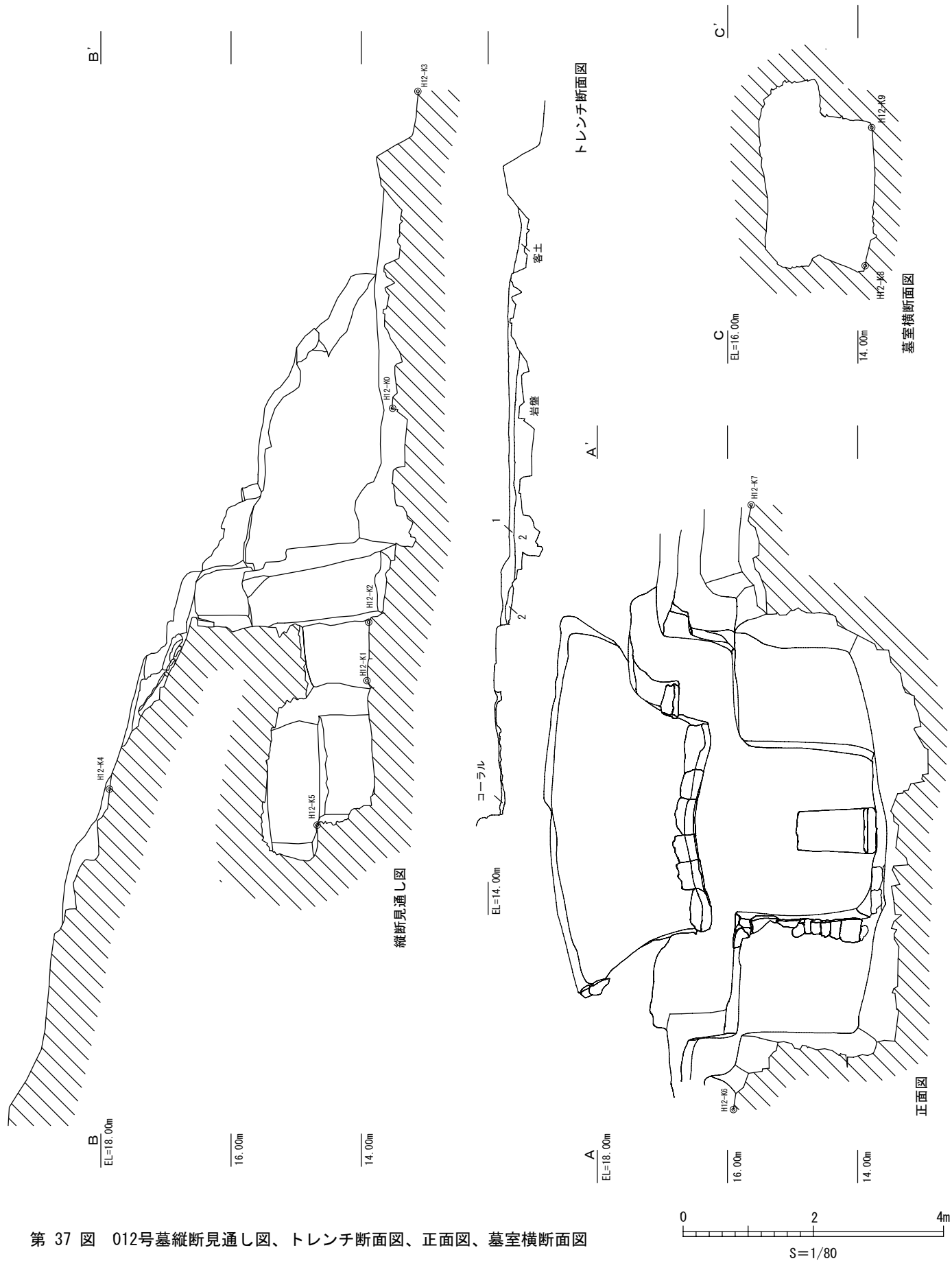


第35図 獣骨埋納平面図



第 36 图 012号墓 平面图





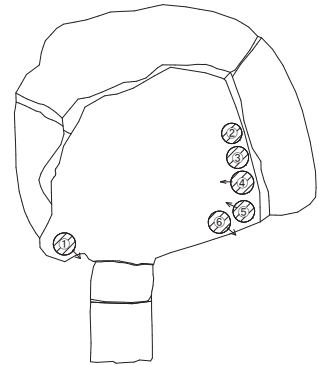
第 37 図 012号墓縦断見通し図、トレンチ断面図、正面図、墓室横断面図

まで使用された墓であると考えられる。

(2) 遺物(第39図～第40図、図版57～図版58)

012号墓からは蔵骨器、沖縄産陶器、本土産磁器、金属製品が得られた。蔵骨器はボージャー形、甕形、底付甕形、御殿形が出土している。墓室からの出土であるが、そのほとんどが破損し、原位置を保つものはシルヒラシで壁際に安置された数基であった(第38図)。以下、残存状況の良好なものを図化した。銘書から内間姓、仲嘉間姓、比嘉姓を確認できた。

蔵骨器 1 (第39図149、150)はシルヒラシの北東の角に安置されていたボージャー形である。蓋はつまみが扁平形で蓋裏の中心部は無孔である。径7.7cmのつまみ台が見られ、体部は無文である。罎端部の中央が浅く窪む。安里分類のVa式(1740～1770)の資料である。身は頸部沈線が2本、胴部は無文で、マド枠は平葎形が貼り付けられる。マド枠の上部に見られる短い波状文はカマ印と思われる。安里分類のⅢa式(1700～1800)に相当する資料である。両者の絞り込みから1740～1770年の資料と考えられる。



第 38 図 蔵骨器配置の模式図 (数字は蔵骨器No.)

蔵骨器 3 (第39図151、152)は左棚の前方に安置された蔵骨器でボージャー形である。蓋はつまみは扁平形で蓋裏の中心部は無孔である。つまみ台は見られず、体部は無文である。安里分類のVb式(1740～1770)の資料である。身は頸部沈線が2本、胴部は無文で、平葎形のマド枠が貼り付けられる。最大胴径は胴部横帯の下部沈線にあり32.0cmを測る。マド枠右上方にカマ印が見られる。安里分類のⅢa式(1700～1800)の資料である。両者の絞り込みから1740～1770年の資料と考えられる。蓋裏に銘書があり「仲嘉間筑登之／女子／蒲■[戸カ]と読める。銘書より被葬者は「仲嘉間筑登之女子蒲戸」ということが分かる。

第39図153はボージャー形で接合により復元できた資料。頸部沈線は2本を数え、胴部は無文である。平葎形のマド枠が貼り付けられる。マド枠の左上方にカマ印が見られる。焼成不良により器形が歪む。安里分類のⅢa式(1700～1800)の資料と見られる。

蔵骨器 2 (第39図154、155)は器形がボージャー形とマンガン釉甕形の両方の類似点が見られる資料で、安里分類の無釉甕形と考えられる資料である。器面にマンガン釉は施釉されず焼しめられている。蓋はボージャー形でつまみやつまみ台が見られない笠形である。蓋上部の調整が粗い。安里分類のVa式(1740～1770)に相当する。身は口縁部が直口し、口唇部は平坦である。横帯1は2条の沈線が見られ、横帯2は突帯が1条見られる。横帯が口縁部、頸部にある点はマンガン甕形と共通する。しかし横帯3、4はなく、ボージャー形で見られる胴部横帯の沈線が上下に1条ずつ見られる。貼り付けられたマド枠も唐破風形で1円2円と見られ、唐破風の頂部に玉飾りの跡が見られた。安里編年ではマンガン釉甕形のI期(1760～1770年代)に該当する資料で、ボージャー形ではⅦ式(1750～1820年)にあたる資料である。銘書が蓋及び身で見られた。蓋裏では「内間筑登之女子／ま加戸／同人女子／まさ」と読めた。身の胴部で見られた銘書は大部分が薄れていたが「嘉■[慶カ]■[拾カ]…七月七日洗骨／…■戸／…」と読め、嘉慶年間(1796～1820年。二桁台の年代だと1805～1820年となる)の洗骨ということが分かる。銘書より被葬者は「内間筑登之女子ま加戸」とその女子の「まさ」の二人だということが分かる。

第40図156はマンガン釉甕形の身である。墓室シルヒラシから出土。横帯1は沈線が2条、横帯2は突帯

が2条施される。肩部文様帯は櫛描波状文が2条施され、胴部文様帯は貼り付けの蓮華文、茎の部分は沈線で表現される。蓮華の上の法師像は貼り付け。胴下部文様帯にも櫛描波状文が2条施される。屋門は貼り付けのアーチ形で柱貫が見られ、頂部には花形の円文が見られる。安里編年のⅢ期～Ⅳ期(1810～1890年代)の資料。屋門に銘書が見られ「道光貳■壺■●●●…七月廿日／■間筑登之」と読める。道光21年(1841)に■間筑登之(内間?)が洗骨または死去したことが分かる。

第40図157はボージャー形の蓋である。墓室から出土。つまみは扁平形で蓋裏の中心は無孔。径8.3cmのつまみ台が見られる。胴部は無文。銘書は見られないが、内面中央に十字を丸で囲んだ墨書が見られた。器形より安里分類のVa式(1740～1770)に相当する資料である。

第40図158はマンガン釉甕形の蓋である。つまみは宝珠形で径11.8cmのつまみ台が1段。体部が丸みを持って張り、内外面ともに回転ナデ調整が施され全体的に丁寧な造りである。蓋内面に銘書が見られ「乾隆二十一年／丙申五月廿五日去／比嘉筑登之男子／比嘉筑登之親雲上」とある。被葬者は乾隆21年(1756)に死去した比嘉筑登之の男子で「比嘉筑登之親雲上」ということが分かる。

第40図159はマンガン釉甕形の蓋である。つまみは宝珠形で径13.3cmのつまみ台が1段見られる。鐔は平坦で端部の中央が浅く窪む。内外面ともに回転ナデ調整が施され、全体的に丁寧な造りである。蓋内面に銘書が見られ「本空妙性禅定尼／乾隆四拾九年甲辰／九月初六日死去／同五拾年乙巳七月九日洗骨／比嘉筑登之／妻／本名なへ」とある。戒名を持つことから寺との関係性があり、乾隆49年(1784)に死去し、翌年の乾隆50年(1785)に洗骨されたことが分かる。

第40図160は赤焼御殿形の蓋である。検出は奥棚に向かって左端にあったが、蓋のみで置かれた状態での検出であったため、原位置ではないと判断した。屋根は寄棟造りで大棟の両端に一对の鯨を施す。降棟の先は獅子頭を正面・背面の両面に貼り付ける。正面・背面とも白化粧後に体部には花文を描き、両側面は蓮華文を描く。軒に墨で縦線を等間隔で描いており、垂木の表現と考えられる。上江洲編年の1680年～1780年の資料である。ただし、同じ赤焼系統でも寄棟になったものは1764～1770年代に集中する^{註1}とあることから、本蔵骨器もその間の資料と想定される。銘書は見られない。

副葬品は本土産の碗類や沖縄産陶器の瓶や碗、円盤状製品、鉄釘が出土した。その内、残存状況が良好の以下の3点を図化した。

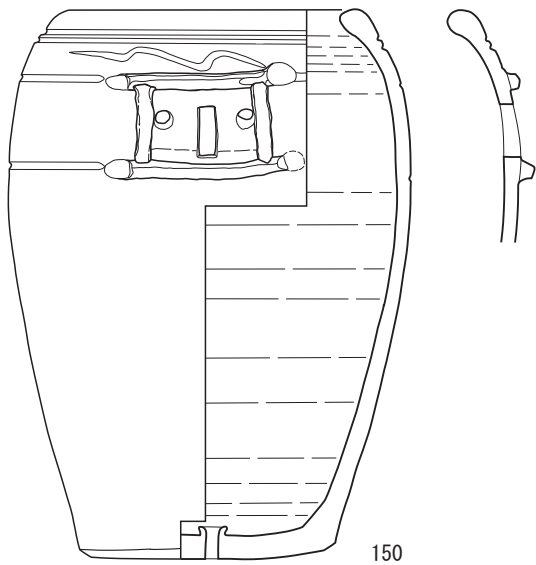
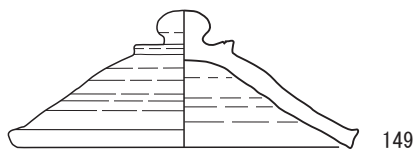
第40図161は沖縄産施釉陶器の瓶で、法量は口径2.4cm、器高14.1cm、底径5.3cmを測る。畳付と内面以外は光沢のある瑠璃釉を施す。焼成時に隣接した製品と溶着による痕跡が見られる。素地は浅黄褐色を呈する。墓庭から出土した。

第40図162は沖縄産施釉陶器の瓶で、法量は口径1.9cm、器高11.2cm、底径6.7cmを測る。白化粧に透明釉を施す。外面は畳付以外の全面に、内面は口縁内に施釉される。畳付にはアルミナ、高台の内外には白色細砂が付着する。外面にコバルトと鉛釉の線条文を施す。素地は浅黄橙色を呈する。墓庭から出土した。

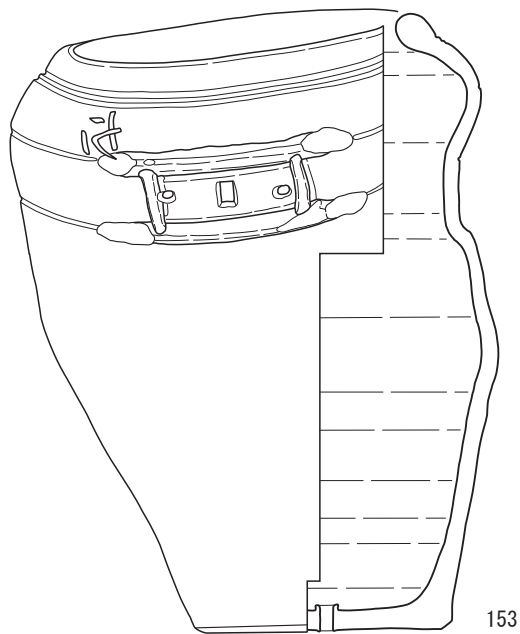
第40図163は沖縄産無釉陶器を円形に打割成形した円盤状製品である。法量は縦3.4cm、横2.9cm、厚さ0.9cmを測る。素地はにぶい赤褐色を呈する。墓庭からの出土。

<参考文献>

註1：沖縄県立博物館・美術館・2008年『ずしがめの世界』



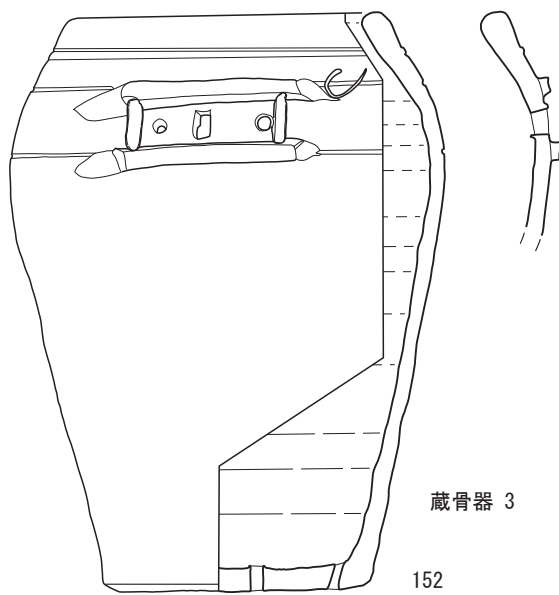
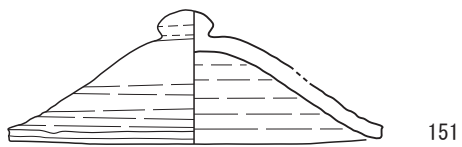
藏骨器 1



0 S=1/6 20cm

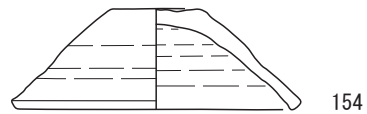
第39図 012号墓出土遺物 1

仲和
前



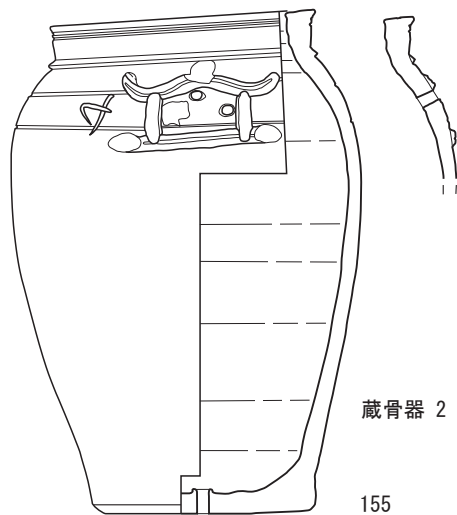
藏骨器 3

内古
大

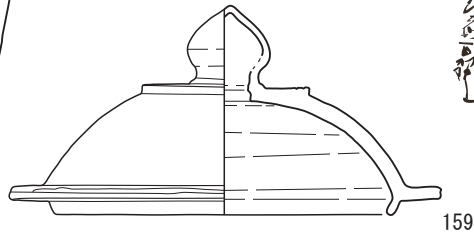
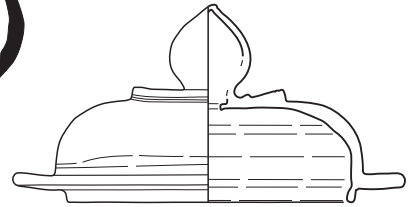
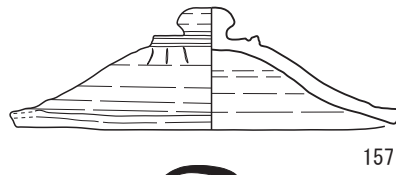
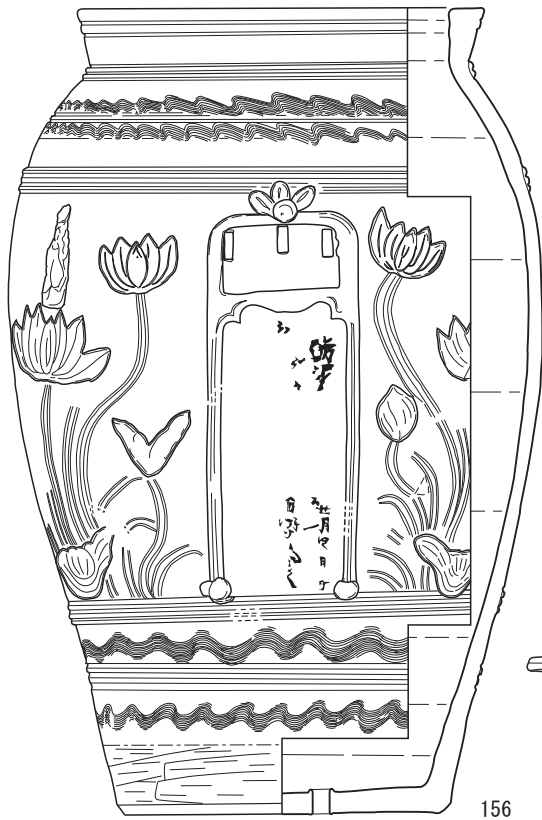


十

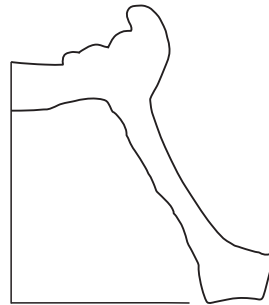
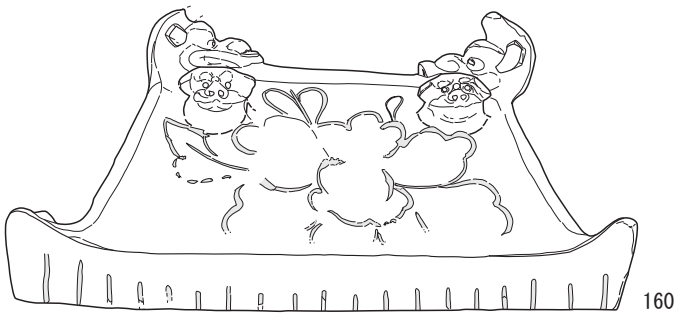
厂
改
骨



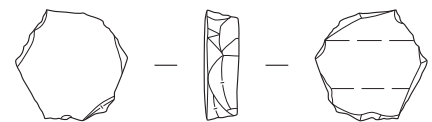
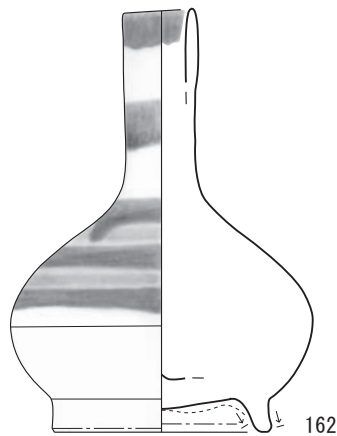
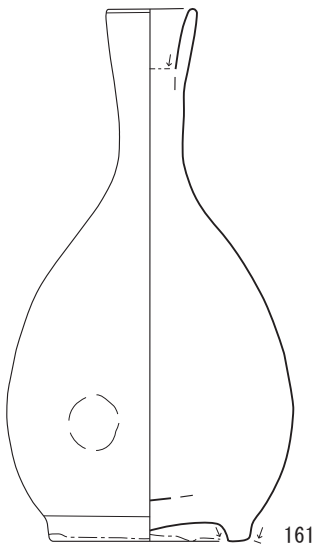
藏骨器 2



明治二十一年
四月八日
江戸
自
江戸
明治二十一年
四月八日
江戸
自
江戸



0 S=1/6 20cm



163

0 S=1/2 5cm

第40图 012号墓出土遺物 2

第18表 012号墓蔵骨器(蓋)観察表

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	つまみ/屋根形状 接合部孔 つまみ台・圏線 鐔(cm) かえり(cm)	つまみ台径 口径/椀長 内径/桁行長 器高/梁行長 体部高/器高	文様	調整痕	釉薬	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
1	1	第39図149 図版57-149	墓室・シルヒラシ	ボージャー形	扁平形 無孔 あり・1条 — —	7.7 31.5 30.7 11.0 8.2	なし	つまみ台は回転削り出し。鐔端部の中央が浅く窪む。ロクロ成形後、内外面ともに回転ナデ調整。	なし	なし	—	—	
2	3	第39図151 図版57-151	墓室・シルヒラシ	ボージャー形	扁平形 無孔 なし・なし — —	— 29.85 29.2 10.65 8.5	なし	つまみ台なし。端部は平坦。ロクロ成形後、内外面共に回転ナデ調整。	なし	あり	—	—	
3	2	第39図154 図版57-154	墓室・シルヒラシ	ボージャー形	なし 無孔 なし・なし — —	7.2 22.9 21.5 8.0 8.0	なし	つまみとつまみ台のない笠形。端部は平坦。ロクロ成形後、外面上部はへら削り。蓋上部の調整が粗い。	なし	あり	—	—	
4		第40図157 図版58-157	墓室	ボージャー形	扁平形 無孔 あり・なし — —	8.3 31.05 30.0 9.7 7.5	なし	つまみ台回転削り出し。鐔端部は中央が浅く窪む。ロクロ成形後、内外面ともに回転ナデ調整。	なし	なし	—	—	つまみ台直下に短い縦位沈線が3条。窯印か。
5		第40図158 図版58-158	墓室・シルヒラシ	マンガン釉甕形	宝珠形 有孔 1段・なし 3.3 11	11.8 31.1 21.6 15.6 9.1	なし	体部が張り、鐔端部およびかえりの端部は丸みをおびる。ロクロ成形後、内外面共に回転ナデ調整。全体的に丁寧に調整される。	マンガン釉を表面全体に施釉。鐔の内側は露胎。	あり	乾隆21 (1756)	—	
6		第40図159 図版58-159	墓室	マンガン釉甕形	宝珠形 有孔 1段・なし 2.6 11	13.3 34.3 25.3 16.55 10.25	なし	つまみ台は回転削り出し。鐔は平坦で端部の中央が浅く窪む。ロクロ成形後、内外面共に回転ナデ調整。全体的に丁寧に調整される。	マンガン釉を表面全体に刷毛で施釉。鐔の内側は露胎。	あり	乾隆49 (1784)	乾隆50 (1785)	銘書に戒名を確認できる。
7		第40図160 図版58-160	墓室	赤焼御殿形	寄棟造り	— 30.7 50.0 38.6 24.8	寄棟形。大棟の両端に一对の龕。降棟の先は獅子頭。正面背面ともに花文を描く。両側面は蓮華文を描く。軒部分に墨で縦線を等間隔で描く。垂木か。	型成形後、外面は横方向の丁寧にナデ調整。内面は横方向のナデ調整が見られるがやや粗い。白化粧を施す。	なし	なし	—	—	

第19表 012号墓蔵骨器(身)観察表

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	大きさ (cm) ※	窓枠/屋門	窓数/形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯印	銘書	死去年	洗骨年	備考
1	1	第39図150 図版57-150	墓室・シルヒラシ	ボージャー形	22.7 32.0 19.5 43.5	平葺形	3個 1方2円	①凹2 ②凹1 ③凹1 ④一	なし	口縁部は玉縁状で内傾。ロクロ成形後、口縁部から胴下部までナデ調整。内面ナデ調整。	9個/円	なし	あり	なし	-	-	窓底上方の波状文は窯印か。
2	3	第39図152 図版57-152	墓室・シルヒラシ	ボージャー形	24.5 34.4 19.2 46.0	平葺形	3個 1方2円	①凹2 ②凹1 ③凹1 ④一	なし	口唇部厚みがあり内傾する。ロクロ成形後、口縁部から肩部は弱い回転ナデ調整。肩部から胴下部は静止ナデ。胴最下部は回転へら削り。	5個/円	なし	あり	なし	-	-	窓底右上方に窯印あり。
3		第39図153 図版57-153		ボージャー形	27.5 37.5 18.5 48.8	平葺形	3個 1方2円	①凹2 ②凹1 ③凹1 ④一	なし	口縁部は玉縁状で内傾。ロクロ成形後、口縁部から胴下部までナデ調整。胴最下部はへら削り。焼成不良により器形が歪む。口唇部に削り跡あり。	5個/円	なし	あり	なし	-	-	窓底左上に窯印あり。
4	2	第39図155 図版57-155	墓室・シルヒラシ	無釉甕形	23.3 34.0 19.5 49.0	唐破風形	3個 1方2円	①凹2 ②凸1 ③凹1 ④凹1	窓は唐破風形で屋根の頂部に玉飾りの貼り付けの跡がみられる。	直口口縁で、口唇部は平坦。ロクロ成形後、口縁部から底部を回転ナデ調整。	7個/円	なし	あり	あり	-	-	窓枠左側および背面肩部に窯印あり。
5		第40図156 図版58-156	墓室・墓庭	マンガン釉甕形	32.0 42.0 25.0 64.0	アーチ形	3個 1方2方	①凹2 ②凸2 ③凸3 ④凸3	肩部文様帯は櫛描きの波状文が2条。胴部は貼り付けの蓮華文。蓋部分は線彫り。蓮華の上に貼り付けの法師像。胴下部文様帯は櫛描きの波状文が2条。	口縁部は外反。口唇部は平坦に成形する。ロクロ成形後、口縁部から胴下部をナデ調整。胴最下部をへら削り。内面、回転調整。	6個/円	マンガン釉を表面全に施釉するが、胴下部および銘書面を露胎。	なし	あり	道光21 (1841)		

※大きさ(cm)は、ボージャー形・甕形は上から口径/胴径/底径/器高。家形・御殿形は上部(長軸×短軸)/底部(長軸×短軸)/器高。

第20表 012号墓 陶磁器他観察表

No.	挿図番号 図版番号	出土地	器種	分類	法量(cm)	観察事項	備考
1	第40図161 図版58-161	墓庭	瓶	沖縄産施釉陶器	口径:2.4 器高:14.1 底径:5.3	量付と内面以外は光沢のある瑠璃釉を施す。焼成時に隣の製品と溶着した痕跡あり。素地は浅黄橙色。	
2	第40図162 図版58-162	墓庭	瓶	沖縄産施釉陶器	口径:1.9 器高:11.2 底径:6.7	白化粧に透明釉。外面は量付以外全面に、内面は口縁内に施釉される。量付にはアルミナ、高台の内外には白色細砂が付着する。外面にコバルトと鉛釉の線条文を施す。素地は浅黄橙色。	
3	第40図163 図版58-163	墓庭	円盤状製品	沖縄産無釉陶器	縦:3.4 横:2.9 厚さ:0.9	重量12g。沖縄産無釉陶器を円形に打割した製品。素地はにぶい赤褐色。	

第5節 016号墓

(1) 遺構 (第41図～第42図、図版19)

016号墓は調査区丘陵の西斜面に位置し、尾根を挟んで東斜面には004号墓が位置する。丘陵斜面地に墓室を構築した亀甲墓である。当墓は本調査以前に廃棄され墓口が開いており、墓室からは甕形や御殿形などの蔵骨器が散乱した状態であった。また、墓庭への廃棄も多く見られた。

チジ（屋根）は平面形が後方で湾曲する馬蹄形を呈し、ヤジョーマーイは見られない。ウーシ（白）に繋がる屋根周縁の石列は板状の切石を並べ、屋根の内側に面を向ける。また後列の切石は外側に面を向ける。チジ中央はほぼ平坦で盛り上がりは見られない。石敷きは見られず、造成土による盛り土仕上げである。マユ（眉石）は3個の切石で構成されており、眉頂部は平坦に仕上げ、眉端部に向かって下方に屈曲し、先端部付近で上方に反る。両端部は肥大しない。眉正面の底部には小さな段が施されている。スディイシ（袖石）の上にウーシ（白）及びクワウーシ（子白）が配置される。墓正面は切石による相方積みだと見られるが、全面漆喰塗布がなされ目地が確認出来ない。墓口は高さ約0.97m、幅約0.63m、奥行き（羨道の長さ）約0.9mである。サンミデー（供物台）は1段で3個の切石で墓庭と段差を設け、石敷きは見られない。石灰岩を砕いた砂(10YR6/8明褐色砂)を敷き詰め、面を揃えている様子が窺えた。スディイシ（袖石）は墓正面左右に岩盤削り出しの1段で構成されている。正面およびサンミデー側の面も全面漆喰塗布がなされている。墓庭は岩盤を掘り込んで平坦化を行っている状況が窺えた。左側のワラビヌティ（童の手）は不明瞭ながらもその痕跡らしき段差が見られるが、右側は欠落する。ワラビヌティやナージミー（庭積み）は岩盤を削り出して構築され、斜位に走る斜交層理が顕著に見られる。左側のナージミーの高さは約1.5mを測る。ハカヌジョー（墓門）は基地建設による影響が検出されなかった。現存の墓庭の法量は奥行き約6.5m、幅約5.6mを測る。

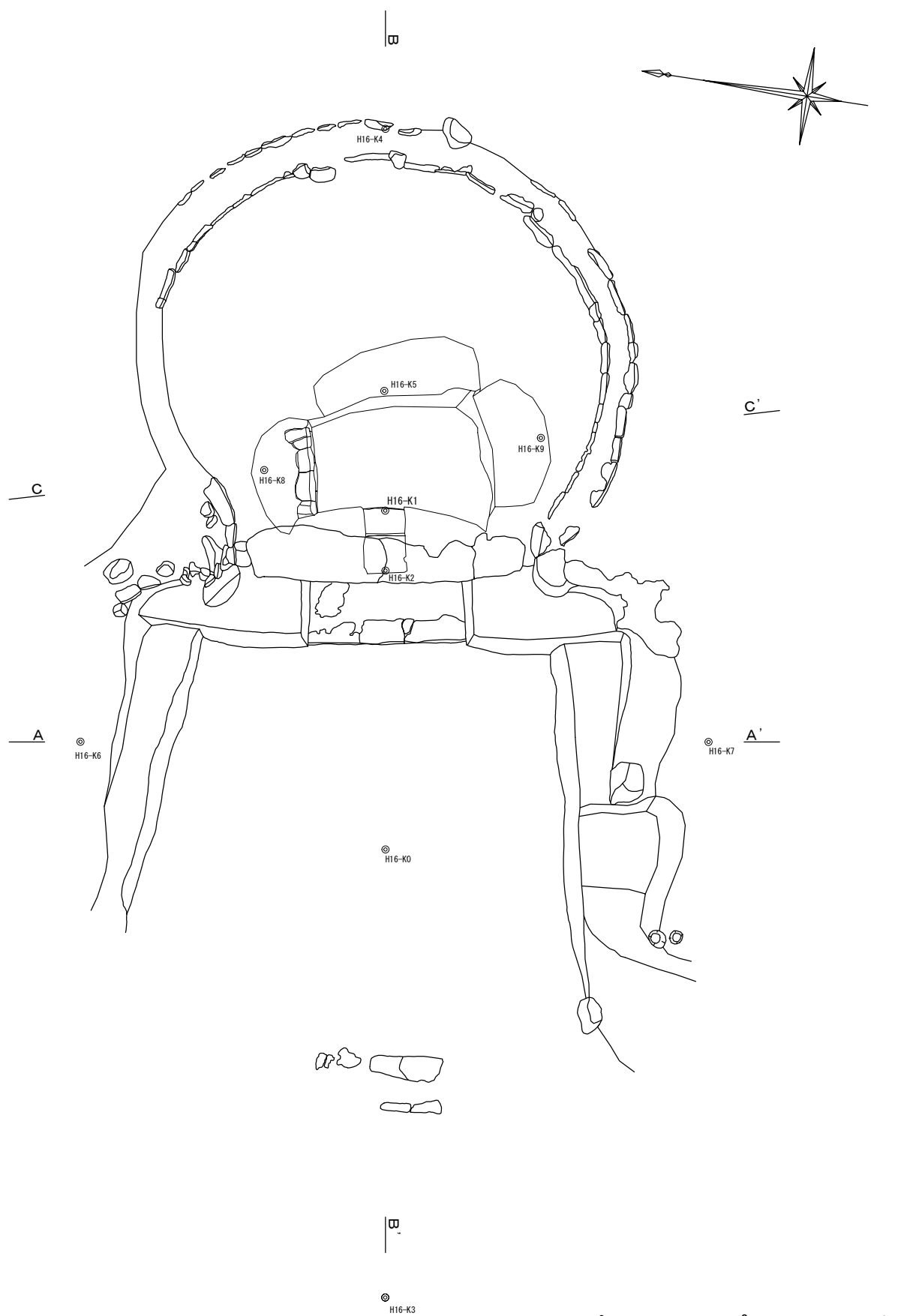
墓室は柵を含めた幅が約4.2m、奥行きが約2.3m、シルヒラシから天井までの高さ約1.8mを測る。岩盤に横穴を掘り込んで造られた墓室で、墓室から墓口をみると正面は切石による相方積みで構築されたことが分かる。よって、墓正面を大きく開口し、切石により墓口を構築されたことが窺えた。タナ（柵）は奥壁および左右側壁の出窓状の2類b型で、奥柵の奥行きは約0.7m、シルヒラシからの高さは約0.7mを測る。左柵は奥行き約0.8m、シルヒラシからの高さは約0.5mを測る。奥柵および左柵は岩盤を掘り込んで成形するが、奥行き約0.8mの右柵は大きな切石を2段積んで構築する。シルヒラシは横約2.3m、奥行き約1.4mを測り、岩盤直上は石灰岩を砕いた礫と石粉を混ぜた10YR7/6明黄褐色砂を充填し、その上に1cm大の小礫が少量混じる10YR4/6～10YR7/6を敷き均している。

本墓の明瞭な造墓年代や使用年代は不明である。出土した蔵骨器をみると、図化を見送ったがボージャー形の蓋で安里分類のVa式(1740～1770)が完形で1点出土し、多数を占める蔵骨器はマンガン釉甕形である。また最も新しい銘書は大正12年(1923)であることから、出土遺物から推定される墓の使用時期は18世紀中頃から20世紀初め頃であると考えられる。

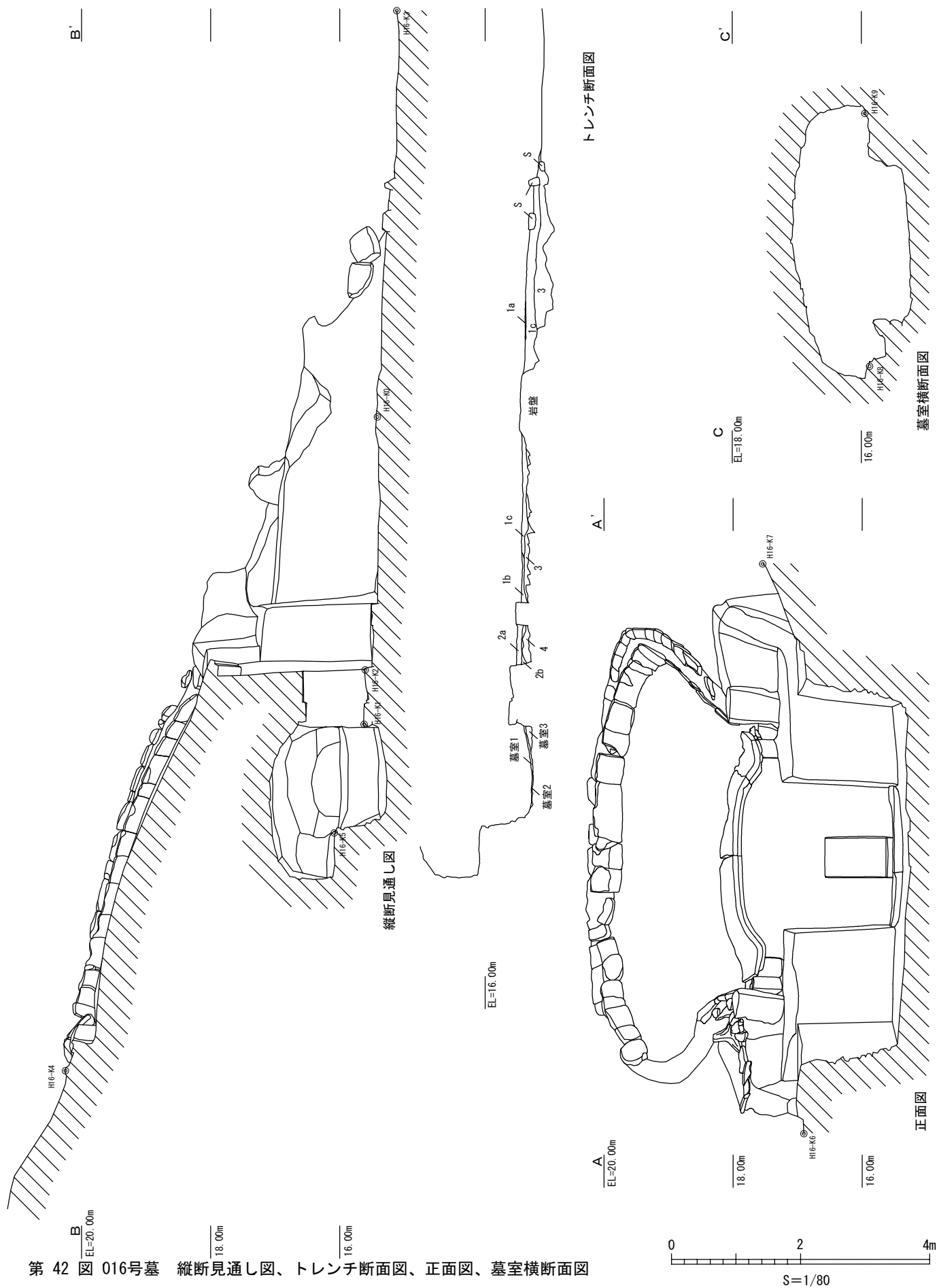
(2) 遺物 (第43図、図版59)

016号墓から蔵骨器、本土産磁器、沖縄産施釉陶器、アンダーガーミ、煙管、金属製品が出土した。そのほとんどは墓庭からの出土であった。

第43図164はマンガン釉甕形の蔵骨器である。身の資料で口縁部が直口し、口唇部は平坦でやや内



第 41 图 016号墓 平面图



傾する。肩部文様帯は無文で、横帯3～横帯4の間の胴部を縦帯で5つに区画する。屋門は瓦屋形で2本の柱で3つに区画する。屋門下部に貼り付けの蓮華文。その他は貼り付けの法師像と蓮華文が見られ、茎の部分も貼り付けで表現される。胴下部は無文。マンガン釉は肩部、肩部文様帯、屋門の区画、胴下部に施釉され、法師像が貼り付けられる区画は無釉となる。その特徴から安里編年のⅡ～Ⅲ期（1770～1850年代）の資料と考えられる。墓庭から出土。

第43図165はマンガン釉底付甕形の身で口縁部は外反し、口唇部は平坦でやや外側に傾く。底部は半裁竹管で押引きの立体的な仕上げ。胴部文様帯に蓮華文、茎、法師像の貼り付け。胴下部文様帯には唐草文と円文の貼り付け。屋門はアーチ形の貼り付けで、銘書面に「内間筑登之」とある。

第43図166はマンガン釉甕形の身である。口縁部はやや外反し、口唇部は平坦。横帯3・横帯4はそれぞれ3条の沈線文で表現され、肩部文様帯や胴部文様帯で見られる唐草文や蓮華文も沈線で表現される。屋門は貼り付けのアーチ形。頂部と柱下に玉飾りが見られる。柱貫は見られない。安里編年のⅤ期（1900～1920年代）の資料である。

第43図167はマンガン釉甕形の蓋である。つまみは宝珠形で鐳や端部を平坦に仕上げる。体部中央に2条の沈線が廻り、棟状の突帯がつまみ台から中央の沈線まで3本伸び、その下端部に円形の粘土板を1つ貼り付ける。マンガン釉を全体的に刷毛で施釉され、造りも丁寧である。

第43図168はマンガン釉甕形の蓋である。つまみは宝珠形。鐳は平坦に仕上げ、かえりは0.3cmと低い。つまみ台から下方に小孔が30箇所余り見られる。銘書は見られない。

第43図169は沖縄産施釉陶器の煙管の吸い口である。法量は長さ3.15cm、重量5.9gである。白色の素地に透明釉が施される。素地は乳白色を呈する。墓庭から出土。

第21表 016号墓蔵骨器(蓋)観察表

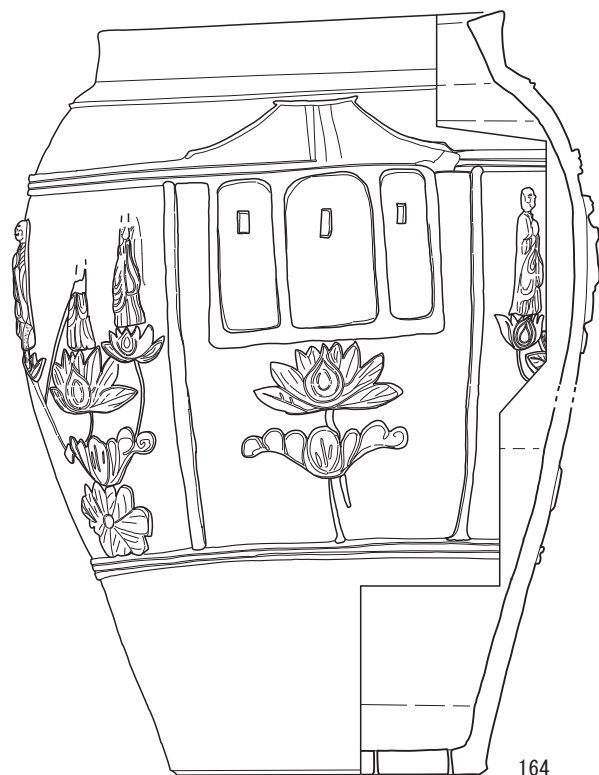
No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	つまみ/屋根形状 接合部孔 つまみ台・圏線 鐳 (cm) かえり (cm)	つまみ台径 口径/棟長 内径/桁行長 器高/梁行長 体部高/器高	文様	調整痕	釉薬	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
1		第43図167 図版59-167	墓庭	マンガン釉甕形	宝珠形 有孔 1段・2条 3.5 2.6	13.0 34.0 25.4 17.0 9.5	体部中央に2条の沈線が廻る。棟状の突帯貼り付けがつまみ台から中央の沈線まで3本伸び、その下端部に玉飾りのような円形の粘土板を一つ貼り付ける。	つまみ台は回転削り出し。鐳は平坦で端部も平坦。かえりは0.3cmと低い。ロクロ成形後、外面回転ヘラ削り。内面は回転ナデ調整。	マンガン釉を全体的に刷毛で施釉。	なし	—	—	
2		第43図168 図版59-168	墓庭	マンガン釉甕形	宝珠形 有孔 2段・1条 2.1 0.3	10.1 28.0 21.6 15.8 11.25	なし	つまみ台は回転削り出し。鐳は平坦で端部も平坦。かえりは0.3cmとかなり低い。ロクロ成形後、外面回転ヘラ削り。下部から鐳は回転ナデ調整。内面に指頭痕あり。また、つまみ台から下方に小孔が33箇所ある。	マンガン釉を全体的に刷毛で施釉。	なし	—	—	

第22表 016号墓蔵骨器(身)観察表

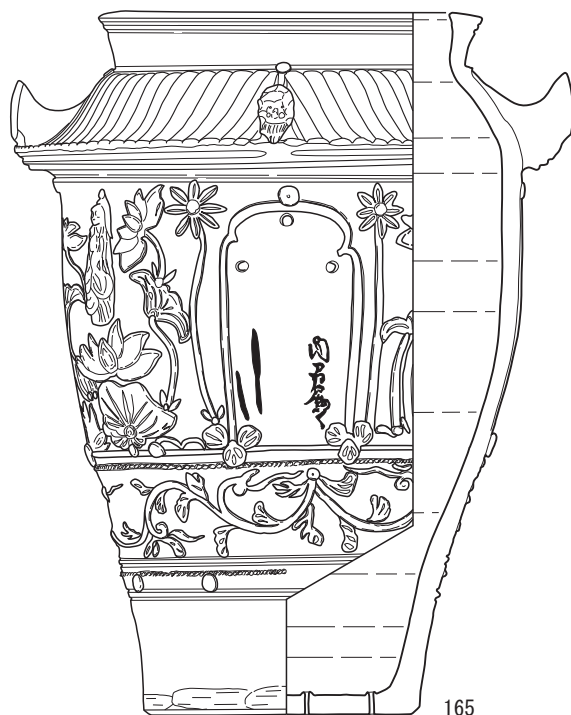
※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	大きさ (cm) ※	窓枠/屋門	窓数/形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯印	銘書	死去年	洗骨年	備考
1		第43図164 図版59-164	墓庭	マンガン釉甕形	32.0 44.7 24.0 60.5	瓦屋形	3個/3方	①なし ②凸1 ③凸3 ④凸3	肩部文様帯なし。胴部を横帯3から横帯4の間を縦帯で5つに区画。屋門下部は蓮華文の貼り付け。その他の区画は貼り付けの法師像と蓮華文と茎。胴下部は無文。	直ロ口縁で口唇部は内側にやや傾く。ロクロ成形後、外面口縁部から胴下部ナデ調整。内面は回転調整がみられる。	13個/不整円	マンガン釉を全体的に施釉するが、法師および蓮華文の区画は露胎。	なし	なし	—	—	
2		第43図165 図版59-165	墓庭	マンガン釉底付甕形	30.4 36.5 21.0 56.2	アーチ形	3個/3円	①凹2 ②凸1 ③凸2 ④凸2	底部は半裁竹管で押引きの立体的な瓦。降棟の先に獅子頭。胴部に蓮華文・茎・法師像の貼り付け。胴下部には唐草文と円文の貼り付け。	口縁部はやや外反し、口唇部は平坦だがやや外側に傾く。ロクロ成形後、胴上部静止ナデ調整。胴最下部はヘラ削り。内面は回転ヘラ削りとナデ調整。	15個/円	マンガン釉を全体的に施釉するが、銘書面および胴下部は露胎。	あり	なし	—	—	
3		第43図166 図版59-166	墓庭	マンガン釉甕形	24.8 31.8 20.3 48.6	アーチ形	2個/2方	①凹2 ②凸1 ③凹3 ④凹3	肩部文様帯は沈線で唐草文。胴部は沈線で蓮華文。胴下部文様帯は波状沈線文が1条。	口縁部はやや外反し、口唇部は平坦。ロクロ成形後、口縁部から胴下部をナデ調整。胴最下部をヘラ削り。内面は回転ナデ調整。	13個/円	マンガン釉を全体的に施釉する。	なし	なし	—	—	

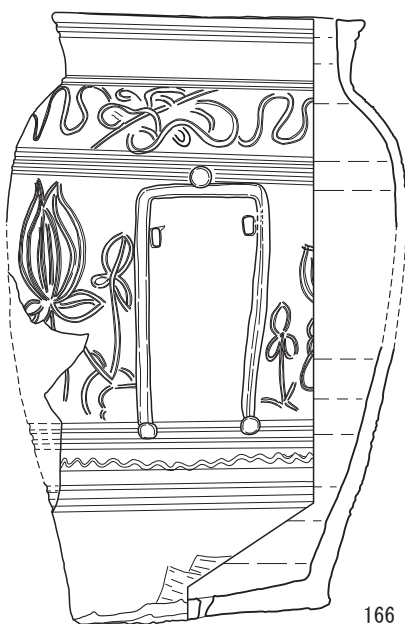
※大きさ(cm)は、ボージャー形・甕形は上から口径/胴径/底径/器高。家形・御殿形は上部(長軸×短軸)/底部(長軸×短軸)/器高。



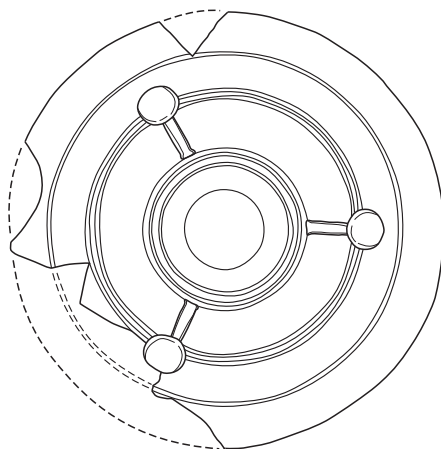
164



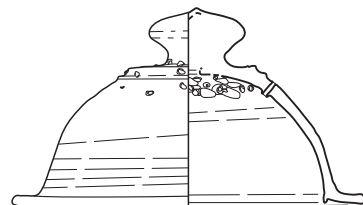
165



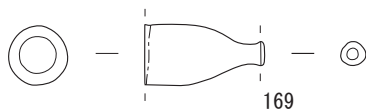
166



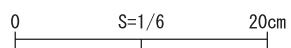
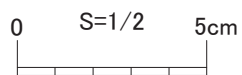
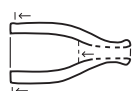
167



168



169



第43图 016号墓出土遺物

第6節 018号墓

(1) 遺構 (第44図～第45図、図版20)

018号墓は調査区丘陵の西斜面に位置し、墓口の方位は西南西である。丘陵斜面地に横穴を掘削し、墓室を構築した亀甲墓である。当墓は本調査以前に廃棄されており、墓口は開口し、蔵骨器の多くは墓庭へ廃棄されていた。

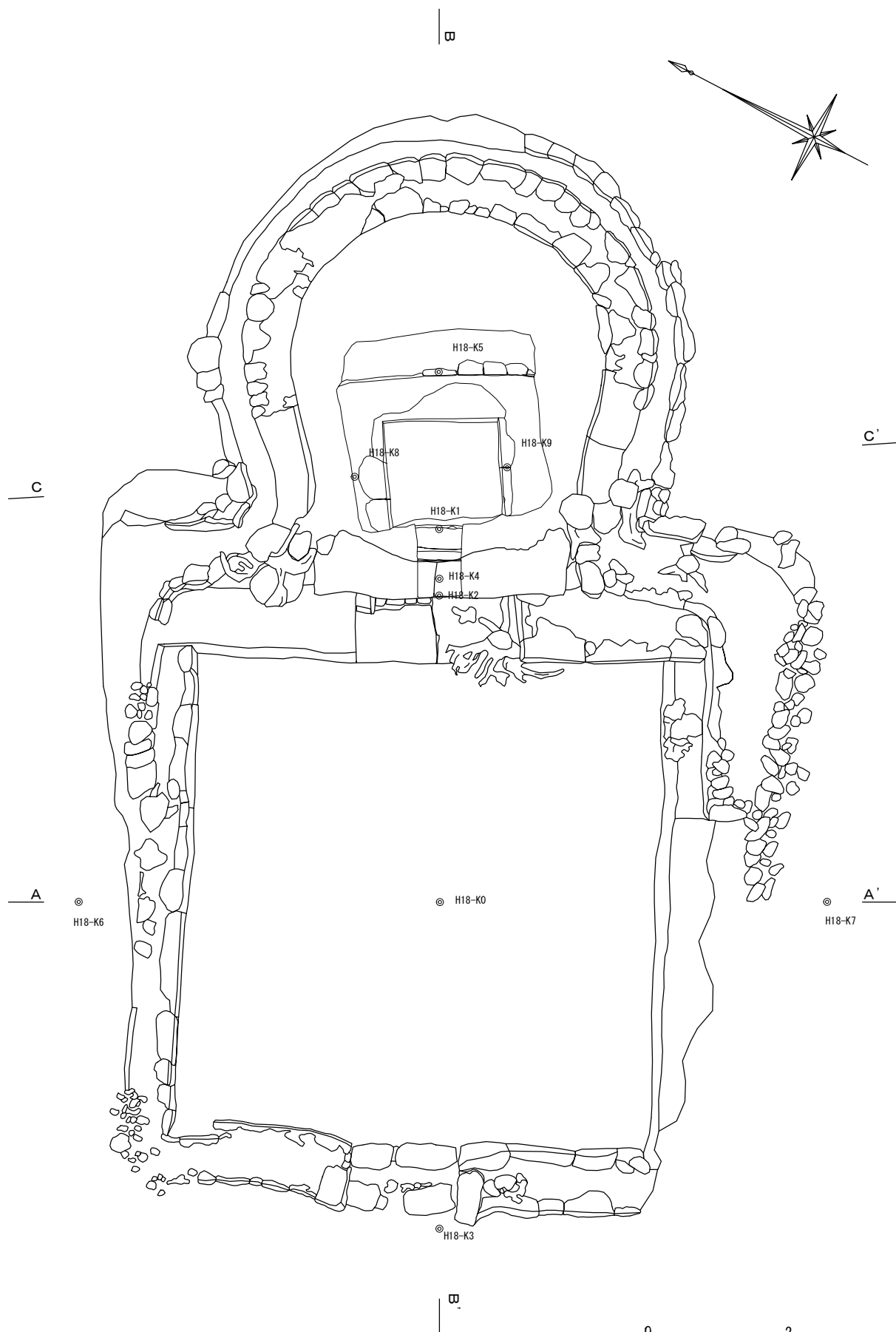
チジ(屋根)は平面形が後方で湾曲する馬蹄形を呈し、頂上から右側部分は欠損するがヤジョーマーイは高さ約0.5mの板状の切石を一行に廻らしたと見られる。ウーシ(臼)につながる屋根周縁は2条の石列で面を持つ方が上面を向き、石列の間は造成土で重鎮する。両列の表面に漆喰の塗布を施し、幅広い石列で周縁が廻るよう意匠される。チジ中央は緩やかな弧状を呈し、石敷きは見られなかった。仕上げは盛り土で行ったと見られる。マユ(眉石)は2つの切石で構成されている。眉頂部は平坦に仕上げ、眉端部に向かって下方に屈曲し、先端部付近で上方に反る。両端部は肥大しない。眉正面の底部には小さな段が施されている。スディイシ(袖石)の上にウーシ(臼)及びクワウーシ(子臼)が配置される。調査開始時はウーシが残存していたが、調査中に落石の危険が生じたため除去した。墓正面は岩盤の削り出しで、全面に漆喰塗布される。墓口の高さ約1m、幅約0.65m、奥行き(羨道の長さ)約1mである。サンミデー(供物台)は2つの板状の切石を並べ、墓庭との段差を設ける。向かって左隅に幅約21cm、奥行き18cmのカピアンジ(紙銭焼き場)が造られる。スディイシ(袖石)は墓正面左右に岩盤削り出しの1段で構築されるが、左袖石は板状切石を正面や側面に配して右袖石との面を揃えている。右袖石では漆喰が全面に塗布される。ハカヌナー(墓庭)は岩盤を掘り込んで平坦化を行っている状況が、左ナージミー(庭積み)の斜交層理と庭の岩盤床面で見られた斜交層理のラインが同一なことから窺える。岩盤の窪み部分に2～5cm大の石灰岩を砕いた小礫と石粉が混じった10YR6/8明黄褐色砂の造成土を重鎮し、その上層に1cm大の礫や枝サンゴが少量混じる黒褐色砂質土で表面を敷き均す様子が見られた。ワラビヌティ(童の手)は岩盤削り出しの後、小さな切石による雑な相方積みでナージミーの3分の1程度まで造られるが、先端部は相方積みのままである。左側のナージミーは岩盤を削り出して構築されているのに対し、右側は大きめの切石による相方積みで構築される。左側のナージミーの高さは約1.1mを測る。ジョー(門)は相方積みで高さ約1m、幅1.5m、奥行き約1mを測る。ハカヌナー(墓庭)は幅約6.6m、奥行き約6.8m、平面観は方形となる。

墓室は幅約2.7m、奥行き約2.7m、シルヒラシから天井までの高さ約1.8mを測る。タナ(棚)は奥側に2段、左右に1段で、2段目は平面観がコの字状となる。奥棚と左右棚の高さは均一であることから6類a型に相当する。棚は岩盤からの削り出しで造られるが、奥棚や右棚の縁石の一部に切石が列状に配されている。シルヒラシは横約1.6m、奥行き約1.3mを測り、石灰岩の砕いた小礫と石粉の混じった10YR7/6明黄褐色砂を敷き均している状況が窺えた。

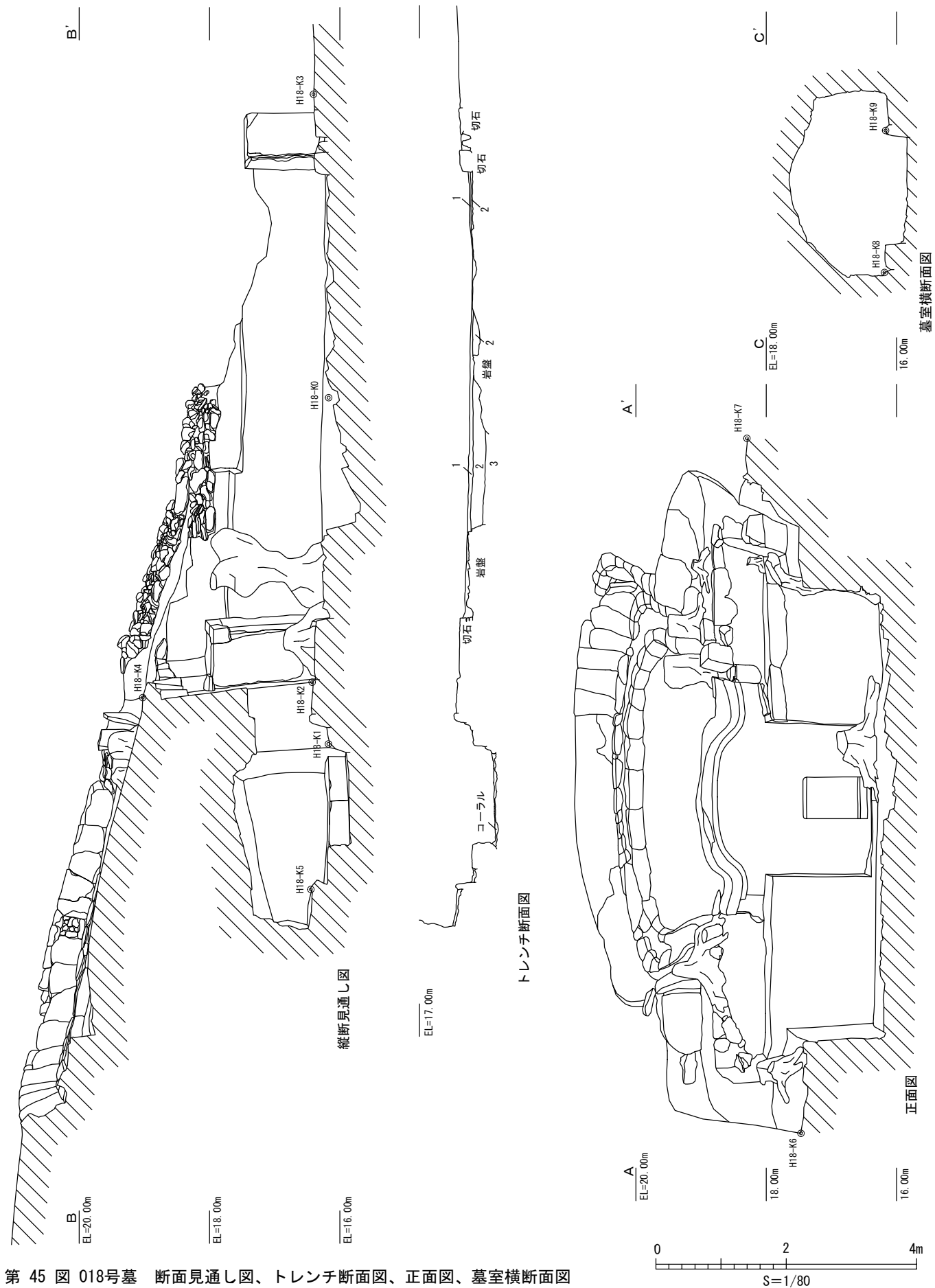
本墓の造墓年代は明らかでないが、墓の使用時期は最も古い銘書が荒焼御殿形で見られた19世紀半ばで、最も新しい銘書が明治45年(1912)であることなどから、19世紀半ばから20世紀初頭まで使用された墓であると考えられる。

(2) 遺物 (第46図～第47図、図版60)

018号墓から本土産磁器、沖縄産施釉陶器、煙管(雁首)が出土した。銘書より古波蔵姓が確認できた。



第 44 图 018号墓 平面图



第 45 図 018号墓 断面見通し図、トレンチ断面図、正面図、墓室横断面図

第 46 図 170、171 は荒焼御殿形の蓋と身のセットである。墓室からの出土だが棚やシルヒラシで割れた状態で検出され接合により完形資料となった。蓋は入母屋型で大棟に一对の鯨が乗る。降棟の先端に装飾は見られない。身は位牌形の屋門を貼り付け、その両側と側面に蓮華に乗った法師像を貼り付ける。その下部には左右向かい合う馬の像が見られる。蓋および身で銘書が見られた。身の銘書面に「道光貳拾一年壬寅正月六日／死去／兄／古波蔵筑登之／同貳拾三年甲辰六月十二日洗骨」とあり、蓋内面にも同様の銘書が墨書される。これより被葬者は「古波蔵筑登之」で道光 21 年（または道光 22 年）に死去し、道光 23 年（または道光 24 年）に洗骨されたことが分かる。

第 47 図 172、173 は上焼御殿形である。蓋は左棚から、身は墓庭と墓門前から出土した。接合により完形資料となる。上江洲編年の 1810～1940 年の資料となる。

第 47 図 173 はマンガン釉甕形の蓋である。墓室から出土。蓋内面に「明治四拾五年旧五月／■■■／五日洗骨／古波蔵丑妻」との銘書があり、被葬者は「古波蔵丑妻」で明治 45 年（1912 年）に洗骨されたことがわかる。図化した副葬品は墓室や墓庭から出土した。第 25 表、第 47 図 175、176 のとおり。

第23表 018号墓蔵骨器(蓋)観察表

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	つまみ/屋根形状 接合部孔 つまみ台・圏線 鐫(cm) かえり(cm)	つまみ台径 口径/棟長 内径/桁行長 器高/梁行長 体部高/器高	文様	調整痕	釉薬	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
1		第46図170 図版60-170	墓室	マンガン釉 御殿形	入母屋形	— 54.5 53.1 40.0 39.5	大棟に鯨一对。降棟の先端に装飾なし。屋根は一層。瓦を丁寧に表現している。	型成形後、鯨は丁寧に削られる。外面丁寧にナデ調整後に施文される。内面横方向のナデ調整主体に、面の境目周辺は縦方向のナデ調整。	マンガン釉を表面全面的に施釉。身との接合面は露胎。	あり	—	道光23 (1843)	
2		第47図172 図版60-172	墓室	上焼御殿形	入母屋形	— 43.0 48.7 38.2 31.2	大棟に鯨一对。降棟の先に獅子頭。屋根は二層。正面に格子文や花文、柱状突帯の貼り付け。	型成形後、外面全体に丁寧にナデ調整後に施文。口唇部は横位のナデ調整。	白化粧後、瓦部分に鉛釉、その他の意匠に緑釉を施釉。身との接合面は露胎。	なし	—	—	
3		第47図174 図版60-174	墓室	マンガン釉甕形	宝珠形 有孔 3段・なし 2.5 なし	9.8 30.95 25.0 17.35 11.9	なし	つまみ台回転削り出し。鐫はやや反り、端部は平坦。ロクロ成形後、外面回転ナデ調整。内面も回転痕がみられる。	マンガン釉を表面全面的に施釉。	あり	—	明治43 (1910)	

第24表 018号墓蔵骨器(身)観察表

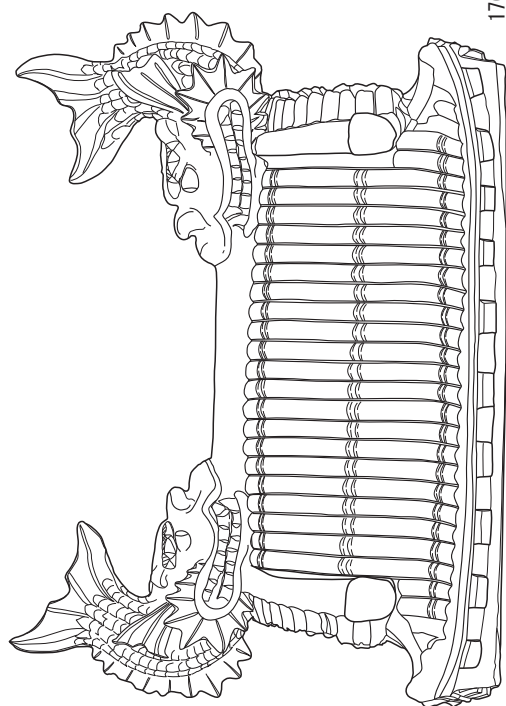
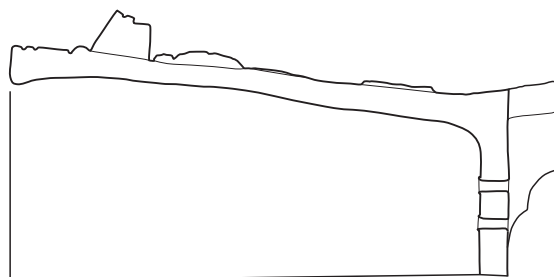
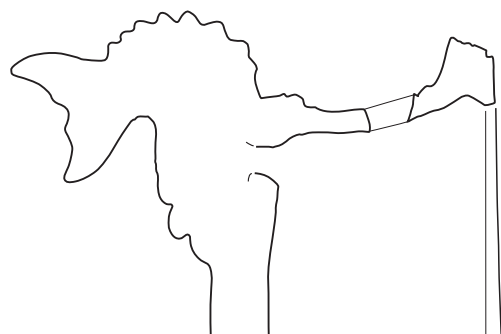
※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	大きさ (cm) ※	窓枠/屋門	窓数/形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯印	銘書	死去年	洗骨年	備考
1		第46図171 図版60-171	墓室	マンガン釉御殿形	50.5×34.5 44.5×44.3 43.0	位牌形 貼付	1個/1方	—	屋門の両側と側面に蓮華に乗った法師像を貼り付け。蓮華の茎は沈線。正面蓮華の下に突帯を貼り付け、左右向かい合う馬の像を貼り付ける。背面は無文。	型成形後、外面は丁寧にナデ調整後施文をする。内面は口縁部付近は横方向のナデ調整。胴部は縦方向のヘラ削り。	(60個)/ 円	マンガン釉を表面全体的に施釉するが、口唇部と銘書面は露胎。	なし	あり	道光21 (1841) or 道光22 (1842)	道光23 (1843) or 道光24 (1844)	
2		第47図173 図版60-173	墓庭・ 墓門前	上焼御殿形	48.0×35.0 38.0×26.3 44.6	首里城?	—	—	口唇部から8cm下に底をつける。口縁部下は格子文および花文が一对。底中央と降棟に獅子頭と唐破風の屋門。正面は立ち獅子と蓮華・蓮葉の貼り付け。	型成形後、内外面ともに丁寧にナデ調整。	12個/円	白化粧後、鉛釉、緑釉を施す。	なし	なし	—	—	

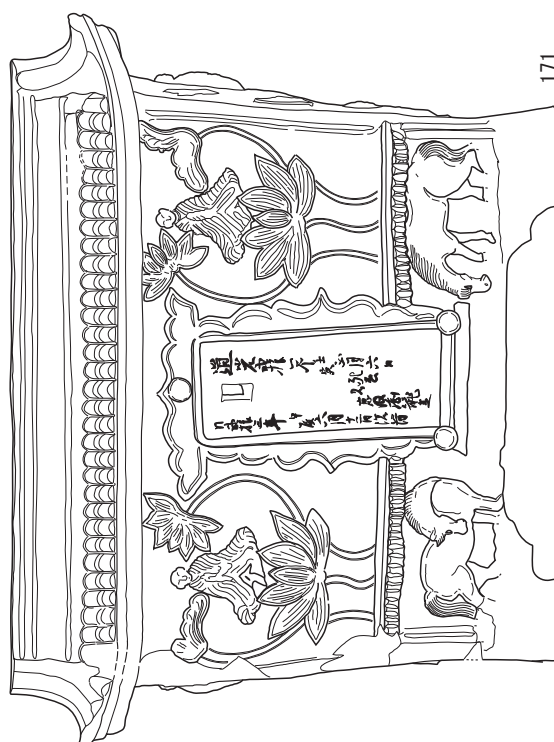
※大きさ(cm)は、ポジャー形・甕形は上から口径/胴径/底径/器高。家形・御殿形は上部(長軸×短軸)/底部(長軸×短軸)/器高。

第25表 018号墓 陶磁器他観察表

No.	挿図番号 図版番号	出土地	器種	分類	法量 (cm)	観察事項	備考
1	第47図 175 図版60-175	墓庭	瓶	沖縄産施釉陶器	口径:5.6 器高:12.9 底径:6.0	白化粧に透明釉。外面は壺付以外に、内面は口縁内に施釉される。口唇部と把手にコバルト、外体面にコバルトと鉛色釉の線条文、高台にコバルトの線条文を施す。素地は浅黄橙色。	
2	第47図 176 図版60-176	墓室	煙管 (雁首)	沖縄産施釉陶器	長さ:2.75	火皿の径1.35cm。重量4g。白色の素地に外面から火皿途中まで緑釉を施す。ラウ接合部の径1.2cm。素地は乳白色。	



170



171

西漢
景帝
三年
二月
己未
葬

0 S-1/6 20cm

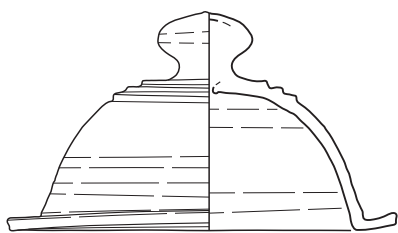
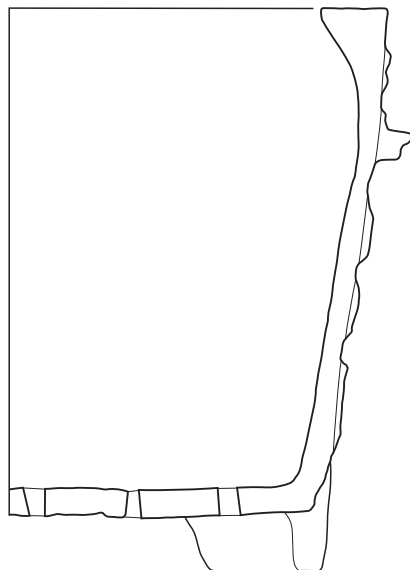
第46图 018号墓出土遺物 1



172



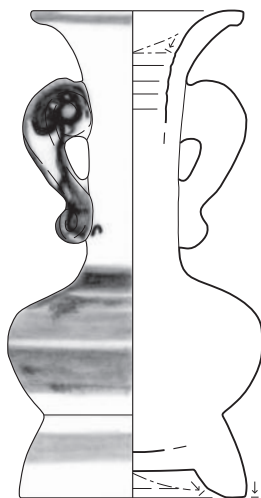
173



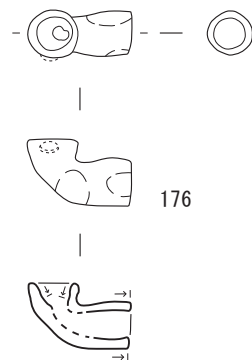
174

明地松云
古地松云
古地松云

0 S=1/6 20cm



175



176

0 S=1/2 5cm

第47图 018号墓出土遺物 2

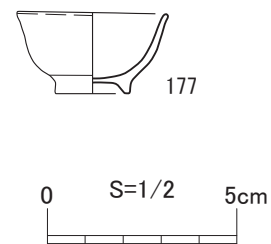
第7節 019号墓

(1) 遺構 (第49図～第50図、図版21)

019号墓は調査区丘陵の西斜面に位置し、斜面に横穴を掘削し、墓室を構築した亀甲墓である。当墓も本調査以前に廃棄がされており、墓口が開口していた空墓である。

チジ(屋根)は残存状況が悪く、墓正面のウーシ(臼)から伸びる屋根周縁の石列やヤジョーマーイの一部しか見られないが、その形状から後方で湾曲する馬蹄形状を呈することが推測される。ヤジョーマーイは板状の切石を列状に配しており、ウーシ(臼)の後方は高さ約0.53mの比較的大きな切石を使用し、屋根周縁の列で後方の列は約0.3mとやや小振りな石材を使用する状況が確認された。屋根周縁の石列は2条の石列で面を持つ方が側面を向き、石列の間は造成土で重鎮する。チジの中央は緩やかな弧状を呈していたとみられ、石敷きは見られなかった。墓正面のマユ(眉石)は3つの切石で構成される。眉頂部は平坦に仕上げ、眉端部に向かって下方に屈曲し、先端部付近で上方に反る。両端部は肥大しない。眉正面の底部には小さな段が施されている。スディイシ(袖石)の上にウーシ(臼)及びクッウーシ(子臼)が配置される。墓正面は岩盤の削り出しで全面に漆喰が塗布される。墓口の高さ約0.95m、幅約0.6m、奥行き(羨道の長さ)約1.2m。羨道はサンミデー(供物台)よりも一段高くなる。サンミデーは幅約2.4m、奥行き約1.4mで岩盤を削って平面化をする。向かって左隅に幅約26cm、奥行き約15cm、高さ約10cmの切石をL字状に組み合わせたカビアンジ(紙銭焼き場)が見られた。スディイシ(袖石)は墓正面左右に岩盤を削り出して構築されるが、正面や側面に高さ約1.5mの板状の切石を配して面を揃えている。墓庭は岩盤を掘り込んで平坦化を行っている状況が見られた。岩盤の窪み部分に2～5cm大の石灰岩を砕いた礫と石紛が混じる10YR6/8明黄褐色砂層を重鎮し、その上層に1cm大の礫や枝サンゴが少量混じる黒褐色砂質土で表面を敷き均す。隣墓の018号墓でも同様な造成状況が見られた。ワラビヌティ(童の手)は岩盤削り出しのナージミー(庭積み)の上部に小振りな板状の切石を列状に配する様子が窺えた。右ナージミーの高さは約1.3m、低い箇所では約1.2mを測る。左右のナージミーは両方とも岩盤削り出しで構築され、右ナージミーでは高さ約0.45m、幅約0.7mの袖墓が1基見られ、床上には人頭大の礫が敷き均されている状況が窺えた。袖墓も開口しており、空墓であった。ハカヌジョー(墓門)は岩盤削り出しで墓口の正面ではなく、南側へずれた所に造られる。高さ約1m、幅約1.4m、奥行き約1.8mを測る。ハカヌナー(墓庭)は幅約6m、奥行き約6.2m、平面観は方形となる。

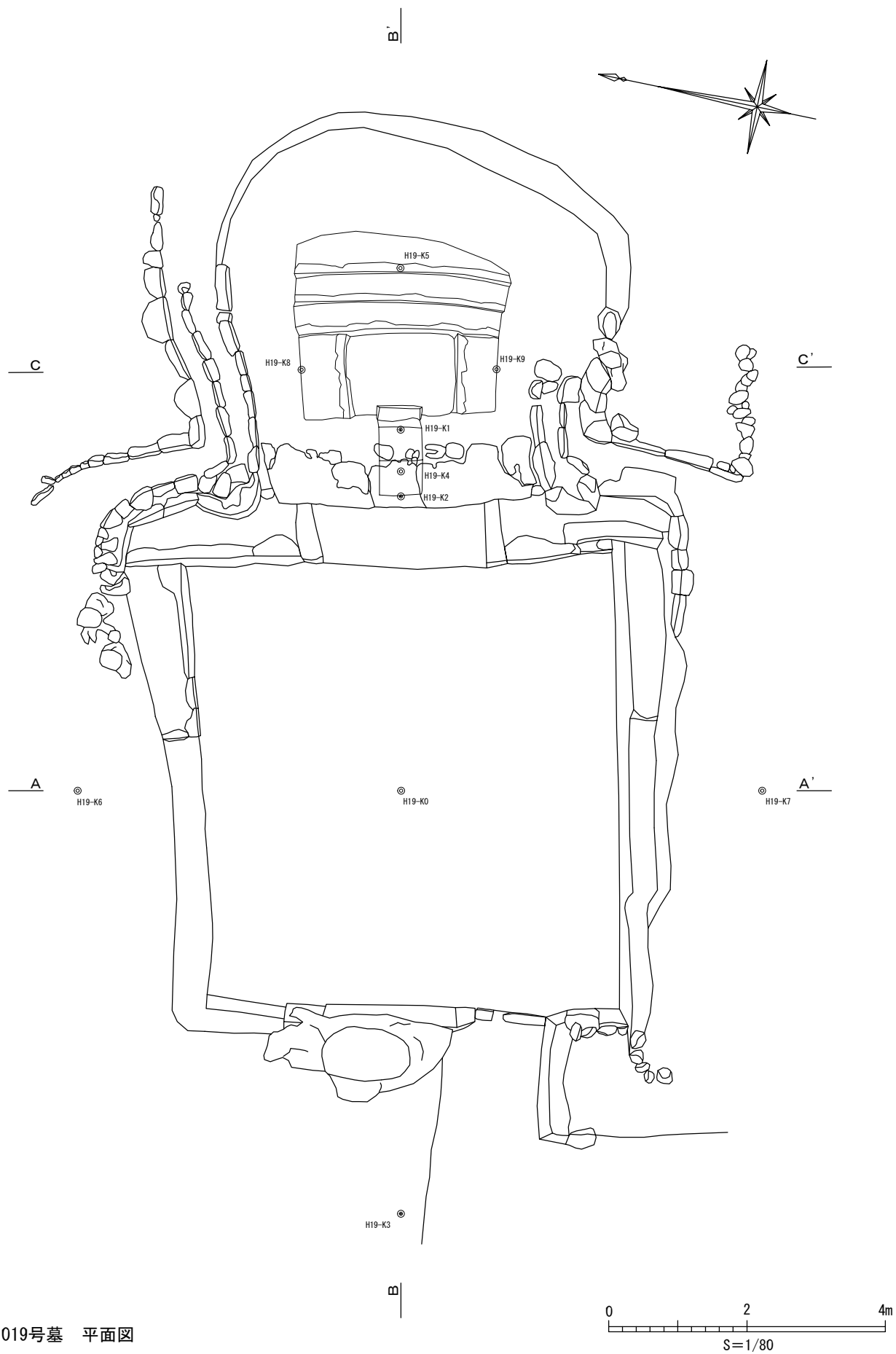
墓室は幅約3m、奥行き約2.4m、シルヒラシから天井までの高さ約2mを測る。墓室入口には岩盤を直方体状に削り出した段差が一段見られた。タナ(柵)は奥側に3段、左右に1段で、3段目は奥柵と左右の柵に段差が設けられていることから5類b型に相当する。柵は縁石に切石を列状に配して、岩盤と切石の間を造成土で重鎮する。シルヒラシは幅約1.6m、奥行き約1mを測り、石灰岩を砕いた小礫と石紛の混じった10YR7/6明黄褐色砂を敷き均している状況が窺えた。本墓の造営年代について不明であり、蔵骨器の出土もなかったため使用時期についても不明である。



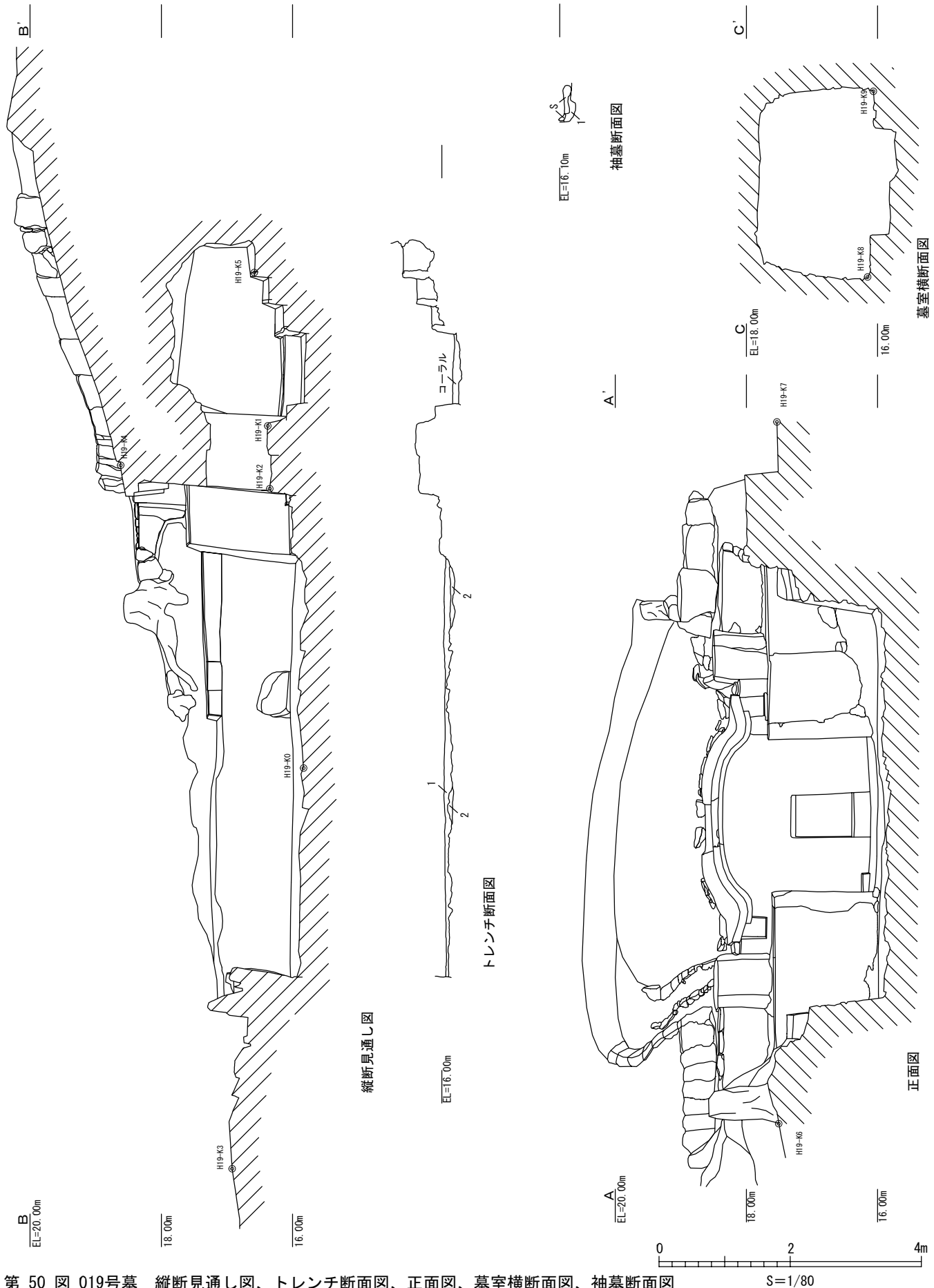
第48図 019号墓出土遺物

(2) 遺物 (第48図177、図版60)

蔵骨器出土は無く、本土産磁器の小杯が1点カビアンジから出土した。



第 49 图 019号墓 平面图



第 50 図 019号墓 縦断見通し図、トレンチ断面図、正面図、墓室横断面図、袖墓断面図

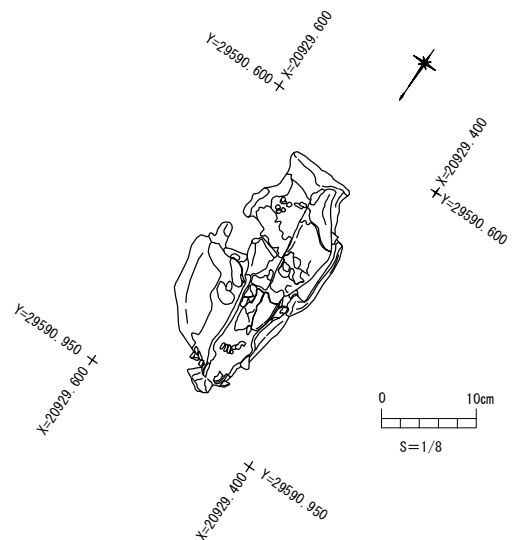
第8節 021 号墓

(1) 遺構 (第 52 図～第 53 図、図版 23)

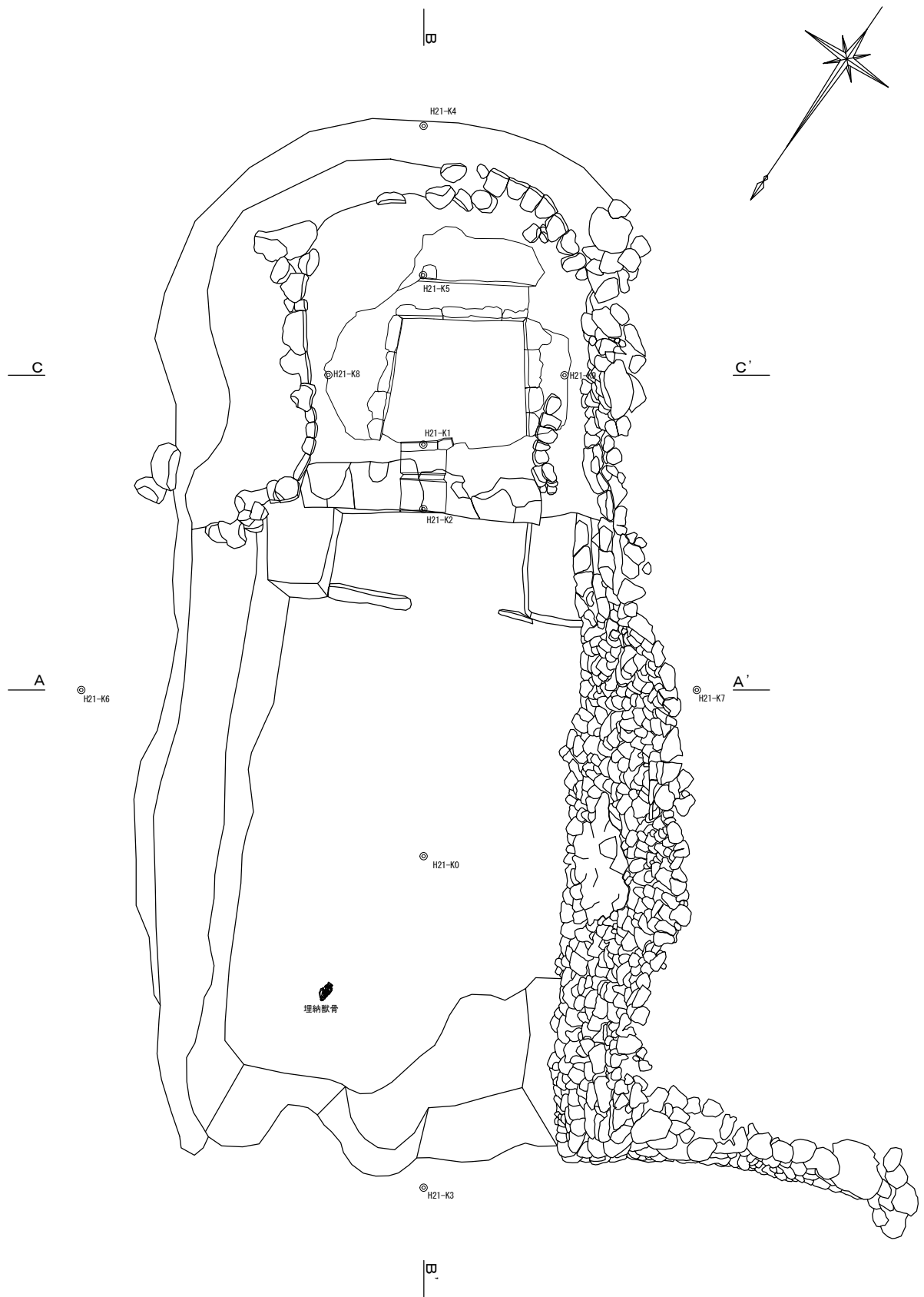
021 号墓は調査区西側斜面丘陵の北向きの斜面に位置し、墓口は北北西を向く。斜面地に墓室を構築した亀甲墓である。当墓は本調査以前に廃棄され、墓口は開口していた。板状の閉塞石が左袖石に立てかけられ、シルヒラシやサンミデーに破損した蔵骨器が散乱していた状況であった。

チジ（屋根）は石列の残存状況から平面形が後方で湾曲する馬蹄形状を呈することが推測される。ヤジョーマーイは見られない。ウーシ（臼）に繋がる屋根周縁の石列は正面側に小振りな切石を使用し、屋根の内側及び上側に面を向ける。後列の石列は外側および上側に面を向ける。チジ中央はほぼ平坦で盛り上がりや石敷きは見られない。マユ（眉石）は4個の切石で構成されており、眉頂部は平坦に仕上げ、眉端部に向かって下方に屈曲し、先端部付近で上方に反る。端部が反り上がり、両端部は5cmほど厚みが増す。眉正面の底部には小さな段が施されている。正面向かって左側のウーシ（臼）は見られるが、右側のウーシは欠落する。左側のウーシは眉端部と接し、眉石より内側に配置される。クウーシ（子臼）は見られない。墓正面は岩盤の削り出しで、墓口に厚み約0.13m、幅約0.97mのジョウカブイ（門被い）と幅約0.2m、高さ約1.2mのジョウハシラ（門柱）が嵌め込まれている。墓口は幅約0.63m、高さ約1m、奥行き（羨道の長さ）0.83mを測る。ジョウカブイと岩盤の隙間に小振りな切石による相方積みが見られる。羨道の床は2個の切石を敷き、サンミデー（供物台）や墓室（シルヒラシ）と段差を設ける。サンミデー（供物台）は1段で、スディイシ（袖石）と直線上に切石を列状に配して墓庭と区画する。縁石と墓正面の間に石灰岩を砕いた石粉が混じる造成土で重鎮する状況が窺えた。カピアンジ（紙銭焼き場）は見られない。スディイシは墓正面左右に岩盤削り出しの1段で構築されている。墓正面に一部漆喰が残存するが、スディイシでは斜交層理が顕著に見られる。墓庭は岩盤を掘り込んで平坦化を行っている。ワラビヌティ（童の手）は見られず、残存する右側のナージミー（庭積み）は岩盤削り出しで構築される。左側のナージミーは022号墓の背面石積みの構築により埋没または消滅したと考えられる。右側のナージミーの上端では018号墓や019号墓で確認された段差は見られなかった。ハカヌジョー（墓門）は見られなかったが、現存の墓庭の法量は奥行き約6.1m、幅約4.2mを測る。墓庭の北東隅付近で獣（偶蹄目イノシシ科）の頭骨が出土した。造成土層より検出され、ピットの掘り方が不明瞭である。南北軸に沿って犬歯が北を向いており、北を意識した埋納と考えられる。

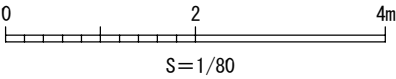
墓室は棚を含めた幅が約3.3m、奥行きが約2.8m、シルヒラシから天井までの高さ約1.6mを測り、岩盤に横穴を掘り込んで造られた墓室である。棚（タナ）は奥側に2段、左右に1段ずつ見られる。2段目の縁部は切石が列状に配されており、その内側には石灰岩を砕いた小礫と石粉が混じる明黄褐色砂で重鎮されている状況が確認できた。2段目はシルヒラシ側の平面観が無段のコの字状を呈するが、奥壁および左右の側壁の平面観は凸状となり、奥壁の1段目の天井部分もアーチ状を呈していることから本来の棚



第 51 図 獣骨埋納平面図



第 52 图 021号墓 平面图





第 53 図 021号墓縦断見通し図、トレンチ断面図、墓室平面図、正面図、墓室横断面図

の形状は出窓状であったと考えられる。よって、後世のある時期に柵を増築し、左右壁を柵と同じ高さに掘り込んで面を揃えたと見られる。現況のシルヒラシの法量は幅約 1.7m、奥行き約 1.7mを測る。奥壁の 1 段目の高さはシルヒラシから約 0.7m。2 段目の高さは約 0.3m。

本墓の造墓年代は不明だが、墓室の本来の柵形状は奥壁および左右の側壁からなる出窓状で墓室類型の 2 類 b 型であったと推測されるが、切石で構築された柵の追加など後世に造り替えた時期があることが示唆される。使用年代については、図化を見送ったボージャー型の身で安里分類のⅢa式（1700～1800 年）と蓋で Vb 式（1740～1770）が出土していることや、確認された銘書で最も古いものが第 54 図 179 身の「大清乾隆四／■■■[拾年カ]／…」で乾隆 40 年（1775）であることなどから 18 世紀代に使用が始まり、最も新しい銘書は「大正七年…／骨古波蔵山戸」で大正 7 年（1918）が見られたことなどから 20 世紀の初頭まで使用された墓であると考えられる。

（2）遺物（第 54 図～第 55 図、図版 61～図版 62）

021 号墓からは蔵骨器、本土産磁器、沖縄産陶器、煙管が得られた。蔵骨器はボージャー形、甕形、御殿形が出土している。そのほとんどはサンミデー（供物台）に廃棄されていた。以下、残存状況の良いものを図化した。銘書から宮城姓や古波蔵姓を確認した。また、第 55 図 183 のマンガン釉甕形の蓋より「前のろくもい」の銘書が確認されたことは特筆される。

第 54 図 178、179 はボージャー形でシルヒラシに横たわった状態で出土した。原位置は保っていないものの、唯一蓋と身がセットで分かる資料である。178 の蓋はつまみやつまみ台が見られない笠形である。安里分類のⅦ式（1750～1820 年）に相当する資料である。蓋内面に「なへ」と銘書がある。身は頸部沈線が 3 本、胴部は無文で、平葎形のマド枠が貼り付けられている。安里分類のⅣ式（1720～1820 年）に相当する。マド枠下方に銘書が見られ「大清乾隆／四■■■[拾年カ]／■■■新■■…や／うし宮城■■[母カ]／なへ」と読める。宮城姓が確認できる。

第 54 図 180 はボージャー形の身である。口縁部は玉縁状で内傾し、頸部沈線が 2 本、胴部は無文である。唐破風形のマド枠が貼り付けられる。安里分類のⅢc 式（1700～1800 年）に相当する。墓庭（サンミデー）より出土。

第 54 図 181 はマンガン釉甕形の身である。肩部文様帯は無文で、横帯 3・4 は貼り付けの突帯。瓦屋形の屋門が貼り付けられ、柱には蓮華を意匠した模様が見られる。胴部文様帯に蓮華に乗る法師像を貼り付けし、蓮華および茎や法師像の上方の花文も貼り付けにより施される。胴下部文様帯は蓮華文の貼り付けが見られる。安里編年のⅡ期（1770～1800 年代）の資料である。

第 54 図 182 はマンガン釉甕形の身である。横帯 3 は貼り付けの突帯だが、横帯 4 は 2 本の沈線となる。肩部文様帯は沈線で葉文を施し、胴部文様帯には沈線で蓮華文、胴下部文様帯は櫛描波状文が 2 条見られる。屋門は貼り付けのアーチ形。安里編年のⅣ～Ⅴ期（1850～1920 年）と見られる。

第 55 図 183 はマンガン釉甕形の蓋でつまみは宝珠形で鏝や端部を平坦に仕上げる。つまみ台から棟状の突帯が十字状に 4 本伸び、上面観を 4 つに区画する。突帯は体部中央で止まり、突帯下端部に左右対称の渦巻き状の装飾を棟と平行に貼り付ける。全体的にとっても丁寧に作られ、マンガン釉を表面全体に施釉する。蓋内面に「卯八月廿三日前のろくもい洗骨仕申候」とある。墓庭から出土。『琉球国由来記』に記載される市内の祭祀場は城間を含む十五村落あり、城間東空寿古墓群が所在する城間にも「巫」がおり、稲二祭や麦二祭を執り行っている。城間集落にはノロの家系につけられた屋号として「ノロ殿内」

が残っている^{註1}。前のろくもいの「くもい」は接尾敬称辞であり^{註2}、この銘書から被葬者は前代のノロで卯八月廿三日に洗骨をしたことが分かる。ただし、ノロに関する銘書はこの1点のみのため本墓がノロ墓という確証はないが、城間ノロの墓を考える上で貴重な銘書である。

第55図184は上焼コバルト釉御殿形で屋根は入母屋形となる。大棟に一对の鯢を配し、唐破風頂部に龍頭が施される。龍頭および降棟の先はツノになり、中央に格子文と花文が貼り付けられる。庇上面は軒瓦を表現し、重ね焼きの跡が見られる。身と接する部分に銘書が見られ「大正七年…／骨古波蔵山戸」とあり、大正7年(1918)に洗骨されたことが考えられる。

第55図185～188は墓室シルヒラシから出土した小杯である。全て沖縄産施釉陶器で、185、187、188は白土を用いて成形し、透明釉を施している。素地は灰白色を呈する。185の法量は口径3.4cm、器高1.65cm、底径1.8cmを測る。187の法量は口径3.6cm、器高2.25cm、底径1.9cmを測る。188の法量は口径4.6cm、器高2.45cm、底径2.2cmを測る。186は褐色釉を畳付け脇から内底面にかけて施す。素地はにぶい黄橙色を呈する。法量は口径3.8cm、器高は1.9cm、底径2.1cmを測る。

第55図189は本土産磁器の小杯である。法量は口径6.8cm、器高3.0cm、底径2.4cmを測る。口縁は直口で、畳付け以外を透明釉で全面施釉する。高台外面にコバルトで波文が1条見られる。外底面にコバルトで文字らしき文様が見られる。墓庭から出土。

第55図190は本土産磁器で口縁が直口する小杯である。法量は口径5.7cm、器高2.6cm、底径2.1cmを測る。畳付け、外底面以外は透明釉で全面施釉される。内底面に赤色で花文が施される。外面下部は4箇所を面取りした形状となる。底部は面取りした稜線に沿って直線状に成形し、平面観が八角形となる。墓庭から出土。

第55図191は沖縄産施釉陶器で渡名喜瓶と呼称される瓶である。法量は口径3.6cm、器高20.8cm、底径6.0cmを測る。黒色釉を高台脇まで施し、高台は露胎となる。胴部中央に3条の沈線が巡る。素地は灰色を呈する。墓室から出土。

第55図192は沖縄産施釉陶器の瓶子で、口縁部が打割される。法量は器高が残存で15.9cm、底径7.4cmを測る。白化粧の後、透明釉が施される。畳付けは露胎で、頸部内にコバルト釉が一部施釉される。胴部外面にコバルト釉で撫子文が描かれる。素地は浅黄褐色を呈する。

第55図193は青銅製の煙管の雁首である。法量は長さ6.7cm、幅は1.7cm、火皿の径は1.3cm、首部の立ち上がりは2.05cmを測る。重量は13g。ラウ接合部の長径が1.3cm、短径が1.0cmである。上面は灰を落とすために叩いた跡の窪みが見られる。下半部には布目の跡が見られる。墓室から出土した。

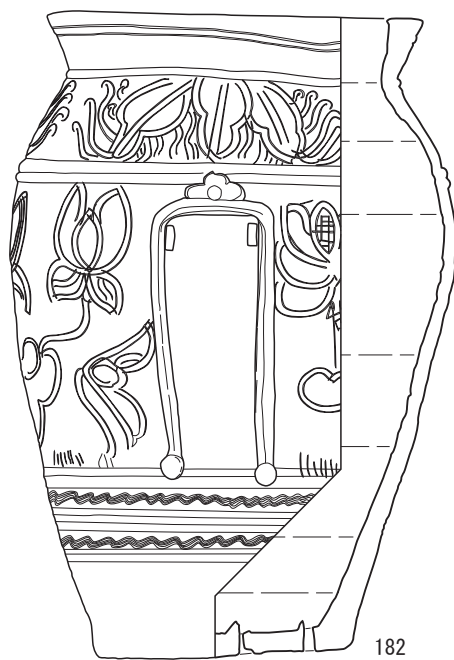
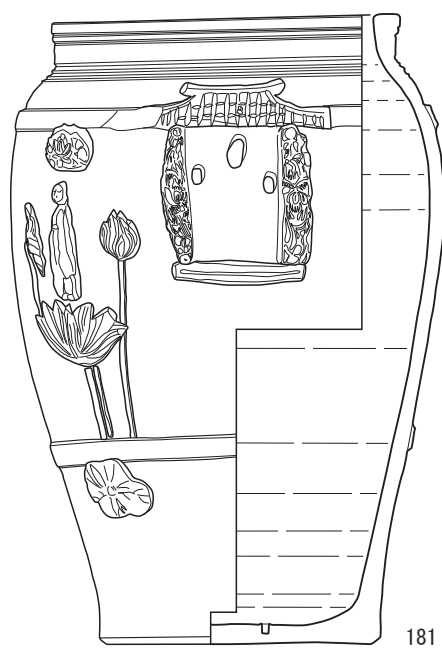
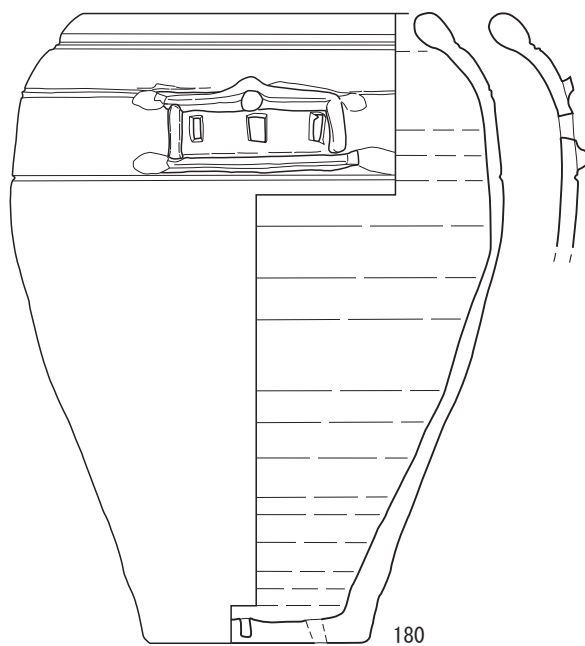
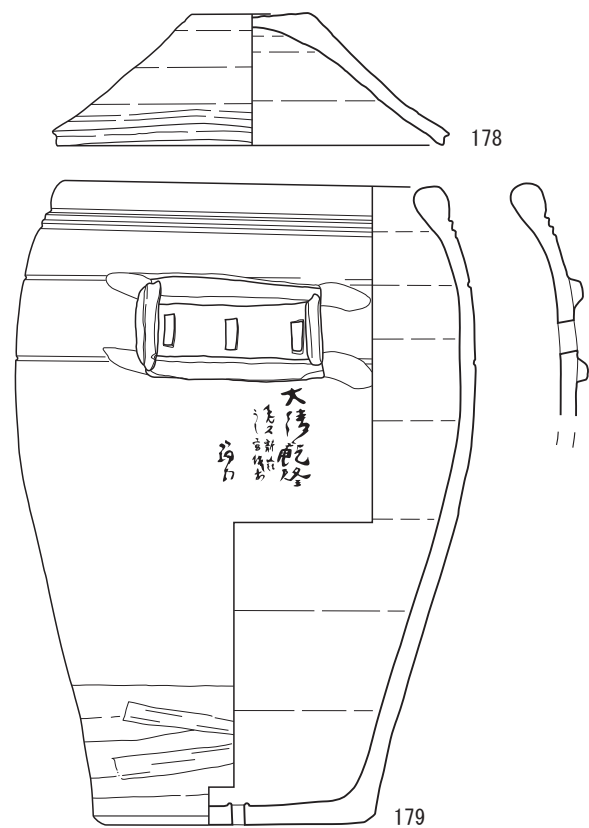
第55図194は金属製の延べ煙管である。法量は長さ11.5cm、吸口径0.5cm、火皿の径1.0cm、首部の立ち上がりは1.7cmを測る。継ぎ目が上面に見られる。火皿近くの上面は193と同じような灰を落とすために叩いた跡が多数残る。

<参考文献>

註1 城間字誌編集委員会『城間字誌 第一巻「城間の風景」』浦添市城間自治会

註2 沖縄タイムス社1983年「ノロ[祝女]」『沖縄大百科事典 下』

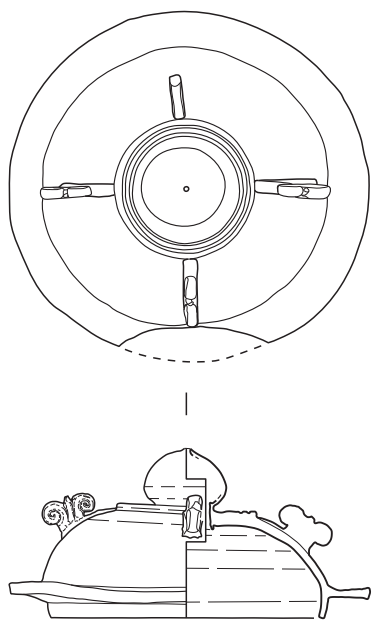
54



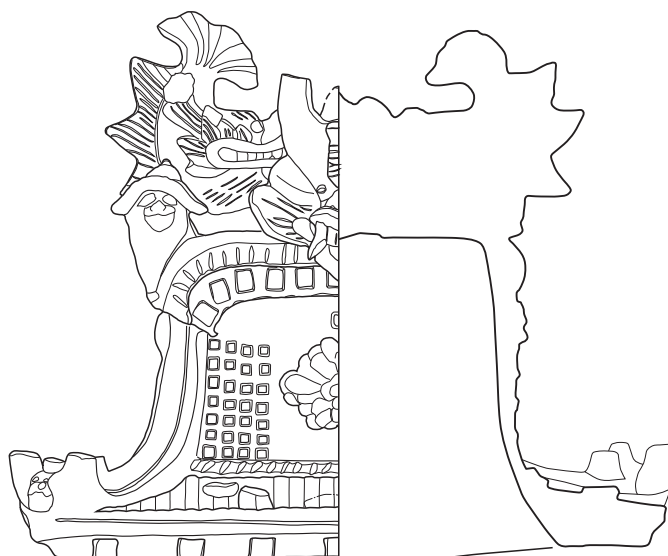
0 S=1/6 20cm

第54图 021号墓出土遺物 1

五女山
骨董坑山戸

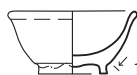


183

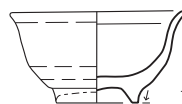


184

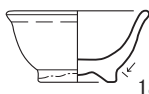
0 S=1/6 20cm



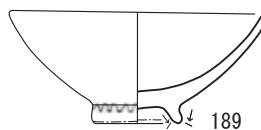
185



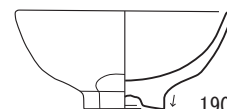
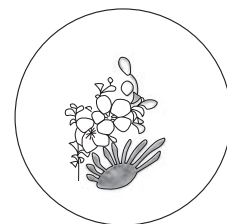
188



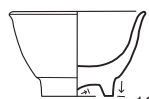
186



189



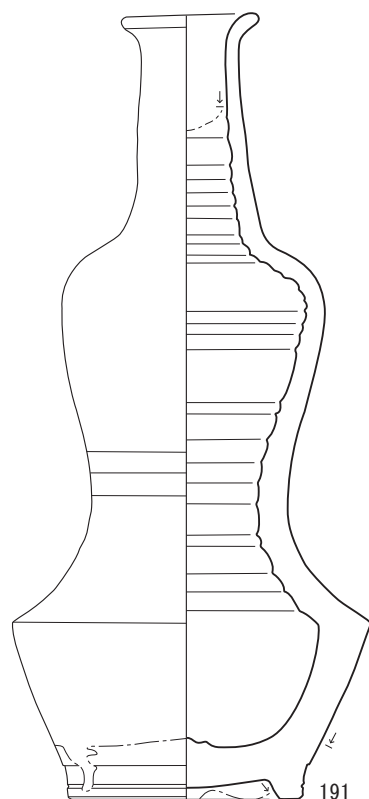
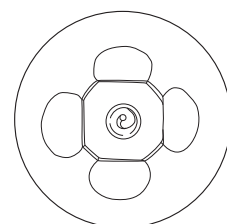
190



187



193



191



194



0 S=1/2 5cm

第55図 021号墓出土遺物 2

第26表 021号墓蔵骨器(蓋)観察表

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	つまみ/屋根形状 接合部孔 つまみ台・圏線 鐫(cm) かえり(cm)	つまみ台径 口径/棟長 内径/桁行長 器高/渠行長 体部高/器高	文様	調整痕	釉薬	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
1		第54図178 図版61-178	墓室	ボージャー形	なし 無孔 なし・なし — —	— 30.7 30.5 10.5 10.5	なし	つまみ台およびつまみなしの笠形。鐫端部は中央が窪む。ロクロ成形後、内外面回転ナデ調整。	なし	あり	—	—	
2		第55図183 図版61-183	墓庭	マンガン釉甕形	宝珠形 有孔 1段・2条 3.0 0.15	11 21.5 20.7 13.5 9.0	つまみ台から棟状の突帯が十字状に4本伸びる。上面観体部を4つに区画する。突帯は体部中央で止まる。突帯下端部に左右対称の渦巻き状の装飾を棟に平行に貼り付ける。	鐫は平坦で、鐫とかえりの端部は平坦に作られる。ロクロ成形後、内外面ともに回転ナデ調整。全体的に丁寧につくれる。	マンガン釉を表面全体に施釉する。鐫内面に自然釉がみられる。	あり	—	—	
3		第55図184 図版61-184	墓庭	上焼コバルト釉御殿形	入母屋形	— 36.3 52.3 41.0 43.4	大棟に一对の鯪。唐破風頂部に龍頭。龍頭および降棟の先はツノになる。中央に格子文と花文を貼り付け。底上面は野互。重ね焼きの跡がみられる。	型成形。外面は全体に丁寧なナデ調整の後に施文。内面は横方向のナデ調整。	全体に白化粧後、鉛釉、緑釉、コバルト釉を施釉。内面は白化粧のみ。	あり	—	大正7 (1918)	

第27表 021号墓蔵骨器(身)観察表

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	大きさ (cm) ※	窓枠/屋根 門	窓数/形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯印	銘書	死去年	洗骨年	備考
1		第54図179 図版61-179	墓庭	ボージャー形	29.0 36.5 20.5 51.0	平葺形	3個 1方2方	①凹3 ②凹1 ③凹1 ④—	なし	口縁部は玉縁状でやや直口。ロクロ成形後、胴上部は回転ナデ調整。胴下部は静止ナデ。胴最下部はへら削り。内面回転へら削り。口縁部から胴下部まで回転ナデ調整。	6個/円	なし	なし	あり	乾隆40年代 (1775～1784)		
2		第54図180 図版61-180	墓庭	ボージャー形	24.5 34.4 19.2 46.0	唐破風形	3個 1方2円	①凹2 ②凹1 ③凹1 ④—	なし	口縁部は玉縁状で内傾。ロクロ成形後、口縁部から肩部は弱い回転ナデ調整。肩部から胴下部は静止ナデ調整。胴最下部は回転へら削り。内面回転ナデ調整。	5個/円	なし	なし	なし	—	—	
3		第54図181 図版61-181	墓庭	マンガン釉甕形	27.5 34.4 20.9 50.0	瓦屋形	3個 1円2円	①凹2 ②凹3 ③凸1 ④凸1	肩部文様帯なし。胴部は蓮華に乗る法師像の貼り付け。蓮華および蓋、法師像の上に花文の貼り付け。胴下部文様帯は蓮華文の貼り付け。	口縁部は直口し、口唇部は平坦。ロクロ成形後、外面口縁部から胴下部ナデ調整。内面は回転ナデ調整。全体的に丁寧なつくり。	17個/円	なし	なし	なし	—	—	
4		第54図182 図版61-182	墓庭	マンガン釉甕形	29.85 35.45 19.6 51.1	アーチ形	2個 2方	①凹2 ②凸1 ③凸2 ④凹2	肩部文様帯は葉文の沈線。胴部は蓮華文の沈線。胴下部文様帯は柳描波状文を2条。	口縁部は外反し、口唇部は平坦。ロクロ成形後、外面は平滑なナデ調整。内面は回転ナデ調整。	6個/円	なし	なし	なし	—	—	

※大きさ(cm)は、ボージャー形・甕形は上から口径/胴径/底径/器高。家形・御殿形は上部(長軸×短軸)/底部(長軸×短軸)/器高。

第28表 021号墓 陶磁器他観察表

No.	押図番号 図版番号	出土地	器種	分類	法量(cm)	観察事項	備考
1	第55図 185 図版62-185	墓室	小杯	沖縄産施釉陶器	口径:3.4 器高:1.65 底径:1.8	精選された白土を用いる。透明釉を高台脇から内底面にかけて施す。素地は灰白色。	
2	第55図 186 図版62-186	墓室	小杯	沖縄産施釉陶器	口径:3.8 器高:1.9 底径:2.1	褐色釉を畳付脇から内底面にかけて施す。素地はにぶい黄橙色。	
3	第55図 187 図版62-187	墓室	小杯	沖縄産施釉陶器	口径:3.6 器高:2.25 底径:1.9	素地は灰白色で焼成はよくない。透明釉を高台脇から内底面にかけて施す。	
4	第55図 188 図版62-188	墓室	小杯	沖縄産施釉陶器	口径:4.6 器高:2.45 底径:2.2	精選された白土を用いる。透明釉を高台脇から内底面にかけて施す。素地は灰白色。	
5	第55図 189 図版62-189	墓庭	小杯	本土産磁器	口径:6.8 器高:3.0 底径:2.4	直口口縁の染付。畳付以外透明釉で全面施釉。コバルトで高台外面に波文が入る。外底面にコバルトで文字らしき文様有り。	
6	第55図 190 図版62-190	墓庭	小杯	本土産磁器	口径:5.7 器高:2.6 底径:2.1	直口口縁の色絵。畳付、外底面以外透明釉で全面施釉。内底面に赤色で花文を施す。外面下部は4箇所を面取りした様な形状となる。底部は四隅を取った方形を呈する。	
7	第55図 191 図版62-191	墓室	瓶	沖縄産施釉陶器	口径:3.6 器高:20.8 底径:6.0	黒色釉を高台脇まで施し、高台は露胎とする。胴部中央に3条の沈圏線を施す。素地は灰色。	
8	第55図 192 図版62-192	墓室	瓶	沖縄産施釉陶器	口径:— 器高:— 底径:1.4	白化粧に透明釉。外面は畳付以外に、内面は口縁内に施釉される。口縁内にコバルト、外面にコバルトで撫子文を施す。素地は浅黄橙色(底部は橙色)。	
9	第55図 193 図版62-193	墓室	煙管 (雁首)	青銅製	長さ:6.7 幅 :1.7	火血の径1.3cm。首部の立ち上がり2.05cm。重量13g。ラウ接合部の径1.0～1.3cm。上面は灰を落とすために敲かれたため凹んでいる。下半部には布目の跡が見られる。	
10	第55図 194 図版62-194	墓室	煙管 (延べ煙管)	金属製	長さ:11.5 吸口径:0.5	火血の径1.0cm。首部の立ち上がり1.7cm。重量8g。完形品。継目は上。火血近くの上面は灰を落とすために敲かれたため傷が多く見られる。	

第9節 022号墓

(1) 遺構(第56図～第57図、図版24)

022号墓は調査区丘陵の西斜面に位置し、墓口の方位は西南西である。丘陵斜面に横穴を掘削し、墓室を構築した亀甲墓である。墓口が3分の1ほど開口しており、残り3分の2は大きさが異なる礫で雑な野面積みにより閉塞されていた。

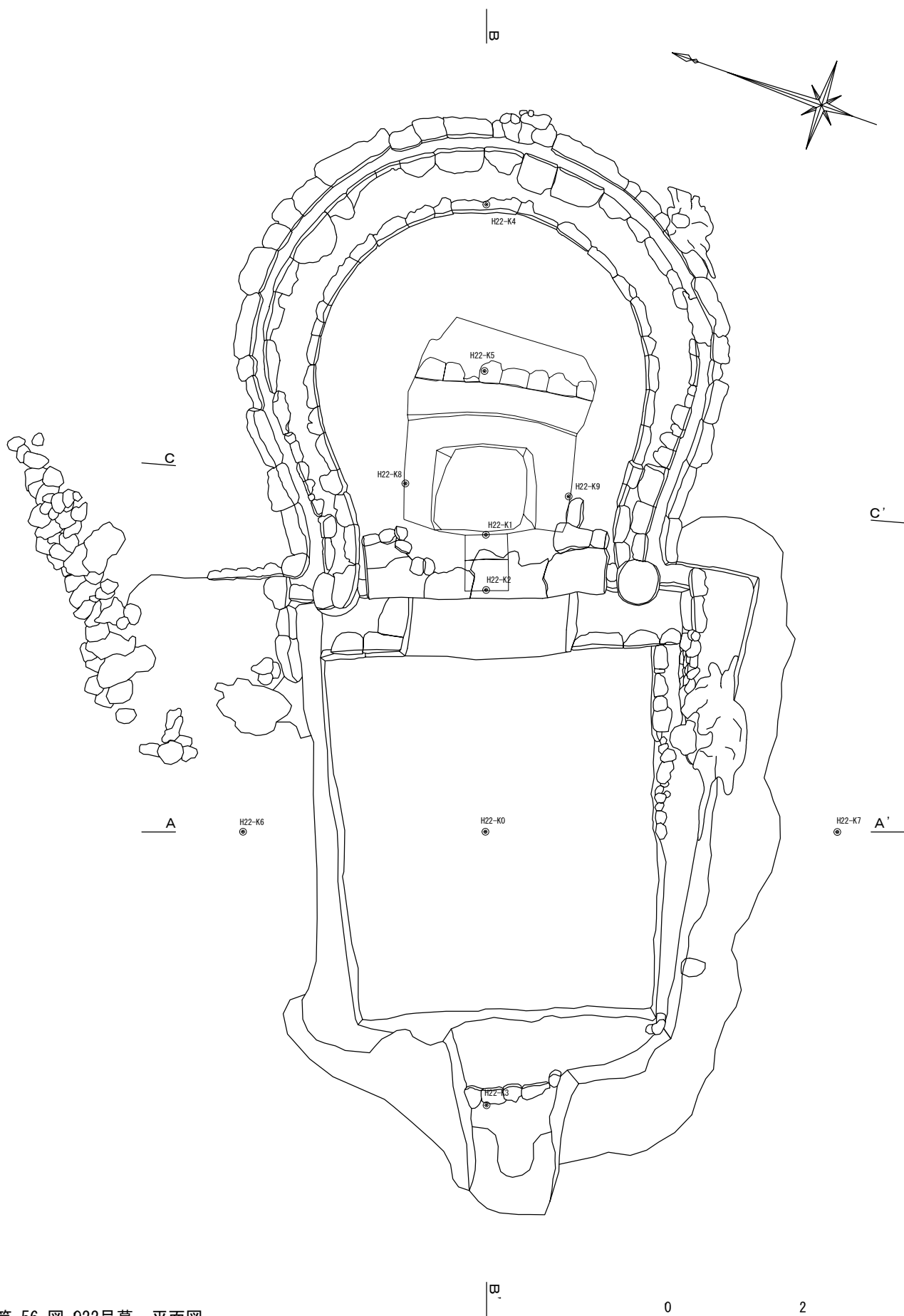
チジ(屋根)は平面形が後方で湾曲する馬蹄形を呈し、高さ約0.3mの石積みでヤジョーマーイが構築される。長方形の石切を屋根の内側及び上側に面を向ける。ウーシに繋がる屋根周縁の石列は2条の石列で構築され、前列側は板状の切石を屋根の内側及び上側に面を向ける。後列の石列は外側及び上側に面を向ける。石列の間は造成土で重鎮する。チジ中央は緩やかな弧状を呈し、石敷きは見られなかった。仕上げは盛り土で行い、その表層に漆喰塗布により仕上げがなされている痕跡が一部残存する。マユ(眉石)は4つの切石で構成されている。眉頂部は緩やかな丸みを帯び、眉端部に向かって下方に屈曲し、先端部付近で上方に反る。両端部は肥大しない。眉正面の底部には小さな段が施されている。スディイシ(袖石)の上にウーシ(白)及びクウーシ(子白)が配置される。墓正面は丁寧な布積みによって構築され、墓口の上部にはカガンイシ(鏡石)が見られ、明瞭なジョウカブイ(門被い)は見られず、カガンイシ下部に浅い挟りが見られる。シミイシ(隅石)は意匠されており、墓口の高さ約1.4m、幅約0.64m、奥行き(羨道の長さ)約0.82mである。サンミデー(供物台)は岩盤削り出しにより構築され、墓庭と約8cmの段差が設けられている。向かって左隅に岩盤の窪みがあり、そこに板状の切石を2つはめ込んだカピアンジ(紙銭焼き場)状の穴がある。スディイシ(袖石)は墓正面左右に板状の切石による布積みにより1段で構築される。ハカヌナー(墓庭)は岩盤を掘り込んで平坦化を行っている状況が窺えた。岩盤の窪み部分に1～10cm大の石灰岩を砕いた小礫と石粉が混じった10YR6/8明黄褐色砂の造成土を重鎮し、その上層に1cm～5cm大の礫が混じる10YR2/3黒褐色砂質土で表面を敷き均す様子が見られた。ワラビヌティ(童の手)と思われる粗い相方積みが角から2.8mまで伸びる。先端部に樹木があるため不明瞭だが、ワラビヌティの先は欠落すると見られる。岩盤を掘り込んで構築されたハカヌジョー(墓門)があり、幅約1.3mを測る。縁には4つの切石が配される。ハカヌジョーから約1m下がった位置に墓庭があり、浅い半地下状となる。右ナージミー後方約2.6mの箇所から021号墓に向かつて屋根の後方に高さ4.0mの野面積みによる壁が構築される。この石積みにより021号墓の左ナージミーは消滅し、本墓が021号墓の後に構築されたことが分かる。ハカヌナー(墓庭)は幅約4.5m、奥行き約5.1m、平面形は長方形である。

墓室は幅約2.5m、奥行き約3.0m、シルヒラシから天井までの高さ約1.6mを測る。タナ(柵)は奥に3段、左右に1段で、3段目は平面観がコの字状となる。面の高さはフラットで無段となることから、5類a型に相当する。柵は岩盤削り出しにより構築されるが、奥柵の1段目の縁部分は8個の切石が配されている。シルヒラシは幅約1.3m、奥行き約1.2mを測り、石灰岩を砕いた小礫と石粉の混じった10YR7/6明黄褐色砂を敷き均して仕上げる状況が窺えた。

本墓の造墓年代は明らかでないが、使用時期については出土した蔵骨器から、銘書で最も古い年号が明治21年(1888)で上焼コバルト釉御殿形であり、新しい年号は昭和20年(1945)でマンガン釉甕形である。それらから、19世紀後半から20世紀中頃まで使用されていたことが考えられる。

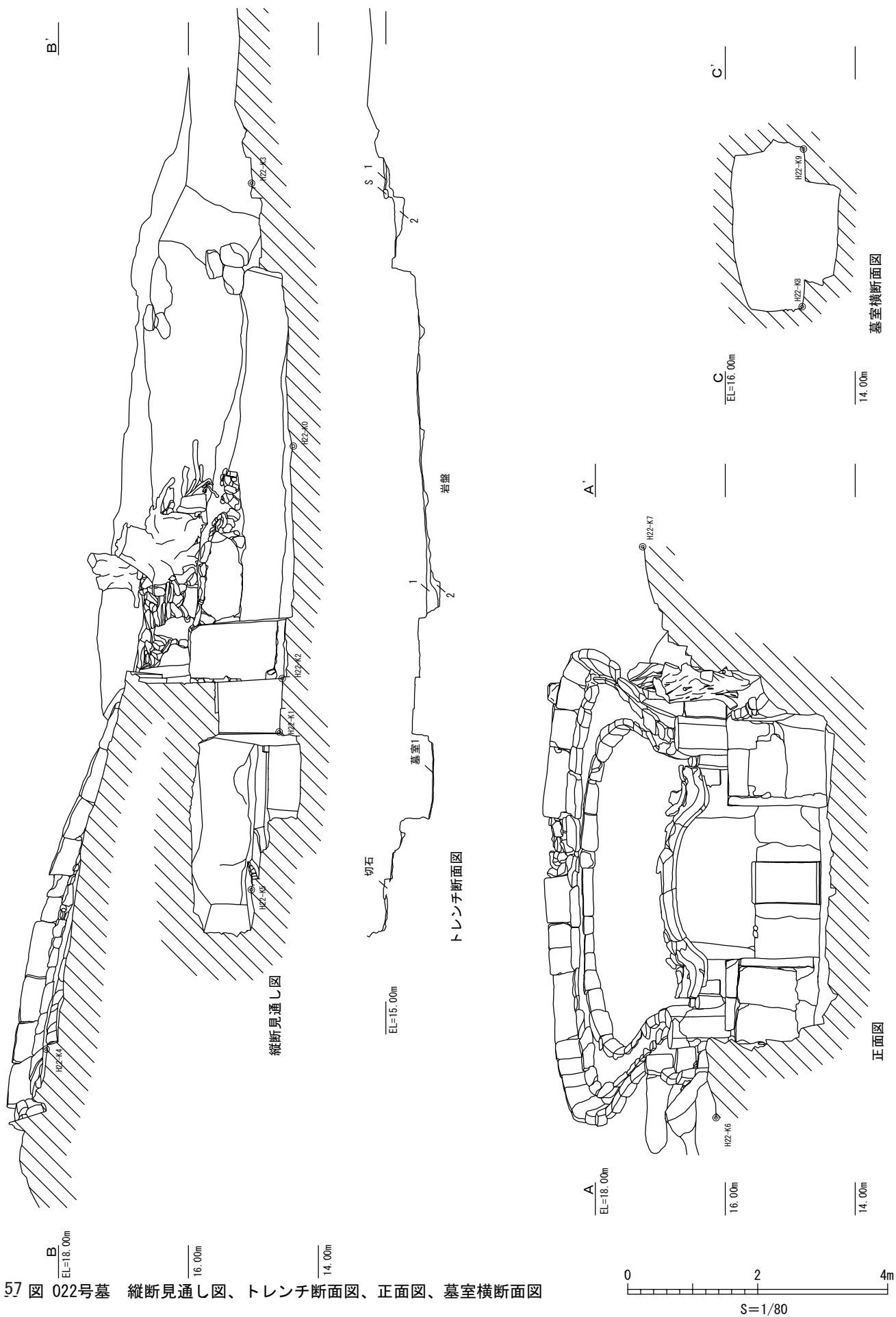
(2) 遺物(第59図、図版63)

本墓からは甕形、御殿形の蔵骨器が墓室から出土した。また副葬品の出土も数点見られたが、破片のた



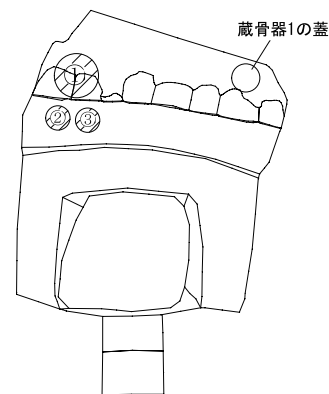
第 56 图 022号墓 平面图

第 57 図 022号墓 縦断見通し図、トレンチ断面図、正面図、墓室横断面図



め図化は見送った。

第59図195、196の蔵骨器1はマンガン釉甕形のセットである。蓋は身の上でなかったが(第58図)、サイズ及び他の蔵骨器との兼ね合いからセット関係と断定した。195蓋はつまみが宝珠形でつまみ台は2段見られる。鐔は厚みがあり、端部は丸みを帯びる。内外面共にナデ調整を施される。196身は横帯1～4すべて沈線となり、肩部文様帯は沈線で蓮弁文及び葉文を施す。胴部文様帯は貼り付けによるアーチ形の屋門のみが見られる。胴下部文様帯は櫛描波状文が2条施される。底部立ち上がりから6cmの箇所3箇所の穿孔が見られる。蓋内面に「昭和二十年四月／又吉マツ／行年／六十二才」の銘書が確認できる。また図化は見送ったが、蔵骨器



第58図 蔵骨器配置の模式図(数字は蔵骨器No.)

2・3は器高21.2cm～21.4cmの小型蔵骨器で、それぞれ蓋内面に「昭和二十年四月／又吉伍清／行年／三十九才」「昭和二十年四月／又吉伍助／行年／三十六才」とあり、蔵骨器1と親子関係にある血縁者を同時期にそれぞれの蔵骨器に納骨したことが分かる。亡くなった年が同じ昭和20年(1945)4月であることから沖縄戦で亡くなった方の可能性が考えられる。

第59図197、198は上焼コバルト釉御殿形のセットで蓋は右棚から、身はシルヒラシから出土した。どちらも背面がシルヒラシを向いていたことから原位置ではないと考えられた。197蓋は入母屋形で大棟に一对の鯨が見られ、唐破風の頂部に龍頭を施される。龍頭および降棟の先はツノになる。中央に格子文と花文、円文を貼り付ける。底に重ね焼の跡が見られた。198身は口縁部の下方に庇をつけ、庇上面の中央に龍頭、降棟に獅子頭が施される。胴部中央に2本の柱を貼り付けし、その中央に銘書が墨書される。口唇部にも「明治廿一年戌九月十二日洗骨又吉蒲」の銘書が確認できる。

第29表 022号墓蔵骨器(蓋)観察表

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	つまみ/屋根形状 接合部孔 つまみ台・園線 鐔(cm) かえり(cm)	つまみ台径 口径/棟長 内径/桁行長 器高/渠行長 体部高/器高	文様	調整痕	釉薬	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
1	1	第59図195 図版63-195	墓室	マンガン釉甕形	宝珠形 有孔 2段・なし 1.8 なし	13.8 33.6 26.9 15.5 11.1	なし	つまみ台回転削り出し。鐔は厚みがあり、端部は丸い。ロクロ成形後、内外面ともにナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。鐔内側は露胎。	あり	昭和20 (1945)	—	
2		第59図197 図版63-197	墓室	上焼コバルト釉御殿形	入母屋形	— 36.3 51.8 40.05 43.4	大棟に一对の鯨。唐破風頂部に龍頭。龍頭および降棟の先はツノになる。中央に格子文と花文、円文を貼り付け。底に重ね焼の跡がみられる。	型成形。外面は全体に丁寧なナデ調整の後に施文。内面は横方向のナデ調整。	外面白化粧後に鉛釉、緑釉、コバルト釉を施釉。内面白化粧後に泥釉。	なし	—	—	

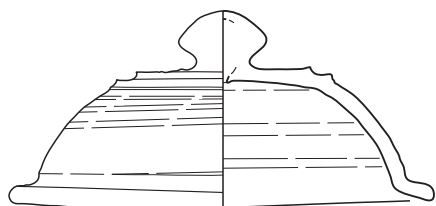
第30表 022号墓蔵骨器(身)観察表

※法量の単位はcm、()内は残存値

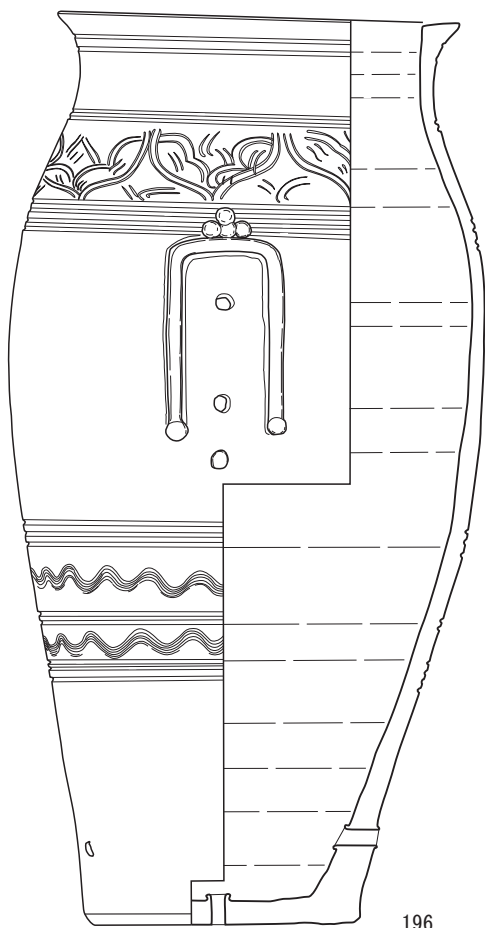
No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	大きさ (cm) ※	窓枠/屋門	窓数/形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯印	銘書	死去年	洗骨年	備考
1	1	第59図196 図版63-196	墓室	マンガン釉甕形	32.5 38.5 22.0 72.5	アーチ形	3個 3円	①四2 ②四2 ③四4 ④四3	肩部文様帯は沈線で蓮弁文および葉文。胴部に文様は見られない。胴下部文様帯は櫛描波状文を2条。	口縁は外反し、口唇部は平坦。ロクロ成形後、内外面ともに回転ナデ調整。	19個/円	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	なし	—	—	
2		第59図198 図版63-198	墓室	上焼コバルト釉御殿形	46.9×34.7 37.1×26.0 44.9	その他	5個/円	—	口縁部から12cm下に庇をつける。庇上面の中央に龍頭、降棟に獅子頭。庇下段に花文の貼り付け。斜位の基盤格子文の突帯下に蓮華文の貼り付け。蓋や葉は緑釉で描かれる。中央に2本の柱を貼り付けし、その中央に銘書が書かれる。	型成形後、外面は全体にナデ調整後、施文する。内面は口縁部付近縦方向のナデ調整が見られる。	—	白化粧後、コバルト釉、鉄釉、緑釉を施釉。	なし	あり	—	明治21 (1888)	

※大きさ(cm)は、ボージャー形・甕形は上から口径/胴径/底径/器高。家形・御殿形は上部(長軸×短軸)/底部(長軸×短軸)/器高。

昭和辛酉四月
又吉マツ
行年
六十三才



195



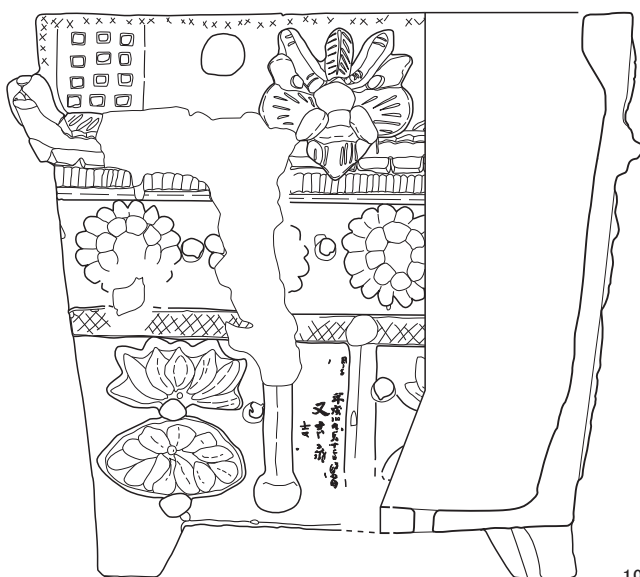
196

蔵骨器 1

0 S=1/6 20cm



197



198

明治辛酉九月
音洗宵又吉満

第59図 022号墓出土遺物

第 10 節 025 号墓

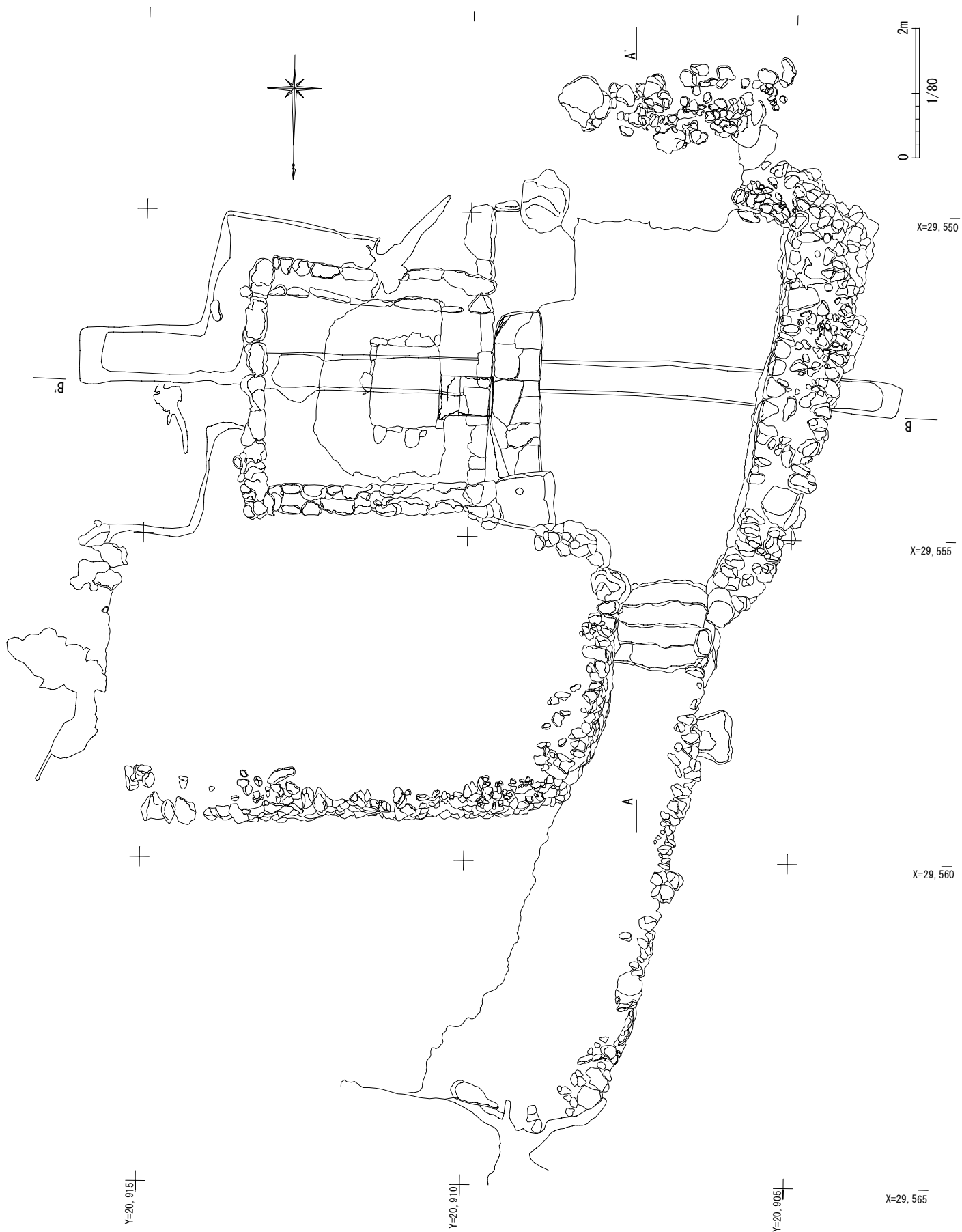
(1) 遺構(第 60 図～第 61 図、図版 25)

025 号墓は調査区丘陵の西斜面に位置し、斜面に横穴を掘削し、墓室を構築した平葺墓である。当墓は本調査以前に廃棄されており、墓口は開口し、蔵骨器の多くは墓庭へ廃棄されていた。

屋根の平面形状は切石を並べて方形とする。向かって左右が 2 条の石列で構築され、後方の列は比較的大きな切石を 1 列並べて構築する。石列の内側は岩盤掘削後に 20 cm 大の石灰岩を裏込めし、その上層に 5 cm 前後の礫が混入する 2.5Y7/8 黄色から 2.5Y6/8 明黄褐色及び 10YR5/8 黄褐色の混礫砂質土を重鎮して表面を仕上げる。20 cm 大の裏込めは正面側で見られたが屋根後方側では見られなくなり、岩盤直上を混礫砂質土で重鎮する状況が窺えた。亀甲墓という眉石にあたる横長の石列は 6 個の切石で構成される。石列直下は高さ約 0.76m、幅は約 0.4m～0.7m の 5 個の切石を横列に配した布積みが見られる。布積みから下位は牧港石灰岩の斜交層理が横位に見られ、一部漆喰が残存する。墓口はジョウカブイ(門被い)及びシミイシ(隅石)で構成され、その周囲は方形の切石による布積みが見られる。墓口の高さは約 1m、幅約 0.6m、奥行き(羨道の長さ)約 0.76m である。ジョウカブイの上方の岩盤面に横位の小さな段が施されており、ジョウカブイからの距離は異なるものの内間西原近世墓群Ⅲ23 号墓の平葺墓で見られた正面の段と類似する。シミイシは向かって左側は一枚の板状の切石で構築されるが、右側は 3 段 5 枚の板状板石で構築され目地を漆喰で埋める。正面は漆喰が部分的に残存し、全面的に漆喰を塗布していたと見られる。ジョウカブイの厚みは約 0.13m、幅約 0.93m。シミイシの高さ約 1m、幅約 0.19m である。サンミデー(供物台)は 1 段見られ、高さ約 0.15m の 12 枚の板状の切石で構築される。サンミデーの幅約 2.7m、奥行き約 0.73m。向かって左側に幅 0.21m、奥行き 0.15m、深さ 0.07m のカビアンジ(紙銭焼き場)が見られる。スディイシ(袖石)は墓正面左右に 1 段ずつ見られ、左スディイシは岩盤の削り出しにより構築され、右スディイシは相方積みである。左スディイシの高さが約 2.1m、右スディイシの高さは約 1.3m を測り、左スディイシが高く両方の高さは揃っていない。ハカヌジョー(墓門)はなく、ハカヌナー(墓庭)の北側角に墓庭へ昇降する段状の構築物が 4 段見られる。ハカヌナーの西側は高さ約 0.9m、幅約 1m の野面積みの石垣で囲われる。ハカヌナーの法量は南北軸が約 5.3m、東西軸が約 3.1m を測り、平面観は横長の方形となる。

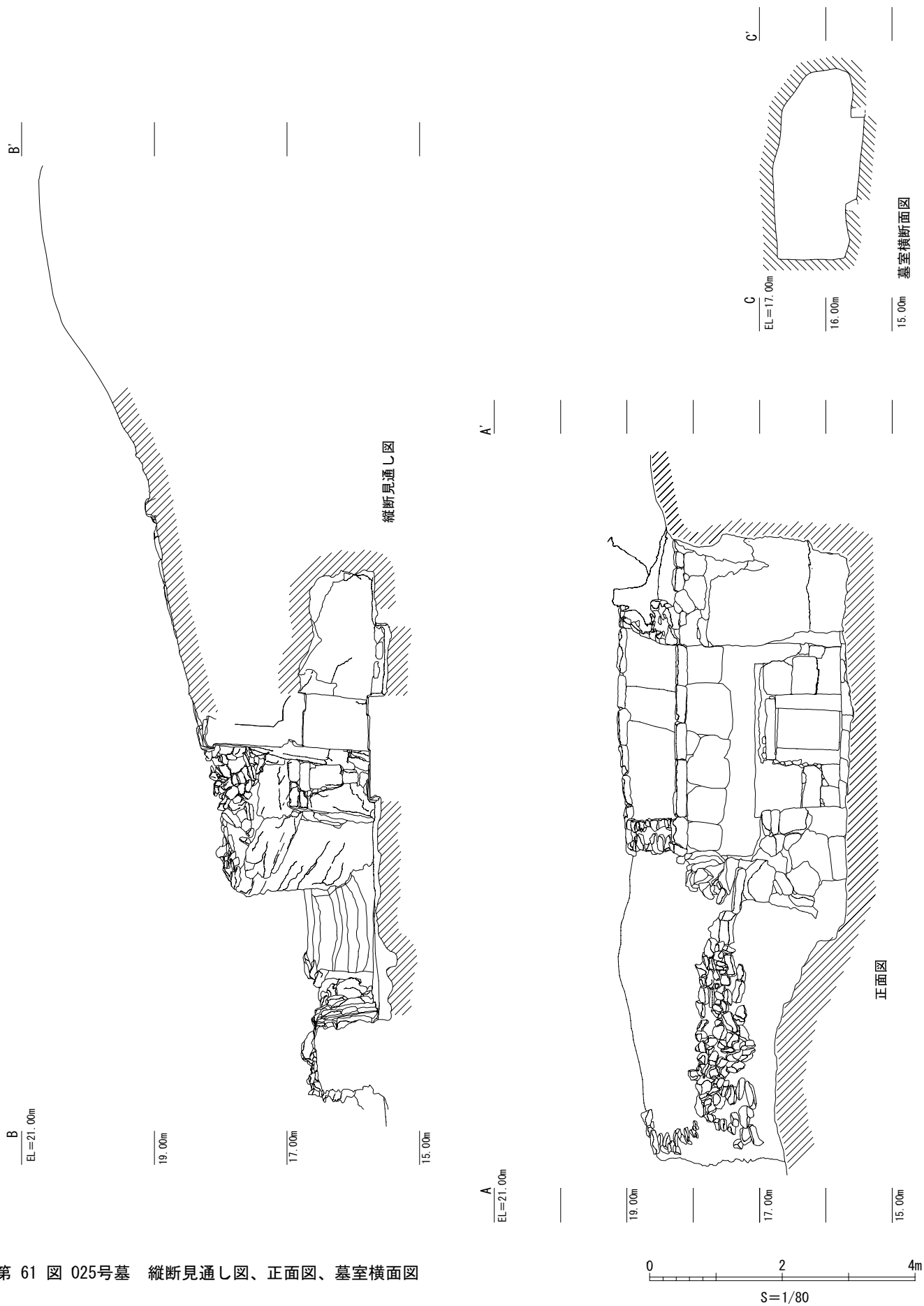
墓室は幅約 2.7m、奥行き約 1.8m、シルヒラシから天井までの高さ約 1.2m を測る。牧港石灰岩の岩盤に横穴を掘り込んで造られた墓室で、タナ(棚)は奥側に 1 段、左右に 1 段のコの字状を呈し、奥棚と左右棚に段差は見られない。墓室類型は 3 類 a 型となる。奥棚のシルヒラシからの高さは約 0.2m、左右棚の高さも同様に約 0.2m を測る。奥棚の奥行きは約 0.8m、右棚の奥行きは 0.78m、左棚の奥行きは約 0.66m。タナは岩盤削り出しにより造られるが、縁石の一部に切石を配している。墓室の壁面は丁寧に成形されており、岩盤の窪みには赤褐色の土を充鎮する箇所が見られたほか、奥壁や右壁面には漆喰塗布された箇所も一部見られた。

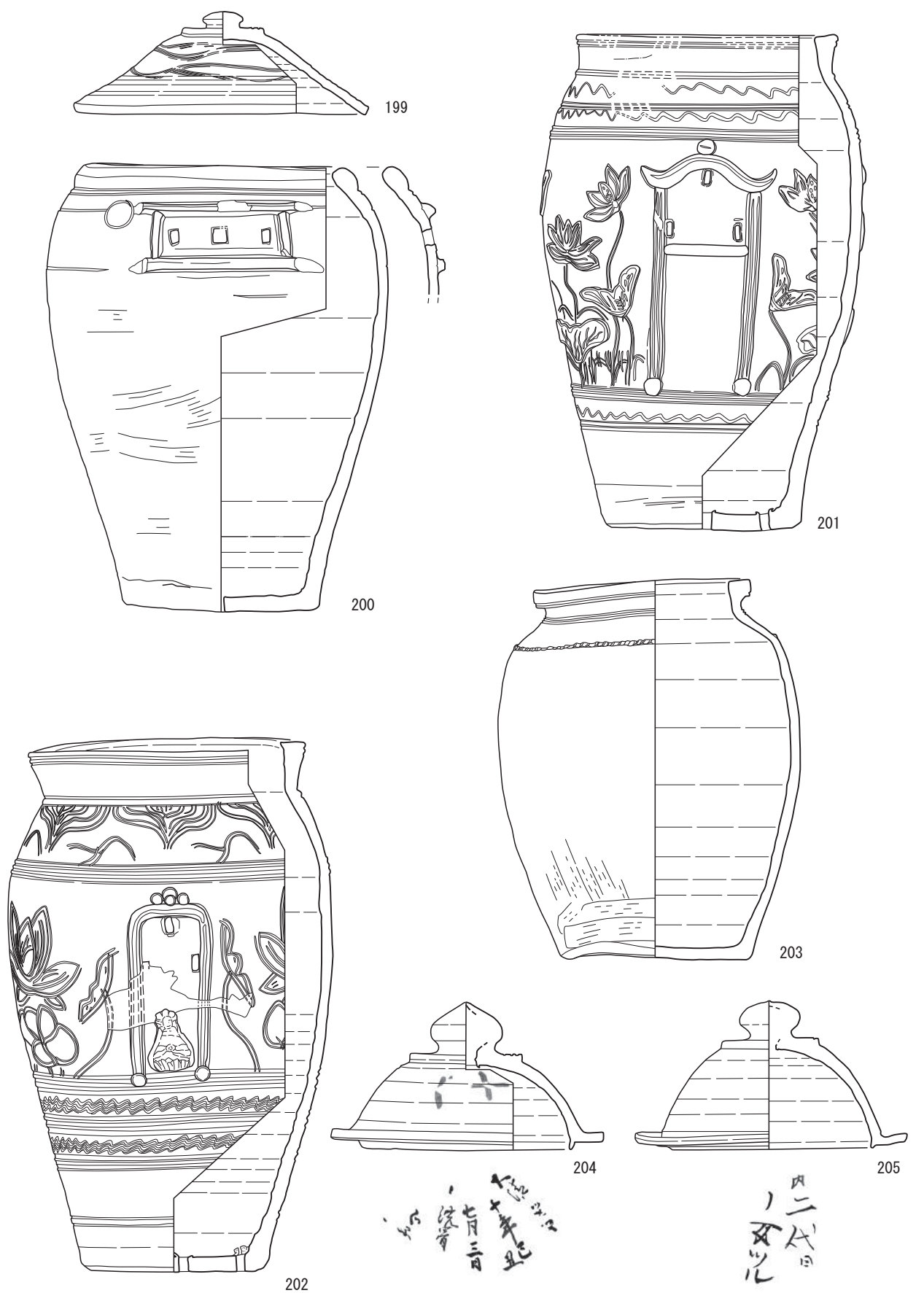
本墓の造営年代は不明だが、墓庭へ廃棄された蔵骨器はボージャー形およびマンガン釉甕形が見られ、ボージャー形の器形から安里分類Ⅳa式(1740～1750)が出土したことや、第 62 図 204 マンガン釉甕形の蓋の銘書は嘉慶 10 年(1805)と考えられ、また第 62 図 205 から銘書にカタカナが使用されていることから近代が想定できる。これらから、18 世紀半ばから 20 世紀まで継続的に使用された墓であると考えられる。



第 60 图 025号墓 平面图

第 61 図 025号墓 縦断見通し図、正面図、墓室横断面図





第62図 025号墓出土遺物 1

(2) 遺物(第 62 図～第 63 図、図版 64～図版 65)

025 号墓から甕形の蔵骨器や沖縄産施釉陶器や無釉陶器、円盤状製品、古銭が出土した。そのほとんどが墓庭へ廃棄された状態での出土であった。墓室内で検出され、接合により完形資料となった 202 のマンガン釉甕形があるが、破片の状態だったため原位置の復元には至らなかった。

第 62 図 199、200 はボージャー形の蓋と身のセットである。199 の蓋はつまみは扁平形で蓋裏の中心は無孔。径 8.7 cm のつまみ台がみられ、体部に櫛描波状文が見られる。器形より安里分類の IVa 式(1740～1750)の資料となる。200 の身は頸部沈線が 2 本、胴部は無文で、平葎形のマド枠が貼り付けられる。マド枠左上にカマ印が見られる。安里分類の IIIa 式(1700～1800)に相当し、両者の絞り込みから 1740～1750 年の資料と考えられる。201 はマンガン釉甕形の身で横帯 3・4 が突帯、頸部文様帯に沈線で波状文が 2 条廻り、胴部には貼り付けの蓮華文および唐破風形の屋門がある。胴下部文様帯に波状沈線文が見られる。屋門には玉飾りが頂部及び柱下に見られる。安里編年の III 期(1810～1850 年代)の資料である。202 は横帯 3 は突帯だが横帯 4 が沈線となり、また胴部文様帯の蓮華文も沈線で表現される。アーチ形の屋門が貼り付けられ、その内に法師像の貼り付けが施される。安里編年の IV 期(1850～1890 年代)の資料である。203 は水甕の転用蔵骨器で肩部に粘土紐が 1 条見られ、頸部に 3 条の沈線が廻る。204 はマンガン釉甕形の蓋である。つまみは宝珠形で径 12.1 cm のつまみ台が 1 段ある。鐏は平坦に仕上げ、端部も平坦である。蓋外面に墨書で記号のようなものが描かれ、内面に銘書で「大清■■／十年己丑／七月三日／洗骨／■■ふ」とあり、マンガン釉の出現が 1780 年以降であることから嘉慶 10 年(1805)が考えられた。しか

第31表 025号墓蔵骨器(蓋)観察表

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	つまみ/屋根形状 接合部孔 つまみ台・圈線 鐏(cm) かえり(cm)	つまみ台径 口径/棟長 内径/桁行長 器高/梁行長 体部高/器高	文様	調整痕	釉薬	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
1		第62図199 図版64～199	墓庭	ボージャー形	扁平形 無孔 あり・2条 — —	8.7 31.8 31.2 11.1 9.3	櫛描き波状文	つまみ台は回転削り出し。鐏端部は平坦。ロクロ成形後、外面上部回転へう削り。内面回転痕がみられる。	なし	なし	—	—	
2		第62図204 図版64～204	墓室 墓庭	マンガン釉甕形	宝珠形 有孔 1段・2条 ? 0.9	12.1 29.7 22.2 16.2 10.5	なし	つまみ台は回転削り出し。鐏は平坦で端部も平坦。ロクロ成形後、外面回転へう削り。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	あり	—	—	
3		第62図205 図版64～204	墓室 墓庭	マンガン釉甕形	宝珠形 有孔 1段・1条 ? 0.3	10.5 29.1 21.9 16.2 12.1	なし	つまみ台は回転削り出し。鐏はやや反り、端部も平坦。ロクロ成形後、外面回転へう削り。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	あり	—	—	

第32表 025号墓蔵骨器(身)観察表

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	大きさ (cm) ※	窓枠/屋門	窓数/形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯印	銘書	死去年	洗骨年	備考
1		第62図200 図版64～200	墓庭	ボージャー形	27.0 36.8 20.3 48.7	平葎形	3個 1方2方	①凹2 ②凹1 ③凹1 ④—	なし	口縁部は玉縁状でやや直口する。ロクロ成形後、ナデ調整および胴部へう削り。	5個/円形 (1個未貫通)	なし	あり	なし	—	—	窓底右側に窯印あり。
2		第62図201 図版64～201	墓室 墓庭	マンガン釉甕形	27.9 34.6 19.6 53.9	唐破風形	3個 1方2方	①凹2 ②凸1 ③凸3 ④凸3	肩部文様帯は2条の波状文の沈線。胴部は蓮華文の貼り付け。蓋は沈線。胴下部文様帯は波状沈線文が1条。	口縁部は直口。口唇部は平坦。ロクロ成形後、内外面ともに回転ナデ調整。	6個/半円形 (1個は未貫通)	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	なし	—	—	
3		第62図202 図版64～202	墓室	マンガン釉甕形	29.7 34.9 18.7 57.4	アーチ形	3個 1方2方	①凹2 ②凸1 ③凸3 ④凹3	肩部文様帯は蓮弁文の沈線。胴部は沈線で蓮華文。胴下部文様帯は櫛描き波状文を2条。屋門内に法師像の貼り付けがみられる。	口縁部は外反し、口唇部はやや内傾する。ロクロ成形後、内外面共に回転ナデ調整。焼成不良により火ぶくれが数箇所みられる。	7個/円形	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	なし	—	—	
4		第62図203 図版64～203	墓庭	転用	23.3 32.8 19.4 41.3	—	—	—	肩部に粘土紐の貼り付けによる粘土紐が1条。頸部に3条の沈線が廻る。	ロクロ成形後、外面ナデ調整および削り調整。底部付近で縦位および横位のへう削りがみられる。	なし	なし	なし	なし	—	—	

※大きさ(cm)は、ボージャー形・甕形は上から口径/胴径/底径/器高。家形・御殿形は上部(長軸×短軸)/底部(長軸×短軸)/器高。

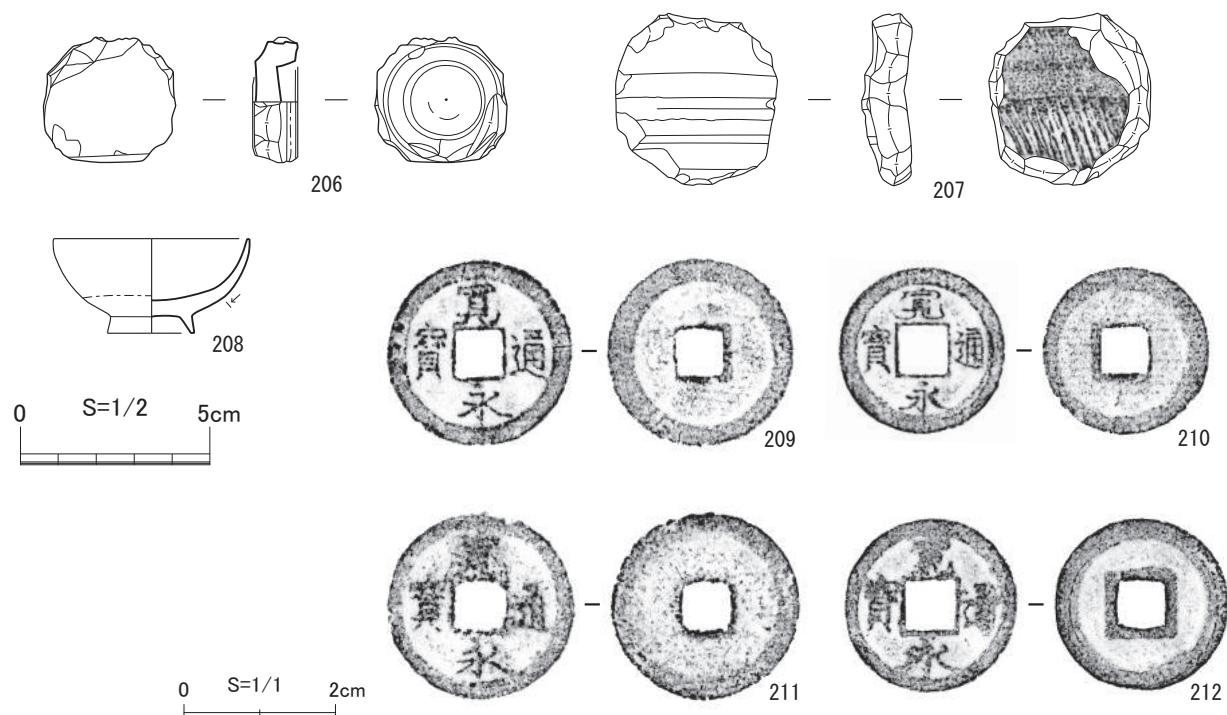
し、嘉慶10年の十干十二支は乙丑であり、十干を書き間違えた可能性がある。205はマンガン釉甕形の蓋で、つまみは宝珠形で径10.5cmのつまみ台が1段ある。204のつまみと比較すると先端部が丸くなる。鏝はやや上方に反り、端部は平坦に仕上げる。蓋内面に銘書があり「内二代目ノ女ツル」とカタカナを使用していることから近代に墨書されたものである。第63図206～207は円盤状製品である。206は本土産磁器の底部を利用する。207は沖縄産無釉陶器の播鉢の口縁部を加工した製品である。208は沖縄産施釉陶器の小杯で墓庭から出土した。209～212は新寛永の古銭である。墓庭西側の石積み付近の造成土より一括で出土した。

第33表 025号墓 陶磁器他観察表

No.	挿図番号 図版番号	出土地	器種	分類	法量 (cm)	観察事項	備考
1	第63図 206 図版65-206	墓庭	円盤状製品	本土産磁器	縦:3.3 横:3.5 厚さ:1.2 底径:2.4	重量15.5g。緑色釉の皿底部を加工したものと思われる。調整が粗く、形状は方形に近い。皿付から外底面を除き、施釉される。	
2	第63図 207 図版65-207	墓庭外側	円盤状製品	沖縄産無釉陶器	縦:4.5 横:4.3 厚さ:1.0	重量28.1g。播鉢の口縁部を加工したもの。素地はにがい赤褐色。形状は円形に近い。内面に櫛目が入る。	
3	第63図 208 図版65-208	墓庭完掘	小杯	沖縄産施釉陶器	口径:5.2 器高:2.5 底径:2.3	直口口縁。内面から外面胴下部まで透明釉を施釉。皿付にアルミナ付着。素地は灰白色。	

第34表 025号墓 銭貨観察表

No.	挿図番号 図版番号	出土地	銭貨名	初鑄年	区分	法量 (cm・g)						材質	備考
						輪外径	輪内径	郭外幅	郭内幅	輪厚	重量		
1	第63図 209 図版65-209	墓庭	寛永通寶 (新寛永)	1697年	Ⅲ期	24.3	19.2	7.5	5.9	1.1	3.2	銅	
2	第63図 210 図版65-210	墓庭	寛永通寶 (新寛永)	1697年	Ⅲ期	22.0	17.3	7.5	6.2	0.9	2.25	銅	
3	第63図 211 図版65-211	墓庭	寛永通寶 (新寛永)	1697年	Ⅲ期	24.8	20.3	8.3	6.4	0.9	2.7	銅	
4	第63図 212 図版65-212	墓庭	寛永通寶 (新寛永)	1697年	Ⅲ期	22.9	18.6	8.0	6.1	0.9	2.75	銅	



第63図 025号墓出土遺物 2

第11節 026号墓

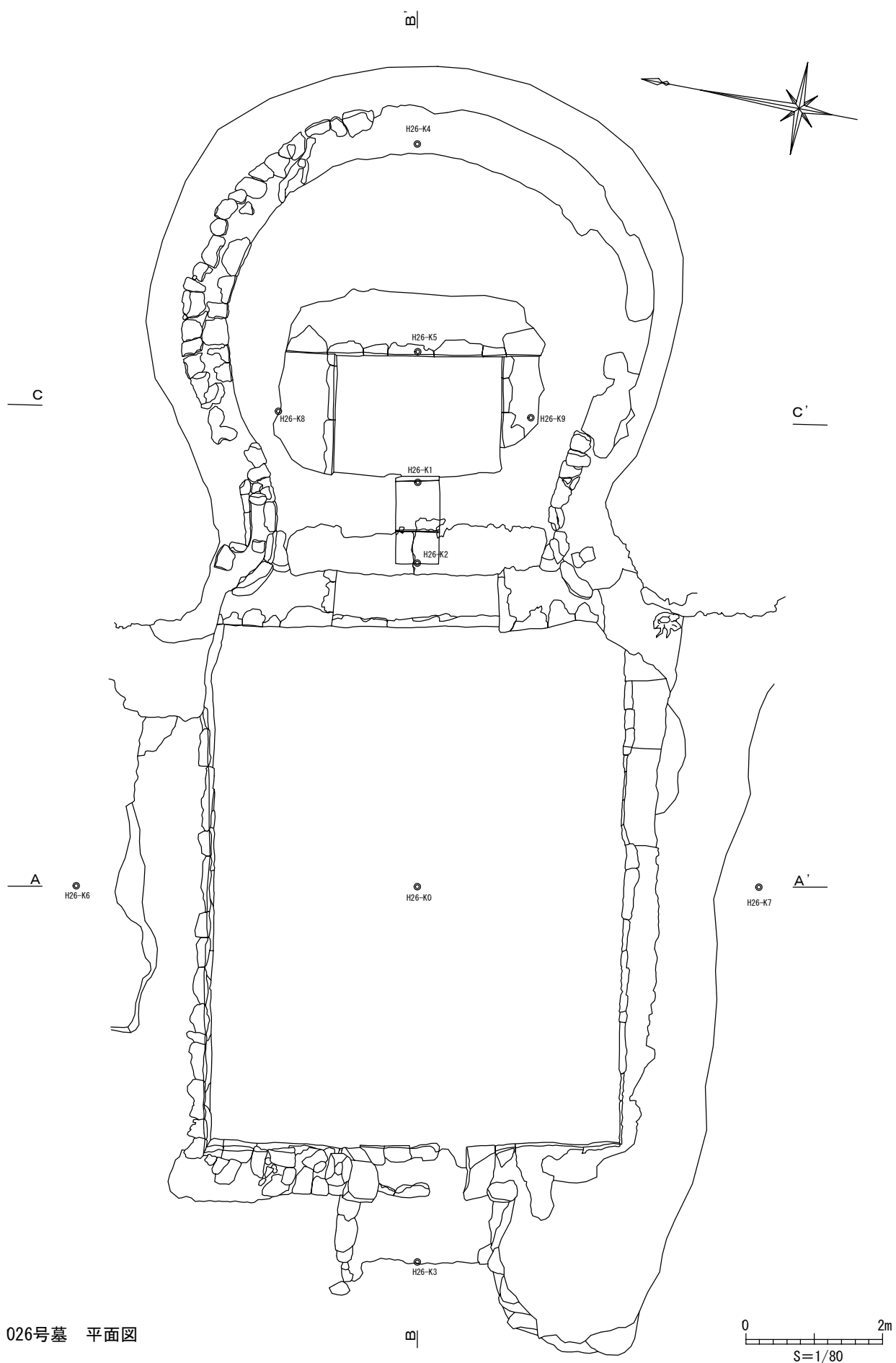
(1) 遺構(第64図～第65図、図版26)

026号墓は調査区丘陵の西斜面に位置し、斜面に横穴を掘削し、墓室を構築した亀甲墓である。本墓群の中でも比較的標高の高い位置に構築される。当墓は本調査以前に廃棄されており、墓口は開口し、蔵骨器の多くは墓庭へ廃棄されていた。

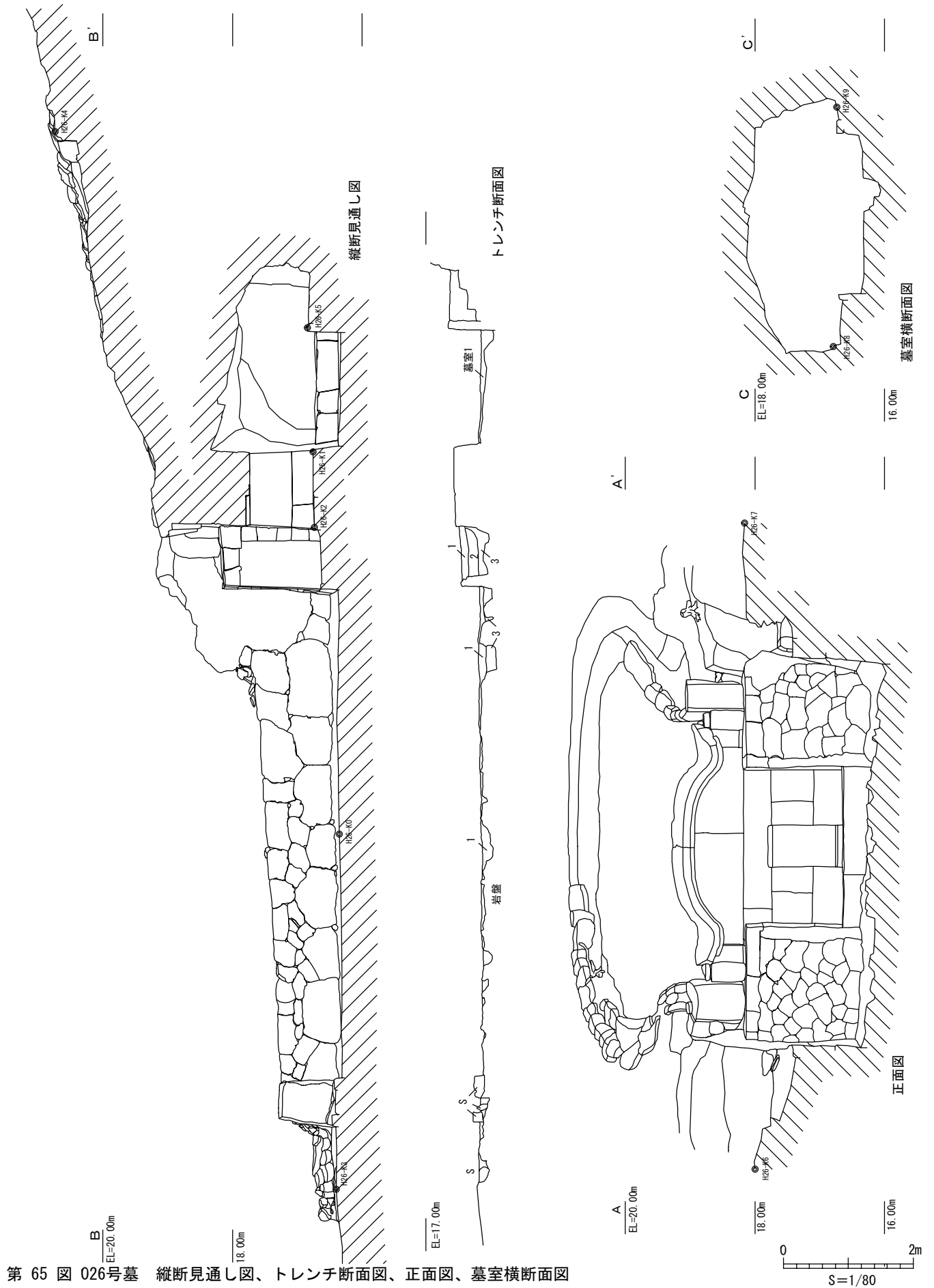
チジ(屋根)は平面形が後方で湾曲する馬蹄形を呈し、ヤジョーマーイは見られない。ウーシ(臼)に繋がる屋根周縁の石列は向かって左側が2条の石列で構築され、面を持つ方が上側を向く。後方中央付近からは岩盤の削り出しにより構築された突帯状の列へと繋がる。チジ中央は岩盤削り出しにより緩やかな弧状を呈し、石敷きは見られなかった。仕上げは盛り土で行ったと見られる。マユ(眉石)は2つの切石で構成されている。眉頂部は平坦に仕上げ、眉端部に向かって屈曲し、先端部付近で強く上方に反る。両端部は肥大しない。眉正面の底部には小さな段が施されている。スディイシ(袖石)の上にウーシ(臼)及びクウウーシ(子臼)が配置される。クウウーシの上に厚み9cm、幅22cmの板状の切石が見られる。墓正面は丁寧な布積みで構築されており、ジョウカブイ(門被い)は高さ0.37m、幅2.1mである。シミイシ(隅石)は意匠されていないが、ジョウカブイの下部は墓口を中心として左右対称に配置された切石で布積みが見られることが窺える。ジョウカブイの上部には2つの大きな切石が見られる。墓口の高さ約1.05m、幅約0.63m、奥行き(羨道の長さ)は約1.2mである。サンミデー(供物台)は高さ0.26mの板状の切石を2つ配して墓庭と区画する。サンミデーの幅約2.4m、奥行き0.75m。板状の切石と正面壁まで岩盤直上に10YR4/6明黄褐色砂層の造成土を重鎮し、その上層にさらに10YR3/4暗褐色砂質土を入れ、表面は墓庭と同様の10YR3/2黒褐色砂質土が見られた。カビアンジ(紙銭焼き場)は見られない。スディイシ(袖石)は墓正面左右に1段ずつ見られる。左袖石の角部分で一部岩盤の削り出しが見られるが、全体的に丁寧な相方積みで構築される。墓庭は岩盤を掘り込んで平坦化を行い、岩盤の窪みに1cm～5cm大の小礫が少量と石粉が混じった10YR6/8明黄褐色砂の造成土を重鎮して表面を敷き均す様子が見られた。ワラビヌティ(童の手)は不明瞭。左右のナージミー(庭積み)もスディイシと同様に丁寧な相方積みで構築されている。右側のナージミーの高さは約1mを測る。墓門の石積みは粗い相方積みでハカヌジョー(墓門)側は高さ0.8m、幅0.45mの切石が配される。ナージミーで見られた丁寧な相方積みとは様相が異なるため、構築時期が異なる可能性が考えられる。ハカヌジョーは高さ0.8m、幅1.3m、奥行き0.7を測る。また、ジョーへ入るための墓道が見られ、その両側に高さ約0.3mの粗い相方積みが見られる。ハカヌナー(墓庭)は幅約6m、奥行き約7.5m、平面観は長方形となる。

墓室は幅約3.8m、奥行き約2.6m、シルヒラシから天井までの高さ約1.7mを測る。牧港石灰岩の岩盤に横穴を掘り込んで造られた墓室で、墓室から墓口側の壁を見ると布積みで構築されている。タナ(柵)は奥側に1段、左右に1段のコの字状で、奥柵と左右柵に段差が見られることから3類b型に相当する。奥柵のシルヒラシから高さ約0.5m、左右柵のシルヒラシからの高さは約0.34mを測る。両柵の縁部には側面が方形の切石を列状に配し、その内側は石灰岩を砕いた小礫と石粉が少量混じり砂粒がやや多く見られる10YR5/4にぶい黄褐色砂で重鎮し、表面を均している状況が窺えた。

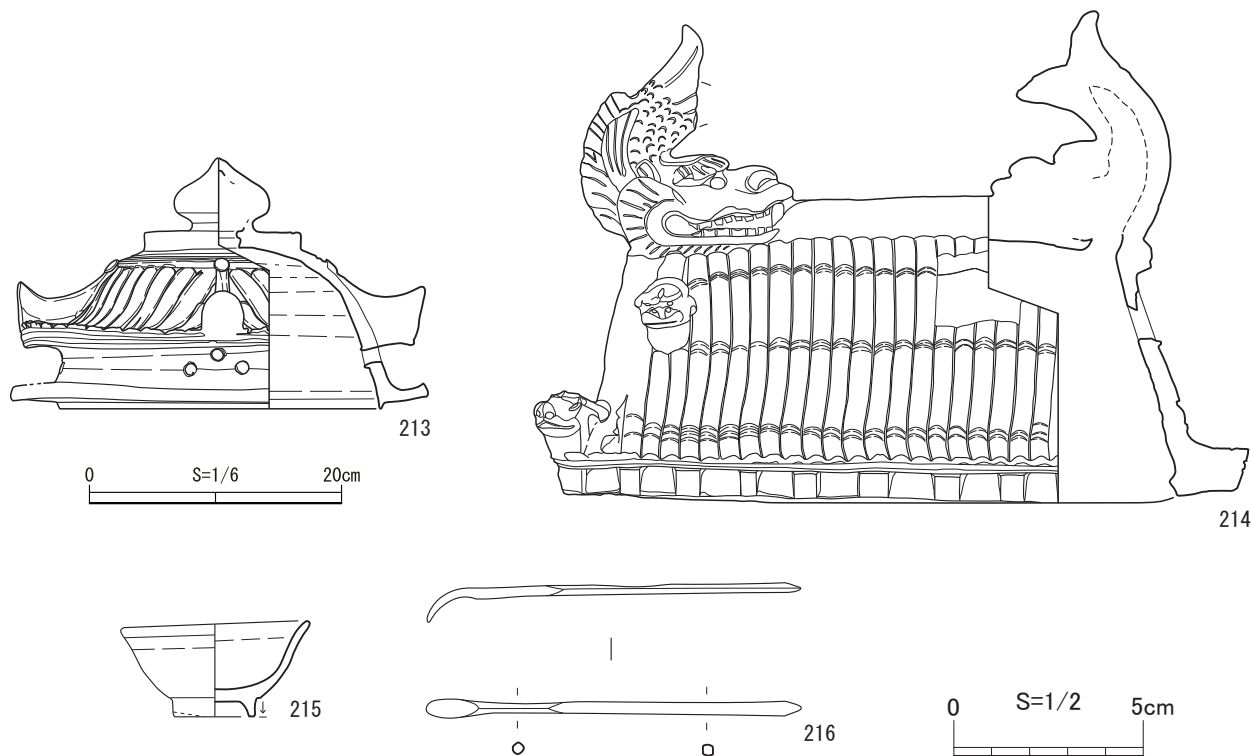
本墓の造墓年代は明らかでないが、使用時期は出土した蔵骨器から19世紀代の使用が考えられる。しかし、出土資料が少量のため不明な点が多い。



第 64 图 026号墓 平面图



第 65 図 026号墓 縦断見通し図、トレンチ断面図、正面図、墓室横断面図



第66図 026号墓出土遺物

(2) 遺物(第66図、図版65)

本墓から蔵骨器、本土産磁器、沖縄産施釉陶器、金属製品(簪)が出土した。出土数は第3表をご参照いただきたい。第66図は残存状況が良好なものを図化した。第66図213はマンガン釉底付き甕形の蓋である。墓庭から出土した。それとセット関係と思われる身も墓庭から出土したが復元に至らなかったため図化は見送った。第66図214は荒焼御殿形の蓋である。身は出土していない。上江洲編年の1810年～1870年とされる。図化は見送ったが、墓室シルヒラシや奥棚で破片が散乱した状態で検出されたマンガン釉甕形の身で安里編年Ⅲ期(1810～1850年代)相当の資料も出土している。215は沖縄産施釉陶器の小杯である。墓庭から出土。216は青銅製の簪で耳かき状を呈し、男性用の副簪(押差)である。同じく墓庭から出土した。

第35表 026号墓蔵骨器(蓋)観察表

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	つまみ/屋根形状 接合部孔 つまみ台・圏線 鏝(cm) かえり(cm)	つまみ台径 口径/棟長 内径/桁行長 器高/梁行長 体部高/器高	文様	調整痕	釉薬	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
1		第66図213 図版65-213	墓庭	マンガン釉 底付き甕形	宝珠形 有孔 2段・3条 4.1 0.5	12.4 33.1 25.0 19.9 14.1	半截竹管を強めに押して立体的な瓦を作る。降棟の先は隅頭石のように反る。降棟の上方先端に円文の貼り付けがある。底下部に円孔3個ずつを4箇所に配する。	つまみ台は回転削りだし。鏝は焼成不良によりやや歪む。端部は平坦。内外面回転ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。鏝内側は露胎。	なし	—	—	
2		第66図214 図版65-214	墓庭	荒焼御殿形	入母屋形	— 46.8 56.5 42.2 39.0	大棟に一对の鯪。鯪の下に獅子頭。降棟にも獅子頭を貼り付ける。瓦を立体的に作る。庇に2条ずつの横位の沈線が3段ある。	型成形後、外面丁寧なナデ調整後に貼り付け施文。内面に横方向のナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。身との接触面および内側は露胎。	なし	—	—	

第36表 026号墓 陶磁器他観察表

No.	挿図番号 図版番号	出土地	器種	分類	法量(cm)	観察事項	備考
1	第66図 215 図版65-215	墓庭	小杯	沖縄産施釉陶器	口径:5.0 器高:2.55 底径:2.2	畳付、外底面以外透明釉で全面施釉。口唇部を釉剥ぎ。畳付にアルミナが見られる。貫入が多い。素地は乳白色。	
2	第66図 216 図版65-216	墓庭	簪 (押差)	青銅製	長さ:9.0	重量4g。耳かき状を呈する。断面は首部が丸形、竿部が方形。	

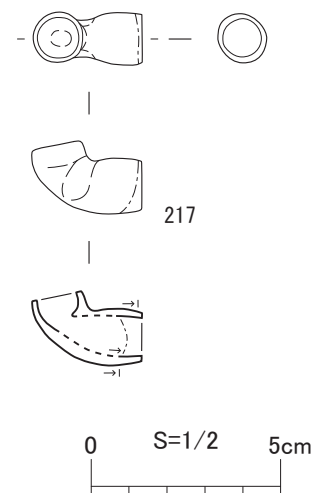
第12節 033号墓

(1) 遺構(第67図～第68図、図版29)

033号墓は調査区丘陵の西斜面に位置し、等高線が密な斜面に横穴を掘削して墓室を構築した亀甲墓である。当墓は本調査以前に廃棄されており、墓口は開口していた。

チジ(屋根)は平面形が後方で湾曲する馬蹄形を呈し、高さ約0.5m、厚み約0.16mの板状の切石を配したヤジョーマーイが廻る。正面には漆喰が残存する箇所が確認される。ウーシ(臼)につながる屋根周縁の石列は1列で構築され、026号墓やその他墓で見られたような外周側の列は見られない。屋根周縁の石列とヤジョーマーイの間は盛土で重鎮する。チジ中央は岩盤削り出しによる緩やかな弧状を呈し、石敷きは見られない。盛土表面の一部には漆喰が残存する箇所が見られたため、漆喰塗布によって仕上げられた状況が窺えた。マユ(眉石)は3つの切石で構成される。眉頂部はやや緩やかに丸みを帯び、眉端部に向かって傾斜をつけて屈曲し、先端部付近で強く上方に反る。眉正面の底部には小さな段が施されている。スディイシ(袖石)の上にウーシ(臼)及びクウーシ(子臼)が配置される。墓正面は布積みで構築されており、ジョウカブイ(門被い)上部のカガンイシ(鏡石)は1枚の切石である。ジョウカブイの高さ約0.48m、幅約2.6mを測る。シミイシ(隅石)は両側とも幅約0.25m、高さ約1mである。その左右に方形の切石を配する。墓口の高さ約1m、幅約0.66m、奥行き(羨道の長さ)は約0.87mである。サンミデー(供物台)は高さ約0.2mの3つの板状の切石で構築される。サンミデーの幅約2.4m、奥行き約0.9m。向かって左角に幅約0.1mの正方形を呈したカピアンジ(紙銭焼き場)が見られる。スディイシ(袖石)は墓正面左右に1段ずつ見られ、左袖石の残存状況から、幅約0.2mの板状の切石で正面を布積みにし、内部は裏込めと造成土により構築されていることが分かる。右袖石の高さ約1.8m。墓庭は岩盤を削り出しで、岩盤直上に締まりのよい3cm～5cm大の石灰岩礫が混入する造成土を重鎮し、表面を石粉や砂が混入する暗褐色砂質土で敷き均す。ウーシから伸びるワラビヌティ(童の手)は見られるが先端の形状は不明瞭。左右のナージミー(庭積み)とも一部削り出しにより壁面となる岩盤が見られ、その上部に雑な相方積みが見られる。ハカヌジョー(墓門)は幅約2m、奥行き0.5m。ハカヌナー(墓庭)は幅約5m、奥行き5.5mを測り、平面観は略方形となる。

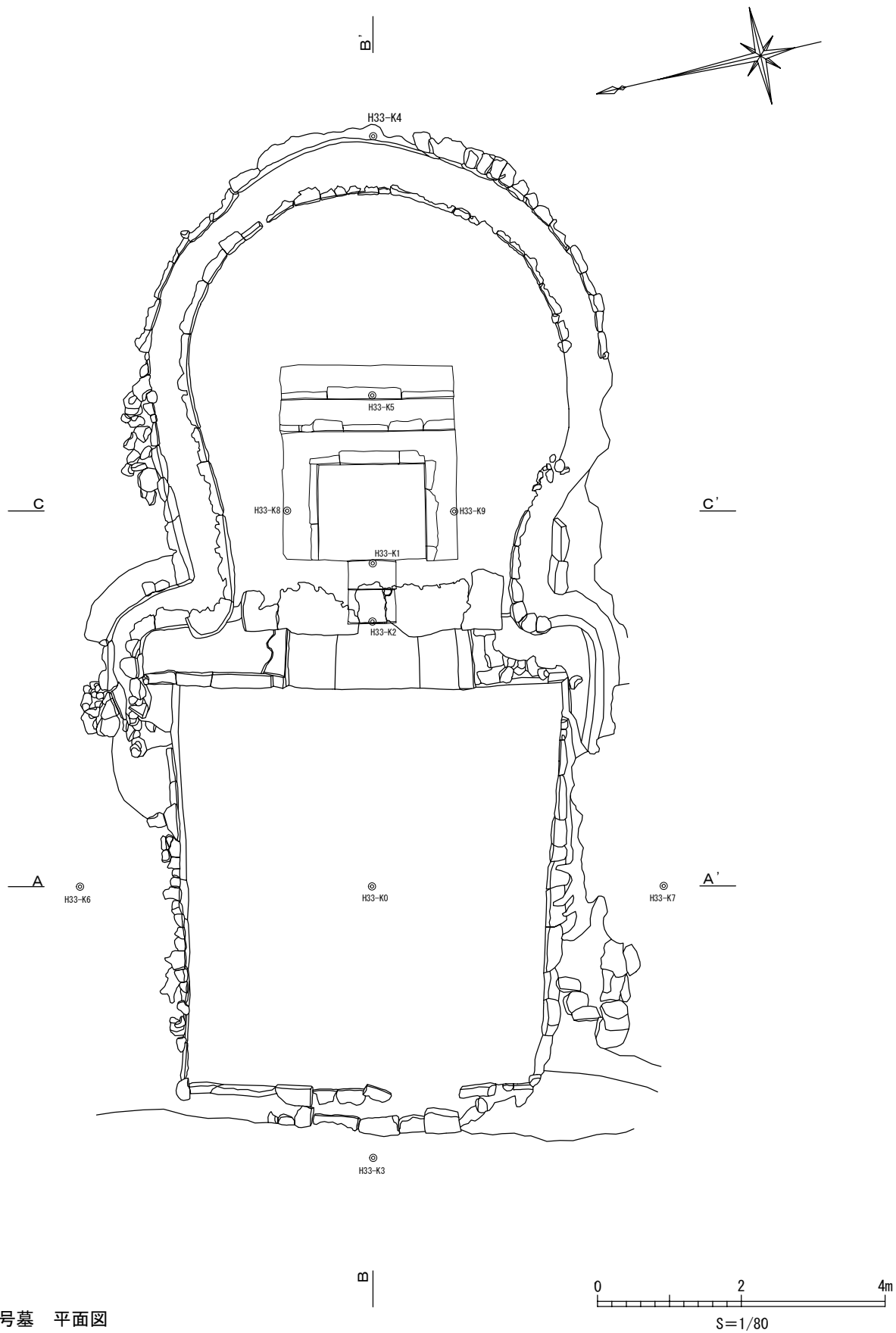
墓室は幅約2.5m、奥行き約2.7m、シルヒラシから天井までの高さ約2.2mである。墓室の内部全体の壁を丁寧に石積みし、天井の形状は切石によるアーチ状で巻墓と呼称される構造を持つ。墓室から墓口をみると布積みで構築されていることから墓正面を大きく開口し、墓室を構築後、切石により羨道および正面を構築する。内部は裏込めにより重鎮している状況が正面の破損部より確認できた。タナ(柵)は奥側に3段、左右に1段のコの字状で、段差が見られないことから5類b型に相当する。シルヒラシには枝サングが敷き詰められる。柵の縁は板状の切石で列状に配し、その内側の表面は石粉が敷かれる。本墓の造営時期は不明であり、出土蔵骨器がマンガン釉甕形の破片のみで復元に至らなかったため、使用時期についても詳細は不明である。



(2) 遺物(第69図、図版65)

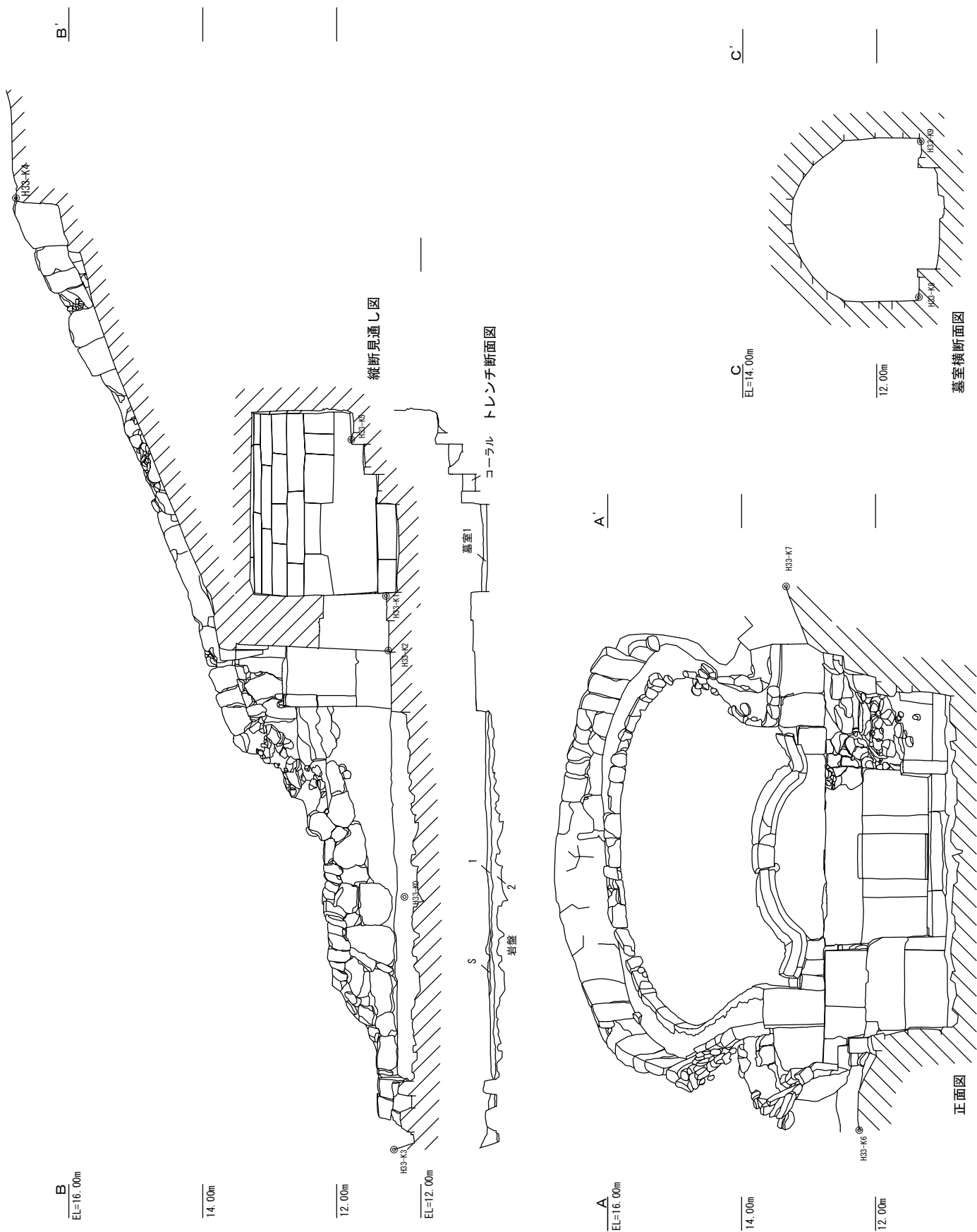
墓室より沖縄産施釉陶器の雁首が出土した。他は第3表を参照。

第67図 033号墓出土遺物



第 68 图 033号墓 平面图

第 69 図 033号墓 縦断見通し図、トレンチ断面図、正面図、墓室横断面図



第13節 034号墓

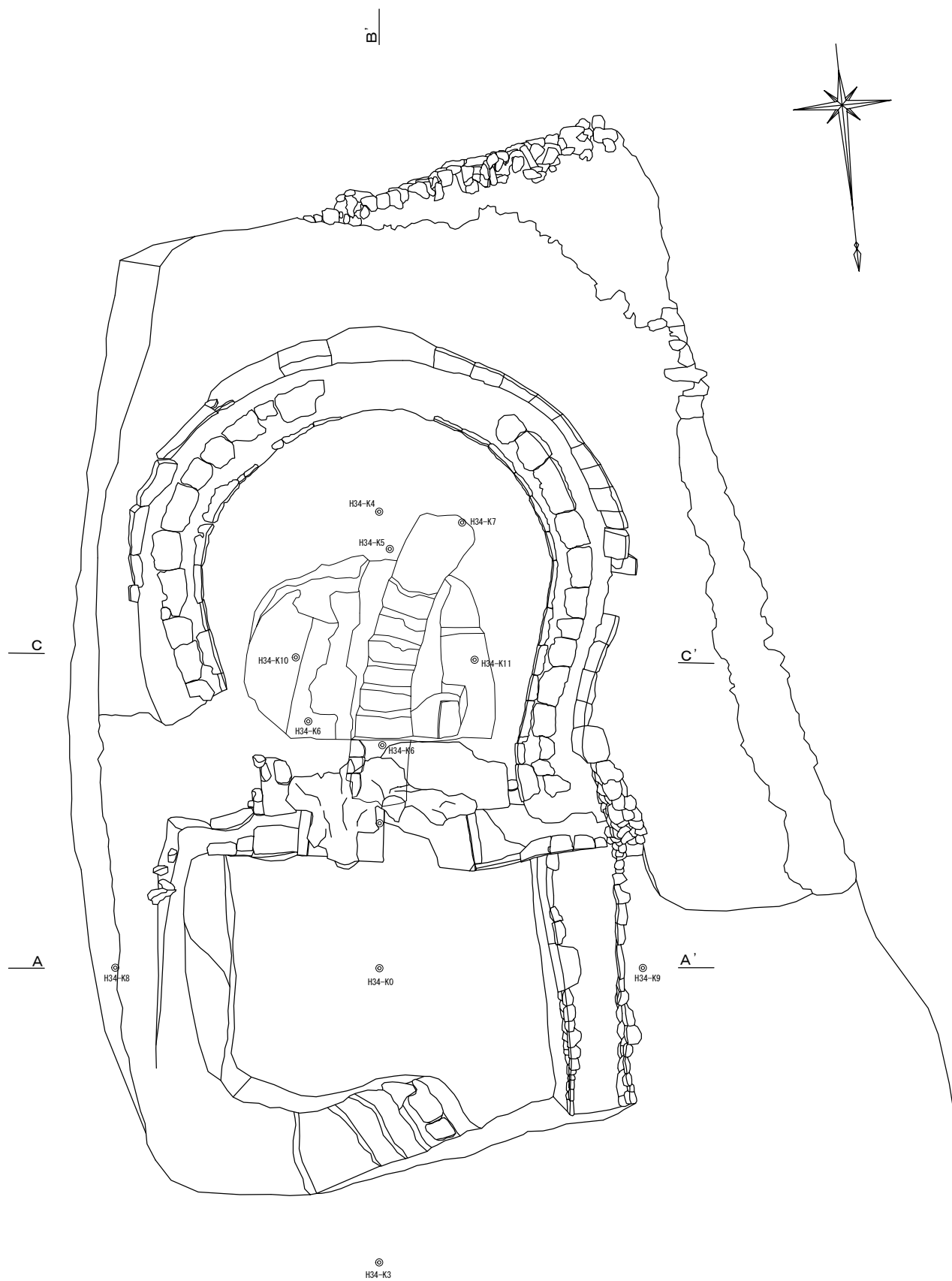
(1) 遺構 (第69図～第70図、図版30)

034号墓は調査区丘陵の中腹にあり、墓口は北側を向く。墓庭を周囲より1.7m掘り下げて構築され、5段の削り出しによる階段が設けられる。墓庭側の2段目は切石を2つ配して段とする。当墓は本調査以前に廃棄されており墓口は開口していたため、墓庭へ流入した相当量の土砂が墓室にも流れ込んでいた。

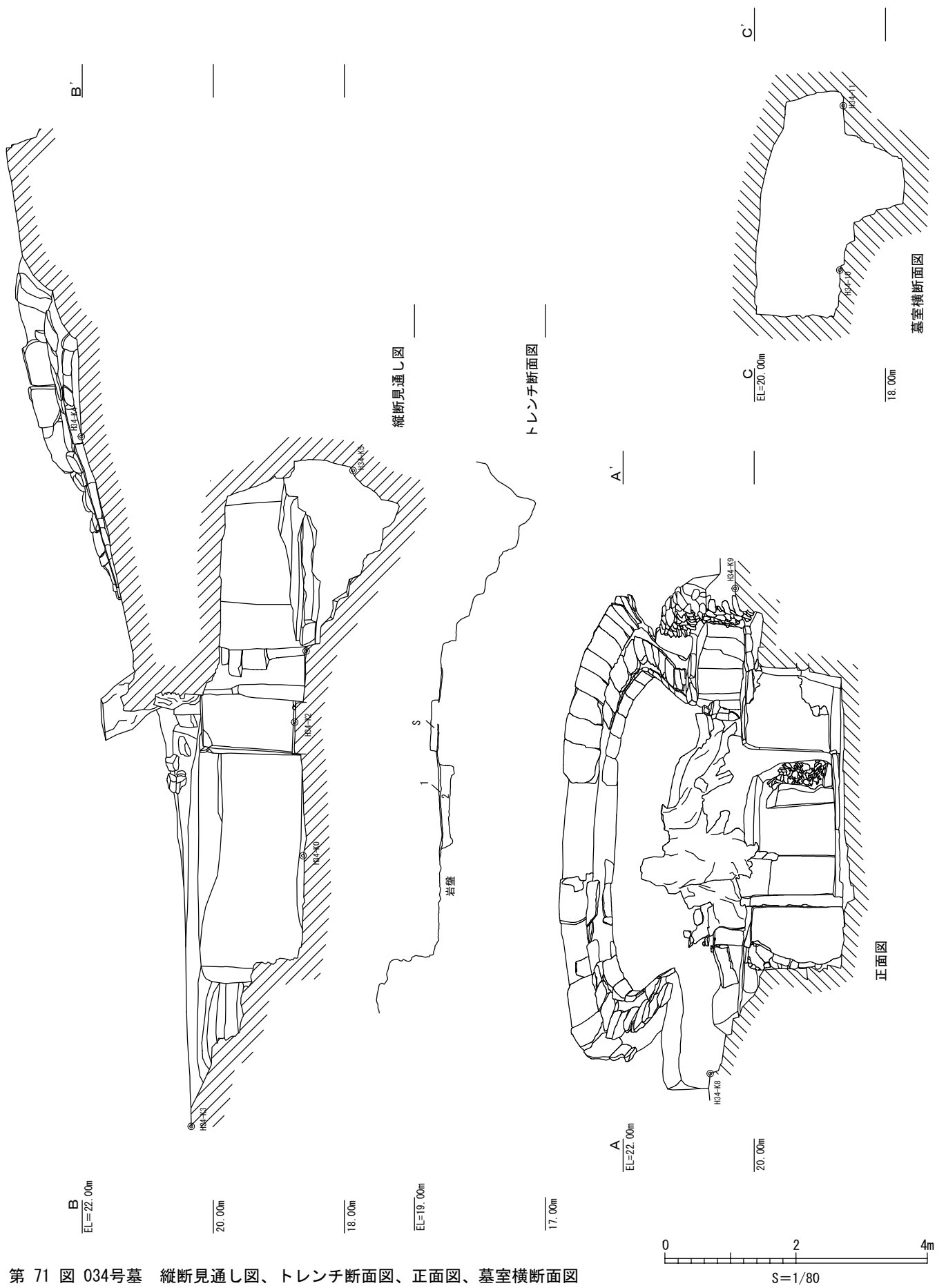
チジ（屋根）は平面形が後方で湾曲する馬蹄形を呈し、高さ約0.35m、厚み0.2m前後の板状の切石を配したヤジョーマーイが廻り、それらは外側に開いてやや斜めに面が見えるようを配している。ウーシ（臼）に繋がる屋根周縁の石列は2列で構成され、内側の列は幅約0.35m、奥行き約0.1mの直方形の切石を配し面を正面に向ける。後列は奥行き約0.35m、幅約0.3m～0.7mの幅広の切石面を上方に向け、チジ中央に向かって斜位になるよう勾配を付けて配されている。チジ中央は岩盤削り出しによる緩やかな弧状を呈し、石敷きは見られない。マユ（眉石）は眉中央に大きなガジュマルが見られるためにその形状は不明瞭だが、先端部付近で上方に反る状況が確認できる。眉正面の底部の段差は不明瞭。右ウーシ（臼）は欠落し、左ウーシ（臼）の位置に半円形状に削り出された岩盤が見られる。墓正面は墓口周辺の石積み欠落しているため不明瞭だが、大きめの切石による布積みが想定される。切石と岩盤との内部は裏込めを入れている様子が向かって右側の崩落部から確認できる。残存の墓口の幅約0.78m、奥行き（羨道の長さ）約0.8mである。サンミデー（供物台）は高さ約0.08m、幅約1.2m、奥行き0.8mの2つの切石で構成される。縁部に漆喰が残存することから漆喰塗布が窺える。向かって左隅にカビアンジ（紙銭焼き場）が設けられている。左スディイシ（袖石）は岩盤削り出しの後、上部に切石を積み、右スディイシと高さを揃えている。右スディイシは幅約0.78m、高さ約1.3mの板状の切石をL字に配してスディイシとする。上面は板状の切石を並べて面とする。墓庭は岩盤を掘り下げて構築され、岩盤直上に1～10cm大の石灰岩を砕いた礫と石紛が混じる10YR7/6明黄褐色砂が重鎮される。ワラビヌティ（童の手）は不明瞭。左ナージミー（庭積み）の下半部は岩盤削り出しでその上部に相方積みが見られ、右ナージミーは岩盤削り出しで、その北角が階段部の出入口となる。ハカヌナー（墓庭）は幅約4.3m、奥行き約3mを測り、横長の方形となる。

墓室は幅約3.4m、奥行き約2.4m。岩盤に横穴を掘り込んで墓室を構築する。シルヒラシ床面には地下へ降りる階段が掘り込まれていた。奥柵直下に地下空間が構築されたため、奥柵の形状は不明である。階段の幅は約0.8m、5つの段が設けられ、最下段から天井まで約2.6mを測る。階段の先に空間は見られない。左右に1段ずつ柵が見られ、左柵のシルヒラシ床面からの高さは約0.18m、柵の奥行きは約0.66m。右柵は高さが不明瞭で、奥行きは約0.72mを測る。柵の残存状況が不良なため、柵形状は不明である。地下空間には空き缶やガラス瓶が多数見られ、沖縄戦時中に壕として使用された可能性が考えられる。

本墓から蔵骨器の出土はなく、墓室も改築されていることから造営時期は不明な点が多い。墓庭を周囲より掘り下げて階段で昇降する古墓は、本墓群より北へ約420mに位置する港川崎原古墓群と類似する。



第 70 图 034号墓 平面图



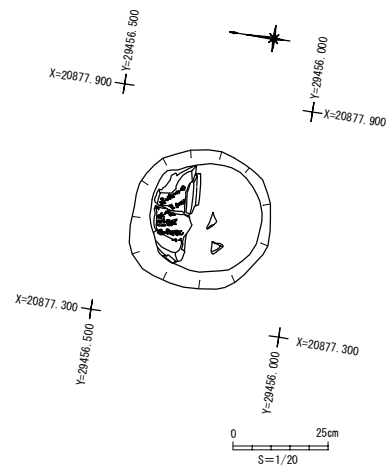
第14節 039号墓

(1) 遺構(第73図～第74図、図版32)

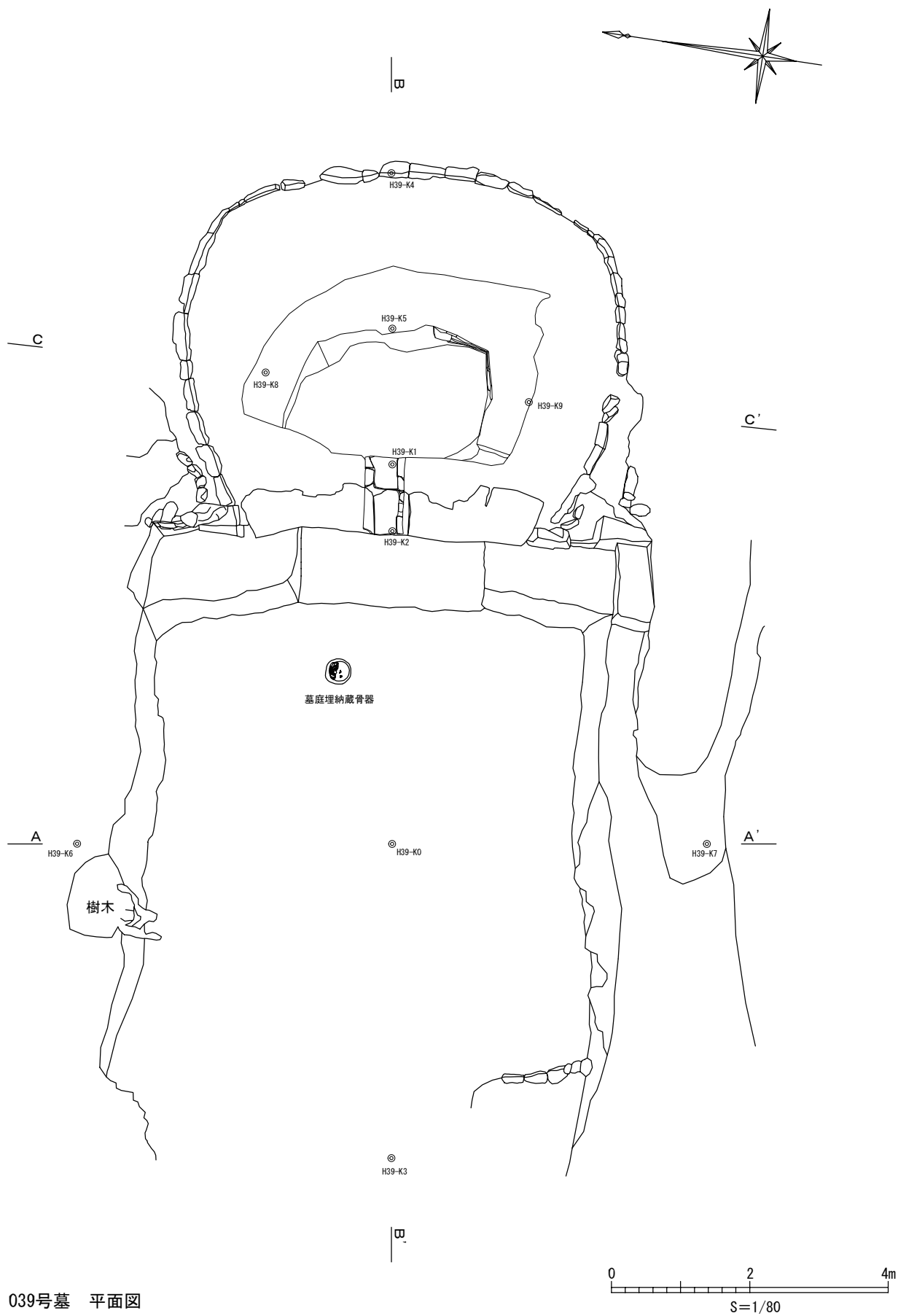
039号墓は調査区丘陵の西斜面に位置し、斜面に墓室を構築した亀甲墓である。当墓は本調査以前に廃棄されて墓口は開口しており、シルヒラシから蔵骨器の破片が出土したほか、墓庭への廃棄が多く見られた。

チジ(屋根)は平面形が後方でやや直線的になる略円形を呈し、ヤジョーマーイに相当する石列は見られない。屋根周縁の石列は1列で構築され、長方形の切石を列状に配置する。チジ中央は岩盤削り出しによる緩やかな弧状を呈し、石敷きは見られない。マユ(眉石)は3つの切石で構成される。眉頂部は平坦に仕上げ、眉端部に向かって屈曲し、先端部付近で上方に反る。両端部は肥大しない。眉正面の底部には小さな段が施されている。正面観がL字状を呈した切石が屋根周縁の見られる1条の石列端部と接することやスディイシ(袖石)の上に配置されている状況からウーシ(臼)として考えることが出来る。本墓ではメンチャとウーシの間にクウーシ(子臼)は意匠されていない。ウーシと考えられる切石がL字状であることから眉石端部と接しないことにより約0.1mの隙間が生じ、ミジハイ(水はけ口)としての機能が考えられる。墓正面は岩盤削り出しにより斜交層理が明瞭に見られるが、墓口は切石により構築される。ジョウカブイ(門被い)は墓口上部で高さ約0.57m、幅約1.5mを測る。ジョウカブイと岩盤の間を雑な相方積みで埋める。シミイシ(隅石)は高さ約0.95m、幅約0.3mを測る。墓口の高さ約1m、幅約0.62m、奥行き(羨道の長さ)は約1.06mである。墓正面は斜交層理の窪み箇所や目地の一部に漆喰が残存する。サンミデー(供物台)は1段見られ、高さは約0.15mを測り、岩盤削り出しで構築される。スディイシ(袖石)は墓正面左右に岩盤削り出しの1段で構成されている。墓庭は岩盤を掘り込んで平坦化している状況が窺えた。ワラビヌティ(童の手)は見られない。ナージミー(庭積み)は左右とも岩盤削り出しにより構築される。スディイシ同様、斜交層理が顕著に見られた。右側のナージミーの高さは約1.75mを測る。ハカヌジョー(墓門)は検出されなかったが、ハカヌジョーに繋がるとみられる石列が検出された。現存の墓庭の法量は幅約6.1m、奥行き約6.8mを測り、平面形は略方形である。サンミデーの前方でピットを1基検出した。径0.36mのピットに庇付きマンガン釉の蓋を打割し、銘書が書かれている部分を上に向けて埋納されていた(第72図、図版66)。出土した蓋は墓室や墓庭から検出された他の破片と接合可能であったことより、元は墓室内に安置されていた蔵骨器だということが分かる。蓋内面に「嘉慶二十五／年庚辰八月十四日／洗骨／比嘉筑登之／妻■」とあり、埋納時期は嘉慶25年(1820)以降ということになる。埋納の理由は不明。

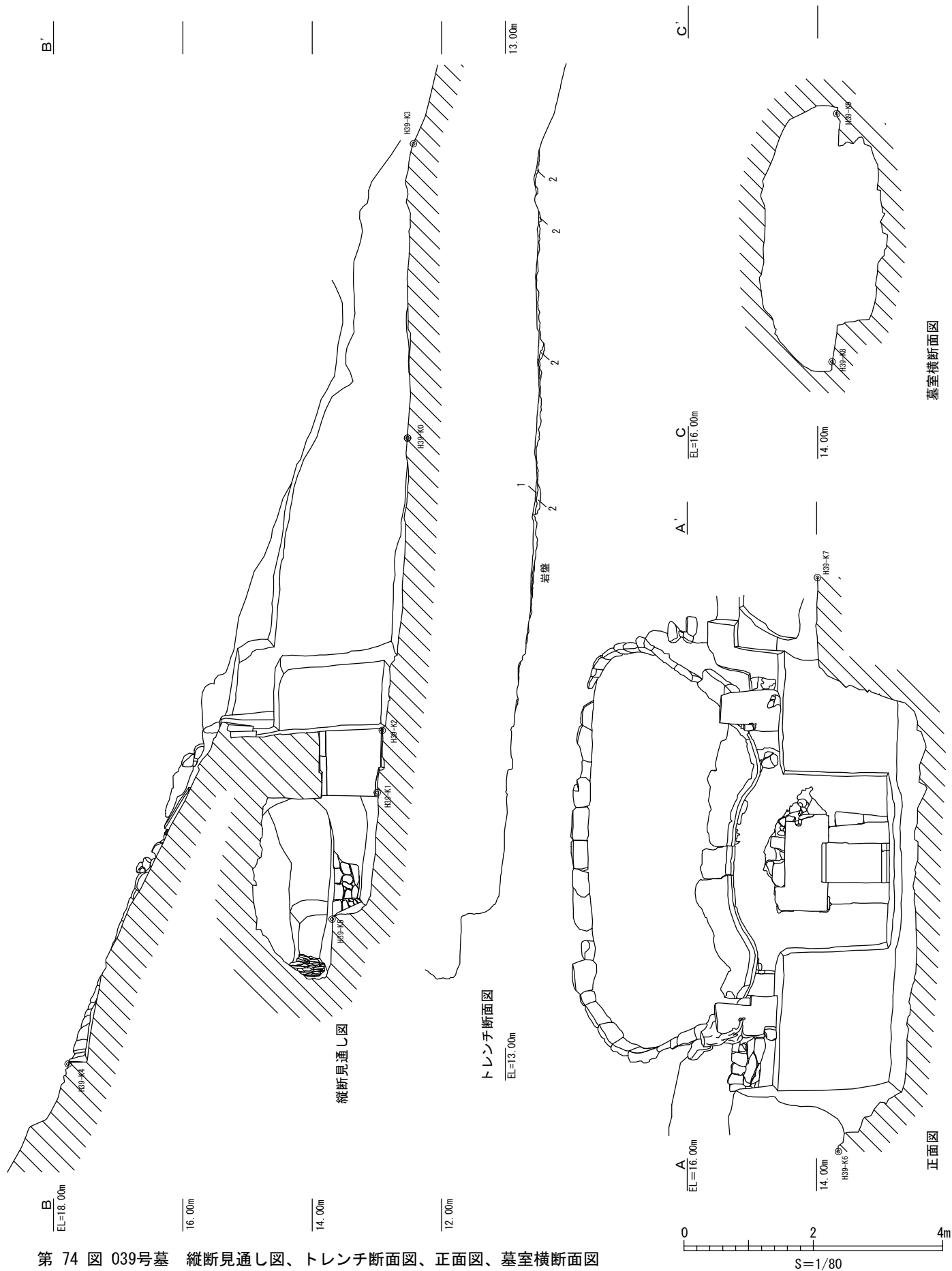
墓室は幅約4m、奥行き約2.7m、シルヒラシから天井までの高さ約1.8mを測る。岩穴に横穴を掘り込んで構築された墓室で、墓室から墓口を見ると切石による相方積みが見られ、目地を漆喰で埋める。しかし、墓正面は斜交層理が確認できることから岩盤の削り出し面であり、墓室側の壁面を切石積みにより構築されたことが分かる。墓室の平面形がいびつな形状で奥棚と左右棚の段差の無いコの字状の3類a型である。シルヒラシから棚の高さは約0.5mを測る。棚は岩盤を削り出して構築するが、左棚の一部で相方積みが見られる。



第 72 図 墓庭埋納蔵骨器 出土平面図



第 73 図 039号墓 平面图



第 74 図 039号墓 縦断見通し図、トレンチ断面図、正面図、墓室横断面図

また奥壁の一部にも相方積みが見られる。棚およびシルヒラシには上面に1 cm～2 cmの明黄褐色の砂質土が見られた。

本墓の造営年代は不明だが、使用時期は出土した蔵骨器で最も古い形式が第76図225や226のボージャー形の蓋で安里分類のⅠ式(1660～1690)に相当する。ボージャー形が多数を占め、最も新しい銘書は大正10年(1921)であることから、使用時期の始まりは17世紀中頃から17世紀後半とみられ、その後は、20世紀前半まで使用された墓であると考えられる。

(2) 遺物(第75図～第76図、図版66～図版68)

039号墓からは蔵骨器、本土産磁器、沖縄産陶器、鉄釘が出土した。蔵骨器のほとんどは墓庭からの出土であった。よって、蓋と身のセット関係が明確な資料は出土していない。最も多く出土したのはボージャー形で、次いでマンガン釉甕形が見られる。ボージャー形では喜名・知花焼と見られる身の検出があったが、残存状況が悪く図化は見送った。荒焼御殿形は蓋の完形が2点だが、身の完形を5点確認されていることから、相当数の荒焼御殿形が安置されていたと窺える。また赤焼御殿形は蓋と身が5点ずつ出土し、そのほかに石製家形蔵骨器の蓋が1点、上焼ツノ形の御殿形の身が5点出土した。本墓では御殿形を多く安置していた状況が廃棄された蔵骨器より推測できた。銘書により津波姓、比嘉姓が確認された。

第75図218、219はボージャー形の身である。218は口縁部が玉縁状で内傾し、頸部沈線が3本、平葎形のマド枠が貼り付けられる。マド枠の右側に鳥獣形文が沈線で描かれる。219は同じく頸部沈線が3本、平葎形のマド枠。マド枠の下に蓮華文が沈線で描かれる。両者とも安里分類のⅡa式(1680～1740)に相当する。

第75図220はボージャー形の身で、頸部沈線が1本、平葎形のマド枠が貼り付けられる。マド枠左上方に窯印が見られる。胴部無文。安里分類のⅢa式(1700～1800年)に相当する。マド枠下方に「乾隆…／津■[波カ]…」と銘書が見られ、乾隆年間(1736～1795年)が確認できる。

第75図221はボージャー形の身で、頸部沈線が3本、平葎形のマド枠が貼り付けられる。マド枠右上方に窯印が見られる。安里分類のⅣ式(1720～1820)に相当する。

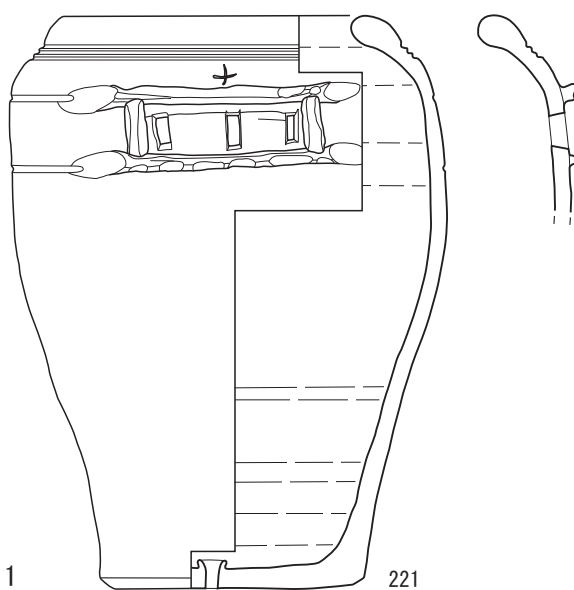
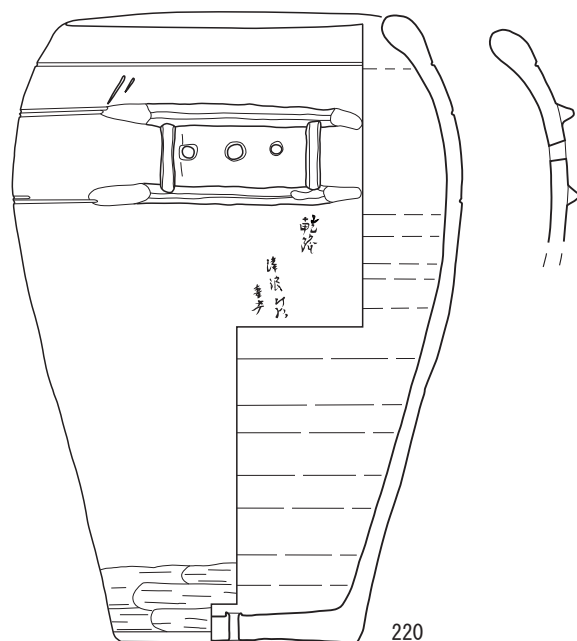
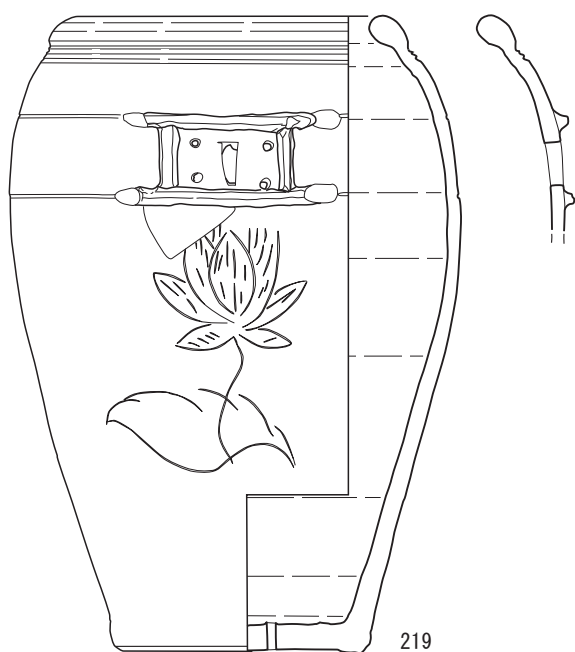
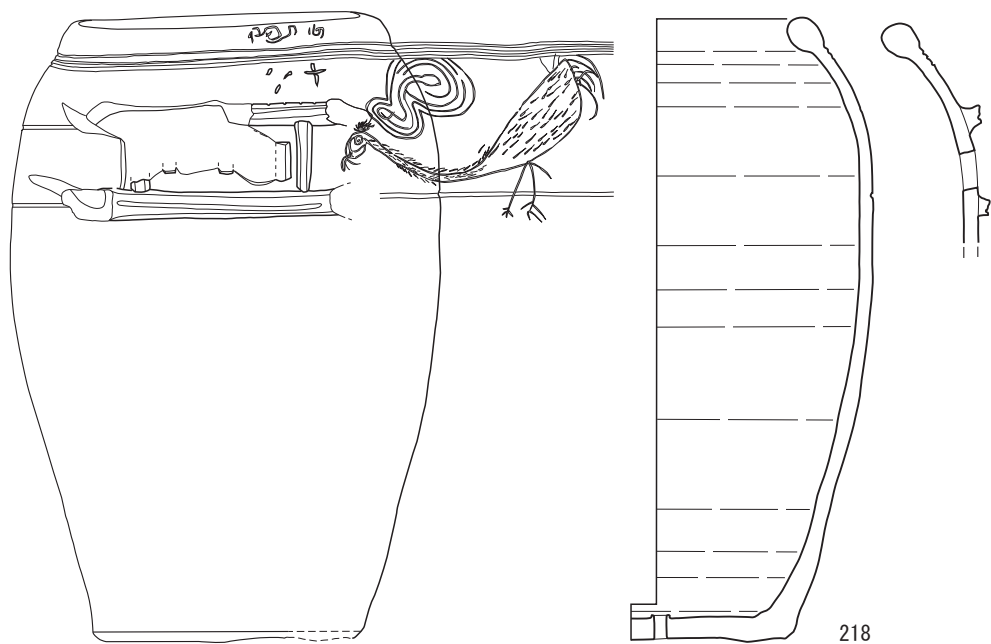
第76図222はマンガン釉甕形の身で、横帯2～4とも突帯が貼り付けられる。屋門が貼り付けの唐破風形で柱貫が付く。頂部に玉文、柱下に花形弁。肩部文様帯は葉文と見られる模様を沈線で描き、胴部文様帯は貼り付けの蓮華文、法師像が見られ、茎は沈線で表現する。安里編年のⅢ期(1810～1850年代)に相当する資料である。

第76図223はマンガン釉甕形の身で、口縁部は平坦でやや外反する。肩部文様帯は沈線で蓮華文を施す。横帯2・3は突帯で横帯4は沈線である。屋門は貼り付けのアーチ形で柱下玉飾りの下に台座を貼り付けし、その中央に円文を3つ貼り付ける。胴下部文様帯は櫛描波状文を2条施す。安里編年のⅣ期(1850～1890年代)の資料。

第76図230は荒焼御殿形の身である。屋門は唐破風形を貼り付け、柱貫の上方に小孔を左右に5箇所ずつ十字に配するように穿孔する。屋門の両側と側面に蓮華に乗った法師像を貼り付ける。花形の印刻文で縁取りされ、脚部には同じく花形と方形の印刻文が施される。上江洲編年の1810～1870年の資料である。

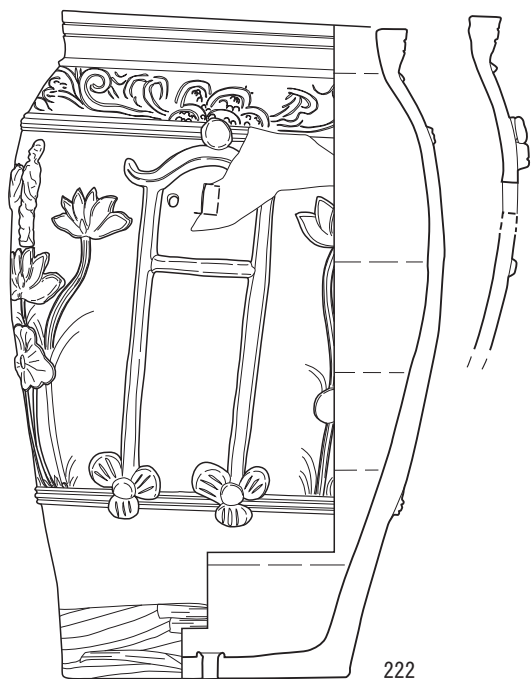
第76図224はサンゴ石製家形蔵骨器で屋根は入母屋形である。正面及び両側面の軒に垂木が表現される。外面は全体的に丁寧な調整が見られ、内面は粗い削り跡が明瞭である。大堀分類の2H類(入母屋造千鳥破風6式)と見られ、17世紀後葉から18世紀が主体となる資料である。

第76図225～229はボージャー形の蓋である。225はつまみが欠損するが宝珠形を呈したと見られ、蓋裏

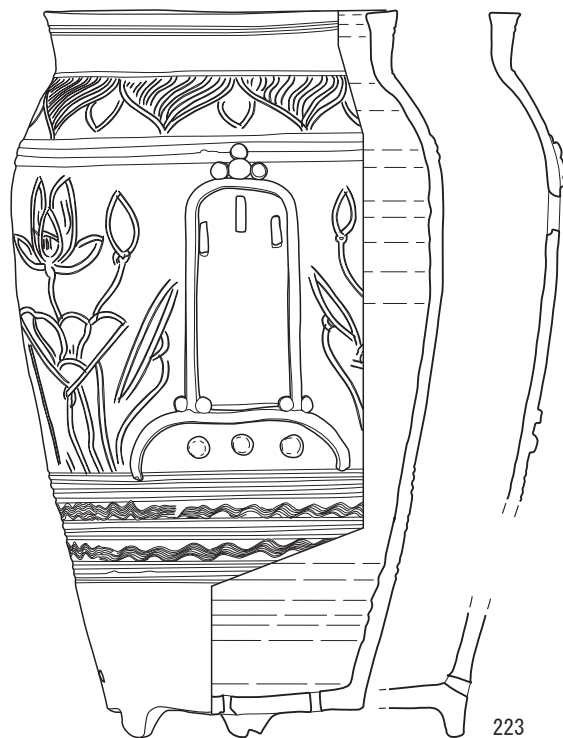


第75図 039号墓出土遺物 1

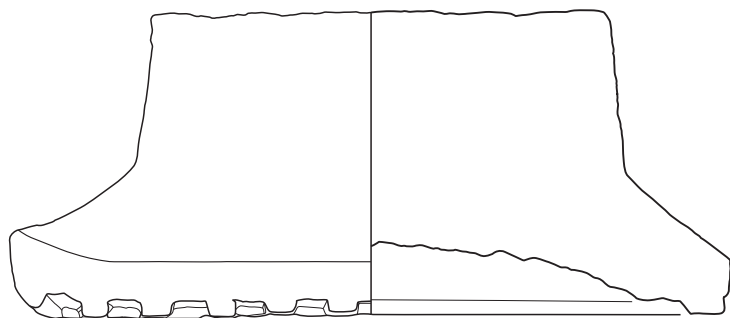
0 S=1/6 20cm



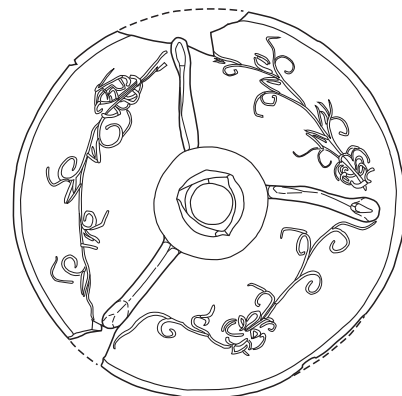
222



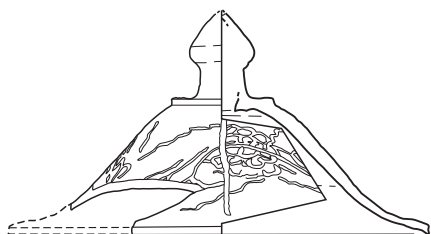
223



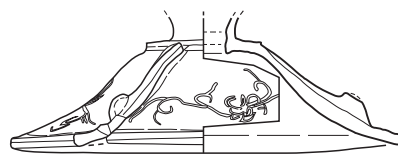
224



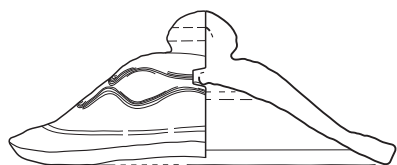
225



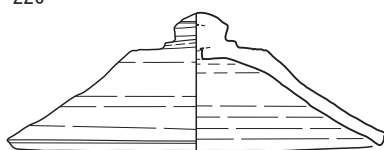
226



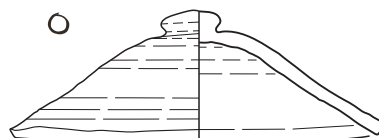
227



228



229



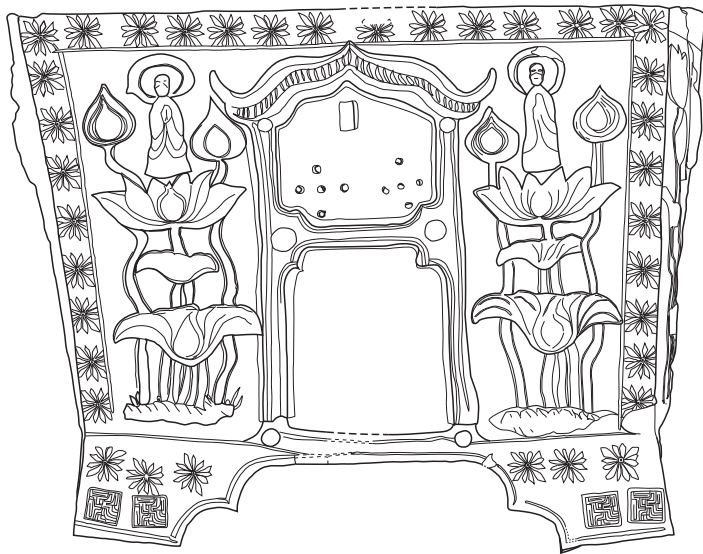
230

宿正
漢代
陶器
出土
物
之
一
也

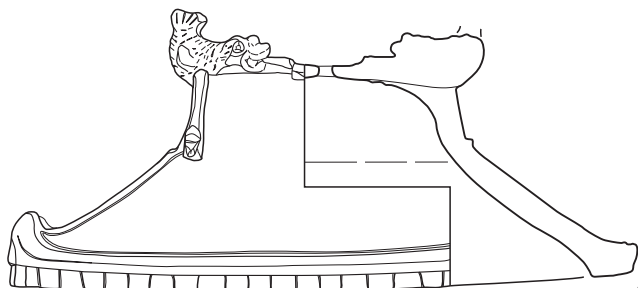
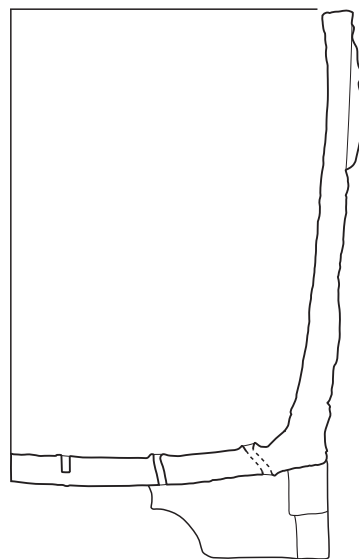
漢代
陶器
出土
物
之
一
也

0 S=1/6 20cm

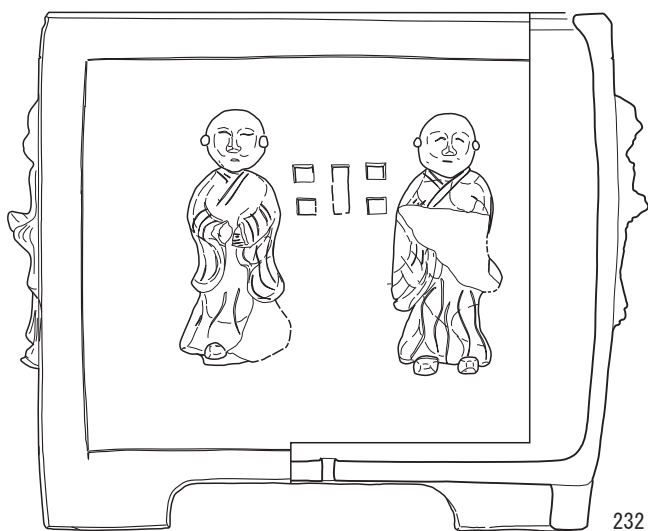
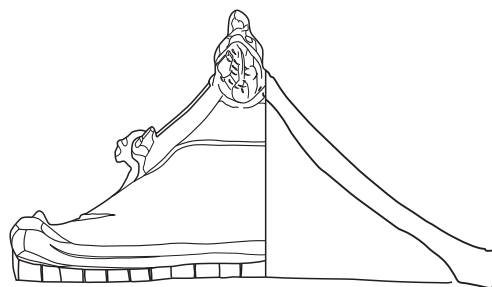
第76図 039号墓出土遺物 2



230

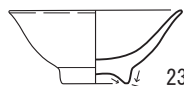


231

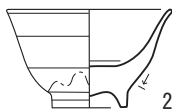


232

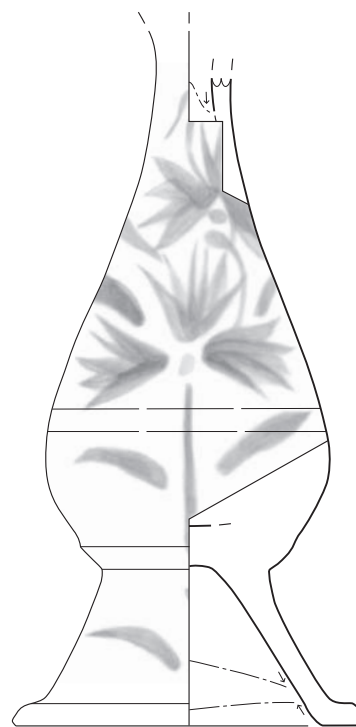
0 S=1/6 20cm



233



234



235

0 S=1/2 5cm

第77図 039号墓出土遺物 3

の中心部は有孔である。径9cmのつまみ台から軒状の突帯が放射線状に3本伸び、体部を3つに区画する。突帯の端部は粘土塊を貼り付け、緩い角状となる。体部の区画に線彫りの唐草文が施される。鐙の端部は中央が浅く窪み、内外面共に回転ナデが施され、全体的に丁寧な造りである。安里分類のⅠ式(1660～1690)の資料に相当し、本墓の出土遺物の中で最も古い形式である。

226はつまみが宝珠形で、蓋裏の中心部は有孔。鐙は厚みがあり、端部は平坦となる。つまみ台の径8.1cm。体部に線彫りの草花文が施され、つまみ台から幅広の縦位沈線が4本施文される。安里分類のⅠ式(1660～1690)の資料と想定される。227はつまみが饅頭形で蓋裏の中心部は有孔である。つまみ台は見られない。体部に櫛描波状沈線文が2条見られる。安里分類のⅡb式(1680～1750)に相当する。

228はつまみが扁平形で、蓋裏の中心部は有孔である。鐙端部の中央が浅く窪む。つまみ台は径5.6cmと小型。体部は無文。安里分類のⅢb式(1710～1740)の資料となる。蓋内面に銘書で「雍正九年辛亥／五月四日死／津波■■男子／■■親富祖也／同人■■／同人子／…■■」とあり、津波■■男子の■■親富祖が雍正9年(1731)に死去したことが分かる。

229はつまみが扁平形で蓋裏の中心部は無孔である。端部は平坦で内外面共に回転ナデ調整が見られる。蓋表に墨書で○の印。蓋内面に銘書で「津波親雲上次男／加那津波」とある。安里分類のⅤb式(1740～1770)の資料である。

第77図の231および232は両者とも墓庭から出土し、赤焼御殿形の蓋と身はほかに4基ずつの計5基が出土したため、明確なセット関係は不明である。

231は赤焼御殿形の蓋である。屋根は入母屋形で大棟に一对の鯨が施される。降棟に簡略化された獅子頭が付く。軒の四隅に角状の突起が見られる。軒に垂木が意匠される。上江洲編年の1690～1780年の資料である。

232は赤焼御殿形の身である。型成形後、外面は丁寧なナデ調整の後に、法師像を貼り付けている。正面に方形のマドが4箇所見られ、正面及び背面に法師像が2体ずつ貼り付け、側面は1体ずつの貼り付けが施される。

第77図233は本土産磁器の小杯である。口縁部は外反し、畳付以外は透明釉で全面施釉される。

第77図234は沖縄産施釉陶器の小杯である。口縁部が外反し、内面から外面下部まで透明釉で施釉。外面にコバルトが薄く見られる。素地は灰白色を呈する。

第77図235は沖縄産施釉陶器の瓶子である。素地は赤褐色で緻密。外面及び内面途中まで白化粧を施した後、透明釉で施釉される。外面胴部にコバルトで撫子文を施す。

第37表 039号墓 陶磁器観察表

No.	挿図番号 図版番号	出土地	器種	分類	法量(cm)	観察事項	備考
1	第77図 233 図版68-233	墓庭	小杯	本土産磁器	口径:4.6 器高:1.95 底径:1.8	外反口縁。畳付以外透明釉で全面施釉。	
2	第77図 234 図版68-234	墓庭	小杯	沖縄産施釉陶器	口径:4.4 器高:2.6 底径:2.0	外反口縁。外面下部から外底面以外透明釉で施釉。外面にコバルトが薄く見られる。素地は灰白色。	
3	第77図 235 図版68-235	墓庭	瓶	沖縄産施釉陶器	口径:— 器高:18.4 底径:9.3	素地は赤褐色で緻密。外面は底部から高台内部以外、内面は頸部途中まで白化粧の後、透明釉で施釉。外面にコバルトで撫子文を施す。素地は橙色。	

第38表 039号墓蔵骨器(蓋)観察表

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	つまみ/屋根形状 接合部孔 つまみ台・圏線 鐫(cm) かえり(cm)	つまみ台径 口径/棟長 器高/渠行長 体部高/器高	文様	調整痕	釉薬	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
1		第76図224 図版67-224	墓庭	冢形(石製)	入母屋形	— 36.4 57.4 48.4 24.4	正面および左右の軒に垂木の表現。背面に軒は見られない。	外面は全体的に丁寧な削り調整が見られる。内面は粗い削り痕が明瞭にみられる。	なし	なし	—	—	サンゴ石製
2		第76図225 図版67-225	墓庭	ポージャー形	欠損 有孔 あり・なし —	9.0 30.9 30.6 — 8.7	つまみ台から棟状の突帯が放射状に3本伸び、体部を3つに区画する。突帯の端部は粘土塊を貼り付けゆるい角状にする。体部の区画には線彫りの唐草文が施される。	つまみ台は削り出し。鐫端部は中央が窪む。ロクロ成形後、内外面ともに回転ナデ調整がみられる。全体的に丁寧なつくり。	なし	なし	—	—	
3		第76図226 図版67-226	墓庭	ポージャー形	宝珠形 有孔 あり・なし —	8.1 (35.0) (35.0) (17.7) 10.8	体部に草花文を施文後、4箇所に縦位方向の沈線。	つまみ台は削り出し。鐫端部は中央が窪む。ロクロ成形後、内外面ともに回転ナデ調整がみられる。全体的に丁寧なつくり。	なし	なし	—	—	
4		第76図227 図版67-227	墓庭	ポージャー形	饅頭形 有孔 なし・なし —	— 30.7 29.9 12.15 8.9	体部に櫛描波状文	つまみ台なし。鐫端部は厚みがあり平坦。ロクロ成形後、内外面ともに回転ナデ調整。	なし	あり	—	—	
5		第76図228 図版67-228	墓庭	ポージャー形	扁平形 有孔 あり・2条 —	5.6 30.0 28.9 10.9 8.7	なし	つまみ台回転削り出し。鐫端部は浅く中央が窪む。ロクロ成形後、内外面ともに回転ナデ調整。	なし	あり	雍正9 (1731)	—	
6		第76図229 図版67-229	墓庭	ポージャー形	扁平形 無孔 なし・なし —	— 29.7 28.7 10.4 8.7	なし	つまみ台なし。端部は平坦。ロクロ成形後、内外面ともに回転ナデ調整。	なし	あり	—	—	
7		第76図231 図版67-231	墓庭	赤焼 御殿形	入母屋形	— 20.5 50.0 39.0 22.0	大棟に一对の鰭。降棟に簡略化された獅子頭。軒四隅に角状の突起。軒に垂木の表現。	型成形後、外面は全体的に横方向のナデ調整。内面、横方向の粗いナデ調整。	なし	なし	—	—	

第39表 039号墓蔵骨器(身)観察表

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	大きさ (cm) ※	窓枠/屋門	窓数/形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯印	銘書	死去年	洗骨年	備考
1		第75図218 図版66-218	墓庭	ポージャー形	23.0 33.7 19.4 49.3	平葺形	3個?	①凹3 ②凹1 ③凹1 ④—	窓枠右側に沈線で鳥獸形文。	口縁部は玉縁状で内傾する。ロクロ成形後、口縁部から胴下部までナデ調整。胴最下部はへう削り。内面、回転ナデ調整。	5個/円	なし	あり	なし	—	—	窓枠上方に窯印あり。
2		第75図219 図版66-219	墓庭	ポージャー形	24.5 35.5 19.0 50.5	平葺形	5個 1方4円	①凹3 ②凹1 ③凹1 ④—	窓枠下に沈線で蓮華文。	口縁部は玉縁状で内傾する。ロクロ成形後、口縁部から胴下部までナデ調整。内面、回転ナデ調整。	5個/円	なし	なし	なし	—	—	
3		第75図220 図版66-220	墓庭	ポージャー形	27.0 35.5 18.5 49.5	平葺形	3個 1円2円	①凹1 ②凹1 ③凹1 ④—	なし	口縁部は玉縁状で内傾する。ロクロ成形後、胴上部から胴下部までナデ調整。胴最下部はへう削り。内面、回転ナデ調整。	5個/円	なし	あり	あり	乾隆年間 1736~1795		窓底左上に窯印あり。
4		第75図221 図版66-221	墓庭	ポージャー形	23.3 34.3 19.0 45.5	平葺形	3個 1方2方	①凹3 ②凹1 ③凹1 ④—	なし	口縁部は玉縁状で内傾する。ロクロ成形後、口縁部から胴下部までナデ調整。内面、回転ナデ調整。	6個/円	なし	あり	なし	—	—	窓枠上に窯印あり。
5		第76図222 図版67-222	墓庭	マンガン釉壺形	27.3 34.2 22.5 52.8	唐破風形(貼)	(3個) (1方2円)	①凹2 ②凸1 ③凸3 ④凸3	肩部文様帯は沈線による葉文か。胴部は貼り付けの蓮華文および法師像。茎は沈線。柱下の玉飾りは花卉形。	口縁部は直口。口唇部は平坦。外面は口縁部から底部はナデ調整。胴最下部はへう削り。内面は強い回転ナデがみられる。	1個/円	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	なし	—	—	
6		第76図223 図版67-223	墓庭	マンガン釉壺形	27.0 33.0 19.4 55.0	アーチ形(貼)	3個 1方2方	①凹2 ②凸1 ③凸3 ④凹4	肩部文様は沈線の蓮弁文。胴部は沈線による蓮華文。胴下部文様は櫛描波状文。柱玉飾りの下に台座を貼り付けし、その中央に円文を横に3個貼り付け。	口縁部はやや外反。口唇部は平坦。外面は口縁部から底部ナデ調整。内面は強い回転ナデがみられる。底部には3つの脚がつく。	12個/円	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	なし	—	—	
7		第77図230 図版68-230	墓庭	荒焼 御殿形	54.0×40.9 48.0×35.5 43.7	唐破風形(貼)	11個 1方10円	—	屋門の左右と側面に蓮華に乗った法師像を貼り付け。上下左右に花文の印刻で縁取り。脚部に花文と方形の印刻。	型成形後、外面丁寧なナデ調整の後に文様を貼り付け。内面は口縁部付近は横方向のナデ調整。胴部はへう状工具による縦方向の調整後、軽く全体をナデ調整を施す。	(30個)	マンガン釉を表面全体に施釉するが、正面銘書面および蓋と接する面は露胎。	なし	なし	—	—	
8		第77図232 図版68-232	墓庭	赤焼 御殿形	45.0× (35.5) 43.0×35.0 41.0	—	5個 1方4方	—	正面および裏面に法師像を2体貼り付け、両側面に法師像を1体ずつ貼り付け。	型成形後、外面は丁寧なナデ調整の後に文様を貼り付け。内面は口縁部付近は横方向のナデ調整。胴部は方向のナデ調整が見られる。	5個/円	なし	なし	あり	—	—	

※大きさ(cm)は、ポージャー形・壺形は上から口径/胴径/底径/器高。冢形・御殿形は上部(長軸×短軸)/底部(長軸×短軸)/器高。

第15節 041号墓

(1) 遺構(第78図、図版33)

041号墓は調査区丘陵の西斜面に位置し、斜面に横穴を掘削し墓室を造る。本墓は比較的低い位置に構築されており、東側標高の上位斜面部には044号墓など亀甲墓が構築される。

墓庭は斜面を矩形に掘り下げ、墓正面は岩盤の削り出しである。正面壁面に斜交層理が確認できる。墓口周辺は漆喰が塗布されているため、正面の墓口周囲の石組で確認できるのはジョウカブイ(門被い)のみである。ジョウカブイは厚み約0.15m、幅約0.8mを測る。ただし、墓室の墓口側の壁ではシミイシ(隅石)を確認することが出来る。墓口は幅約0.63m、高さ約0.8m、奥行き(羨道の長さ)は約0.8mを測る。羨道は墓庭から約0.45mの箇所に段差が設けられ、それに対応するよう天井部分にも段差が設けられている。これらの段差は閉塞石止めの機能が考えられる。スディイシ(袖石)は見られず、墓口前に敷かれた6個の切石がサンミデー(供物台)の役割を果たすものと考えられた。それらの切石は、両脇はやや大きめな石を配置しているが全体的に不揃いな形の切石が配されている。正面屋根側の縁は切石による1段から2段の粗い相方積みが施される。亀甲墓でいうマユ(眉石)に相当するような切石は見られず、正面屋根側の縁から奥行き約1.0mの緩斜面が屋根に相当する部分と見られ、角から約0.4mの立ち上がりが見られる。立ち上がりの縁の部分に小振りな礫による石列の一部が残存し、その石列はヤジョーマーイの可能性が考えられる。左右のナージミー(庭積み)は基壇部で岩盤削り出しの面が露呈するが、その上部は粗い相方積みが見られる。ナージミーの正面側の高さは約2.1m、墓門側の高さが約1.6mと丘陵斜面の傾斜に合わせて墓門側が低くなるよう構築されている。ハカヌジョー(墓門)は崩落し残存状況が不良だが、墓庭と墓道を昇降する段状の構築物が見られ、墓庭側に2段の切石が残存する。ハカヌナー(墓庭)は幅約3m、奥行きは長軸で約3.1m、短軸で約2.2mを測り、平面観は概ね正方形となる。

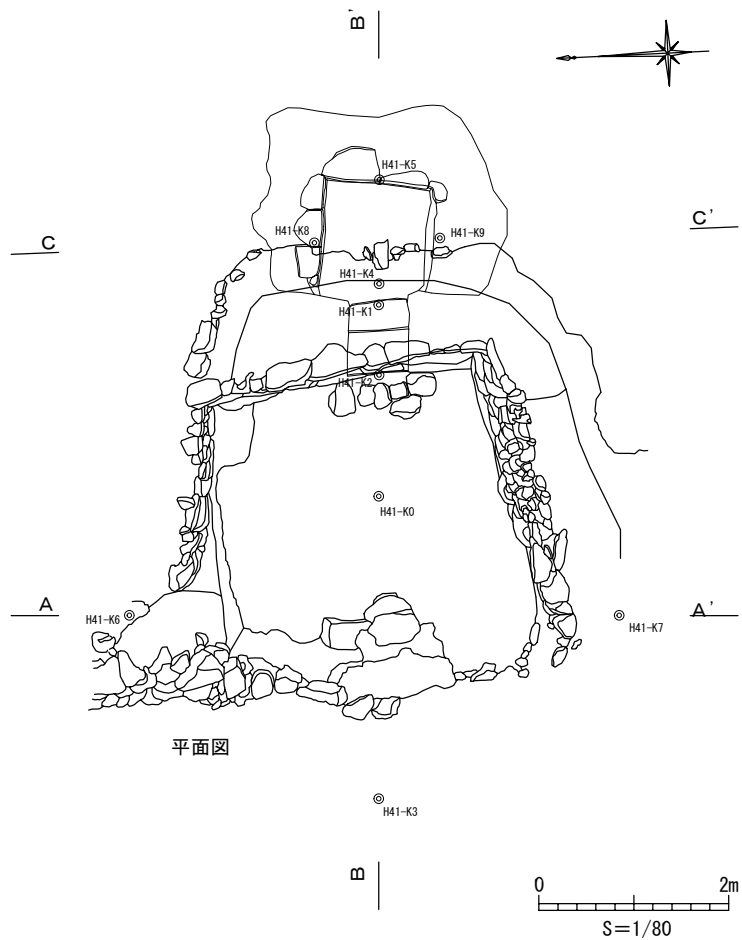
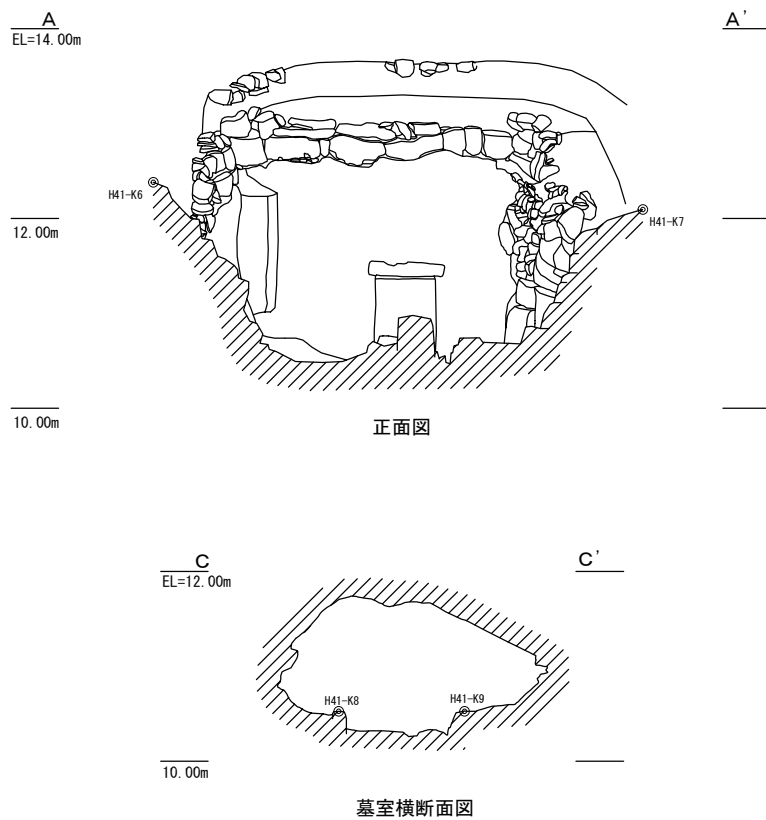
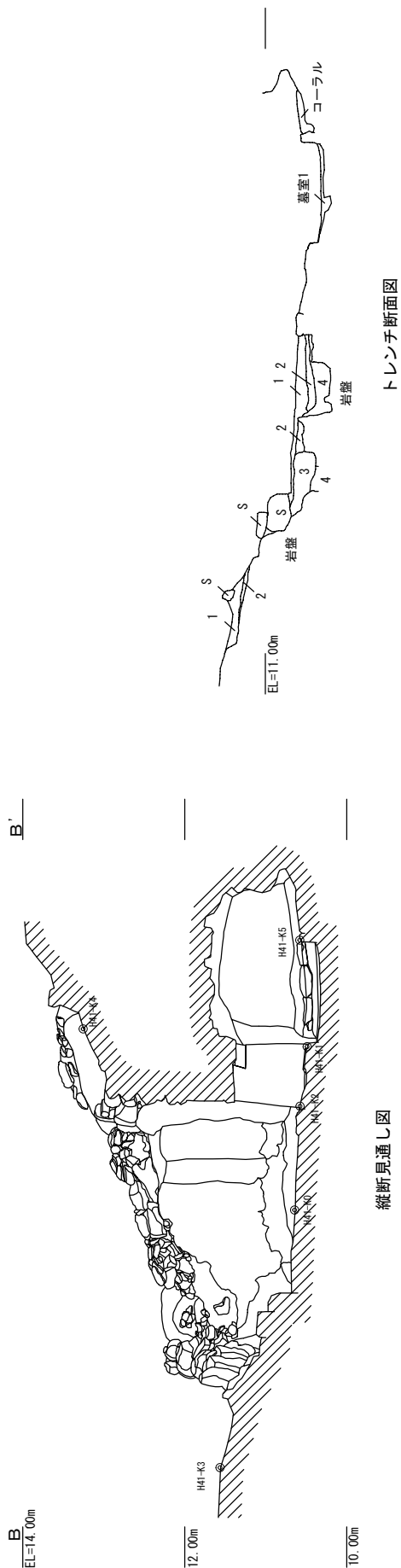
墓室は幅約2.3m、奥行き約1.9m、シルヒラシから天井までの高さ約1.3mを測る。天井は岩盤の凹凸が顕著で成形が粗い。シルヒラシは幅約1.0m、奥行き約1.2mを測る。墓庭が概ね東西の軸を向くのにに対し、羨道がやや南東側を向くため、墓室の軸と墓庭の軸が異なっている。タナ(棚)はコの字状で奥と左右に段差は見られない。墓室類型は3類a型となる。奥棚の奥行き約0.66m、シルヒラシ基底面からの高さ約0.17m、左棚の奥行き約0.17m、シルヒラシ基底面からの高さ約0.23m、右棚の奥行き約0.55m、基底面からの高さ約0.7mを測る。3つの棚は概ね0.2m前後の低い高さの棚の造りとなっている。左棚は岩盤削り出しにより構築されるが、奥棚および右棚は縁に切石を列状に配し、岩盤との内側に石灰岩を砕いた小礫と石紛及び砂粒がやや多く混入する10YR5/4にぶい黄褐色砂層で充填し構築される。奥壁および左右壁も天井と同様に成形が粗く、平面観も不定形な矩形である。

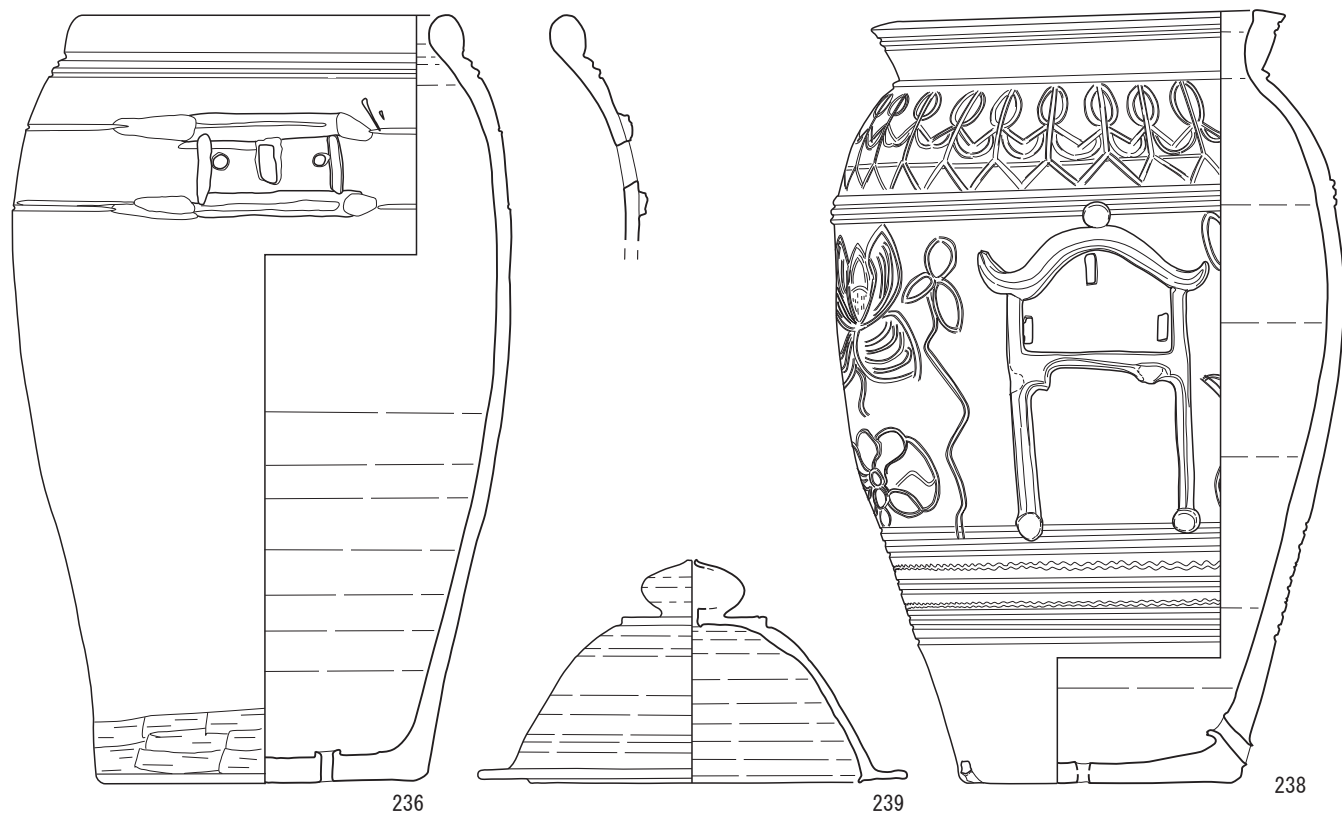
本墓の造営年代は不明だが、出土した蔵骨器をみると甕形のボージャー形で安里分類のIV式(1720～1820)の身やVII式(1750～1820)の蓋、およびマンガン釉甕形で安里編年のIV期(1850～1890)、V期(1900～1920年代)、VI期(1930年代以後)と出土した。このことから、本墓の使用時期は18世紀中頃から20世紀初め頃まで継続的に使用され、特にマンガン釉甕形は完形7点中、安里編年のIV期の身が4点出土と集中して見られたことから、1850年代から1890年代が最も使用されたことが窺える。

(2) 遺物(第79図、図版69)

041号墓からは蔵骨器、本土産磁器、沖縄産無釉陶器、鉄釘、ガラス製品が出土している。蔵骨器は甕形の

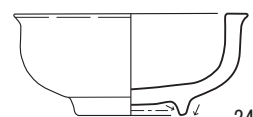
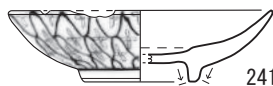
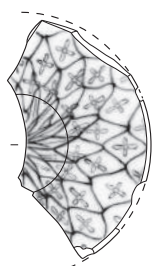
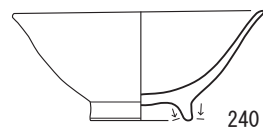
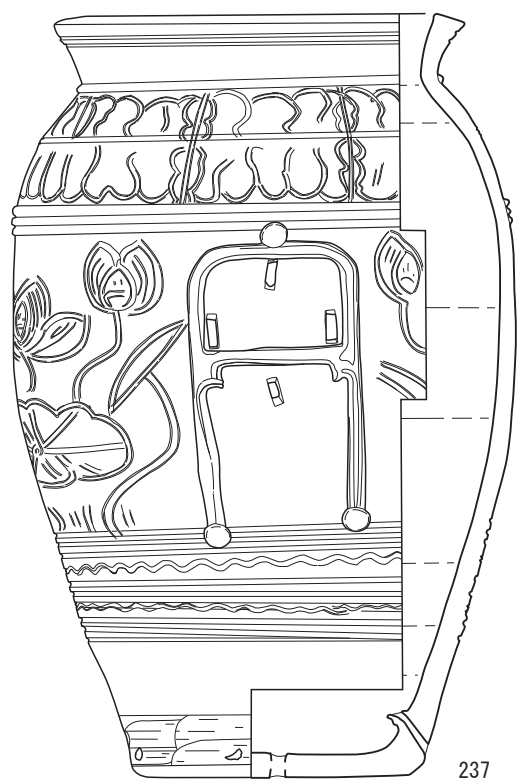
第 78 図 041号墓 遺構図





大木

0 S=1/6 20cm



0 S=1/2 5cm

第79図 041号墓出土遺物

ボージャー形およびマンガン釉甕形が出土し、それらはすべて墓庭へ廃棄された状態での出土であった。最も多く出土したのはマンガン釉甕形で、完形は7点出土し、その中でも安里編年のⅣ期の蔵骨器が出土割合中44%を占めていた。第79図236はボージャー形の身で、口縁部は玉縁状で直口する。頸部沈線が3本で胴部は無文である。マド枠は平葎形が貼り付けられ、右上方にカマ印が見られる。器形より安里分類のⅣ式(1720～1820)に相当する資料である。

第79図237はマンガン釉甕形の身で、口縁部は外反し、口唇部は平坦である。頸部文様帯に軍配の沈線文とそれを形骸化した文様が上下段で配され廻らされる。横帯3は突帯、横帯4は沈線である。図238と同様に胴下部文様帯は波状沈線文が2条廻る。胴部文様帯に沈線の蓮華文が見られ、屋門はアーチ形が貼り付けられる。安里編年のⅣ期(1850～1890年代)の資料と考えられる。

第79図238はマンガン釉甕形の身で、頸部文様帯に人形の沈線文が廻らされる。横帯3は突帯で、横帯4は沈線となり、胴下部文様帯に波状沈線文が2条廻る。胴部文様帯は沈線の蓮華文が見られ、屋門は唐破風形の貼り付けである。安里分類のⅣ期(1850～1890年代)に相当する資料である。

第79図239はマンガン釉甕形の蓋で、内面に墨書で「…西七月七日洗骨之／五男■かま戸■[津カ]波親雲上」とあり、年号は不明だが七夕に洗骨された津波姓だということが分かる。

第79図240、241、242は本土産磁器の小杯および小皿である。法量及び観察事項は第42表を参照。

第40表 041号墓蔵骨器(蓋)観察表

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	つまみ/屋根形状 接合部孔 つまみ台・園線 鏝(cm) かえり(cm)	つまみ台径 口径/棟長 内径/桁行長 器高/梁行長 体部高/器高	文様	調整痕	釉薬	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
1		第79図239 図版69-239	墓庭	マンガン釉甕形	宝珠形 有孔 1段・1条 2.5 0.5	11.3 33.3 25.8 18.2 13.3	なし	つまみ台回転削り出し。鏝端部はやや丸い。ロクロ成形後、内外面ともに回転ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	あり	—	—	

第41表 041号墓蔵骨器(身)観察表

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	大きさ (cm) ※	窓枠/屋門	窓数/形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯印	銘書	死去年	洗骨年	備考
1		第79図236 図版69-236	墓庭	ボージャー形	29.0 39.5 24.5 61.2	平葎形	3個 1方2円	①凹3 ②凹1 ③凹1 ④一	なし	口縁部は玉縁状で直口。ロクロ成形後、口縁部から胴下部までナデ調整。胴最下部はヘラ削り。内面、回転ナデ調整。	5個/円	なし	あり	なし	—	—	底右上方に窯印あり。
2		第79図237 図版69-237	墓庭	マンガン釉甕形	32.8 40.3 21.3 61.5	唐破風形 (貼)	3個 1方2方	①凹2 ②凸1 ③凸3 ④凹3	肩部文様帯は沈線の人形文。胴部は沈線の蓮華文。胴下部文様帯は沈線で波状文を2条。	口縁部は外反し、口唇部は平坦に仕上げやや外へ傾く。ロクロ成形後、外面回転ナデ調整。胴最下部はヘラ削り。内面は回転ナデ調整。	11個	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	なし	—	—	
3		第79図238 図版69-238	墓庭	マンガン釉甕形	32.5 40.0 21.5 60.5	アーチ形 (貼)	4個 1方3方	①凹2 ②凸1 ③凸3 ④凹3	肩部文様帯は沈線で軍配文。胴部は沈線の蓮華文。胴下部文様帯は沈線で波状文を2条。	口縁部は外反し、口唇部は平坦に仕上げやや外へ傾く。ロクロ成形後、外面は肩部から胴下半部は回転ナデ調整。胴最下部はヘラ削り。内面は回転ナデ調整。	6個/円	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	なし	—	—	

※大きさ(cm)は、ボージャー形・甕形は上から口径/胴径/底径/器高。家形・御殿形は上部(長軸×短軸)/底部(長軸×短軸)/器高。

第42表 041号墓 陶磁器観察表

No.	挿図番号 図版番号	出土地	器種	分類	法量(cm)	特徴	備考
1	第79図 240 図版69-240	墓庭	小杯	本土産磁器	口径:6.65 器高:2.9 底径:2.7	外反口縁。皿付以外透明釉で全面施釉。	
2	第79図 241 図版69-241	墓庭	小皿	本土産磁器	口径:7.0 器高:1.9 底径:3.0	直口口縁。皿付以外透明釉で全面施釉。内外面にコバルトで網目模様、赤色で花文を施す。外底面に印の様な文様が見られる。	
3	第79図 242 図版69-242	墓庭	小皿	本土産磁器	口径:6.2 器高:2.7 底径:2.8	皿付以外透明釉で全面施釉。コバルトで口唇部に幾何学文様、内面に枝木の文様(松?)を施す。	

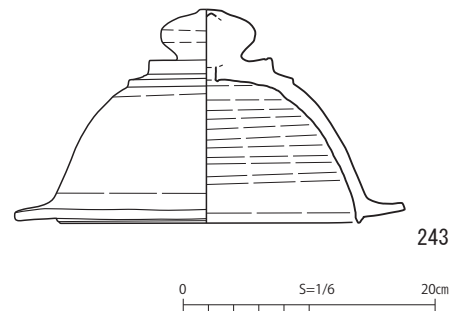
第16節 042号墓・043号墓

(1) 遺構(第82図、図版33)

042号墓および043号墓は調査区丘陵の西斜面に位置し、前述の039号墓(第14節参照)と後述の044号墓(第17節参照)の間に構築される。斜面に横穴を掘り込んで墓室を造る掘込墓である。両墓は庭を共有し、また、両墓の間を仕切る墓室の壁は設けられていない。墓口は大きく開口し、一部閉塞石が残存する。当墓は調査以前に廃棄されており、墓室には数基の蔵骨器の蓋が検出されたが、身は検出されていない。

墓正面は岩盤削り出しにより構築され、丘陵の基盤である牧港石灰岩の斜交層理が顕著に見られる。墓口と見られる正面の開口部は、042号墓で長軸高さ約1.05m、短軸で高さ約0.84m。向かって左が高く右が低い。これは斜交層理のラインに合わせて掘り込んだ為だと考えられる。幅は約1.15m。羨道は見られない。043号墓開口部の高さは長軸で約0.96m、短軸で約0.66m。042号墓と同様に斜交層理のラインを利用して構築されている。幅は約1.2m。当墓も明瞭な羨道は見られない。正面墓口を分ける柱状の壁の奥行きは約0.6mである。この0.6mの奥行きに閉塞石の約0.3mの礫が数個見られる。スディイシ(袖石)は見られず、左右のナージミー(庭積み)とも岩盤削り出しにより構築されている。ナージミーの壁にも斜交層理が顕著に確認できる。ハカヌジョー(墓門)の検出はなく、残存のハカヌナー(墓庭)の法量は奥行き約6.8m、幅約5.5m。平面観は長方形である。

墓室は仕切りが無く、室内での両墓の行き来は可能である。墓室法量は042号墓の奥行き約0.84m、高さ長軸で約0.98m、短軸約0.83m。墓口の構造と同様に向かって左が高く、右が低い。正面開口部の高さのまま墓室を掘り込み、奥壁に向かって少し低くなる状況が窺えた。043号墓でも同様な状況が見られ、奥行きは約0.68m、高さは長軸で約0.87m、短軸で約0.65m。042号墓より奥行きが短い。墓室の幅は両墓合わせて約3.2m。両墓ともシルヒラシにあたる箇所が見られず、その奥行きの法量から安置出来る蔵骨器は数点分だと考えられる。043号墓からはボージャー形の蓋が4点出土しており、身の胴径を35cmと仮定した場合(004号墓蔵骨器41を参照とした)、043号の墓室はその4点以上の安置は出来なかったと想定される。



第80図 042号墓出土遺物

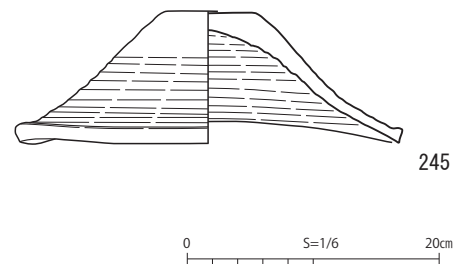


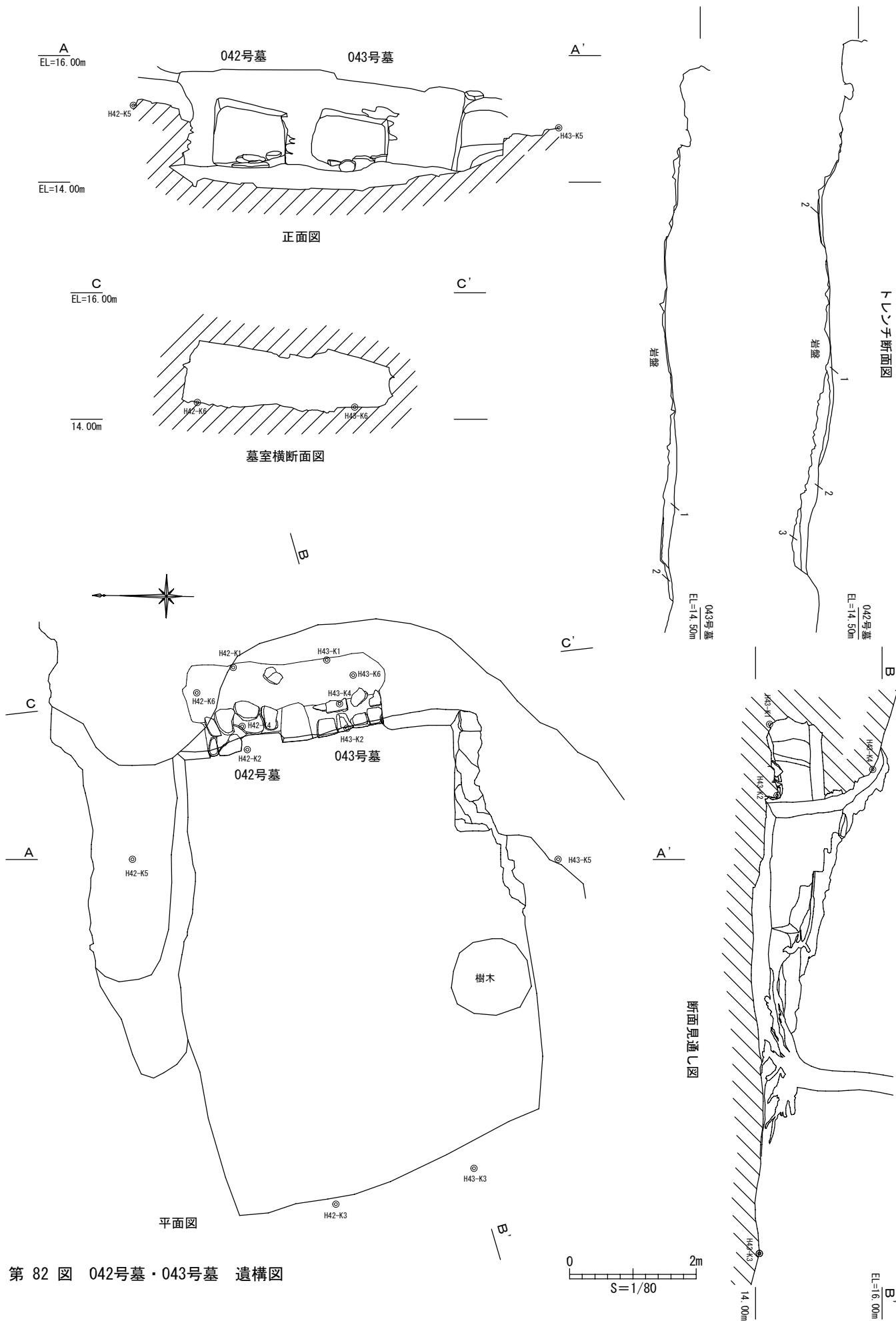
第81図 043号墓出土遺物

(2) 遺物(第80図～第81図、図版71)

042号墓からはマンガン釉甕形の蓋(243)が出土。法量口径31.0cm、内径23.8cm、器高17.0cm、体部高13.1cm。

043号墓はボージャー形の蓋が4点出土し、その内2点を図化した。244、245は法量それぞれ口径33.2cm、30.8cm、内径32.7cm、30.2cm、器高12.2cm、10.5cm。体部高10.1cm。244は安里分類のIVa式(1740年～1750年)。245はVII式(1750年～1820年)。





第 82 図 042号墓・043号墓 遺構図

第17節 044号墓

(1) 遺構(第84図～第85図、図版34)

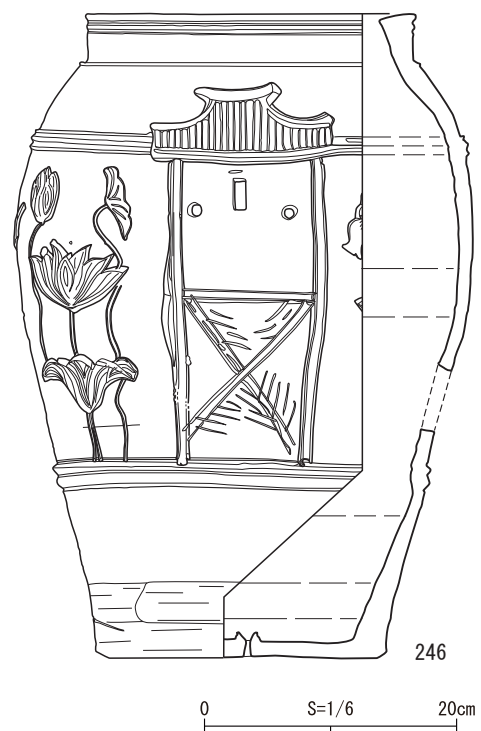
044号墓は調査区丘陵の西斜面に位置し、斜面に横穴を掘削し、墓室を構築した亀甲墓である。当墓は本調査以前に廃棄され、墓口は開口する状況であった。

チジ(屋根)は平面形が後方で湾曲する馬蹄形を呈する。屋根周縁の石列は、ウーシと接する眉石付近は切石により2条の石列で構築されるが、その後方からは岩盤の削り出しにより構築された突帯状の列により曲線を描く。チジ中央は岩盤の削り出しにより緩やかな弧状を呈し、石敷きは見られない。マユ(眉石)は3つの切石で構成される。眉頂部はやや平坦に仕上げ、眉端部に向かって屈曲し、先端部付近で上方に反る。両端部は肥大しない。眉正面の底部には小さな段が施される。スディイシ(袖石)の上にウーシ(臼)とクウーシ(子臼)が配置される。クウーシの上部に厚み約8cm、幅約19cmの板状の切石が見られる。墓正面は切石による丁寧な布積みが見られ、目地には漆喰が施されている。ジョウカブイ(門被い)の幅は墓口と左右のシミイシ(隅石)を合わせた幅と同じであり、墓口を中心として概ね左右対称に積み上げられている。墓口の高さ約1m、幅約0.65m、奥行き(羨道の長さ)約1mである。サンミデー(供物台)は数個の切石を列状に配して墓庭と区画する。サンミデーの幅約2.4m、奥行き約0.9m。切石と正面壁まで岩盤直上に造成土を重鎮して、墓口の高さと揃えている状況が窺えた。羨道の床は切石を2つ敷く。スディイシ(袖石)は墓正面左右に1段ずつ見られ、両方とも岩盤を削り出して構築するが、サンミデー側は布積みにより構築する。ワラビヌティ(童の手)は見られない。左右のナージミー(庭積み)は岩盤を削り出して構築され、牧港石灰岩の斜交層理が明瞭に見られる。左ナージミーの最も高い箇所は約2.2mを測る。ハカヌジョー(墓の門)側の石積みは小振りの礫を使用した雑な野面積みで、ジョーも同様である。ジョーの幅は約1.1mを測る。ハカヌナー(墓庭)は幅約6m、奥行き約7mを測り、平面観は長方形となる。

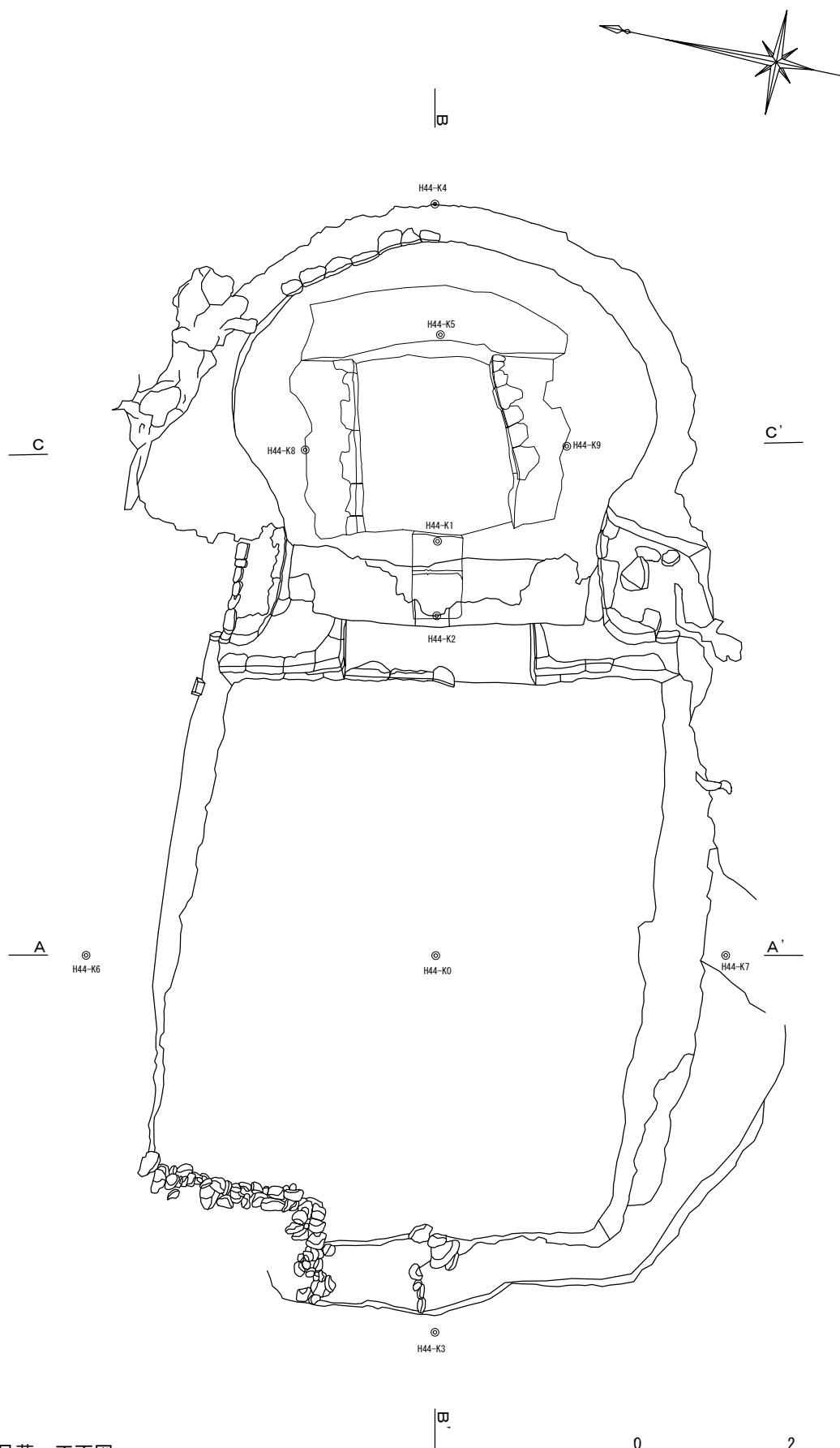
墓室は幅3.4m、奥行き3.1m、シルヒラシから天井までの高さ約1.8mを測る。墓室内墓口側の壁は全面に漆喰塗布がなされており、相方積みで構築された様子が辛うじて窺えた。造営時は墓正面を大きく開口し、切石により正面が構築されたと考えられる。タナ(棚)は奥側に1段、左右に1段のコの字状で奥棚と左右棚に段差が見られることから3類b型に相当する。奥棚の高さは約0.63m。左右棚の高さは約0.43m。奥棚は岩盤削り出しで造られるが、左右棚の縁部には切石を列状に配置する。

(2) 遺物(第83図、図版71)

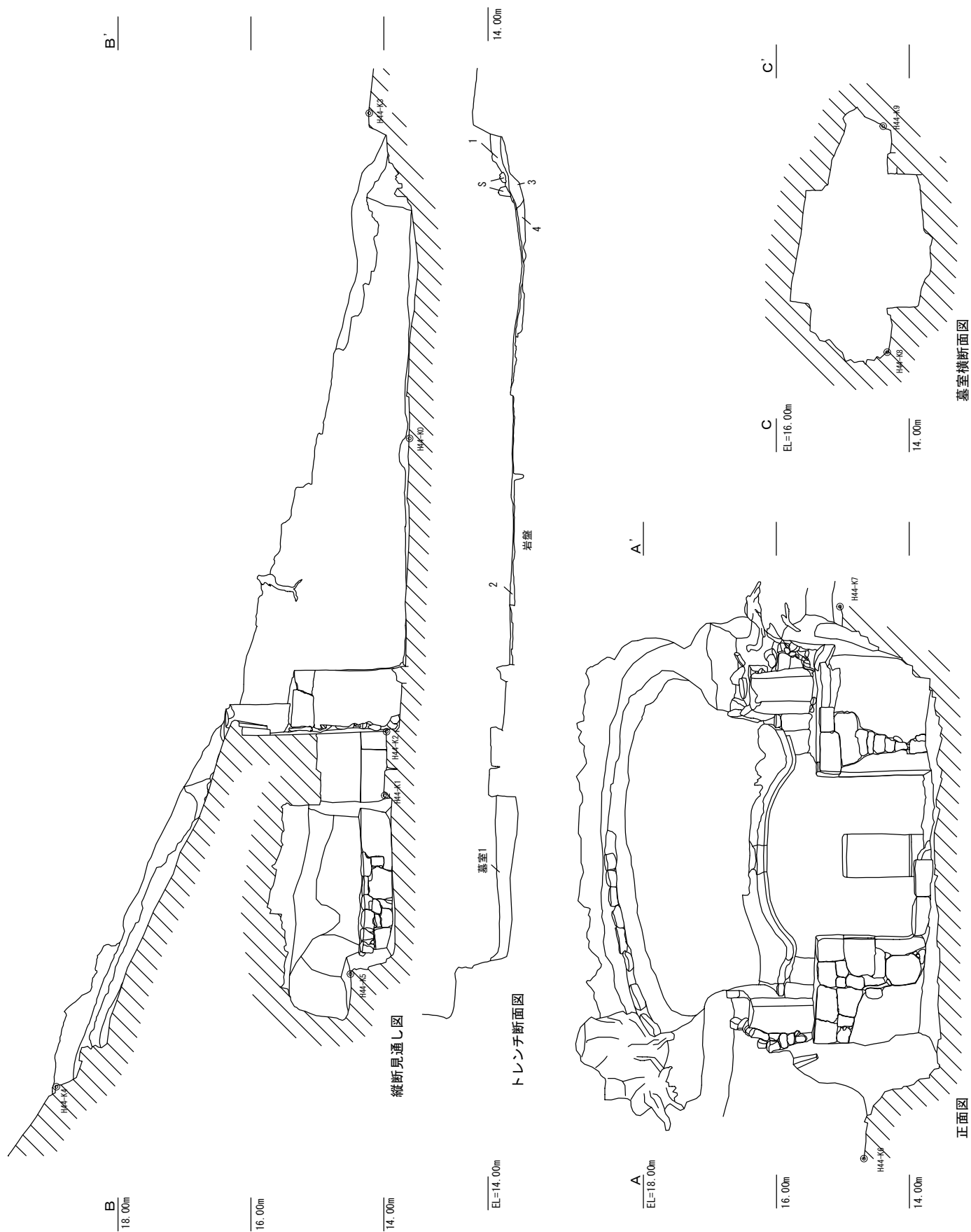
本墓から出土した蔵骨器はボージャー形やマンガン釉甕形が見られた。ボージャー形は残存状況が悪く図化を見送ったが、身で安里分類のIV式(1720～1820)が出土した。第83図はマンガン釉甕形の身で横帯2～4が突帯となる。胴部は貼り付けの蓮華文。屋門は瓦屋形で柱貫の下に対角線を繋げる十字状の貼り付けが見られる。安里編年のⅡ期(1770～1800年代)の資料である。口径26.15cm、胴径36.5cm、底径21.2cm、器高51.3cmを測る。



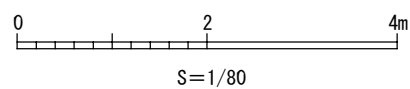
第83図 044号墓出土遺物



第 84 图 044号墓 正面图



第 85 図 044号墓 縦断見通し図、トレンチ断面図、正面図、墓室横断面図



第18節 046号墓

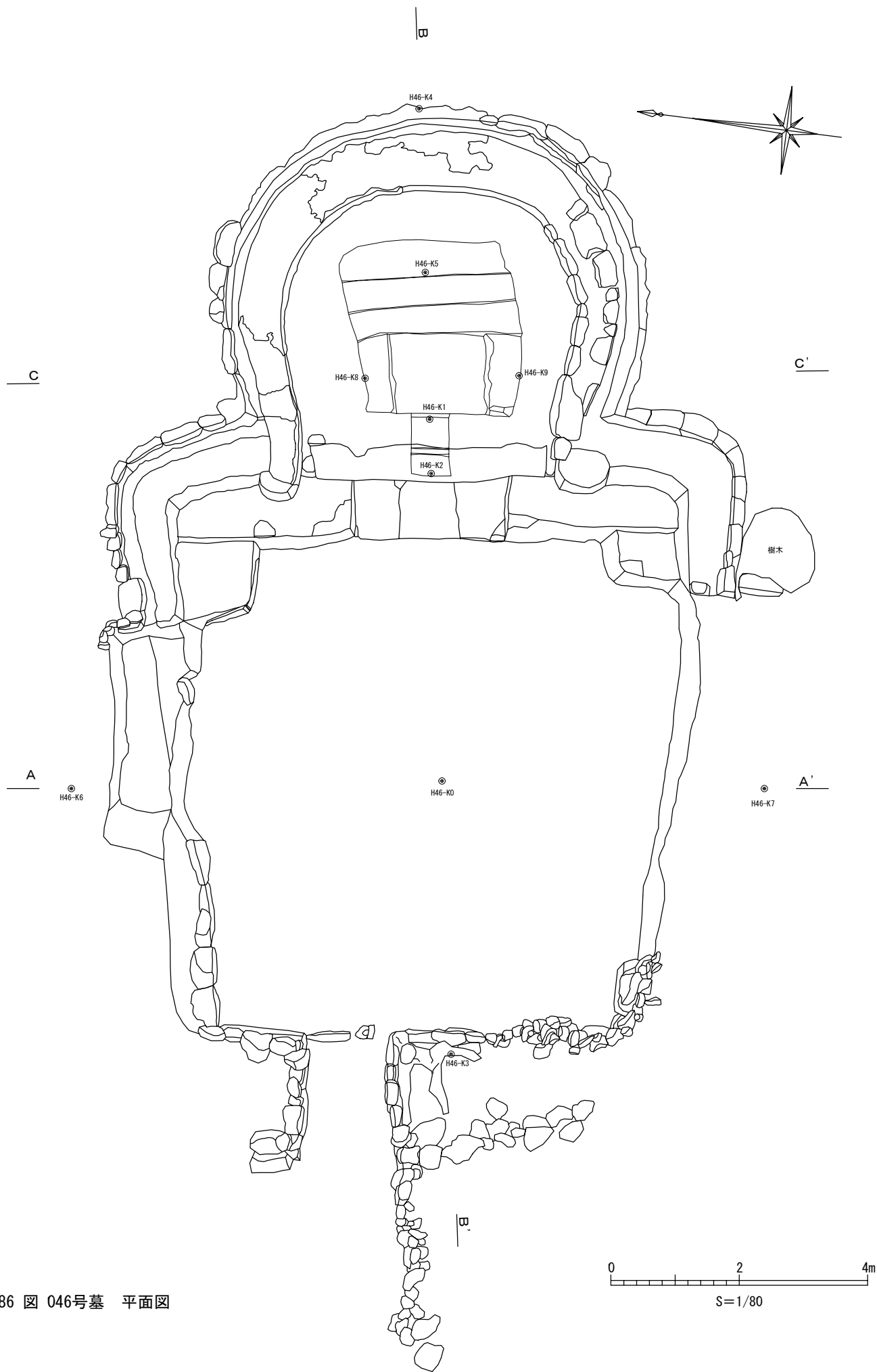
(1) 遺構(第86図～第87図、図版36)

046号墓は調査区丘陵の西斜面に位置し、斜面に横穴を掘削し、墓室を構築した亀甲墓である。本墓は調査区範囲の中で南端になる。比較的高い標高に構築され、下位位置(標高13.8m～17m)には047号墓など亀甲墓が構築される。他の墓と同様、当墓も本調査以前に廃棄されており、墓口は開口し、蔵骨器の多くは墓庭へ廃棄されていた。

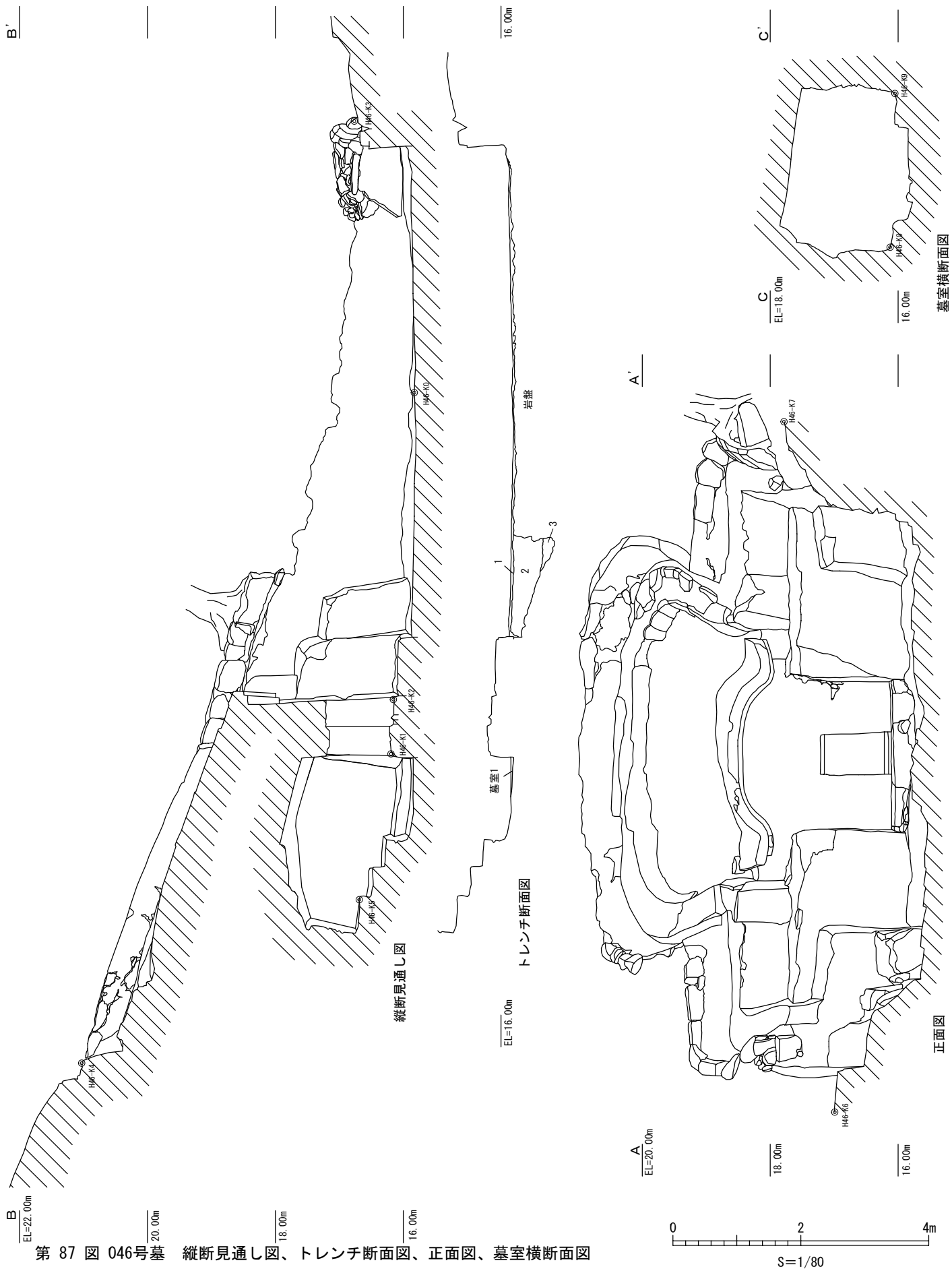
チジ(屋根)は平面形が後方で湾曲する馬蹄形を呈し、高さ約0.4mの岩盤削り出しによるヤジョーマーイが構築される。ウーシ(白)に繋がる屋根周縁の石列は左側が2条の石列で構築され、面を持つ方がチジを向く。後方から右ウーシまで岩盤の削り出しにより構築された突帯状の石列へと繋がる。石列の表面には漆喰の残存が確認出来、使用当時は石列の表面に漆喰を全面に塗布を施し、幅広の石列で周縁が廻るように意匠されたと考えられる。チジ中央は緩やかな弧状を呈し、石敷きは見られない。仕上げは盛土で行い、その表層に漆喰塗布により仕上げがなされた痕跡が一部残存する。マユ(眉石)の表面も漆喰が塗られており、切石の構成数は不明である。眉頂部は平坦に仕上げ、眉端部に向かって下方に屈曲し、先端部付近で上方に反る。両端部の肥大は見られない。眉正面の底部には小さな段が施されている。スディイシ(袖石)の上にウーシ及びクウーシ(子白)が配置される。墓正面は全面に漆喰塗布される。墓口の高さ約1m、幅約0.62m、奥行き(羨道の長さ)は約0.91mを測る。サンミデー(供物台)は3つの板状の切石を並べ、墓庭との段差を設ける。カピアンジ(紙銭焼き場)は見られない。スディイシ(袖石)は墓正面左右に岩盤削り出しの2段で構築されるが、右スディイシの2段目に一部切石の使用が見られる。調査区内でスディイシを2段有しているのは本墓のみであり、漆喰は塗布されず、斜交層理が明瞭である。ハカヌナー(墓庭)は岩盤を掘り込んで平坦化を行っている状況が窺えた。サンミデー側の岩盤が脆かったのか大きく窪んでいるため、岩盤直上は石灰岩を砕いた礫と石紛を入れ、その上層に1cm～5cm大の石灰岩を砕いた礫と石紛を約0.4mの厚さで重鎮し、ハカヌナーの面を平坦化する。ワラビヌティ(童の手)は岩盤削り出しにより構築される。平面上2段目のスディイシと長さを揃えている。左ナージミー(庭積み)は岩盤の削り出しにより構築され、右ナージミーは中央部分が崩落により欠落するが、そこからハカヌジョー(墓門)側は大きめの切石が使用される。左ナージミーの高さ約1.5mを測る。ジョーは板石状の切石で粗い相方積みで構築され、墓口からはやや北にずれる。ジョーの幅約1.2m、奥行き約2mを測る。ハカヌナーは幅約7.3m、奥行き約7.5m、平面観は方形となる。

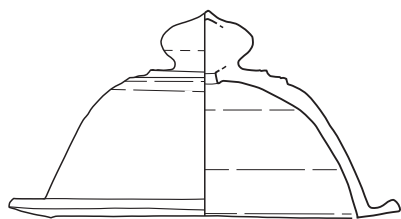
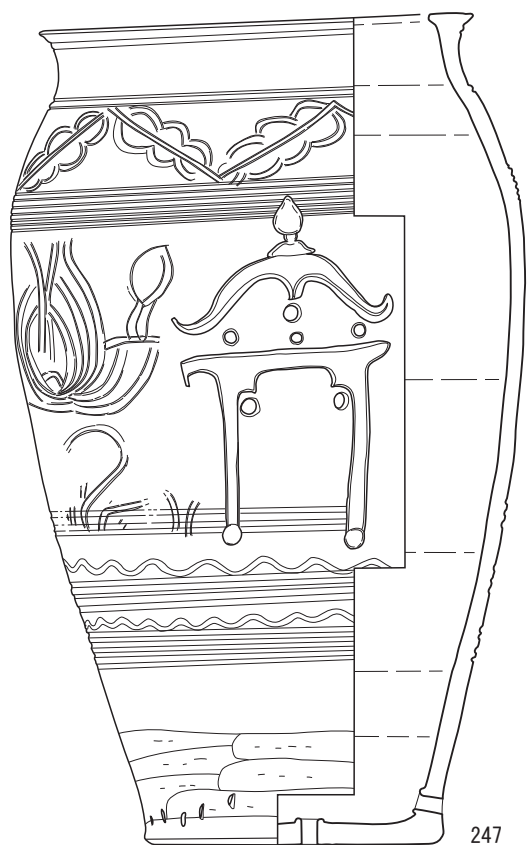
墓室は幅約2.5m、奥行き約2.6m、シルヒラシから天井の高さ約1.6mを測る。墓室内墓口側の壁は全面に厚く漆喰塗布がされているため、どのような構築法か不明である。タナ(柵)は奥側に3段、左右に1段で、奥柵と左右柵に段差が見られることから5類b型に相当する。タナは岩盤削り出しにより構築される。シルヒラシは幅約1.4m、奥行き約1.2mを測り、石灰岩を砕いた小礫と石紛が混じった10YR5/4にぶい黄褐色砂で薄く敷き均している状況が窺えた。

本墓の造営年代は不明であるが、蔵骨器はマンガン釉甕形や上焼御殿形が確認され、年代が墨書された銘書の検出は無かったが、マンガン釉甕形では安里編年のⅢ期～Ⅳ期(1810～1890年代)からⅥ期(1930年代以後)までが確認された。また上江洲編年1810年～1950年の上焼御殿形も確認されていることから、本墓の使用時期は19世紀初め頃から使用された墓であると考えられる。



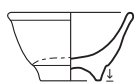
第 86 図 046号墓 平面图



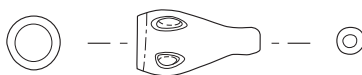


字

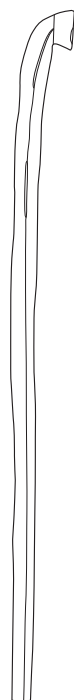
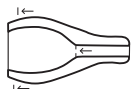
250



251



252



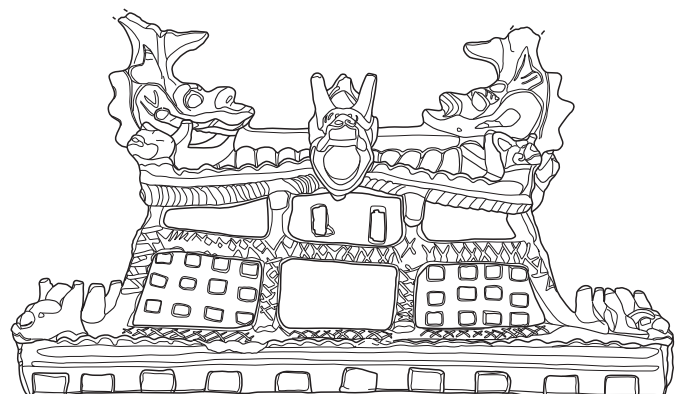
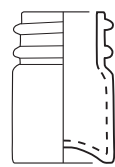
253



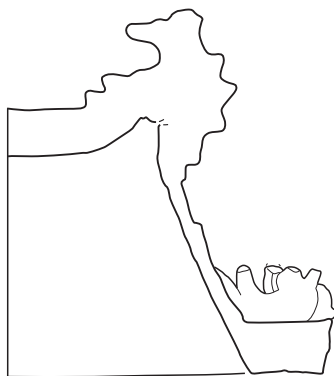
254



255



248



249

0 S=1/6 20cm

0 S=1/2 5cm

第88图 046号墓出土遺物

(2) 遺物(第88図、図版70)

046号墓からは蔵骨器、本土産磁器、沖縄産施釉陶器、金属製品、ガラス製品、プラスチック製品が出土した。蔵骨器は墓庭へ廃棄されており、蓋と身のセット関係が不明なものが多い。上焼御殿形は1個体分の出土だったためセット関係が判明した。法量等について第43表・第44表を参照。

第88図はマンガン釉甕形の身である。横帯3および横帯4が沈線で表現され、胴部文様帯の蓮華文も沈線となる。屋門は貼り付けの唐破風形で、柱貫から下は別単位でつくられている。安里編年のV期(1900～1920年代)に相当する資料である。

第88図は上焼御殿形の蓋と身のセットである。248蓋は入母屋形を呈し、屋根は重層となる。大棟に一对の鯢を施し、降り棟の先に龍頭を貼り付ける。249身は口縁部から約5cm下方に庇を付け、底上面には瓦を立体的に意匠する。中央に龍頭、降り棟に獅子頭が見られ、胴部には法師像と蓮華文を貼り付ける。蓋と身の両方で外面は白化粧後に飴釉や緑釉が施釉され、内面は泥釉が施されている。

第88図253は延べ煙管である。青銅製で首部の立ち上がり1.7cmを測る。側面に繋ぎ目が見られ、火皿近くの上面は灰を落とすために叩いた跡の窪みが見られる。重量17g。

第43表 046号墓蔵骨器(蓋)観察表

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	つまみ/屋根形状 接合部孔 つまみ台・圈線 鏝(cm) かえり(cm)	つまみ台径 口径/棟長 内径/桁行長 器高/梁行長 体部高/器高	文様	調整痕	釉薬	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
1		第88図248 図版70-248	墓庭	上焼御殿形	入母屋形	— 36.95 52.3 37.8 30.4	大棟に一对の鯢。大棟の四隅および正面・背面の降棟に龍頭。正面唐破風の頂部に龍頭。表部は六区画に区分され、上部中央に方形の窓が2つ、左右下段は格子文。	型枠成形後、外面全体に丁寧なナデ調整後に施文。内面は横方向のナデ調整。	外面白化粧後、飴釉および緑釉を施釉。内面も白化粧後、泥釉。	なし	—	—	
2		第88図250 図版70-250	墓庭	マンガン釉甕形	宝珠形有孔 2段・2条 3.4 なし	9.25 31.1 24.2 16.4 11.7	なし	つまみ台は回転削り出し。鐔は上方に反り、端部は平坦。かえり無し。口縁成形後、内外面回転ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	あり	—	—	

第44表 046号墓蔵骨器(身)観察表

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	大きさ (cm) ※	窓枠/屋門	窓数/形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯印	銘書	死去年	洗骨年	備考
1		第88図247 図版70-247	墓庭	マンガン釉甕形	34.5 41.0 22.5 66.0	唐破風形 (貼)	6個 6円	①凹2 ②凸1 ③凹7 ④凹4	屋門は唐破風形だが柱貫から下が別単位で作られる。肩部文様帯は沈線で葉文。胴部は沈線で蓮華文。胴下部文様帯は波状文が2条。	口縁部は外反し、口唇部は平坦。口縁成形後、外面回転ナデ調整。胴最下部は回転ヘラ削り。内面は回転ナデ調整。	27個/円・半円	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	なし	—	—	
2		第88図249 図版70-249	墓庭	上焼御殿形	47.3×33.4 42.5×28.0 42.5	その他 貼り付け	2個 2方	—	口縁部から約5cm下に庇をつける。庇上面には立体的な瓦。中央に龍頭。降棟に獅子頭。正面及び両側面は法師と蓮華・葉を貼り付ける。	型枠成形後、外面ナデ調整し文様を貼り付ける。内面は口縁部付近は横ナデ調整。胴部はナデ調整。	(20個)	白化粧後、飴釉、緑釉を施す。内面は泥釉が粗く施される。	なし	なし	—	—	

※大きさ(cm)は、ポージャー形・甕形は上から口径/胴径/底径/器高。冢形・御殿形は上部(長軸×短軸)/底部(長軸×短軸)/器高。

第45表 046号墓 陶磁器他観察表

No.	挿図番号 図版番号	出土地	器種	分類	法量(cm)	観察事項	備考
1	第88図 251 図版70-251	墓庭	小杯	沖縄産施釉陶器	口径:2.3 器高:1.8 底径:1.6	内面から外面高台際まで透明釉を施釉。素地は灰白色。	
2	第88図 252 図版70-252	墓庭	煙管 (吸口)	陶製品	長さ:3.25	ラウ接合部の径1.4cm。重量6g。外面は接合部近くまで、内面は吸口途中まで透明釉を施釉。外面に楕円形の文様を施す。素地は灰白色。	
3	第88図 253 図版70-253	墓庭	煙管 (延べ煙管)	青銅製	長さ:18.25 吹口径:0.5	火皿の径0.9～1.0cm。首部の立ち上がり1.7cm。側面につなぎ目が見られる。灰を敲いて落とした為か上面の火皿近くに凹みが見られる。	
4	第88図 254 図版70-254	墓庭	ガラス瓶 (薬品瓶)	ガラス	口径:1.2 器高:3.3 底径:1.6	ガラスの色は緑色。僅かに気泡が見られる。底部に紋章らしき文様と「50」のエンボスが見られる。	
5	第88図 255 図版70-255	墓庭	ガラス瓶 (薬品瓶)	ガラス	口径:2.2 器高:4.0 底径:2.6	ガラスの色は茶色。僅かに気泡が見られる。底部に「HA」と「18」のエンボスが見られる。	

第19節 050号墓・051号墓

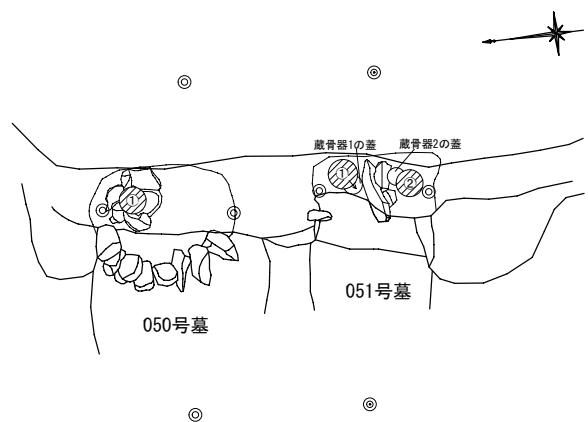
(1) 遺構(第90図、図版38)

050号墓及び051号墓は調査区丘陵の西斜面にあり、前述の第5節016号墓の南側の位置に構築された掘込墓である。両墓のさらに南側の同標高には同じく掘込墓の017号墓が所在し、標高15m～16mの位置に掘込墓が3基並ぶ。本墓の050号墓及び051号墓は埋没した状態で検出された。高さ1mに満たない丘陵の小さな面に掘り込まれた掘込墓で墓庭は見られない。050号墓が051号墓よりも低い位置に構築されている。

050号墓は閉塞石が一部残存するものの墓口は開口した状態で埋没していたため墓室内へ土が流入していた。墓室にタナ(棚)は見られず、墓室は墓口の高さよりも掘り下げて造られている。墓口には約0.25mの礫が残存しており、礫を使用しての野面積みによる閉塞が考えられる。墓室の奥行きは約0.53m、幅約1.1m、高さ約0.50m。墓室向かって左側の床に0.15m前後の礫を数個敷き、その上に蔵骨器を据えて安置していた状況が窺えた。シルヒラシは見られず、蔵骨器を安置するのみの墓であることが考えられた。

051号墓も050号墓と同様に墓口が開口した状態で埋没していたため墓室内へ土が流入する。蔵骨器が2点安置された状態で検出された。墓室の床面は墓口の高さとはほぼ同一で、050号墓のように掘り下げられていない。墓室の奥行きは約0.65m、幅約0.94m、高さ約0.6m。墓室床の中央に高さ約0.12m、厚み約0.03mの板状の礫を立てるように据えており、それにより墓室が左右に区切られる。墓室よりボージャー形が2点出土した。土の流入によるものなのかマド枠は正面を向いていない。050号墓と同様シルヒラシは見られず、墓室は出土した2点分の広さしかないため、これらの蔵骨器を安置するための墓であることが考えられる。

050号墓から出土した蔵骨器はマンガン釉甕形で第91図蔵骨器1である。身は屋門が退化し、孔が3か所穿孔されるのみである。安里編年のVI期(1930年以後)の資料と考えられる。051号墓から出土した蔵骨器は2点ともボージャー形で第92図の蔵骨器1と蔵骨器2である。蔵骨器1は向かって左側に安置されており、蔵骨器2は右側に安置されていた(第89図)。蔵骨器1の蓋は安里分類のVII式(1750～1820)の資料、身は安里分類のVIa式(1770～1810)で、両者の重なる時期は1770年～1810年となる。蔵骨器2の蓋はつまみが見られず、つまみ台も無いことから安里分類のVII式(1750～1820)と見られ、身は安里分類のIVa式(1720～1820)の資料に相当する。両者の重なる時期は1750年～1820年となる。2点のボージャーを比較すると蔵骨器2が若干古手になると考えられるが、当墓は概ね18世紀後半から19世紀初め頃に使用された墓ということが想定できる。050号墓はさらに下り20世紀中頃に使用された墓ということが考えられる。出土した蔵骨器から両者の墓は051号墓が古く、050号墓が後の時期に造られたことが考えられる。両墓の北東側に016号墓が所在し、016号墓の使用時期が18世紀中頃から20世紀初め頃が想定できるため、051号墓は同時期に使用されていた状況



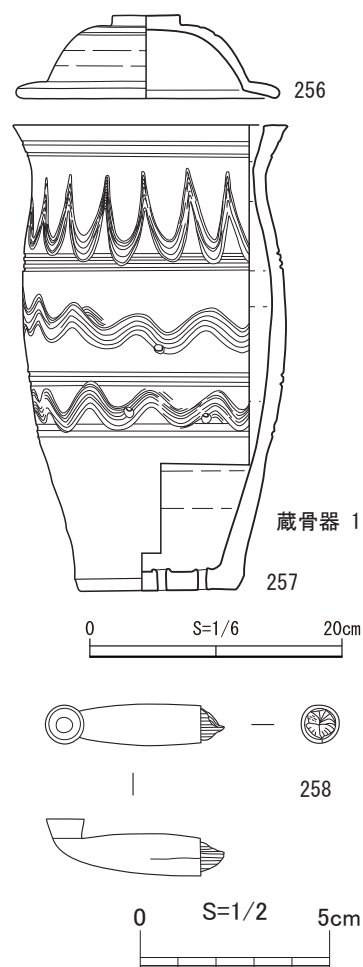
第 89 図 050号墓・051号墓蔵骨器配置の模式図
(数字は蔵骨器No.)

が窺える。銘書が見られなかったため被葬者の特定が困難だが、位置関係や使用時期からみて袖墓のような近縁者の可能性が考えらえる。

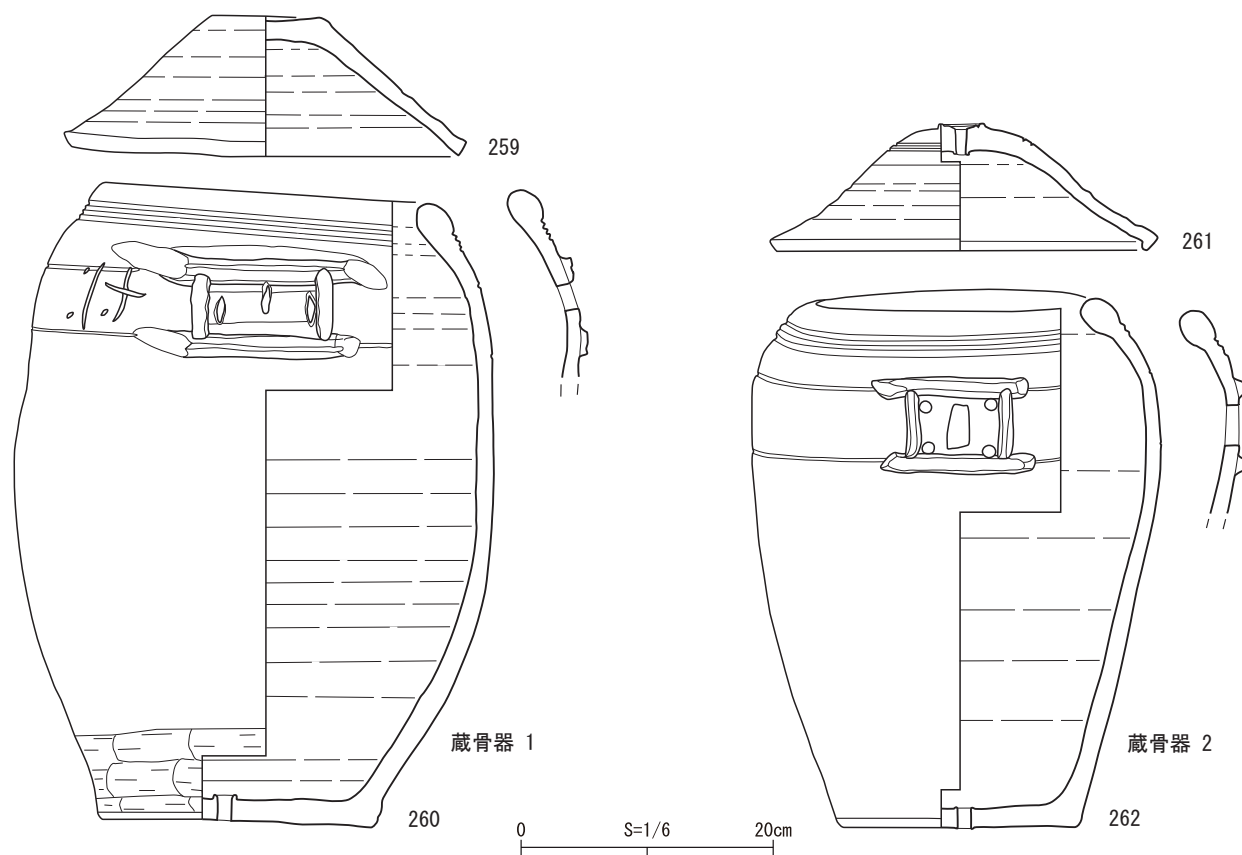
(2) 遺物(第91図～第92図、図版71)

050号墓は墓室からマンガン釉甕形の蔵骨器1点及び墓周辺より煙管が出土した。第91図256の蓋はつまみが無く、つまみ台を1段有する。かえりは見られない。257の身は横帯2が無く、屋門も施されていない。約7mmの小孔が3箇所三角形に穿孔される。第91図258は煙管の雁首で青銅製。内部にラウが一部残存する。021号墓出土の雁首のように灰落としの叩き跡は見られない。

051号墓は墓室からボージャー形の蔵骨器1・2が出土した。第92図259はつまみやつまみ台が見られない笠形の蓋である。260の身は頸部沈線が4本、胴部は無文で、平葺形のマド枠左側にカマ印が見られる。焼成不良によるものか器形に歪が生じている。第92図261はつまみは見られないが蓋裏の中心に孔が見られる。鰐端部は平坦だが端部の一部が内側に折れる。262の身は頸部沈線が3本、胴部は無文で、平葺形のマド枠が貼り付けられる。



第91図 050号墓出土遺物



第92図 051号墓出土遺物

第46表 050号墓・051号墓蔵骨器(蓋)観察表

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	つまみ/屋根形状 接合部孔 つまみ台・圏線 鐫(cm) かえり(cm)	つまみ台径 口径/棟長 内径/桁行長 器高/梁行長 体部高/器高	文様	調整痕	釉薬	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
1	1	第91図256 図版71-256	墓室	マンガン軸壺形	なし 無孔 1段・1条 3.0 なし	5.3 20.8 15.2 6.6 5.9	なし	つまみ台は回転削り出し。つまみ無し。ロクロ成形後、外面上部回転へう削り。胴部回転ナデ調整。内面は回転ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。胴内側は露胎。	なし	—	—	050号墓より出土
2	1	第92図259 図版71-259	墓室	ボージャー形	なし 無孔 なし・なし —	— 30.0 28.5 11.5 11.5	なし	つまみのない笠形。ロクロ成形後、内外面ともに回転ナデ調整。	なし	なし	—	—	051号墓より出土
3	2	第92図261 図版71-259	墓室	ボージャー形	なし 有孔 なし・なし —	— 29.0 26.2 10.0 10.0	体部上方に2条の沈線文が廻る。	無宝珠だが接合部孔は有孔である。胴端部は平坦だが、内側にかえりのように折れる。ロクロ成形後、内外面ともに回転ナデ調整。	なし	なし	—	—	051号墓より出土

第47表 050号墓・051号墓蔵骨器(身)観察表

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	大きさ (cm) ※	窓枠/屋門	窓数/形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯印	銘書	死去年	洗骨年	備考
1	1	第91図257 図版71-257	墓室	マンガン軸壺形	21.5 20.8 12.5 36.9	なし	3個 3円	①凹2 ②なし ③凹3 ④凹2	肩部は上端の尖った櫛描波状文。胴部は櫛描き波状文を2条。	口縁部外反し、口唇部は平坦。外面、胴上部は回転ナデ調整。胴下部は静止ナデ。胴最下部はへう削り。内面は回転へう削りとナデ調整。	7個/円	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	なし	—	—	050号墓より出土
2	1	第92図260 図版71-260	墓室	ボージャー形	25.6 37.5 21.7 50.6	平葎形	3個 (各不整横円)	①凹4 ②凹1 ③凹1 ④—	なし	口縁部は玉縁状で内傾。粘土紐巻き上げ成形後水挽。口縁部から胴下部までナデ調整。胴最下部はへう削り。内面は回転ナデ調整。	4個/円	なし	あり	なし	—	—	051号墓より出土 窓枠左に窯印あり。
3	2	第92図262 図版71-262	墓室	ボージャー形	22.5 32.5 18.5 42.5	平葎形	5個 1方4円	①凹3 ②凹1 ③凹1 ④—	なし	口縁部は玉縁状で内傾。粘土紐巻き上げ成形後水挽。胴上部は回転ナデ調整。胴下部は静止ナデ。胴最下部はへう削り。内面は回転へう削り後、口縁部から胴下部まで回転ナデ調整。	5個/円	なし	なし	なし	—	—	051号墓より出土

※大きさ(cm)は、ボージャー形・壺形は上から口径/胴径/底径/器高。家形・御殿形は上部(長軸×短軸)/底部(長軸×短軸)/器高。

第48表 050号墓 青銅製品観察表

No.	挿図番号 図版番号	出土地	器種	分類	法量(cm)	観察事項	備考
1	第91図258 図版71-258	周辺	煙管 (雁首)	青銅製	長さ:4.1	火皿の径0.8～1.0cm。ラウ接合部の径1.0cm。首部の立ち上がり1.5cm。重量5g。内部にラウが残る。側面につなぎ目が見られる。	

<引用・参考文献>

- ・安里進1997「伊祖の入れ御拝領墓の厨子甕と被葬者—近世墓の考古学的調査による家族復元—」『伊祖の入れ御拝領墓の厨子甕と被葬者—近世墓の考古学的調査による家族復元—』浦添市文化財調査研究報告書第25集
- ・安里進・新里まゆみ2006「比嘉門中墓の家族史—一族の数だけ歴史がある—」『比嘉門中墓の家族史—一族の数だけ歴史がある—比嘉門中墓の調査概要』浦添市文化財調査研究報告書
- ・上江洲 均1989「厨子甕について」『南島の墓—沖縄の葬制・墓制』沖縄県地域史協議会編
- ・浦添市教育委員会2004年「内間西原近世墓群Ⅲ」『内間遺跡—内間カンジャーヤーガマ遺跡—内間西原近世墓群Ⅲ』
- ・宜野湾市教育委員会1989年『土に埋もれた宜野湾』宜野湾市文化財調査報告書第10集
- ・名嘉真宜勝2002年『沖縄の人生儀礼と墓』沖縄文化社
- ・那覇市教育委員会2007年『銘苅古墓群—重要遺跡確認調査報告—』
- ・沖縄県立博物館・美術館2008年『ずしがめの世界』
- ・大堀皓平2016「沖縄県内に出土する石厨子の分類と編年試案」『よのづち—浦添市文化部紀要第12号—』
- ・浦添市教育委員会2012年『勢理客城門原古墓群』

第5章 銘書の分析

本調査では、合計51基の墓が検出された。これらの遺構と出土遺物の概要については、前章で報告を行った。本章では、蔵骨器に記された銘書についてその詳細を報告する。報告は、銘書の内容を整理した上で、各墓の様相について所見を述べる。

第1節 資料の概要

銘書とは蔵骨器（厨子甕）に記された墓誌銘を指す方言である。その主な記載内容としては、被葬者の姓名、位階、死亡・洗骨年月日などが挙げられる。銘書は基本的に墨書で記され、蔵骨器の蓋と身に記される。

本調査によって出土した蔵骨器の銘書の詳細については第49表から第53表に示した。同表は銘書の記された蔵骨器を各墓単位の取上番号順に並べ、それぞれの銘書の内容と被葬者名、死去・洗骨年を記載したものである。また、関連する情報は「備考」に記載した。

第2節 銘書からわかる各墓の様相

003号墓 （不明）

紀年銘が確認できず、墓の使用年代は不明である。銘書の確認できる蔵骨器は2点で、「先真」という屋号が確認できる。

004号墓 （栗国・西原・比嘉・外間家の墓）

該墓中でもっとも古い紀年銘を持つ資料は蔵骨器15の康熙56年（1717）であり、もっとも新しい紀年銘を持つ資料は蔵骨器45の光緒2年（1876）であることから近世期に造墓・使用された墓と考えられる。また、蔵骨器17の被葬者が「栗国掟親雲上男子三ら西原」「三ら西原女子かま戸」「うし比嘉」の3人であることから、栗国・西原・比嘉の3系統が使用していることがわかる。外間については他の被葬者との関連性は不明。なお、西原系統では「栗国」が屋号として使用されており、栗国から西原に家名が変わったのちに元の家名が屋号化した可能性も考えられる。

『城間字誌』第1巻の屋号調査に栗国の名前が見えるため、004号墓を利用した人々は城間村の人々であると考えられる。ただし、蔵骨器34は首里士族の「馬氏板良敷親雲上室真靄」が納められている。銘書からは004号墓の被葬者との直接的な関連が見いだせないものの、古墓群のなかに士族の墓は確認できないため何らかの理由で004号墓に持ち込まれたと考えられる。

005号墓 （栗国家の墓）

近代から戦後にかけて使用された墓。栗国姓を名乗り、屋号は「栗国小」であることがわかる。4号墓の「栗国」の分家か。

009号墓 （西原家の墓）

王国時代末期から近代にかけて使用された墓。該墓中でもっとも古い紀年銘を持つ資料は道光29年(1849)である。被葬者は西原筑登之親雲上で「一世」と同義であると考えられる「元世」と記されていることから、この人物から分家をしたと考えられる。また、屋号が「新屋」であることも、その証左であるといえる。

012号墓 （内間・比嘉家の墓）

近世期に使用された墓。乾隆年間には比嘉、嘉慶年間以降は内間を姓に持つ人々が葬られている。

014号墓 （我謝・我如古・宮城家の墓）

近世から近代にかけて使用された墓。銘書に「城間村」の文字が現れることから、城間村に居住した人々であることがわかる。「新門」という屋号が登場する。

016号墓 （内間・西原家の墓）

近世から近代にかけて使用された墓。

018号墓 （古波蔵家の墓）

近代に使用された墓。

021号墓 （宮城・古波蔵家の墓）

近世から近代にかけて使用された墓。具体的な死去・洗骨年は不明だが、第55図183の蔵骨器には「前のろくもい」と記された人物が納められている。近世の城間村の祭祀は城間ノロが管理していたため、被葬者は城間ノロを勤めた人物の可能性もある。

022号墓 （又吉家の墓）

近代に使用された墓。昭和20年4月に死亡もしくは洗骨した人物が3人おり、死去年と考えれば沖縄戦の戦没者の可能性もある。また、被葬者男性の名乗り頭に「伍」の字が使われているが、近代以降城間村で使われ始めた名乗り頭であるので、城間村の人々であることがわかる。

025号墓 （不明）

第62図204の蔵骨器には「大清」の文字が確認できるため、近世から使用された墓であると考えられる。

032号墓 （又吉家の墓）

蔵骨器には浦添間切の地方役人である沢岬掟を勤めた又吉山戸の男子の徳と又吉山戸が納められている。被葬者の又吉山戸は「三才」であったことが記され沢岬掟の又吉山戸とは別人である。

039号墓（津波・比嘉家の墓）

近世から近代にかけて使用された墓。蔵骨器には伊祖掟と記されたものもあり、浦添間切の地方役人を務めた人物も納められている。また、明治以降の銘書には「久場川小」という屋号が登場する。「久場川小」は『城間字誌』でも確認することができる。

040号墓（仲西家の墓）

蔵骨器には光緒3年(1877)に洗骨された前・仲西親雲上と、光緒7年(1881)に洗骨された同人の妻が納められている。仲西親雲上とは浦添間切の地頭代に任ぜられた人物が称する名前であるため、被葬者は王国時代末期に浦添間切の地頭代を勤めた人物であることがわかる。

041号墓（津波家の墓）

五男のかま戸という人物が七月七日に洗骨されたことがわかる。

第46表 050号墓・051号墓蔵骨器(蓋)観察表

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	つまみ/屋根形状 接合部孔 つまみ台・圏線 鐫(cm) かえり(cm)	つまみ台径 口径/棟長 内径/桁行長 器高/渠行長 体部高/器高	文様	調整痕	釉薬	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
1	1	第91図256 図版71-256	墓室	マンガン釉甕形	なし 無孔 1段・1条 3.0 なし	5.3 20.8 15.2 6.6 5.9	なし	つまみ台は回転削り出し。つまみ無し。ロクロ成形後、外面上部回転へう削り。胴部回転ナデ調整。内面は回転ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。胴内側は露胎。	なし	—	—	050号墓より出土
2	1	第92図259 図版71-259	墓室	ボージャー形	なし 無孔 なし・なし —	— 30.0 28.5 11.5 11.5	なし	つまみのない笠形。ロクロ成形後、内外面ともに回転ナデ調整。	なし	なし	—	—	051号墓より出土
3	2	第92図261 図版71-259	墓室	ボージャー形	なし 有孔 なし・なし —	— 29.0 26.2 10.0 10.0	体部上方に2条の沈線文が廻る。	無宝珠だが接合部孔は有孔である。胴端部は平坦だが、内側にかえりのように折れる。ロクロ成形後、内外面ともに回転ナデ調整。	なし	なし	—	—	051号墓より出土

第47表 050号墓・051号墓蔵骨器(身)観察表

※法量の単位はcm、()内は残存値

No.	蔵骨器番号	図版番号	出土地点	種類	大きさ (cm) ※	窓枠/屋門	窓数/形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯印	銘書	死去年	洗骨年	備考
1	1	第91図257 図版71-257	墓室	マンガン釉甕形	21.5 20.8 12.5 36.9	なし	3個 3円	①凹2 ②なし ③凹3 ④凹2	肩部は上端の尖った櫛描波状文。胴部は櫛描き波状文を2条。	口縁部外反し、口唇部は平坦。外面、胴上部は回転ナデ調整。胴下部は静止ナデ。胴最下部はへう削り。内面は回転へう削りとナデ調整。	7個/円	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	なし	—	—	050号墓より出土
2	1	第92図260 図版71-260	墓室	ボージャー形	25.6 37.5 21.7 50.6	平葎形	3個 (各不整横円)	①凹4 ②凹1 ③凹1 ④—	なし	口縁部は玉縁状で内傾。粘土紐巻き上げ成形後水挽。口縁部から胴下部までナデ調整。胴最下部はへう削り。内面は回転ナデ調整。	4個/円	なし	あり	なし	—	—	051号墓より出土 窓枠左に窯印あり。
3	2	第92図262 図版71-262	墓室	ボージャー形	22.5 32.5 18.5 42.5	平葎形	5個 1方4円	①凹3 ②凹1 ③凹1 ④—	なし	口縁部は玉縁状で内傾。粘土紐巻き上げ成形後水挽。胴上部は回転ナデ調整。胴下部は静止ナデ。胴最下部はへう削り。内面は回転へう削り後、口縁部から胴下部まで回転ナデ調整。	5個/円	なし	なし	なし	—	—	051号墓より出土

※大きさ(cm)は、ボージャー形・甕形は上から口径/胴径/底径/器高。家形・御殿形は上部(長軸×短軸)/底部(長軸×短軸)/器高。

第48表 050号墓 青銅製品観察表

No.	挿図番号 図版番号	出土地	器種	分類	法量(cm)	観察事項	備考
1	第91図258 図版71-258	周辺	煙管 (雁首)	青銅製	長さ:4.1	火皿の径0.8～1.0cm。ラウ接合部の径1.0cm。首部の立ち上がり1.5cm。重量5g。内部にラウが残る。側面につなぎ目が見られる。	

<引用・参考文献>

- ・安里進1997「伊祖の入れ御拝領墓の厨子甕と被葬者—近世墓の考古学的調査による家族復元—」『伊祖の入れ御拝領墓の厨子甕と被葬者—近世墓の考古学的調査による家族復元—』浦添市文化財調査研究報告書第25集
- ・安里進・新里まゆみ2006「比嘉門中墓の家族史—一族の数だけ歴史がある—」『比嘉門中墓の家族史—一族の数だけ歴史がある—比嘉門中墓の調査概要』浦添市文化財調査研究報告書
- ・上江洲 均1989「厨子甕について」『南島の墓—沖縄の葬制・墓制』沖縄県地域史協議会編
- ・浦添市教育委員会2004年「内間西原近世墓群Ⅲ」『内間遺跡—内間カンジャーヤーガマ遺跡—内間西原近世墓群Ⅲ』
- ・宜野湾市教育委員会1989年『土に埋もれた宜野湾』宜野湾市文化財調査報告書第10集
- ・名嘉真宜勝2002年『沖縄の人生儀礼と墓』沖縄文化社
- ・那覇市教育委員会2007年『銘苅古墓群—重要遺跡確認調査報告—』
- ・沖縄県立博物館・美術館2008年『ずしがめの世界』
- ・大堀皓平2016「沖縄県内に出土する石厨子の分類と編年試案」『よのづち—浦添市文化部紀要第12号—』
- ・浦添市教育委員会2012年『勢理客城門原古墓群』

第49表 銘書一覽表(1)

No.	墓番号	蔵骨器No.	図版番号	銘書内容	被葬者	死去年	洗骨年	備考
	003号墓	1	第8図2	<身>■■■■■■■■■■■■■■■■松/■■■■■■■■■■真こせい	<1>真こせい	-	-	
		4	第9図11	<蓋>先真ノ子/女なへ/同人子■■子<判読不能>/母親/〆三人入/但/六月■■■■記	<1>先真ノ子女なへ <2>同人子■■子 <3>母親	-	-	
	004号墓	5	第14図24・25	<蓋>午年八月十日/歳四拾三/うし栗國/壬亥八月ノ八日兩人入/同人女子/ひや <身>うし栗國	<1>うし栗國 <2>同人女子ひや	-	-	
		6	第14図26・27	<蓋裏>午十一月十八日死去/■■栗國む戸西原/女房真こせい <蓋表>午十一月十八日/<判読不能>/栗國■■<判読不能>/女房<判読不能>/<判読不能> <身>栗國之む戸西原/女房真こせい	<1>栗國之む戸西原女房真こせい	-	-	
		8	第15図31	<身>栗國掟<判読不能>/たら■■<判読不能>/子/四月八日	<1>栗國掟<判読不能>たら■■<判読不能>	-	-	
		1	第16図32	<蓋>亥ノ年正月十/栗國西原筑登之/母親	<1>栗國西原筑登之母親	-	-	
		3	第16図34	<蓋>た■■比嘉/母親おみ戸	<1>た■■比嘉母親おみ戸	-	-	
		2	第16図37	<身><判読不明>/女子/<判読不能>/■■子■■■■日	<1><判読不明>女子	-	-	
		9	第17図39	<身>栗■■掟親雲上/女房/■■■■之■■■■/■■■■<判読不能>■■■■女子/まか戸/<判読不能>■■七日	<1>栗■■掟親雲上 <2>栗■■掟親雲上女房 <3>栗■■親雲上女子まか戸	-	-	
		4	第17図40・41	<蓋>山戸外間/亥八月貳日新くつ仕/同人女房/但兩人入/壬亥八月八日 <身>申/八月十一日/■■ら外間/山戸外間/兩人入/同人/女房	<1>■■ら外間 <2>山戸外間 <3>同人女房	-	-	
		10	第18図42	<蓋>山戸比嘉/同人/女房/■■■■/■■真戸/仁牛比嘉/未六月初三日入/〆四人申候	<1>山戸比嘉 <2>同人女房 <3>■■真戸 <4>仁牛比嘉	-	-	
		11	第20図44	<蓋>山戸西原にや/子年正月十六日母親様/<判読不能>戸	<1>山戸西原にや母親様<判読不能>戸	-	-	
		12	第20図48・49	<蓋>乙卯七月六日洗骨/仕候/比嘉掟親雲上 <身>雍正拾壹年/比嘉掟親雲上/乙卯七月六日洗骨仕候	<1>比嘉掟親雲上	<1>1733?	<1>1735	雍正11(1733)=癸丑 雍正13(1735)=乙卯
		18	第21図50・51	<蓋>戌八月朔日去/三ら西原男子/うし西原 <身>戌八月朔日去/三ら西原男子/■■うし西原/未ノ七月七日	<1>三ら西原男子うし西原	-	-	
		20	第21図52	<蓋>外間筑登之/妻/酉六月七日	<1>外間筑登之妻	-	-	
		19	第21図54・55	<蓋>前仲間掟/末年九月廿/五日 <身>あくに西原仁屋男子/前仲間掟/末年九月廿五日	<1>あくに西原仁屋男子前仲間掟	-	-	
		15	第22図56・57	<蓋表><判読不能>■■<判読不能>山<判読不能>/康熙五■■/ <蓋裏>あくに之/三らし原男子/山戸西原/康熙五十/六年丙酉/六月初八日 <身>酉六月八日/あくに三ら西原/男子山戸	<1>あくに三ら西原男子山戸西原	<1>1717?	<1>1717?	康熙56年=1717年
		16	第22図59・60	<蓋>雍正七年己酉/十一月三十日死去/三ら西原 <身>雍正七年己酉十一月卅日死去/三ら西原	<1>三ら西原	<1>1729	<1>不明	雍正7年=1729年
	17	第23図61・62	<蓋表>①亥十二月一日/栗國■■親雲上/男子三ら/西原 ②丑八月十八日/三ら西原/女子かま戸 ③丑七月七日/うし比嘉 <蓋裏>亥十二月一日/栗國掟親雲上/男子三らし原 <身>■■熙六十一年丑七月七日/<判読不能>■■/うし比嘉/■■子かま戸	<1>栗國掟■■親雲上男子三ら西原 <2>三ら西原女子かま戸 <3>うし比嘉	<1>不明 <2>不明 <3>不明	<1>1721? <2>1721? <3>1721?	康熙60年(辛丑)=1721年	

第50表 銘書一覧表(2)

No.	墓 番号	蔵骨 器 No.	図版 番号	銘書内容	被葬者	死去年	洗骨年	備考
		21	第23図 64	<身>正月一日にし■■■/■<判読不能>■■■[女カ]子ノ康熙 六十年辛丑七月七日ノ大しゆノ巳十月■■■九日にし原■■■子ノ 宮里にや	<1>にし■■■...■■■[女]子 <2>大しゆ <3>にし原■■■子宮里にや	<1>不明 <2>1721? <3>不明	<1>不明 <2>1721? <3>不明	康熙60年(辛丑) =1721年
		24	第24図 68	<蓋表>①未ノ五月廿三日ノかま戸比嘉男子ノ歳拾四かな ②未ノ五月廿八日ノ西原■■■男子ノ歳■■■かま戸 <蓋裏>①未ノ五月廿三日ノかま戸比嘉男子ノ歳拾四ノかな ②未ノ五月廿八日ノ西原筑登之男子ノ歳七かま戸	<1>かま戸比嘉男子かな <2>西原筑登之男子かま 戸	-	-	
		37	第26図 80	<蓋>乾隆六拾年己卯七月七日洗骨ノ栗國筑登之親雲上	<1>栗國筑登之親雲上	<1>不明	<1>1795	乾隆60年=1795 年 ※乾隆60年は乙 卯
		34	第27図 84	<蓋>馬氏板良敷親雲上室真霧嘉慶元年丙辰七月朔日死同 三年戊午正月二十四日洗骨号慈心翁氏安谷屋親方盛孟女	<1>馬氏板良敷親雲上室 真霧	<1>1796	<1>1798	嘉慶元年=1796 年 嘉慶三年=1798 年
	004 号墓	41	第28図 87・88	<蓋>乾隆四拾八年ノ癸卯四月初七日ノ栗國筑登之親雲上妻 ノ洗骨仕候 <身>乾隆四拾八年癸卯ノ四月初■■■日栗國筑登之親雲上ノ妻 ノ洗骨仕候	<1>栗國筑登之親雲上妻		<1>1783?	乾隆48年=1783 年
		42	第28図 89・90	<蓋>かま戸栗國ノ亥年正月十ノ三日 <身>あくに西原仁屋男子ノかま戸栗國ノ亥年正月十三日	<1>あくに西原仁屋男子か ま戸栗國	-	-	
		43	-	<蓋>廿五日ノ酉ノ四月ノ外間筑登之 <身>外間筑登之	<1>外間筑登之	-	-	
		32	-	<蓋><判読不能>[月カ]七月仁■■	不明	-	-	
		45		<蓋>光緒貳年丙■■ノ十一月廿日平良ノ■■■ノ御遣仕■■■	不明	<1>1876	<1>1876	光緒2年丙子=1876 年
				<身>昭和四年旧九月十七日ノ■■■■マノ栗國■■■妻	<1>栗國■■■妻	<1>1929?	<1>1929?	昭和4年=1929年
				<身>明治四拾年旧十一月廿九日妻ヲ洗骨シテ夫■■■■合 葬ノ栗國筑登之■■■[名カ]山妻カマ	<1>栗國筑登之■■■山妻カ マ	<1>1907	<1>不明	明治40年=1907 年
	005 号墓			<身>一九六一年十一月十八日ノ故栗國山戸ノ行年六十才	<1>栗國山戸	<1>不明	1961年	1961年=昭和36 年
				<蓋>栗國小長男牛九才ノ大正八年正月九日骨別シ	<1>栗國小長男牛	<1>1919	<1>不明	「骨別」に「カワカと ふりがな有
				<蓋>三勇ウシャ子ノカマ	<1>三勇ウシャ子ノカマ	-	-	
			第34図 138	<蓋>■■■[新カ]屋ノ西原亀妻ノ西原カミ	<1>西原亀妻西原カミ	-	-	
			第34図 139	<蓋>新■■ノ西原亀妻ノ西原ウシ	<1>西原亀妻西原ウシ	-	-	
				<蓋>新屋ノ西原亀ノ長男ノ西原太郎	<1>西原亀長男西原太郎	-	-	
	009 号墓			<蓋>道光二拾九年己酉三月廿三日ノ元世ノ西原筑登之親雲 上	<1>西原筑登之親雲上	<1>1849?	<1>1849?	道光29年=1849 年
				<身><判読不能>三月廿三日ノ<判読不能>雲上	不明	-	-	
				<身>新屋ノ親太郎	<1>親太郎	-	-	
				<身屋門>大正元年旧ノ六月七日ノ子人父西原太郎 <身口唇部>大正八年■■■■■■■[卯拾月拾五カ]日<判読不 能>	<1>父西原太郎	<1>1912?	<1>1912?	大正元年=1912 年
	012 号墓	3	第39図 151	<蓋>仲嘉間筑登之ノ女子ノ蒲■■■[戸カ]	<1>仲嘉間筑登之女子蒲 ■■■	-	-	

第51表 銘書一覽表(3)

No.	墓 番 号	蔵 骨 器 No.	図 版 番 号	銘書内容	被葬者	死去年	洗骨年	備考
	012 号墓	2	第39図 154・155	〈蓋〉内間筑登之女子/ま加戸/同人女子/まさ 〈身〉嘉■[慶カ]■[拾カ]〈判読不能〉七月七日洗骨/〈判読不能〉■戸/〈判読不能〉	〈1〉内間筑登之女子ま加戸 〈2〉同人女子まさ	-	-	嘉慶年間 1796～1820
			第40図 156	〈身〉道光貳■壹■[判読不能]七月廿日/■間筑登之	〈1〉■間筑登之	〈1〉1841？	〈1〉1841？	道光21年＝1841年
			第40図 158	〈蓋〉乾隆二十一年/丙申五月廿五日去/比嘉筑登之男子/比嘉筑登之親雲上	〈1〉比嘉筑登之男子比嘉筑登之親雲上	〈1〉1756	-	乾隆21年＝1756年 ※乾隆21年は丙子
			第40図 159	〈蓋〉本空妙性禪定尼/乾隆四拾九年甲辰/九月初六日死去/同五拾年乙己七月九日洗骨/比嘉筑登之/妻/本名なへ	〈1〉比嘉筑登之妻なへ	〈1〉1784	〈1〉1785	乾隆49年＝1784年 乾隆50年＝1785年 ※乾隆50年は乙巳
	014 号墓			〈蓋〉我謝■[筑登之カ]/男子ま加子同/女房かま戸/…/六月二日	〈1〉我謝■[筑登之カ]男子ま加子 〈2〉同女房かま戸	-	-	
				〈蓋〉昭和…六月/…四日/■[送カ]/ウトー/アンマー	〈1〉ウトー	-	-	
				〈身〉申二月六日/城間村/我如古筑登之/附■[新門]■[宮城]■人/〈判読不能〉■[宮城]■人	〈1〉我如古筑登之 〈2〉新門■[宮城]■人	-	-	
				〈身〉■[洗カ]骨日昭和拾■六月四日/■[送カ]/ウトー/アンマー	〈1〉ウトー	-	-	昭和10年代＝ 1935年～1944年
				〈蓋〉大正■[判読不能]/■月拾[判読不能]/洗骨/〈判読不能〉	不明	-	-	
				〈身〉附■[新門之/宮城]■人/〈判読不能〉/申二月六日/城間村/■[我カ]■[之]	〈1〉宮城■人	-	-	城間村
				〈身〉城間〈判読不能〉/ま■[判読不能]	不明	-	-	城間(村)
	016 号墓		第43図 165	〈身〉内間筑登之	〈1〉内間筑登之	-	-	
				〈蓋〉たる/内間	〈1〉たる内間	-	-	
				〈蓋〉内間/ウシ父/■[三カ]良/又年	〈1〉内間ウシ父■良	-	-	
				〈蓋〉■一■[ウカ]/シヤ/又年	不明	-	-	
				〈蓋〉大正十二■月二十三日癸亥新クチ	不明	1923？	1923？	大正12年＝1923年
				〈蓋〉〈判読不能〉内間三良男■ 〈身〉〈判読不能〉年七月二十四日辛内間三良男■[子カ]	〈1〉内間三良男■	-	-	
				〈蓋〉明治四十一年酉旧三月十三日死亡西原〈判読不能〉/大正四年卯旧九月十日洗骨候也	〈1〉西原〈判読不能〉	〈1〉1908	〈1〉1915	明治41年＝1908年 大正4年＝1915年
				〈蓋〉内間カ/マハーメ/内間牛/ウスメ/又■/	〈1〉内間カマ 〈2〉内間牛	-	-	
	018 号墓		第46図 170・171	〈蓋〉■[道カ]光貳拾/〈判読不能〉年■[壬カ]辰■[正カ]月/六日死去/兄/古波蔵筑登之/同貳拾三年甲辰/〈欠損〉十二日洗骨 〈身〉道光貳拾一年壬寅正月六日/死去/兄/古波蔵筑登之/同貳拾三年甲辰六月十二日洗骨	〈1〉兄古波蔵筑登之	〈1〉1841	〈1〉1843	道光21年＝1841年 ※道光21年は辛丑。壬寅は22年 道光23年＝1843年 ※道光23年は癸卯。甲辰は24年

第52表 銘書一覧表(4)

No.	墓 番号	蔵骨 器 No.	図版 番号	銘書内容	被葬者	死去年	洗骨年	備考
	018 号墓		第47図 174	<蓋>明治四拾五年旧五月/■■■/五日洗骨/古波蔵牛妻	<1>古波蔵牛妻	-	<1>1912	明治45年=1912年
				<蓋><判読不能>■■四十一<判読不能>/<判読不能>		-	-	
				<身>昭和十七年十一月廿二日ソ<判読不能>	不明	1942?	1942?	昭和17年=1942年
				<身>大正十二年	不明	1923?	1923?	大正12年=1923年
	021 号墓		第54図 178・179	<蓋>なへ <身>大清乾隆/四■■■[拾年カ]/■■■新■■■<判読不能>や/うし宮城■■■[母カ]/なへ	<1>うし宮城■■■なへ	<1>1775?	<1>1775?	乾隆40年=1775年
			第55図 183	<蓋>卯八月廿三日前のろくもい洗骨仕申候	<1>前のろくもい	-	-	
			第55図 184	<蓋>大正七年<判読不能>/骨古波蔵山戸	<1>古波蔵山戸	<1>1918?	<1>1918?	大正7年=1918年
				<蓋><判読不能>	不明	-	-	
				<身>乾隆■■■[四カ]<判読不能>/津■■■<波カ><判読不能>/妻	<1>津■■■<判読不能>妻	-	-	乾隆40年代=1775~1784
				<蓋><判読不能>	不明	-	-	
	022 号墓	1	第62図 195	<蓋>昭和二十年四月/又吉マツ/行年/六十二才	<1>又吉マツ	<1>1945		昭和20年=1945年
		4	第62図 198	<身>口唇: 明治廿一年戊戌九月十二日洗骨又吉蒲 <身>屋門: ■■■[明治カ]■■■年戊戌九月十二日洗骨/又吉■■■[蒲カ]/■■■[寅カ]■■■	<1>又吉蒲	-	<1>1888	明治21年=1888年
				<蓋>昭和二十年四月/又吉伍助/行年/三十六才	<1>又吉伍助	<1>1945		昭和20年=1945年
				<蓋>昭和二十年四月/又吉伍清/行年/三十九歳	<1>又吉伍清	<1>1945		昭和20年=1945年
	025 号墓		第62図 204	<蓋表>十<記号カ> <蓋裏>大清■■■/十年己丑/七月三日/洗骨/■■■ふ	不明	-	-	
			第62図 205	<蓋>内二代目/ノ女ツル	<1>女ツル	-	-	
	032 号墓			<蓋>明治廿八年十月廿三日沢岷掟又吉山戸男子徳/明治■■■[卅]六年八月一日三才又吉山戸<判読不能>	<1>沢岷掟又吉山戸男子徳 <2>又吉山戸<判読不能>	<1>1895? <2>1903?	<1>1895? <2>1903?	明治28年=1895年 明治36年=1903年
	035 号墓			乾隆五拾五年庚戌正月十日/赤嶺筑登之親雲上/但御座敷/乾隆五拾三年戊申四月八日/同人妻	<1>赤嶺筑登之親雲上 <2>同人妻	<1>1790? <2>1788?	<1>1790? <2>1788?	乾隆55年=1790年 乾隆53年=1788年
	036 号墓			<蓋>口唇: 洗骨ノ日昭■■■四年旧二月十日 <蓋>内側: <判読不能>二■■■[村カ]/<判読不能>波花■■■	不明	-	<1>1929	昭和4年=1929年
	039 号墓		第75図 220	<身>乾隆<判読不能>/津■■■<波カ><判読不能>	<1>津■■■	-	-	乾隆年間1736~1795年
			第75図 228	<蓋>雍正九年辛亥/五月四日死/津波■■■男子/■■■親富祖也/同人■■■/同人子/<欠損>■■■	<1>津波■■■男子■■■親富祖 <2>同人■■■ <3>同人子	<1>1731	-	雍正9年=1731年
			第75図 229	<蓋>津波親雲上次男/加那津波	<1>津波親雲上次男加那津波	-	-	
				<蓋>雍正■■■<欠損>/己■■■<欠損>/同十<判読不能>/七月十一日洗骨	不明	-	-	雍正年間1723~1735年
				<蓋>大清乾隆<判読不能>/■■■丑五月廿■■■<判読不能>/津覇筑<欠損>/かま■■■	<1>津覇筑<欠損>かま■■■	-	-	乾隆年間1736~1795年
				<蓋>■■■<判読不能>/■■■<判読不能>/■■■<判読不能>/十一月<判読不能>/■■■<判読不能>/牛八月/洗骨	不明	-	-	
				<蓋>雍正拾年壬子/又五月九日死/津覇掟親■■■/うし	<1>津覇掟親■■■うし	<1>1732	-	雍正10年=1732年
				<蓋>故二ら比■■■[嘉カ]<欠損>/津■■■<欠損>	<1>故二ら比■■■ <2>津■■■	-	-	

第53表 銘書一覧表(5)

No.	墓 番号	蔵骨 器 No.	図版 番号	銘書内容	被葬者	死去年	洗骨年	備考
	039 号墓			<蓋>故二ら比■[嘉カ]<欠損>/津■<欠損>	<1>故二ら比■ <2>津■	-	-	
				<蓋><欠損>造年/<欠損>■あり	<1>■あり	-	-	
				<蓋><判読不能>■[子カ]/<判読不能>■[津覇カ]	不明	-	-	
				<蓋>■[乾カ]■<判読不能>洗骨/<判読不能>二十三/<判読不能>	不明	-	-	乾隆年間1736～1795年
				<蓋>式■両/■津覇	<1>■津覇	-	-	
				<蓋>大正十<判読不能>/旧七月/ク■[ハカ]川小/比嘉■[徳カ]<欠損>/妻カ<欠損>	<1>ク■川小比嘉■妻カ<欠損>	<1>1921?	-	大正10年=1921年
		図版66		<蓋>嘉慶二十五/年庚辰八月十四日/洗骨/比嘉筑登之/妻■	<1>比嘉筑登之妻■	-	<1>1820	墓庭出土の埋納蔵骨器 嘉慶25年=1820年
				<身><判読不能>■七月/<判読不能>廿■死■[去カ]/<判読不能>■	不明	-	-	
				<身>伊祖掟	<1>伊祖掟	-	-	
				<身>明治三十二年旧亥四月五日先<原文ママ>骨久場川小■	<1>久場川小	-	<1>1899	明治32年=1899年
	040 号墓			<蓋>光緒三年丁丑七月七日洗骨/前/仲西親雲上/光緒七年己巳五月三日洗骨/御同人/妻	<1>前ノ仲西親雲上 <2>御同人妻	-	<1>1877 <2>1881	光緒3年=1877年 光緒7年=1881年 ※光緒7年は辛巳
	041 号墓		第79図 239	<蓋><判読不能>西七月七日洗骨之/五男■かま戸■[津]波親雲上	<1>五男■かま戸■親雲上	-	-	
	043 号墓		第81図 244	<蓋>乾<判読不能>/<判読不能>■妻	不明	-	-	
	046 号墓		第88図 250	<蓋><判読不能>男	不明	-	-	
	047 号墓			<蓋><判読不能>■<判読不能>■/昭和六■[年カ]■九月<判読不能>/長女	<1>長女	<1>1931?	<1>1931?	昭和6年=1931年
				<身>明治廿六年巳旧六月廿六日死<判読不能>/與座樽	<1>與座樽	<1>1893		明治26年=1893年

第6章 獣骨の分析

第1節 資料について

本章では、調査に伴い出土した脊椎動物遺体(ヒトを除く)のうち、003号墓及び012号墓・021号墓から出土した頭蓋骨について報告する。003号墓では墓室、012号墓・021号墓では墓庭から検出されたピット内から哺乳類の頭蓋骨が出土した。浦添市内の近世墓では、しばしば墓遺構内から動物の頭蓋骨の出土が確認されており、上記も同様の事例であると捉えられる。これらは墓の造営あるいは葬送に伴う何らかの儀礼として意図的に埋設されたものであると考えられるが、墓遺構の数に対して、検出事例が少数であることなどから、その意義や実態については、なお検討が求められる。なお、各々の出土状況は第4章及び第54表に記載し、ここでは動物分類の種同定以下の分析について述べる。

第2節 分析の概要

出土した動物骨はいずれも頭蓋骨及び下顎骨で、3点ともに現生標本との形態比較によりイノシシないしブタに同定される。出土状況はやや脆く、多くの破片で残存する状態である。そのため、全体形は捉えにくい。が、形態的な特徴として、頭頂骨が厚い・下顎体が肥厚する・下顎歯列が舌側に歪むなどの点からブタであろうと考えられる。上・下顎骨では、003号墓・021号墓の個体はM²・M₂までが萌出済みでM³・M₃が未萌出、012号墓のものでは、乳臼歯が残存するとともにM³・M₃が未萌出である。椎骨や四肢骨などが出土しない点では共通するが、003号墓のみ中節骨・末節骨が供判し、中節骨が切断されている様子を見ることができ。

近世墓における動物骨の埋設はブタが用いられる事が最も多く、上下の歯を噛合せた状態を正位で埋める方法が一般的で、012号墓・021号墓はこれに沿った事例であるとみられる。一方で、中手骨・中足骨・指骨などを共に埋める事例も稀に認められ、003号墓の出土状況が該当するとみられる。ただし、当該を逆に埋めた検出例はこれまで確認されていない。墓遺構で検出される頭蓋骨の埋設は、埋設位置・先端を向ける方位・供伴部位など、各要素の多様性が著しい。これらが、葬制においてどのような意義を有するかは、今後検討を続けるべき課題である。本調査の出土資料も、その一つとして重要なものと位置づけられよう。

第54表 動物骨埋設遺構出土の動物骨観察表

※下線は残存歯、()は未萌出

L:Length, B:Breadth

遺構	出土地点	層位	分類群	雌雄	部位	左右	残存状態	歯列の残存状況	埋納状態	計測値 (mm)					
										M1L	M1B	M2L	M2B	M3L	M3B
003号墓	墓室	ピット内	イノシシ/ブタ	雄	頭蓋骨	L	全体的に残存するが、いずれも破片	<u>I¹I²I³CP¹P²P³P⁴M²(M³)</u>	墓室入口近くのピット内から出土。下顎は正位で底面に、その上に頭蓋骨を逆位で配する。底面には中節骨・末節骨が関節した状態で出土。中節骨は骨幹を切断される。	13.6	10.3	17.6	12.9	—	—
						R		<u>I¹I²I³CP¹P²P³P⁴M²(M³)</u>		13.5	9.8	17.5	12.8	—	—
					下顎骨	L	概ね残存	<u>I₁I₂I₃CP₁P₂P₃P₄M₂(M₃)</u>		13.2	8.3	16.4	10.8	—	—
						R	概ね残存	<u>I₁I₂I₃CP₁P₂P₃P₄M₂(M₃)</u>		13.1	8.4	16.1	10.9	—	—
012号墓	墓庭	造成層内	イノシシ/ブタ	不明	頭蓋骨	—	頭頂+後頭+側頭骨	—	墓庭の右奥隅のピット内から頭位を墓庭の入口方向に向けた状態で、頭蓋骨と下顎骨が咬連した状態で出土。	—	—	—	—	—	—
					下顎骨	L	下顎体～下顎枝	<u>m₂(P₃)m₃(P₄)M₃M₂(M₃)</u>		14.1	9.5	18.1	12.5	—	—
						R	下顎体～下顎枝	<u>m₂m₃M₃M₂(M₃)</u>		—	—	18.6	12.1	—	—
					021号墓	墓庭	ピット内	イノシシ/ブタ		雄	頭蓋骨	L	全体的に残存するが、いずれも破片	<u>CP¹P²P³P⁴M²(M³)</u>	墓庭中央やや入口よりの地点に掘られたピット内から、正位で口先を墓庭入口に向けた状態で、頭蓋骨と下顎骨が咬連した状態で出土。
R	<u>CP¹P²P³P⁴M²(M³)</u>	—	—	16.4					13.2			—		—	
下顎骨	L	<u>CP₁P₂P₃P₄M₂(M₃)</u>	14.1	9.1					18.3		11.6	—		—	
	R	<u>CP₁P₂P₃P₄M₂(M₃)</u>	14.5	9.4					18.3		11.5	—		—	

第7章 人骨の分析

第1節 資料について

人骨の出土は、24年度・26年度の調査区ともに墓室内の蔵骨器内に納められた状態であったもの、あるいは墓室・墓庭に散乱した状態で出土したものである。墓室床面や墓庭埋土などから出土している人骨は、蔵骨器の破片と混在している、または蔵骨器を伴わずに散乱していることから、墓との関係性が必ずしも明確ではない資料が多い。そのため、本報告では墓室内に蔵骨器が原位置で残存していた003号墓及び004号墓に焦点を絞り、両遺構の蔵骨器内から出土した人骨の分析・観察を行い、基礎情報について記載することとした。

003号墓・004号墓はともに墓室内は埋没せずに残存する遺構で、棚上あるいはシルヒラシに蔵骨器が設置されていた。一部は転倒したり、蓋が外れたりしているものの、内部の人骨も納められた後に攪乱等を受けたり、土砂等が流入した痕跡は見られなかった。しかしながら、蔵骨器内部の人骨の残存状況を確認すると、全体的に劣化・風化が進行しており、完形の状態で残存するものは少なく、一部欠損あるいは破片となっている骨が大半であった。また、ある程度形状を保っているものについても、質は脆く、触れるだけで崩れてしまう資料も多い。このような状況の要因としては、墓室内部が埋没していたことで常に温湿度変化にさらされていた点、あるいは石灰岩丘陵内にあることから、雨水等が蔵骨器内に流入していた点などが想定される。そのため、人骨分析にあたっては、慎重な作業が求められる状況である。

第2節 分析の方法

前述のとおり、本調査で出土した人骨の遺存状態は良好とはいえず、頭蓋骨や四肢骨などが完形で残存する資料はほとんど見ることができず、形態観察が困難な資料も多い。そこで本分析では、四肢骨などの長管骨は骨端ないし骨幹が全周を残存しているものを対象とし、半分に割れるあるいは破片となっているものは避けた。その上で分析は、部位同定とそれに基づく個体識別及び最小個体数の計数、性別及び年齢推定・病変等の異常形態の観察を基本作業として行い、これらの結果についてそれぞれ一覧表に記載した(第55表)。個体識別と最小個体数の計数は蔵骨器単位で行い、識別した個体ごとに人骨Noを付した。同一の蔵骨器内に複数体の人骨が納められており、個体を識別することが困難である資料については、識別不能を一括資料として区分している。性別判定は、寛骨及び頭蓋の形態が残存する資料がほとんどないことから、四肢骨骨端サイズなどを、他の近世墓から出土した性別が判明している人骨と比較することで推定している。ただし、人骨計測法に基づく骨長計測はほとんどの資料において残存状態の点から不可である。また、年齢推定についても、やはり詳細に判定を行うだけの残存状況が得られていないことから、成人か未成人かあるいはどちらとも判断できないかの3つの区分で分類した。

第3節 分析結果の概要

(1)003号墓

003号墓から出土した蔵骨器のうち6点に人骨の残存が確認された。蔵骨器1・2・5には少なくとも成人2体分の部位が同定され、蔵骨器3・4には成人1体分が確認された。蔵骨器6に残存していた人骨は細片のみであったことから、詳細は不明であるが、使用されていた痕跡を窺うことはできる。遊離歯の歯種や咬耗、骨端の癒合状況及びサイズなどからいずれも成人であろうと推測したが、具体的な年齢段階は、蔵骨器1から出土した下顎骨に歯槽閉鎖が認められた点で、高齢の可能性が指摘できるほかは、言及が難しい状況である。

(2)004号墓

出土した44点の蔵骨器のうち42点に人骨の残存が確認された。部位同定及び最少の被葬者数を計数してみると、1体分が含まれている蔵骨器が27点、2体分が含まれるものが11点、3体分が含まれると推定されるものが4点であることから、本墓の被葬者は少なくとも63を数える。年齢構成では成人41・未成人6・不明14と、成人が多くを占める割合がみられる。しかし、遺存環境が悪いことが窺われる本遺構では、元来、成人に比べて脆弱な未成人骨の残存状態を同等に評価してよいかどうかは疑問が生ずる。同定数の比率が、実際の被葬者の実態をどの程度反映し得るかは、更なる検討を要すると思われる。性別構成についても、大半は判定不能であるものの、蔵骨器27から出土した腸骨の形態あるいは蔵骨器4・13・34・36などで骨のサイズから推測することはできた。形態的な観察においては、腰椎を中心とする椎骨の椎体復縁に骨棘形成が認められる資料が散見された。形成はじめての比較的軽度なものと、進行が進んだ「やや強度」までの例がみられたほか、蔵骨器36の鎖骨の骨端に変形がみられた。

第4節 小考

本報告では上記のとおり003号墓と004号墓から出土した人骨に焦点を当てたが、他の遺構から出土した人骨についてもその残存状態などは概ね共通である。そのため、基礎的な部位同定等はある程度可能であるが、本遺跡における葬制を考察するための資料としては、より専門的な方法を用いるなどして情報の蓄積をすることが必要であろう。特に004号墓などは蔵骨器形態や銘書などの情報も豊富であることから、これらと組み合わせることで、本遺構の実相について考察が可能であろう。

第55表 最少個体数集計表

別 遺構名	年齢・性		成人			未成人	不明	小計	合計
	男性	女性	不明	不明	不明	不明	不明		
003号墓			9					9	72
004号墓	5	3	33	6	16			63	

第56表 出土人骨一覧表

※部位名称の後の数字は同定数を示す

墓 No.	蔵骨 器 No.	人骨 No.	年齢	性別	出土部位	備考
3	1	1	成人	不明	距骨L・R、踵骨L	
3	1	2	成人	不明	踵骨L	
3	1	1or2	—	—	下顎骨、腰椎、椎骨、舟状骨（手）L、月状骨L・R、三角骨L、有頭骨L、第4中手骨L・R、基節骨（手）6、中節骨（手）5、寛骨R、大腿骨L2・R、膝蓋骨L、脛骨L・R、腓骨R、距骨L/R、舟状骨（足）L・R、外側楔状骨R、第1中足骨R、第3中足骨L・R、第4中足骨L、第5中足骨L・R2、基節骨（足）6、中節骨（足）1、遊離歯	下顎骨の歯槽の一部が閉鎖済
3	2	1・2	成人	不明	頭蓋骨破片、軸椎、胸椎、椎骨5、肩甲骨L、鎖骨R、上腕骨L・R、尺骨L2・R、橈骨L・L/R、舟状骨（手）L・R、月状骨L、大菱形骨R、小菱形骨L/R、有頭骨R2、有鈎骨L・R、第1中手骨L、第2中手骨R、第3中手骨L、第4中手骨L、基節骨（手）3、中節骨（手）10、末節骨（手）2、腸骨L、大腿骨L2・R、膝蓋骨L2・R2、腓骨R、距骨L2・R2、踵骨R2、舟状骨（足）L2・R、立方骨R、中間楔状骨L、第2中足骨R、第3中足骨L・R2、第4中足骨L・R2、第5中足骨R、第1基節骨（足）4、末節骨（足）遊離歯	距骨等による重複から最小個体数
3	3	1	成人	不明	頭蓋骨破片、第3中手骨R、中手骨L/R、大腿骨R、膝蓋骨L、第2中足骨L、遊離歯	
3	4	1	成人	不明	頭蓋骨破片、四肢骨破片、第3中手骨R、膝蓋骨R、基節骨（足）2、遊離歯	
3	5	1・2	成人	不明	頭蓋骨破片、上顎骨L、下顎骨L、仙骨破片、上腕骨L3・R2、尺骨L、橈骨L、月状骨L、有頭骨L・R、基節骨（手）3、中節骨（手）2、寛骨L、大腿骨L3・R、脛骨R、腓骨L/R3、踵骨R、立方骨L・R2、外側楔状骨L、第3中足骨L、第4中足骨R、第5中足骨R、末節骨（足）、遊離歯	
3	6	1	不明	不明	破片のみ	
4	1	1	不明	不明	頭蓋骨破片、膝蓋骨L・R、舟状骨（手）R、中節骨（足）、第1基節骨（手）、遊離歯	
4	2	1・2・3	成人	不明	前頭骨、頭頂骨、側頭骨L・R、後頭骨2、頭蓋骨破片、上顎骨L、下顎骨L2、椎骨16、仙骨破片、肩甲骨R、上腕骨L・R4、橈骨L2、尺骨L・R、第2中手骨R、第4中手骨L・R2、中節骨（足）5、寛骨R3、腸骨R、恥骨R、大腿骨L4・R4、膝蓋骨L・R、脛骨L2・R3、腓骨L2・R2、距骨L3・R3、踵骨L2、第1中足骨L3・R、第3中足骨R、第4中足骨L・R、第5中足骨L・R、中手/中足骨3、基節骨（足）7、中節骨（足）8、遊離歯	四肢骨・距骨の部位重複から最小個体数3
4	3	1	成人	不明	頭蓋骨破片、寛骨L、椎骨11、肩甲骨L/R、上腕骨L・R、尺骨R、月状骨R、有頭骨L、中手骨R、第3中手骨L・R、基節骨（手）2、中節骨（手）4、膝蓋骨L・R、踵骨L・R、距骨L・R、舟状骨（足）L・R、立方骨L・R、内側楔状骨R、中間楔状骨R、第3中足骨R、第4中足骨L、第5中足骨L、中足骨L/R、基節骨（足）	
4	4	1・2	成人	男性 女性	頭蓋骨破片、鎖骨L/R、上腕骨L2・R2、橈骨L・R、尺骨L、舟状骨（手）R、有頭骨R、第2中手骨L、第3中手骨R、第4中手骨R、第5中手骨R、大腿骨L・R、腓骨L/R・R、距骨L・R、踵骨R、舟状骨L、基節骨（足）2、第1中足骨L/R、遊離歯	上腕骨遠位端癒合済み、サイズの異なる上腕骨が左右いずれも重複
4	4	3	未成人	不明	仙椎2、大腿骨L・R、脛骨L・R、距骨L・R、踵骨L	骨端及び椎体関節面未癒合
4	5	1	成人	不明	遊離歯、頭蓋骨破片、寛骨R、大腿骨L/R、腓骨R、上腕骨L、膝蓋骨L/R2、椎骨4、仙椎、中節骨（手）、基節骨（手）、舟状骨（手）L・R、有鈎骨L・R、月状骨R、大菱形骨L、第2中手骨L、第4中手骨R、中手/中足骨2、距骨R、踵骨L、舟状骨L、外側楔状骨R、基節骨（足）4、末節骨（足）、	遊離歯に咬痕あり、椎骨の椎体後縁にいずれも骨棘形成あり
4	6	1	成人	不明	頭蓋骨破片、下顎骨L、橈骨L/R、椎骨、舟状骨（手）R、月状骨R、有頭骨L・R、有鈎骨L、第1中手骨L・R、第2中手骨R、第3中手骨L・R、第4中手骨L・R、第5中手骨L、基節骨（手）4、中節骨（手）6、距骨L・R、膝蓋骨R、第1中足骨L、第2中足骨L、第3中足骨R、第4中足骨L、立方骨R、内側楔状骨L、基節骨（足）、第1基節骨L・R	M2萌出済み、
4	7	1・2	成人	不明	頭蓋骨破片、椎骨4、上腕骨L・R、第3中手骨R、第5中手骨R、基節骨（手）、中節骨（手）2、末節骨（手）、大腿骨R、脛骨L、距骨R、内側楔状骨R、第3中足骨L・R、第4中足骨R、第5中足骨R2、基節骨（足）2、第1基節骨（足）L・R、末節骨（足）遊離歯	サイズの異なる中足骨Rが重複
4	8	1・2	成人 未成人	不明	頭蓋骨破片、軸椎、椎骨2、距骨R、橈骨、尺骨L・R、舟状骨（手）L・R、月状骨L・R、大菱形骨L、有頭骨L、有鈎骨L・R、第3中手骨R、第4中手骨L、基節骨（手）5、中節骨（手）4、末節骨（手）3、膝蓋骨R、手根骨/足根骨2、中間楔状骨L、第1中足骨、基節骨（足）6、中節骨（足）4、末節骨（足）2、中足骨L/R、指骨、手根骨/足根骨（未成人）	成人骨が主体だが、手根骨・足根骨に未発達形状が見られるため未成人が混在する
4	9	1	成人	不明	肩甲骨L、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、寛骨L、膝蓋骨L・R、脛骨L・R、踵骨R、立方骨R、内側楔状骨L	四肢骨骨端癒合済み
4	9	2	成人	不明	肩甲骨L、上腕骨R、橈骨L、寛骨L・R、大腿骨L・R、膝蓋骨L、脛骨L・R、踵骨L・R、立方骨R	四肢骨骨端癒合済み
4	9	3	成人	不明	脛骨R	四肢骨骨端癒合済み
4	9	1or2or3	—	—	頭蓋骨破片、胸椎3、腰椎、椎骨2、距骨R、橈骨、尺骨L・R、月状骨R、三角骨L、大菱形骨R、小菱形骨L2・R、有頭骨L・R、有鈎骨L・R、第1中手骨L2、第2中手骨L、第4中手骨L、第5中手骨L、第5中手骨R、第1基節骨L、基節骨（手）2、中節骨（手）3、末節骨（手）5、大腿骨L3・R2、脛骨L2・R、腓骨L・R、距骨L3・R3、舟状骨（足）R、中間楔状骨R2、第1中足骨L、第3中足骨L、第4中足骨R2、第1基節骨（足）L・R2、基節骨（足）12、中節骨（足）5、末節骨（足）4、	
4	10	1・2	成人	不明	頭蓋骨破片、椎骨7、軸椎、頸椎、胸椎、肋骨破片、下顎骨L・R、鎖骨R、肩甲骨L・R、上腕骨R2、橈骨R、舟状骨（手）L・R2、小菱形骨R、有頭骨L、有鈎骨L・R、第3中手骨、第1基節骨（手）2、基節骨（手）8、中節骨（手）6、末節骨（手）3、大腿骨L2・R、膝蓋骨L、距骨L・R、踵骨L、舟状骨（足）L・R、内側楔状骨L、中間楔状骨R、外側楔状骨R、立方骨R、第3中足骨L、第5中足骨L（2）・R、第1基節骨（足）R、基節骨（足）4、中節骨（足）3、遊離歯	大腿骨骨幹の重複から最小個体数を算定
4	11	1	不明	不明	頭蓋骨、手根骨、第1基節骨、遊離歯	
4	12	1・2	成人	不明	頭蓋骨、後頭骨後頭顆、仙骨、椎骨、肋骨、上腕骨R、尺骨L2・R、舟状骨L、有頭骨L2、第1中手骨L、第2中手骨L、第3中手骨L、第1基節骨（手）、基節骨、中節骨（手）、寛骨L・R、大腿骨L・R、膝蓋骨、腓骨L、距骨R、踵骨L・R、舟状骨（足）L・R、内側楔状骨L2、外側楔状骨L、立方骨L2・R2、第1中足骨R、第3中足骨L、第4中足骨R2、第5中足骨L、基節骨（足）、第1基節骨（足）、末節骨（足）、遊離歯	尺骨・有頭骨・立方骨が重複 尺骨肘頭サイズに差、男女各1？ 四肢骨骨端は癒合済み 腰椎椎体後縁に若干の骨棘形成
4	13	1・2	成人	男性 不明	頭蓋骨破片、下顎骨L、椎骨6、軸椎、仙骨破片、肩甲骨L、上腕骨L・R、橈骨R、尺骨R、月状骨R、小菱形骨R、有頭骨L・R、第1中手骨R、第2中手骨L、第3中手骨L2・R、第4中手骨L、基節骨（手）2、寛骨L、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、脛骨L、距骨L・R、踵骨L、舟状骨L・R、立方骨L・R、内側楔状骨R2、中間楔状骨L・R2、第1中足骨L、第2中足骨L・R、第3中足骨L2・R、第5中足骨R、遊離歯	第3中手骨などの重複から最小個体数2 四肢骨骨端はいずれも癒合済み サイズから少なくとも1体は男性
4	14	1	未成人	不明	頭蓋骨破片、中手/中手骨L/R、指骨3、遊離歯	乳歯・未発達の中手骨
4	15	1	不明	不明	頭蓋骨破片、上腕骨L・R、大腿骨R、腓骨?L、遊離歯	

第56表 出土人骨一覧表

※部位名称の後の数字は同定数を示す

墓 No.	蔵 器 No.	人 骨 No.	年 齢	性 別	出土部位	備考
4	16	1	成人	不明	頭蓋骨破片、椎骨13、肩甲骨L・R、上腕骨L・R、舟状骨(手)R、月状骨L、大菱形骨、有鉤骨R、中節骨(手)、寛骨臼L・R、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、脛骨L・R、腓骨L、距骨L・R、踵骨R、舟状骨(足)L・R、基節骨(足)2、立方骨R、内側楔状骨L・R、中間楔状骨L、第3中足骨L、第5中足骨L・R、中手/中足骨2、末節骨(手足不明)、遊離歯	上腕骨遠位端癒合済み 四肢骨・距骨・踵骨などのサイズから男性か?
4	17	1・2・3	成人	不明	頭蓋骨破片、下顎骨L・R、胸椎3、腰椎3、仙骨、椎骨11、肩甲骨R、上腕骨L2・R3、尺骨L・R3、橈骨R、舟状骨(手)L、三角骨L、有頭骨R、有鉤骨L、第3中手骨L2・R、第4中手骨L、末節骨(手)、寛骨R、寛骨臼、大腿骨L・R、膝蓋骨R、脛骨L2・R2、距骨L、踵骨L、立方骨R、中間楔状骨L・R、外側楔状骨R、中節骨(足)、第4中足骨R、第1基節骨(足)L・R、遊離歯	尺骨の重複から最小個体数3 尺骨肘頭サイズ大2・小1 四肢骨骨端いずれも癒合済み 腰椎の椎体復縁に強度の骨棘形成
4	18	1	成人	不明	頭蓋骨破片、頸椎、椎骨13、肩甲骨L、上腕骨L、橈骨R、尺骨L・R、舟状骨(手)L・R、有頭骨L、中手骨、第3中手骨L、第4中手骨L・R、大腿骨L、膝蓋骨L・R、脛骨R、腓骨R、距骨R、舟状骨(足)L、立方骨R、基節骨(手)3、内側楔状骨L、中間楔状骨L、外側楔状骨L、基節骨(足)、第1基節骨(足)2、第3中足骨L、中節骨(足)2、末節骨(手足不明)5、遊離歯	四肢骨骨端癒合済み 骨端サイズが大きいため男性か
4	19	1	成人	不明	頭蓋骨破片、椎骨19、寛骨R、仙骨?、肩甲骨R、上腕骨L・R、尺骨L・R、月状骨L、有鉤骨R、寛骨L・R、大腿骨L・R、立方骨R、中間楔状骨R、第3中足骨L・R、基節骨(足)2	腰椎の1点に骨棘形成
4	20	1	不明	不明	頭蓋骨破片、中節骨(手)、脛骨R、腓骨R	
4	21	1・2	成人	不明	頭蓋骨破片、下顎骨L、頸椎2、胸椎4、椎骨19、胸骨、鎖骨L・R、肩甲骨L・R、上腕骨L・R、尺骨L・R、橈骨L・R2、舟状骨(手)L・R、大菱形骨L、小菱形骨L、有鉤骨L、第2中手骨L、第4中手骨L、第5中手骨L・R、基節骨(手)5、第1基節骨(手)、中節骨(手)7、末節骨(手)2、寛骨L・R、恥骨L、大腿骨L2・R、膝蓋骨L、脛骨L・R、腓骨R2・L/R、距骨L・R、踵骨L・R、舟状骨(足)R、立方骨L・R、内側楔状骨L2・R、中間楔状骨L、第1中足骨L、第3中足骨L2、第4中足骨L、第5中足骨L、第1基節骨(足)、基節骨(足)、末節骨(足)11、種子骨、遊離歯	橈骨・大腿骨・距骨など重複から最小個体数2 四肢骨骨端癒合済み 椎骨の一部に軽度の骨棘形成
4	22	1	不明	不明	椎骨破片、第1基節骨(手)、中節骨(手)、大腿骨/LR、中節骨(足)、末節骨(足)、種子骨	
4	23	1	成人	不明	頭蓋骨破片、腰椎、仙骨、椎骨13、下顎骨、胸骨、肩甲骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・L/R、第1中手骨R、中手骨、中節骨(手)、坐骨L、大腿骨L・R、脛骨L、踵骨L・R、内側楔状骨、中間楔状骨、遊離歯	
4	24	1	未成人	不明	頭蓋骨破片、椎骨15、鎖骨L・R、尺骨L・R、寛骨R、大腿骨R、脛骨R、距骨L、内側楔状骨、種子骨、中足骨、中節骨、遊離歯	尺骨骨端未癒合
4	25	1	成人	不明	頭蓋骨破片、膝蓋骨L、膝蓋骨R、椎骨10、橈骨L/R、舟状骨(手)L・R、月状骨R、有頭骨L・R、末節骨(手)、脛骨L/R、立方骨L・R、内側楔状骨L・R、中間楔状骨L、外側楔状骨L・R、基節骨(足)、中節骨(足)、末節骨(足)、遊離歯	遊離歯に咬耗あり
4	26	1	不明	不明	頭蓋骨破片、椎骨3、舟状骨L(手)、月状骨R、手根骨9、大腿骨R、距骨L・R、舟状骨(足)R、立方骨R、内側楔状骨L・R、第1基節骨R、第1中足骨、第2中足骨R、基節骨(足)2、中節骨(足)、遊離歯	
4	27	1・2	成人	男性 女性	頭蓋骨破片、椎骨15、頸椎、胸椎2、軸椎、下顎骨L、肩甲骨、上腕骨L2・R2、橈骨R、尺骨R、月状骨L・R、豆状骨、中手骨、基節骨(手)、末節骨(手)、寛骨L2・R2、腸骨L2・R、寛骨破片、大腿骨L2・R2、膝蓋骨L/R、脛骨R2、距骨L2・R2、踵骨L・R、基節骨(足)2、末節骨(足)、遊離歯	腸骨大坐骨切痕角から男女各1 重複部位それぞれにサイズ差あり 椎骨の一部に骨棘形成
4	28	1	不明	不明	頭蓋骨破片、遊離歯	
4	29	1・2	成人	不明	頭蓋骨破片、環椎、椎骨16、下顎骨L・R、肩甲骨L、鎖骨L、上腕骨R2、橈骨L、尺骨L、月状骨L、有頭骨L、第2中手骨R、第3中手骨、大腿骨L・R、膝蓋骨L2・R2、腓骨R・L/R、踵骨L・R、距骨L・R、立方骨R、中間楔状骨R、基節骨(足)、中節骨(足)、末節骨(足)	膝蓋骨の重複から最小個体数2
4	30	1	不明	不明	頭蓋骨、遊離歯、大腿骨R	
4	31	1	成人	不明	頭蓋骨破片、椎骨、上腕骨R、橈骨L・R、尺骨R、中節骨(手)、膝蓋骨L、腓骨R、距骨L、基節骨(足)3、第1基節骨(足)R、末節骨(足)2、	尺骨肘頭癒合済み 椎骨に骨棘形成あり
4	33	1・2	成人 未成人	不明	頭蓋骨破片、鎖骨L、基節骨(手)2、脛骨L、距骨R、踵骨L、遊離歯	脳頭蓋の破片に成人と未成人のものが混在 鎖骨はサイズから未成人のもの
4	34	1	成人	男性	遊離歯、上腕骨L、橈骨L、橈骨R、尺骨L・R、脛骨L	
4	34	2	成人	女性	脛骨、上腕骨L・R、橈骨L、尺骨L	
4	34	1or2	—	—	頭蓋骨破片、側頭骨L・R、頸椎3、胸椎12、腰椎5、仙骨、椎骨部位不明、肩甲骨R2、鎖骨R、月状骨R、大菱形骨L、第1中手骨L、第2中手骨L・R2、第3中手骨L、第4中手骨L、中手骨2、基節骨(手)2、寛骨L、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、膝蓋骨L/R、脛骨L・R、腓骨L・R2、踵骨L・R、距骨L・R、内側楔状骨R、外側楔状骨L、舟状骨L/R2、第1中足骨R、第3中足骨L・R、第4中足骨L、中足骨1、第1基節骨(足)L・L/R、基節骨3(足)、中節骨(足)2、	層橈骨の乳様突起は発達する
4	35	1	不明	不明	頭蓋骨破片、脛骨L・R、距骨L、遊離歯	前頭骨の眉弓は隆起しない
4	36	1	成人	男性	頭蓋骨、腰椎2、胸椎4、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、舟状骨(手)L・R、月状骨L、三角骨R、大菱形骨L、有鉤骨L、第1中手骨L・R、基節骨(手)6、中節骨(手)6、末節骨(手)3、腸骨R、大腿骨R、脛骨R、腓骨L、外側楔状骨R、第1中足骨L、基節骨(足)、遊離歯	鎖骨Rの胸骨側関節面が変形
4	37	1	不明	不明	椎骨18、顎骨L/R、小菱形骨R、豆状骨L、基節骨(足)3、末節骨(足)2	椎骨の一部に軽度の骨棘形成
4	38	1	不明	不明	第1中手骨L、基節骨(手)、中節骨(手)4、末節骨(手)、踵骨L・R、距骨R、第2中足骨L、第3中足骨L、第5中足骨R、基節骨(足)3、末節骨(足)4	
4	40	1	不明	不明	中節骨(手)2、末節骨(手)2、末節骨(足)1、遊離歯	
4	41	1	不明	不明	頭蓋骨破片	
4	42	1	未成人	不明	椎骨、舟状骨(手)R、有鉤骨R、第2中手骨L、膝蓋骨L、距骨R、外側楔状骨R、第4中足骨L、指骨4、遊離歯	椎体関節面未癒合
4	43	1	不明	不明	頭蓋骨破片、遊離歯、上腕骨L、橈骨R	
4	44	1・2・3	成人2 不明1	不明	頭蓋骨破片、前頭骨、側頭骨R、下顎骨L+R・R、上腕骨L3・R2、橈骨R2・L/R、尺骨L2・R、小菱形骨R、第1中手骨L、第2中手骨R、第5中手骨L、基節骨(手)、中節骨(手)、寛骨R、大腿骨L3・R1、膝蓋骨R、脛骨L2・R4、腓骨L・R・L/R9、舟状骨(足)L、中間楔状骨L、第1中足骨R、第4中足骨R、第5中足骨L、基節骨(足)、末節骨(足)2、遊離歯	大腿骨の部位重複から最小個体数3 下顎歯の萌出状況から2体は成人

第8章 総括

城間東空寿古墓群で行った本調査により検出された51基の墓の調査成果について、それぞれの墓ごとに遺構や遺物について報告を行った。以下に調査成果について整理をし、本書のまとめとしたい。

本墓群は浦添市城間の旧集落の北方に位置する小字東空寿の中央部の石灰岩丘陵に位置し、調査地内の地層は牧港石灰岩を基盤とする。丘陵の東側には市仲間付近を源とする市内完結型の河川であるシリン川が流れ、丘陵西側は現在米海兵隊施設である牧港補給地区が眼下に広がる。本墓群は基地建設に伴い土地を接収され、墓の移転を余儀なくされた。調査前の状況としてほとんどの墓口で空いているのが確認されたのはそれらに起因する。その後、1974（昭和49）年に返還された。

本遺跡の墓の分布については『市内遺跡発掘調査報告書（3）』（浦添市2013）に詳細な報告があり、亀甲墓59基を含む計98基が確認されている。今回調査対象となった51基の各墓について、形態分類からすると亀甲墓34基（001・005～007・009～016・018～022・024・026・030～039・044～048）、平葺墓4基（003・004・025・041）、破風墓1基（049）、掘込墓11基（002・008・017・023・027・040・042・043・050～052）、岩陰墓1基（029）の計4種類を確認した。本墓群が形成される丘陵は南北に伸び、墓は東西の両斜面に造営される。今回調査を行った墓の65％は亀甲墓となっており、そのほとんどが西斜面で構築されている。平葺墓では大型の003号墓と004号墓が東斜面の北側で見られ、小型の025号墓や041号墓は西斜面の調査区中央や南側で確認された。掘込墓は西斜面で多く確認されており、破風墓は調査区の南端で確認された。029号墓は張り出した岩盤の下部を利用し、壁と床面で部分的な加工が観察されるものの墓正面の構造については不明な点が多い。

丘陵斜面中腹に造営された本墓群は、横穴式の墓室を設け、墓庭は岩盤を平坦に掘削して構築する。墓口の構造は、岩盤掘り込みで造る墓（004墓ほか2基）と羨道部（墓口）を石積みで仕上げた墓（003号墓ほか23基）が見られた。正面部分が崩落等によるものや漆喰塗布により不明瞭な墓があるものの、羨道部を切石で仕上げる墓が多く見られたことが分かる。墓庭を囲む庭積みは、岩盤を掘削して構築されるもの（009号墓など）や、岩盤を掘削後に表面を切石積みで仕上げるもの（001号墓など）、または岩盤掘削の部分と切石積みの両方が見られるもの（003号墓など）がある。両方を併用する墓には左右の庭積みを岩盤掘削により構築して墓門側を切石積みで造営する墓がある。港川崎原古墓群や城間古墓群B地区で見られた周囲より掘り下げて構築される半地下式の墓庭をもつ墓は008・034・041号墓の3基で、本調査区に造営された墓は墓道と墓庭に高低差がほとんど見られない墓が多く分布することが分かる。

墓室の平面形状の分類については、平成26年度に刊行された『前田・経塚近世墓群6』の分類（第1表）を本報告書でも使用した。第56表に墓別にみた墓室類型の表を示した。その他・不明を合わせると12種類のバリエーションを確認した。最も多く見られたのが有段のコ字状に奥柵へ2段加わる5類b型の12基、最も少ないのは無段コ字状に奥柵へ1段加わる6類b型の1基である。第57表に図化を行った遺構別の墓室類型を表した。出現期が17世紀代と見られる出

第57表 墓別墓室類型表

墓室類型	墓番号
1類a・b型	008・017・023・027・029・040・042・043・050・051・052
2類b型	004・016
3類a型	002・003・025・039・041
3類b型	012・014・026・044
5類a型	010・022・032・033・045
5類b型	001・005・009・019・020・030・035・037・046・047・048・049
6類a型	006・018・021・031・038
6類b型	015
その他・不明	007・011・013・024・032・034・036

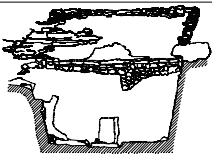
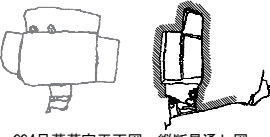
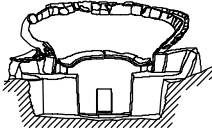
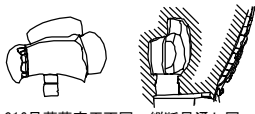
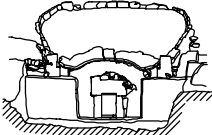
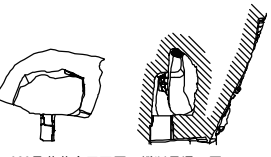
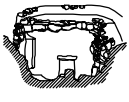
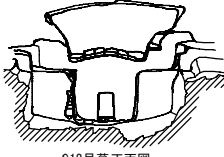
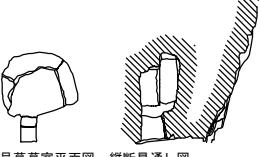
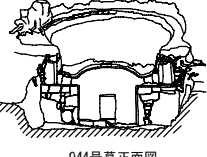
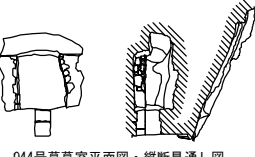
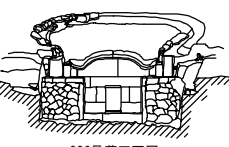
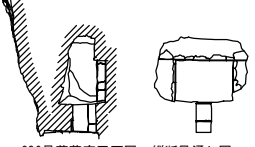
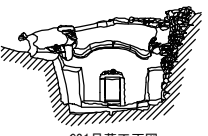
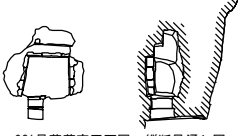
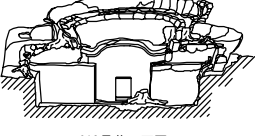
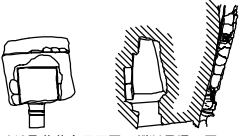
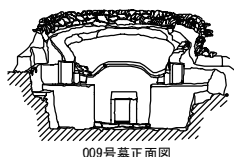
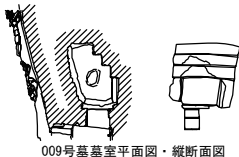
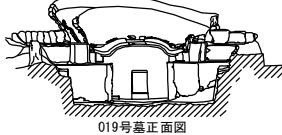
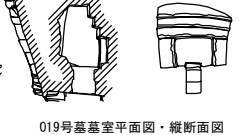
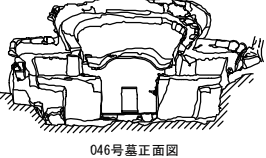
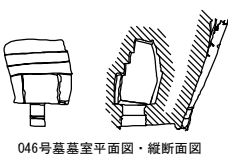
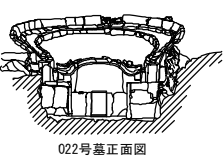
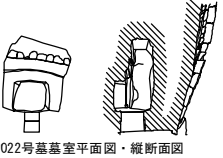
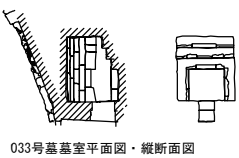
窓状の柵をもつ016号墓の眉石は緩やかで眉両端の外反も弱いといった比較的古式を呈すると見られ、出現期が18世紀代と見られる有段コ字状の柵をもつ012号墓の眉石も両端の反りは見られず、016号同様に古式を呈すると見られる。2類b型から3類b型まで概観するとヤジョーマーイが見られないものが多い。021号墓は6類a型の平面形を持つが、元は2類b型であった可能性が高い。3類a型の柵が見られる003・039・041・025号墓は柵の高さに違いが見られる。前者2基の柵は0.5m以上と高い柵が見られ、後者2基の柵は0.22m以下と比較的低めである。出土蔵骨器からみる使用時期では前者2基は17世紀代から使用が始まるが、後者2基は18世紀代からの使用が推定される。6類a型の018号墓、5類b型の009・046号墓、5類a型の022号墓は出土蔵骨器から推定される使用時期は19世紀代～20世紀代で、6類a型や5類の柵を持つ墓にヤジョーマーイが確認される。

どの墓も造墓年代が分かる資料がないため墓の造営年代は不明な点が多く、また市内の亀甲墓は明治中期から大正・昭和初期にかけて流行して各地に分布していることが知られている。墓の外観については造り替えという行為の有無を検証しなければならないが、今回は資料が乏しく、そこまで至らなかった。そこで、墓室類型から本調査区における墓域の使用時期を検討すると、17世紀代に東斜面の北側（003・004号墓）と西斜面の調査区中央の北側（016・021号墓）及び調査区南側（039号墓）から使用が始まり、次の18世紀代には西斜面の中央北側の016号墓の周囲（012～018号墓）、調査区中央（025・026号墓）、調査区南側で039号墓の周囲（038～044号墓）で墓が増え始め、その後現在見られるような古墓が並ぶ景観となったことが考えられる。

蔵骨器に記された銘書をみると、004号墓出土蔵骨器では栗国・西原・比嘉の3系統が本墓を使用していることが分かる。ほかに外間姓も見られるが関連性は分からない。銘書の分析から西原系統では栗国が屋号として使用されており、栗国から西原に家名が変わったのちに元の家名が屋号化した可能性を第5章で鈴木氏は指摘している。「字城間の屋号（昭和20年）」による戸数の調査では、栗国は12戸とあり城間では7番目に多い※。昭和62年に行った昭和初期の屋号の調査では栗国を屋号とする西原姓は確認されておらず※、近世の屋号と昭和初期の屋号の違いについては今後の課題である。021号墓出土蔵骨器では「前のろくもい」の銘書が確認された。近世城間村の祭祀は城間ノロの管轄であり、021号墓は城間ノロとの関係が示唆される。城間村内にはノロ殿内を屋号に持つ家に古波蔵姓があり、021号墓の所有者も古波蔵姓である。屋号からもノロとの関係性が考えられる。040号墓出土蔵骨器では「仲西親雲上」の銘書が確認された。仲西親雲上とは浦添間切の地頭代職に就任した人が称する。040号墓は西斜面調査区南側に位置し、墓の形態分類では掘込墓となる。墓室から仲西親雲上の銘書が墨書された荒焼御殿形及び、マンガン釉甕形が出土した。比較的小規模の墓室であり家族墓の様相を呈している。

第58表は1952（昭和27）年に作成された土地所有権証明書交付簿から墓の所有者を示したものである。これにより本墓群の調査区の墓所有者はほとんどが字城間出身であることが分かる。014号墓の銘書から「城間村」の文字が確認されていることから、本墓群は城間村の墓域であることを銘書からも捉えることができる。また、ここで注目したいのが所有者名で、かつて城間では組み分け（砂糖組・地域区分）を記した番号表示が、各自の名頭に付されるという独特の名の付け方があり、「1番組は池、2が仁、3が産、4が清、5が伍、6が陸、7が識、8が鉢、9が久、10が重となり、例えば城間池郎は1番組地に基本的に居住し、1番組の砂糖組に所属する人物」であるという※。第58表で示したとおり、名頭に組を示したと見られる人物名を確認することができ、それらから推測できる居住区は2番組、4番組？、5番組、7番組、9番組、10番組となる。城間村では3・7・8・9・10の番組は前村渠、1・2・4・5・6の番組は後村渠と組別で呼称されており、このことから、本墓群は城間村の決まった居住区の墓域でないことが分かる。逆にどのような判断基準

第58表 遺構別墓室類型表

棚の形状（墓室類型）	墓正面図・墓室平面図・墓室縦断見通し図			
出窓状 (2類b型)	 004号墓正面図	 004号墓室平面図・縦断見通し図	 016号墓正面図	 016号墓室平面図・縦断見通し図
無段コ字状 (3類a型)	 003号墓正面図	 003号墓室平面図・縦断見通し図	 039号墓正面図	 039号墓室平面図・縦断見通し図
	 041号墓正面図	 041号墓室平面図・縦断見通し図	 025号墓正面図	 025号墓室平面図・縦断見通し図
有段コ字状 (3類b型)	 012号墓正面図	 012号墓室平面図・縦断見通し図	 044号墓正面図	 044号墓室平面図・縦断見通し図
	 026号墓正面図	 026号墓室平面図・縦断見通し図		
無段コ字状＋段状 (6類a型)	 021号墓正面図	 021号墓室平面図・縦断見通し図	 018号墓正面図	 018号墓室平面図・縦断見通し図
有段コ字状＋階段状 (5類b型)	 009号墓正面図	 009号墓室平面図・縦断面図	 019号墓正面図	 019号墓室平面図・縦断面図
	 046号墓正面図	 046号墓室平面図・縦断面図		
無段コ字状＋階段状 (5類a型)	 022号墓正面図	 022号墓室平面図・縦断面図	 033号墓正面図	 033号墓室平面図・縦断面図
棚無し (1類a型またはb型)	 042号墓 043号墓	 050号墓 051号墓	不 明	 034号墓正面図 034号墓室平面図・縦断面図

で本丘陵に造墓したのかは今後の課題としたい。

本墓群は城間村に居住する方々の墓域であることが調査により改めて判明した。基地建設に伴う墓移転のため墓口が開いた墓が多く見られ、出土した多くの蔵骨器は、墓室内で割れた状態かまたは墓庭へ廃棄されていた。よって、蔵骨器から検討した墓の使用時期についても一部の使用時期の反映でしかないものが多いと思われる。その中、東斜面の北側で確認された004号では墓室から蓋と身のセットを含む45点の蔵骨器が得られたのは特筆される（巻頭5）。銘書が確認された蔵骨器も多くあり、系図を持たない百姓層の貴重な資料を得ることができた。しかし、今回調査を実施した範囲は同墓群の半分程度であり、特に東斜面に造営された古墓の調査数が少ない。前述した平成22年度の範囲確認調査により墓群は東斜面の南側にも広がることが確認されており、シリン川を望む東斜面の古墓について調査が進むことで、本墓群の性格がより明確になるとと思われる。シリン川沿い一帯を含め、近世城間村の墓制について今後も注目していきたい。

<引用文献>

※長間安彦「[浦添研究]浦添市字城間の屋号・姓名について」

『浦添市立図書館紀要No.3』1991.12

<参考文献>

浦添市教育委員会1984『浦添市史』第6巻資料編5自然・考古・産業・歌謡

浦添市教育委員会1989『浦添市』第1巻通史編浦添のあゆみ

浦添市教育委員会1990『浦添市文化財悉皆調査報告書』

浦添市教育委員会1990『城間古墓群』

城間自治会『城間字誌 第一巻「城間の風景」』城間字誌編集委員会

那覇市教育委員会2007『銘苅古墓群－重要遺跡確認調査報告－』

浦添市教育委員会2013『市内遺跡発掘調査報告書（3）－平成18～23年度調査報告－』

浦添市教育委員会2011『沢岬端川原近世墓群』

浦添市教育委員会2011『港川崎原古墓群』

浦添市教育委員会 2015『前田・経塚近世墓群 6 前田真知堂A丘陵（1）・前田西上原A丘陵・前田西前田原A丘陵』

第59表 各墓の所有者（「土地所有権証明書交付簿1952年」より作成）

地目	所有者住所	所有者氏名	備考
墓地	浦添村字港川	照屋仁…	
墓地	浦添村字城間		
山林	浦添村字城間		
山林	浦添村字城間		
墓地	浦添村字城間		
墓地	浦添村字城間		
墓地	浦添村字城間		
墓地	浦添村字城間	赤嶺仁…	
墓地	浦添村字城間	内間伍…	
墓地	浦添村字城間	栗國識…	
墓地	—		
墓地	浦添村字城間		
墓地	—		
墓地	浦添村字城間	栗國識…	
墓地	浦添村字城間		
墓地	浦添村字城間		
墓地	浦添村字城間	西原 清…	
墓地	浦添村字城間	赤嶺仁…	
墓地	浦添村字城間	栗國識…	
墓地	浦添村字城間	西原 清…	
墓地	浦添村字城間		
墓地	浦添村字城間	又吉伍…	
墓地	—		
墓地	浦添村字城間		
墓地	—		
墓地	—		
畑	浦添村字城間		
墓地	浦添村字城間	赤嶺仁…	
墓地	浦添村字城間	古波蔵伍…	
墓地	浦添村字城間		
墓地	浦添村字城間		
墓地	浦添村字城間		
墓地	浦添村字城間	赤嶺仁…	
墓地	浦添村字城間		
墓地	浦添村字城間		
墓地	浦添村字城間		
墓地	浦添村字城間		
墓地	—		
墓地	浦添村字城間	比嘉久…	
墓地	浦添村字城間		
墓地	浦添村字城間		
墓地	浦添村字城間		
墓地	浦添村字城間	又吉重…	
墓地	浦添村字城間		
墓地	浦添村字城間		
墓地	浦添村字城間		
墓地	浦添村字城間		